トランスクリプトに用いる記号一覧

１．発話と発話の時間的関係など

［　　オーヴァーラップの開始位置
］　　オーヴァーラップの終了位置
＝　　末尾に等号を付した発話と冒頭に等号を付した発話とのあいだに、感知可能な間隙が全くないことを示す。また、この記号が行の途中に単独で用いられる場合には、ひとりの発話が完了可能点に達したあと、間隙なしに同じ話者が発話を続けたことを示す。
→　　本来なら同じ行に続けて書くべきひとりの発話が、紙面の制約上、末尾に矢印を付した行と冒頭に矢印を付した行とに分断されて記載されていることを示す。
(数字)　　丸括弧内の数値は、その位置にその秒数の間隙があることを示す。
(.)　　丸括弧内のドットは、その位置にごくわずかの感知可能な間隙（おおむね 0.1 秒前後）があることを示す。
「文字」　　発話者が誰かの発話や思念を直接話法で引用していると見なせる部分。

２．発話産出上の音声的特徴

：　　発話中のコロンは、直前の音が引き延ばされていることを示す。コロンの数は、引き延ばしの相対的長さを示す。
-　　ダッシュは、直前の語や発話が中断されていると見なせることを示す。例えば、声門閉鎖音(glottal stop)が聞こえる場合など。
.　　ピリオドは、直前部分が下降調の抑揚(falling intonation)で発話されていることを示す。
？　　疑問符は、直前部分が上昇調の抑揚(rising intonation)で発話されていることを示す。
,　　コンマは、直前部分が継続を示す抑揚(continuing intonation)で発話されていると見なせることを示す。例えば、下降＋上昇の抑揚(falling-rising intonation)など。
↑↓　　上向きと下向きの矢印は、直後の部分で急激な抑揚の上昇や下降があることを示す。
<u>文字</u>　　下線部分が強調されて発話されていることを示す。例えば、同じ話者の前後の発声に比べて音量が大きい場合や、音が高くなっている場合など。なお、強調の度合いがさらに強い部分は、二重下線を引いて示す。
°文字°　　この記号で囲まれた部分が弱められて発話されていることを示す。例えば、同じ話者の前後の発声に比べて音量が小さい場合や、音が低くなっている場合など。
hh　　小文字のｈは呼気音を示す。呼気音の相対的長さはｈの数で示す。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。
文(h)字(h)　　呼気音が言葉に重ねられている場合には、発話の途中に(h)を挿入する。
.hh　　ドットに先立たれた小文字のｈは吸気音を示す。吸気音の相対的長さはｈの数で示す。この記号は「息継ぎ」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。
〈文字〉　　不等号で囲まれた部分が、前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。
〉文字〈　　不等号で囲まれた部分が、前後に比べて速く発話されていることを示す。

３．転記上の不確実性

？：発話　　発話者が誰であるかまったく分からない音声が聞こえる場合。

(発話者名)：発話　　発話者の同定に疑問がある場合。
(文字)　　聞き取りに確信が持てない部分は丸括弧で囲って示す。
(……)　　まったく聞き取れない発話は、丸括弧の中に点線で示す。発話の長さを示すときには、点線の長さによって示す。
Ｘ／Ｙ　　ＸかＹかいずれかが発話されていると聞こえるが、どちらであるかに確信が持てないことを示す。

４．転記者による注釈・説明

((文字))　　転記者によるさまざまな種類の注釈・説明は、すべて二重丸括弧で囲って示す。

１章　序論

１　はじめに

人間社会は､互いの面前で言葉を用いて相互行為を行うことを不可欠の契機として成り立っている。それらの相互行為は、細部にわたってさまざまな意味に満ちている。たんに個々の言葉や身ぶりの記号としての意味だけではない。あるふるまいが他のふるまいとのあいだに作り出す空間的・時間的配置の微細な組み合わせを通じて、さまざまな意味が半ば無意識のうちに生み出され、読み取られている。

恋人同士の会話においては、ある言葉をいうのが 0.5 秒遅れることから、互いの関係についての重要な意味が生み出されうる。医者が患者に診断結果を述べるとき、患者は意味の分からない医学用語を聞いて、専門職による支配という関係的意味を感知することができる。相手がある地名をいいよどむことから、地域社会への帰属の浅さという意味が読み取られうる。これらはみな、「恋人」「医者と患者」「地域社会」といった社会的事実が産出されるメカニズムの不可欠な一部である。とともに、それらはみな、言葉が人々のあいだでそのつど意味を帯びつつ通用することの不可欠な一部である。人々は､どんなふるまいをどのように配置しあうことで､これらのことを成し遂げているのだろうか。そこには、どのような論理や秩序が存在するのだろうか。これらは、社会の研究にとっても言葉の研究にとっても、無視することのできない基本的な問いだと思われる。

本稿は、言葉を用いた相互行為のもっとも基本的（かつ、おそらくは、もっとも原初的）形態としての会話に焦点を当て、会話を細部にわたって意味に満たされたものにしているメカニズムのいくつかを、とくに「参加の組織化」という問題を中心として考察する試みである。人々が会話に参加するやり方はどのようにして有意味な形で組織化されているのか、それは言葉のどのような使用によって調整されているのか、会話に参加するやり方の違いによってどんな社会的行為が行われており、どんな社会的関係が作り出されているのか。これらのことを、主として会話分析のアプローチに依拠しつつ分析していく[1]。

それに先だって、この序論では大きく三つの作業を行う。第一は、会話分析が、相互行為のメカニズムを解明するうえで、また人間社会の成り立ちを解明するうえで、どんな固有の視座を持ち何をめざしているのかを、従来の主流の社会学との対比を中心として予備的に論じることである（２節～５節)。第二は、言葉を用いた相互行為という領域に関心を寄せてきた研究分野である語用論的コミュニケーション研究との対比において、いま行った議論をパラフレーズすることで、本稿のスタンスと中心的分析課題を明確化することである（６節・７節)。これらの作業を踏まえて最後に、本稿の三つの目標を提示する（８節)。

２　相互行為の秩序

私たちは、自分の知覚できる範囲に誰か他の人がいることに気づくと、それが知り合いであれ赤の他人であれ、自分一人しかその場にいないと想定しているときとは異なったふるまいをするようになる。仮に同じふるまいをそのまま続けるにしても、私たちは、誰もいないと思っているときにはないある種の身体の緊張とともに、そのふるまいを継続せざるを得ないだろう。

Goffman は、こうした複数の人々が「互いにモニターする可能性のある」環境の全体を「社会的状況」と呼んで、自らの社会学的探究の中心的舞台に選んだ。そして、社会的状況における人々のふるまいは「一種独特のリアリティを構成しており、……他の種類の基本的な社会的組織化の諸形態とまったく同じように、それ自身の権利において分析を必要として」いると主張し、そのような探究を「相互行為の秩序（interaction order）」の探究と名づけた（Goffman 1964: 134-135）。彼のいう「一種独特のリアリティ」とは、別のいい方をすれば、社会的状況に参入した個人が直面する「状況の拘束力」とも呼びうるものである。

では、どうして社会的状況は、一種独特の拘束力を帯びたものとして立ち現れるのだろうか。それは、誰かが自分のふるまいをモニターする可能性があることで、自分のふるまいがその者に対して何らかの意味を帯び、何らかの行為を行っていることになりうるからである。相手の存在にまったく気づかないように同じふるまいを続けるときでさえ、それは相手を「無視」しているという行為になりうる。知覚可能な範囲に誰かがいるだけで、自分のふるまいはいつでも相手から「なぜ今ここでそれをしているのか？」と問われる可能性があるものに変質する。

それゆえ、他者が居合わせる状況におかれた人間が直面する一つの基本的課題は、自分のふるまいが適切な動機のもとに行われていると見えるようにすることである。そのためにはどうするのがよいか。「なぜ今それを？」と問われたときに、説明できるように常に身構えておくのがよいか。明らかにこれはよい解決ではない。自分のふるまいの適切さを釈明すべくいつでも身構えることは、そのふるまいそのものへの注意を削いでしまうからである。より望ましいのは、そして実際に人々が日常的に行っていると思われるのは、潜在的に問われうる動機が実際には問われないようにすることである。そして動機を問われないためにもっとも効果的なのは、「ふつうの様子（normal　appearance）」を作り出すこと（Goffman 1971）、あるいは「ふつうであることをする（doing being ordinary）」こと（Sacks 1992 vol.2:　215）である。すなわち、自分と同じような立場の人間がその状況にいたならば行うであろうことと同じことをすることである。

つまり、社会的状況に投げ込まれるとき、私たちは広い意味で状況に「溶け込む」ことへと方向づけられている。「広い意味で」というのは、ここでいう「溶け込み」が、たんに状況内にいる人々に対して協調的にふるまうことを指しているのではなく、むしろ自分のふるまいがしかるべき意味を帯びるために、私たちはそれを他の人々のふるまいに対して特定の仕方で配置していかなければならないということを指しているからである。このように理解された場合、状況に溶け込むことへと方向づけられることは、もっとも直接的に、もっともきめ細かな仕方で、私たちの行為に作用する社会的拘束である。

もう少し具体的にいうならば、人々が社会的状況に参入しその中でふるまうときには、複数の人々がともに居合わせるということに結びついた一連の行為調整上の諸課題が立ち現れ、人々のふるまいはそれらの課題にそのつど方向づけられる。たとえば、診察室に患者が入るときに患者と医師が直面する行為調整上の課題は、子どもの個室に親が入るときに親と子どもが直面する行為調整上の課題と基本的に共通している。どちらの場合も、部屋にいる人は入ってくる人物が誰なのかを識別する必要があり、誰なのかに応じて自分の進行中の活動を中断してコミュニケーションの回路を開くかどうかを選択する必要があり、相手に応じて特定の仕方で最初のひとことを発する必要がある。どちらの場合も、部屋に入る人は、部屋の入り口から入り、相手が「何をしているのか」をまずモニターする必要があり、自分が「何のために」入ってきたかを早い時点で知らせる必要がある。

これらのことはみな、「ふつうに部屋に入ること」の一部である。そしてもちろん、私たちは、人

間が「ふつうではないやり方で部屋に入る」ことがあるのを知っている。たとえば、部屋の窓を割って入る、顔をマスクで隠して入る、入ってきていきなり相手を殴る、等々である。これらの「ふつうさ」と「ふつうでなさ」は、「一人がいる場所にもう一人の人が入ってくる」という社会的状況の開始に関わるのであって、そこが病院の診察室であるか子どもの個室であるかという場面的枠組みの違いに関わるのではない。一人がもう一人の部屋に入るときに現れる行為調整上の課題とそれへの解決方法は、それぞれの場面的枠組みの違いを超えて共通する秩序原理によって、すなわち相互行為の秩序によって組織されている。

社会学の主要な目標のひとつが行為に作用する社会的拘束を解明することである限り、状況に溶け込むことへと方向づけられるという拘束を解明することは、社会学的探究のひとつの基本的課題でありうる。しかし実際には、Goffman 以前の社会学において、「ふつうであることをする」こと、あるいは「状況に溶け込む」ことにかかわる拘束が、正面から探究されることはほとんどなかった。では、このような拘束は、従来の主流の社会学が照準を定めてきた種類の社会的拘束とどのような関係にあるのだろうか。

主流の社会学の考え方では、私たちがそれぞれの社会的状況に参入しその中で行為するとき、それらの状況および行為は、地位や役割の布置としての社会構造の拘束のもとにある。したがって、今述べたような意味での拘束は、そうした「マクロな」拘束のもとで作用するより「ミクロな」拘束として理解されるだろう。しかし、本稿ではこのような見方は採らない。

社会構造として理解された社会的拘束は、「Xという地位・役割の担い手はYを行うべきである」という形で定式化されうる行為への拘束のセットである。これに対し、人々が状況に溶け込むために必要なのは、「今この瞬間において、どのようにふるまえばXという地位・役割の担い手であることになり、また、Yという行為を行っていることになるのか」という問題をそのつど解くことである。そして、相互行為の秩序の研究が提起したのは、この問題を解くために人々に利用可能な選択肢を構造化するものとして社会的拘束を解明する、という課題である。

したがって、もしも状況に溶け込むことにかかわる拘束は社会構造「のもとで」作用するのだといういい方が可能ならば、それとまったく同じように、社会構造の方が状況に溶け込むことにかかわる拘束「のもとで」行為に作用するのだといういい方も可能となる。両者は、「マクロ－ミクロ」というメタファーが示唆するような空間的包含関係にあるのではなく、むしろ社会的拘束に対する異なった見方なのである。だが、このようにいうとき、われわれはすでに Goffman が行った探究を忠実にフォローすることから歩み出て、それを会話分析が継承発展させた方向へと読み込んでいる。今述べた二つが行為への拘束に関する異なった見方だという論点は、会話分析の土台にある方法論的考察を経てはじめて明確に主張しうるものだからである。

３　文脈依存性を解消しないこと

20 世紀半ば以降、Goffman の探究とほぼ並行して、Hall が着手したプロクセミクス、Hymes や Gumperz に代表されるコミュニケーションの民族誌など、社会学・人類学・言語学それぞれの周辺において、相互行為という領域に切り込む重要な仕事が徐々に行われるようになった。それらの中でも、Sacks によって開始された会話分析は、録音・録画された相互行為のデータに精密な分析を施すことによって、この研究領域におけるもっとも重要なアプローチになったといえる。

だが、会話分析が重要であるのは、たんにその精密な解析能力のためだけではない。会話分析は、

Goffman が裸眼の観察を通じて行った相互行為の秩序に関する探究を、より進んだテクノロジーによって精密化しただけの探究ではない。エスノメソドロジーの影響下で生まれてきた会話分析は、Goffman が立てることのなかった重要な方法論的問いを踏まえて開始されている。それは、当面の文脈に引きつけていえば、どうして従来の主流の社会学において、行為への拘束が状況に溶け込むという問題として探究されなかったのか、という問いである。

この問いへのひとつの答え方は、「理論的あるいは実践的に、社会学にとってより重要な問題（制度、社会構造、権力等）があるから、そちらを優先してきたのだ」というものであろう。しかしながら、エスノメソドロジー／会話分析の見方からすると、これはせいぜい事態の半面である。このことを述べるために、まず、相互行為の中で用いられる言葉が社会学や言語学のデータとしてどのように扱われてきたのかを押さえておく必要がある。

社会学において、研究対象とする人々がどんな言葉をどのように用いているかということが、重要だと見なされることは少なかった。むしろそれは、研究において克服されるべき障害のひとつであった[(2)]。実証科学としての社会学の土台を築いた Durkheim が警告したのは、「家族、所有、犯罪など、われわれがつね日ごろ口にしている」言葉が「しばしば曖昧なもの」であるために、「ひじょうに性質を異にするものが同じ名称のもとに、そして同じ説明のもとにとりまとめられて」しまうという危険であった（Durkheim 1895=1978: 105-106）。社会学者は、これらの言葉を厳密な定義に置き換える必要があるのである。だから今日の社会学的調査において、アンケートやインタビューを通じて採取される人々の言葉は、コーディングという手続きを経て操作的概念に置き換えられる。しかしそれは、同じ操作的概念のもとに括れるならば、用いられている言葉が違ってもそのことはあまり気にしないということでもある[(3)]。

言語学においても、これとパラレルな形で探究の方向づけが与えられてきた。構造主義以降の言語学の研究方法について、Gumperz はこうコメントしている。「実際の場で収集された生のデータはまずふるいに掛けた上でより一般性のある形式で記録されるべきであり、それを経て初めて言語学者の行う一般化の資料として利用可能になる」（Gumperz 1982=2004: 13）という前提のもとに研究が進められた。こうして記述された構造から日常行動がずれているとき、それらは「一時的な好み、個人的特異性、表現的または感情的傾向」などを反映しており、「本質的にシステムと関わりのない要素」だと見なされた（Gumperz 1982=2004: 14）。

つまり、これらの学問は、その中心的対象（社会構造、言語構造）を探究するうえで、人々が日々の生活の中で実際に用いている言葉を、さまざまな夾雑物を含んだ「純度の低い」データだと見なしてきた。社会学にとって、ある人がある場面で発する言葉は、たとえば地位・役割システムの中でその人が占める社会的位置の「帰結」である。秩序は、地位や役割の布置に存在するのであって、それに比べれば個々の言葉やその用い方は多少ともランダムだと見なされる。言語学にとって、ある人がある場面で発する言葉は、当該言語の統語規則によって定義される「適格な」文の、多くは不完全な「事例」である。それは個人的スタイルやいいよどみやつっかえといったランダムな要素を含んでいる。相互行為の中で人々が実際に交わす言葉は、社会構造や言語構造の秩序から「派生した」ものとして、また、それらに比べて相対的に「無秩序」な現象として理解されてきたといえる[(4)]。

さて、このような取り扱いが方法論上必要とされる中心的理由は、Durkheim の先の引用が示唆しているように、言葉の意味が文脈によって可変的であるということに求められよう。エスノメソドロジーの創始者 Garfinkel と会話分析の創始者 Sacks が、その唯一の共著論文（Garfinkel & Sacks 1970）の中で論じたのは、まさにこの性質に別の形で向き合うことで、新たな方法論的指針が獲得されると

いうことであった[5]。

Garfinkel & Sacks は、言葉が文脈ごとに意味を変えざるを得ないという性質を、Bar-Hillel の「指標的表現(indexical expression)」という言葉にヒントを得て「指標性(indexicality)」と呼ぶ。そして、社会学的探究において、対象に秩序や合理性を見いだそうとするときには、言葉の「指標性を解消(remedy)」しようとすることがその企てに不可避的に入り込んでくると指摘する[6]。すなわち、探究に用いる言葉が文脈によって変わることのない一義的で客観的な意味を持つようにすることが、対象に秩序や合理性を見いだすための不可欠の手続きを構成しているということである。Durkheim はもちろん、このことにきわめて自覚的であったわけである。

しかし、指標性を最終的に解消することは不可能なので、上のような企てはそれが解消されたと見なすことの上に成り立っている。Garfinkel が一連の「期待破棄実験(breaching experiment)」を通じて例証したのはこのことであった。たとえば、自分たち夫婦のあいだのありふれた会話を書き起こして Garfinkel に提出したある学生は、そこに出てくる言葉の意味について、一義的で客観的な言葉に言い換えてくれという Garfinkel の執拗な要求に、それは不可能だと音をあげざるを得なかった(Garfinkel 1967: 38-41)。

この議論は、社会学者が人々の言葉を専門的概念に置き換えるという手順を、(アイロニカルに)批判しているのではない。指標的な言葉を客観的な言葉に置き換えることは不可能なのだから、そのような方針を掲げる探究は砂上の楼閣だ、といいたいのではない。そのような批判だとすれば、指標性が解消できないことを問題だとみなしていることになるわけで、批判者も同じ穴の狢である。それゆえまた、Garfinkel & Sacks は、ひとつの学的探究としてのエスノメソドロジーや会話分析が、特権的にこの事態を逃れていると主張しているわけでもない。彼らのポイントは、科学的探究において専門的概念が十分なものとして通用しているしくみが、人々の日常的な実践的行為において常識的言葉が十分なものとして通用しているしくみと、原理的に異なるものではないということである。

そうであるなら、ここに、科学的探究と実践的行為の双方に向けて発することのできるひとつの問いが浮かび上がってくる。これらの活動において、言葉が指標性を帯びつつ十分なものとして通用しているのはどのようにしてなのだろうか。こうして、Garfinkel & Sacks は、指標性を解消することをめざす代わりに、指標性を帯びた形で言葉が用いられている手続きを記述しようとする。指標性は解消されるべき研究上の障害ではなく、解明されるべき研究対象の性質になったのである。言葉が指標性を帯びつつ通用しているという人間社会の基本的リアリティの成り立ちを記述すること、これが彼らの掲げた探究目標である。

では、指標性を帯びた言葉はどのようにして通用させられているのだろうか。この問題を考える手始めとして、Garfinkel が行った「偽カウンセリング」実験が示唆的である。実験者は、新しいカウンセリングの方法を試みる実験だと称して、被験者に、自分の悩みごとについて"yes" か"no" で答えられる 10 の質問を行うよう求めた。実験者はそれぞれの質問に対して、衝立の向こうから、予め乱数表を用いてランダムな順番に決めておいた"yes" か"no" の答えを返した。これらの答えは、したがって、背後に何の意図も存在しないものだが、被験者たちはそれぞれの答えにそのつど何らかの意味を読み取り、そこで一種のカウンセリングが行われていると理解した(Garfinkel 1967: 76-103)。

この相互行為が一種のカウンセリングとして秩序だっているという理解は、文脈を参照して"yes" や"no"の意味を解釈することによって、すなわち、指標性を利用することによって可能になっている。では、被験者にとってこのためにどんな文脈や手がかりが利用可能だったのか。「カウンセリング」だという状況の定義づけが予め実験者から与えられていたこと、実験者がそれまで面識のない「他人」

であるというカテゴリー化が利用可能なこと、"yes" "no" という語が最低限の字義的な意味を持つこと、などがまず考えられる。しかし、おそらく最も重要な手がかりは、"yes" "no" という言葉がそれぞれの質問の直後という時間的位置で発せられたことである[7]。

この時間的配置が与えられることで被験者は、１）相手が自分の発話と無関係にふるまっているのでなく、自分の発話に反応している。２）つまりそれは、自分の質問への答えである。３）だから、答えが不十分だったりつじつまがあわなかったりするときは、自分の質問の意図が相手に伝わらなかったとか、相手が自分の身の上についてまだ情報不足だとか、相手は自分にはまだわからない深い意図があるとか、いずれにしても理由がある。４）その理由は、さらに質問を続ける中で明らかにできるはずである、等々の推論が可能となる。またこれらと相互に照らし合う形で、これは「カウンセラーによる助言」であり、このやりとりは一種の「カウンセリング」なのだというふうに、この場面の秩序だった意味が見いだされる。

この実験が示唆しているのは、あるふるまいをもうひとつのふるまいに対して一定の仕方で時間的に配置する仕掛けや、それらのふるまいをある行為として認識可能にする仕掛けが、指標性を帯びた言葉を通用させるしくみの基本的な部分を形づくっているということである。それぞれの言葉が十分であるのは、それが他のふるまいとのあいだにしかるべきタイプの配列を形づくっていくことを通じてだと考えられる。こうして、ここに一群の具体的な探究課題が開示される。会話分析がこれまでもっとも精力を注いできたターンテイキング組織、連鎖組織、修復組織などの探究は、こうして開示された探究課題をひとつひとつ取り上げていったものである。

さて、以上の議論のポイントは次のことである。主流の社会学（あるいは「指標性の解消」を研究方法とする他の人間科学）が相互行為の秩序を正面から探究してこなかったのは、この領域の探究に実践的意義が見いだされなかったとか、この領域のデータを詳細に分析するためのテクノロジーが開発されてなかったとか（これらの事情もそれぞれにたいへん大きいのだが）、そういうことだけではないということである。むしろ、主流の社会学や言語学は、相互行為の中で用いられる言葉の基本的な性質を方法論上「解消」されるべきものと位置づけることの上に成り立っており、この方法論的スタンスは、相互行為の秩序をそれ自体として（すなわち、「派生的」でないものとして）探究することを妨げるように働くのである[8]。この事情を明らかにしたうえで、相互行為の秩序を解明するためには別の出発点が必要だと考えたところに、この領域の探究プログラムとして会話分析が有望だという理由がある。

４　相互行為の「内部の」社会構造

したがって、会話分析は、相互行為の秩序を可能にしている行為への拘束を解明するという課題に対して、確かな方法論的土台を提供しうるのである。だが、主流の社会学（や人間科学）の立場からは、会話分析が社会構造や制度や文化といった「より広い社会文化的文脈」を記述に組み込むことができないために、行為に働く社会的拘束を部分的にしか捉えることができないと見えるであろう。そこで、社会文化的文脈を記述に組み込むということを会話分析がどう考えているか、この問題を次に取り上げる必要がある。

まず、もういちど Goffman の議論に立ち戻り、それと対比することで、会話分析がこの問題に関してどのような意味で Goffman よりも確かな方法論的指針を打ち出してきたのかを明らかにしよう。相互行為の秩序が「一種独特のリアリティを構成しており、……他の種類の基本的な社会的組織化の

諸形態とまったく同じように、それ自身の権利において分析を必要として」いるという主張は、社会的状況において発せられる言葉が、言語構造のたんなる不完全な事例でもなく、発話者の社会構造上の地位や役割のたんなる帰結でもない、ということを意味する。ひとつの発話は、言語構造や社会構造に関係づけて記述される以前に、社会的状況の中での人々の言葉や身体の動きや物理的装備あいだの「統語論的関係」（Goffman 1967: 2）に注目して記述する必要がある。すなわち、それらが空間的・時間的にどのように配列されているか、その配列にどのような構造やプロセスが繰り返し観察されるかを調べることが必要なのである。このような統語論的関係の網の目として捉えられた相互行為秩序は、「相対的に独立した」社会的組織化の領域をなしているのである。

ここで Goffman は、ひとつの意味で、ふるまいの記述に文脈を組み込むことを提唱している。ここで仮想敵として想定されていたのは、ふるまいの記述を「個人とその心理学」から出発する立場である。「諸個人がいて、そのあとにさまざまな場面があるのではない。諸場面があって、そのあとにさまざまな個人がいるのだ」（Goffman 1967: 3）という言葉に、それは端的に表されている。これは、会話分析が Goffman から継承したもっとも基本的な視点である[(9)]。ただ、ここにはまだ主流の社会学が中心的な社会文化的文脈だと見なすものは含まれていない。そこで問題になるのが、相互行為秩序の「相対的独立性」という特徴づけの意味である。

Goffman は、主流の社会学が概念化しようと苦心してきたものを「より大きな社会」とあっさり呼んだうえで、それと相互行為秩序との関係を「ゆるいかみ合い」（Goffman 1983）と表現する。相互行為が行われるとき、相互行為の中で実現される立場は参加者たちの社会構造上の地位や役割に一対一に対応するものではない。むしろ、「さまざまな構造はいわば相互行為の歯車へとかみ合う」（Gofman 1983: 11）。たとえば、女性という地位と中間管理職という地位は社会構造上きわめて異なった分布を示すが、女性が男性との会話において占める立場は中間管理職が重役との会話において占める立場とさまざまな点で共通しているかもしれない。この共通性をもたらすのは相互行為秩序の「歯車」の特性であって、それぞれの社会構造上の地位の特性ではない。多様な社会構造上の地位は、相互行為の中で局所的に実現されるリソースを配分する何らかの論理に媒介されることで、それぞれの相互行為上の立場へと「変換」（Goffman 1961）される。

以上のように、Goffman は相互行為秩序が「相対的に独立した」領域であることを主張する一方で、その外部には社会構造が実在することを認め、それは相互行為の秩序には還元できないと述べた（Goffman 1983: 8）。いわば Goffman は、「より広い社会」について考えることは他の社会学者に任せたのである。これに近い立場からもっと積極的に問題を捉えようとしたものとして、Cicourel の議論がある。彼は、局所的相互行為と民族誌的文脈の「相互浸透」として社会的文脈を理解することを提案し、この観点から会話分析の記述は局所的相互行為に偏っていると批判的コメントをしている（Cicourel 1987）。

これらの見解は、解釈によっては、会話分析の立場と必ずしも異なるものではない可能性がある。ただ、ここで問題なのは、「変換」や「相互浸透」ということの内実である。これらの用語には、会話分析の視点からは慎重に扱われるべきひとつのことがらが、論点先取されているきらいがある。「変換」や「相互浸透」というとき、局所的な相互行為へと変換されてきたり浸透してきたりする社会的文脈が何であるのか、それが相互行為の中で生じることとは独立に記述されているという含みが生まれる。相互行為の中のある要素と社会構造の中のある要素とがそれぞれに同定されており、それらを対応づける操作として社会的文脈の記述が理解されているように見える。

これに対し会話分析は、相互行為の外部に実在する社会的文脈が、変換されたり浸透してきたりと

いうふうには考えない。会話分析の基本的視点は、「より広い社会」についての Goffman の実在論的な社会認識を、方法論的な懐疑に置き換えることだと要約できる。相互行為の秩序が「より広い社会」と相対的に独立なのか、もしそうだとしたらどのような仕方で独立なのか、これらの問題は、相互行為の参与者たちがふるまいを通じて、そのつどお互いに対してその答えを示し合う問題である。分析者は、参与者たちが「このふるまいの文脈は何か」という問題を解いている解き方を見るまでは、相互行為と「より広い社会」との関係についての予断を避けることを重視するのである。

別のいい方をすればこういうことである。一方で、相互行為の中でのふるまいがしばしば、何らかの意味での社会構造によって強く拘束されていることは、われわれの経験的リアリティの一部である。だから、相互行為が社会構造の強い影響下にあるという可能性はアプリオリに否定されるべきではない。ただ他方で、基本的に社会構造のレベルに秩序を見る社会理論が相対的に「無秩序」だと見なしてきた相互行為の領域に、会話分析が精巧な秩序を見いだしたということは重要である。このことは、そのような社会理論が捉えているものとしての社会構造（いわば、相互行為の「外部」に見いだされた社会構造）を、相互行為の記述に組み入れるべきかどうかをさしあたり疑ってかかる理由となる。

では、そのような方法論的懐疑のもとで社会文化的文脈を記述に組み入れるとはどういうことなのか。Schegloff は、次の指針を提出している。会話参与者の社会構造的カテゴリー（性別、階層、職業、民族等々）や相互行為が位置づけられた場面（法廷、教室、病院、家族等々）など、社会文化的文脈を指し示す概念を用いて相互行為を記述しようとするなら、次の二つのことがチェックされる必要がある。第一に、それらの社会的文脈に対して参与者たちがふるまいを「方向づけている（oriented to）」こと、すなわち、参与者たちが自らのそのときのふるまいに「関連ある（relevant）」ものとしてそれらの文脈に注意を向けていることを証拠立てること。第二に、関連あるものと見なしうる社会的文脈が、あるふるまいに「手続き上の結びつき」を持っていること、すなわち、その社会文化的文脈が参照されていることによってそのふるまいが現にあるような形式をとっているのだということを証拠立てること（Schegloff 1987b: 218-220、1992a: 195-196）。

これらの指針から、社会文化的文脈を記述に組み込むことについて、次のような理解が導き出される。一方で、ある社会文化的文脈が関連しており手続き上の結びつきもあることが参与者のふるまいの中に証拠立てられるなら、その文脈は参与者たち自身に観察可能な仕方で相互行為そのもののうちに表示されていることになる。だからそれは、相互行為を超えたところに実在し、相互行為の観察を通じて接近できないという意味で、「外部に」あるのではない。社会構造であれ文化であれ、このときそれらは相互行為の「内部に」見いだされるのである。他方で、ある社会文化的文脈が関連していることが証拠立てられないなら、その文脈は参与者たち自身にとって有意味な文脈ではなく、分析者がまさに「外から」持ち込もうとした文脈なのではないか、という疑いを保持しておく必要が出てくる。というのも、文脈は持ち込もうとすればいくらでも持ち込めるからである。

ところで、この二つのいずれであるかを知るためには、最終的に相互行為の「内部で」起こっていることを詳細に観察しなくてはならない。この意味で、さまざまな実際上の制約[10]はともかく方法論的には、会話分析は社会文化的文脈を記述から排除しているわけではなく、むしろそれを記述に組みこむとはどういうことなのかを、相互行為研究の他のアプローチよりも明確にしている。すなわち、相互行為の「内部に」立ち現れる限りでの社会文化的文脈を記述に組み込むことは、会話分析のプロジェクトの一部である。主流の社会学が社会構造は局所的な相互行為を超えた「外部」にあるものと見なしてきたのに対し、会話分析ではそれを相互行為の「内部」において表示され構成されるものとして理解するのである[11]。

このような観点から行為への社会的拘束を記述するさいに、ここで直接扱う会話という相互行為の一形態については、以下のことが重要なポイントとなる。一方で、会話の適切な参与者であるために、われわれは特定の社会構造的カテゴリーの担い手である必要はない。会話に参加するのに資格はいらない。それは、いつどこで誰によっても、そしておそらくは、いずれの人間社会においても行われうる数少ない相互行為の形態である。だが他方、会話においては特定のカテゴリーの担い手としてふるまうことが要請されないために、かえって参与者は、会話の流れに応じて自分や相手が担い手である多様なカテゴリーに行為を方向づけることが可能となる。そこで、会話の中の行為が方向づけられる社会的拘束を記述するという課題は、二重の性格を帯びる。一方でそれは、どんな社会構造的カテゴリーの担い手同士の相互行為であるとしても、そこで行われている活動が「会話である」ことは認識可能であるということを視野に収められなければならない。他方でそれは、会話のそのつどの時点で、何らかの社会構造的カテゴリーに行為が方向づけられていることが認識可能である、ということも視野に収められなければならない。

この課題に取り組むひとつの糸口は、会話者たちが担う社会構造的カテゴリーが無限に多様でありうるとはいえ、それが会話の中の行為に関連あるものになる仕方はもっとも大づかみにするならば二種類だ、という点に注目することである。すなわち、会話者たちは、互いに同じカテゴリーの担い手（これを、「共ー成員性」ないし「共通の成員性」と呼ぶ）として出会っているか、あるいは異なるカテゴリーの担い手として出会っているか、いずれかである。こうした成員性の配置に注目することは、上に述べた二重の課題に取り組むための戦略的拠点を提供する。なぜならば、相手と共通の成員性を持つにせよ持たないにせよいずれにしてもそれは会話であり得る一方で、どんなカテゴリーに行為を方向づけるにせよ、それはいずれかの成員性の配置に行為を方向づけることを通じてなされるはずだからである。このように見ることで、成員性の配置に行為が方向づけられるさまを記述することは、会話の「内部」において表示され構成される社会構造を探究するための重要な課題となる。

５　行為の記述と「文化」社会学

観察可能なデータの細部に徹底的にこだわろうとする会話分析の特色を、理論的な特徴づけという作業を通じて述べることはどうしても隔靴掻痒の感をぬぐえない。ここまでを読んで、「結局のところ、会話分析は何を明らかにしようとしているのか？」という疑問が払拭されない読者もいることと思う。会話分析の立場から、この疑問への「正答」は、「やってみなければ何が明らかになるかわからない」というものになるはずである。だが、より積極的にこの疑問に答えるひとつのやり方として、ここでは Schegloff（1996）にならって、会話分析がめざしているのはひとつの意味での「文化」社会学なのだと特徴づけてみたい。

話の糸口として、少し具体的な例を考えてみよう。われわれの社会で電話に出た人はたいてい「もしもし」という。この「もしもし」は誰に対して何を行っているのだろうか。この問いに答えることは、実はなかなか複雑な問題である。

まず「誰」の方を考えてみよう。「もしもし」という言葉は電話の「かけ手」に向けられているということができる。しかし、この記述はいつでも正しいだろうか。相手が電話交換手で「しばらくお待ちください」という場合、そのあとで電話口に登場する別の人物の方も別の意味で「かけ手」ではないか。また、自分が先ほどかけた電話に折り返しかけ直された電話である場合、ある意味では自分の方が「かけ手」なのではないか。電話の「かけ手」という言葉だけで記述できるように思われる立

場でも、その人物がやりとりの場で実際に帯びている意味はさまざまな違いをはらんでいる。

「何」の方はどうだろうか。「もしもし」は相手に「呼びかけている」のだろうか。それとも電話のコール音という「呼び出し」に「応じている」のだろうか。「呼びかけ」と呼ぶなら、道で知人を見かけて「やあ」と声をかける行為との違いをさらに特徴づけられなくてはなるまい（たとえば、「誰だかわからない相手に呼びかける」ことと、「知人に呼びかける」ことの違い）。「呼び出しに応じている」と呼ぶなら、玄関で呼び鈴を鳴らした人に大声で「はーい」という行為との違いをさらに特徴づけられなくてはなるまい（たとえば、「すぐ話せることを示す」ことと「少し待てば話せることを示す」こととの違い）。また、「はい、串田です」と電話に出るのでなく「もしもし」と出ることは、「相手に先に名乗るよう求める」行為でもあるといえないか。だが、相手が声を聞いただけでわかって「あ串田さん？」ということもある。しからば、それは「自分を声からわかるかどうかをためす」行為だと呼ぶべきか[12]。

「もしもし」のような一見単純なふるまいでも、それがどんな行為を行っているのかを記述することは単純な問題ではないことがわかる。これは、行為の理解と記述という社会科学上の基本的な問題の一例である。この問題について、上の例を挙げたのは次のことを述べたいからである。今垣間見たような行為の微細な多様性は、特定の言語に蓄えられている行為の名前（典型的には、動詞）のストックを越えているように思われる[13]。だが、これらがそれぞれ異なったタイプの行為であることは、ふるまいがおかれた文脈とそのふるまいの形式との相互反照的な関係の中で、当事者たちには容易に了解されうる。そしてその了解は、その行為に対してそれぞれ異なった仕方で応じるという形で、ふるまいを通じて示されうる。われわれは日常生活の中で、言葉では区別して呼ぶことのできない行為の違いを区別して認識することができ、その区別を反応の仕方においてきめ細かに示すことができる。これは、相互行為が細部にわたって意味に満ちているということの、また別のいい方である。

さまざまな有意味な行為の違いを認識可能にするような形で、人々が互いにふるまうことを可能にしている手続きの体系。これは、少なくとも「文化」という言葉を「行動を支配する制御装置」（Geertz 1973=1987: 77）という意味で用いるかぎり、その不可欠の一部をなすだろう。会話分析のひとつの目標は、この意味での「文化」を記述することであり、したがってそれを「文化」社会学と特徴づけることができる。もちろんそれは、文学や美術や音楽などの社会的基盤を探る、通常の意味での文化社会学とは異なる。

Weber 以来、社会的行為という概念は「社会学の基礎概念」であるが、社会学の経験的研究において、人々が互いのふるまいを通じてそれぞれの行為を認識可能にしている手続きを記述する、という形で行為の記述が企てられたことは、ほとんどないと思う[14]。Weber の行為類型論や Parsons の行為の準拠枠に代表されるように、社会学者が採用してきたのは、ある理論的前提から演繹的に行為の記述枠組みを整備し、それとの偏差を通して実際の行為を記述するというやり方が主流であった。

単純化を承知でいえば、これは次のような事情と関わりがあると思う。多くの社会学者が行う経験的研究は自分が生まれ育った社会文化的世界において行われ、調査対象とする人々の行為の意味は、程度の差はあれ、特別な理論的装備なしに理解可能なものである。文化人類学者がしばしば目の前で行われている行為の理解に困難を感じざるを得ない[15]のと対照的に、社会学者にとってはそれを困難として体感することの方に困難がある。多くの社会調査は、まず目の前で起こっていることをわかってしまうか、あるいはインフォーマントによって与えられた記述をわかってしまうことに基づいている。それゆえ、社会学者が取り組むべき問題は、その社会の成員としてわかっている行為を、社会学者としていかにして一貫した理論的枠組みのもとで説明できるかということに収斂しがちである。

Sacks が、最初の公刊された論文「社会学的記述」（Sacks 1963）において「この論文の目的は今日あるような社会学を奇妙なものと見なすことである」と述べたとき、そこで企てられたのは、行為の理解可能性を自明でないものと見なすことから出発するような社会学的探究を構想することだった。社会学者は、自ら社会の一成員として、研究対象としている人々の行為の意味をわかってしまう。そのようにしてなされる行為理解は、対象とする人々が互いに理解し合っているときの行為理解と基本的に同じものであるはずだ。だが、対象とする人々が互いの行為を理解しあうために用いている方法とは、まさにその人々が有意味な行為を通じて有意味な社会文化的世界を形づくる方法そのものではないか。そうであるなら、行為をわかってしまうことでこの部分を素通りすることは、社会の探究にとっての中心的な研究対象を取り逃がすことではないか。Sacks が行ったのは、おおむねこのような問題提起であった。この問題提起が、これまでに述べてきたいくつかの論点をすべて貫く射程を持つことは、もはや説明の必要はないだろう。

だが、このようにして従来の社会学における行為の記述の取り扱いを「奇妙なもの」と見なすからといって、社会学者が構築した理論枠組みの代わりにヴァナキュラーな行為カテゴリーを用いて行為を記述することは、解決にはならない。上で述べたように、人々は自分たちが互いのふるまいを通じて認識可能にしている行為の違いを、語彙として区別しているとは限らないからである。

会話分析が、相互行為の形式的分析に精を出すのは、このためである。すなわち、人々がどのような形式のふるまいをどのように配置しあっているか、その形式的特徴を分析することで、上の問題に答えを見いだしていこうとするのである。そうすることで、一見したところ同じ名前で呼べるように見える行為の事例群について、その形式的特徴の相違から異なる行為が区別されていることを記述したり、ヴァナキュラーな名前がない行為を、その形式的特徴の共通性に注目して記述したりすることが可能となる。このことの例示として、Schegloff（1996）が「ほのめかしの確認（confirming allusions）」という行為に施した記述を、私のデータに基づいて紹介する。

Schegloff が注目したのは、次の【抜粋１（５）：なごりおしそうに】に見られるような「相手が直前にいった言葉をそのまま（尻下がりの抑揚で）反復する」というふるまいである（「→」と「⇒」で示された行）[16]。

【抜粋１（５）：なごりおしそうに】
((３人の女子大学生の会話。Ｂはこの断片の前に、自分は巷で見かけた格好いい女の人を「あステキ」と目で追ってしまう、という話をしている。)))

　　Ｂ：だって思わずな，((頭部を回して通り過ぎる人を目で追う動作をする))
→　Ａ：なごりおしそうに.
⇒　Ｂ：[なごりおしそうに「あ::っ」て.
　　Ｃ：[あっはっはっはっは

Schegloff が問題にしたのは、次のことである。相手が直前にいったことを反復するふるまいは、ある種の同意（agreement）を行っているように見える。それはまた、同意の中でもとくに確認（confirmation）と呼びうる種類の同意であるように見える。そして、これは同意されるべきことを反復するという手続きによって行われている。しかし、同意や確認を行う方法として、直前の発話を反復するという手続きが示差的に行っていることは何なのだろうか。

この問いは要するに、"agreement"や"confirmation"という英語のヴァナキュラーな行為カテゴリーを

当てはめるだけでは、ここでふるまいの形式と配置を通じて認識可能になっている行為が記述できないということを問題にしている。なぜなら、英語話者は"Yeah" とか"That's right" とか、いろいろなやり方で同意や確認を行うのであって、これらの行為カテゴリーを用いるだけでは、直前の発話を反復するという形式的特徴を持つふるまいの、行為としての固有性が捉えられないからである。

彼が到達した結論だけを述べるなら、この手続きは、１）会話の先立つ部分で自分が明示的にはいわなかったことについて、２）相手がそこから理解したことを明示的に述べ、自分はそれを反復することで３）相手が理解した内容を確認するとともに、４）それを自分が明示的にいうことなしに伝えていたということをも確認する、という独特の行為を行っている。それは、自分が「ほのめかした内容」を確認する行為であり、同時に、自分がそれを「ほのめかしていた」ことも確認する行為である。

われわれの例でいえば、次のようになる。１）Ｂが「だって思わずな」といって通り過ぎる人を目で追う動作をするとき、Ｂは「なごりおしそうに見ている」ことを明示的に述べてはいない。２）続いてＡが「なごりおしそうに」と述べるとき、Ａは自分が理解した内容を明示的に言語化している。３）Ｂは「なごりおしそうに」という言葉を反復することで、Ａの理解した内容は自分の発話と動作が非明示的に伝えていた内容だということを確認している。４）同時に、Ｂは自分がそれを「発話と動作によって伝えていた」ということを確認している。

重要なのは、「ほのめかしの確認」という行為が認識可能な形で存在していることが、会話を細部にわたって形式的に分析することによって初めて記述されたということである。このような記述は、社会学者がこれまで構成した行為類型論によっては得られないし、ヴァナキュラーな行為カテゴリーをそのまま記述に用いることによっては見失われてしまう[17]。だが、以上のような Schegloff の記述を経ると、この行為が、英語話者の世界だけでなく日本語話者の世界においても、はっきり認識可能な行為として存在することがわかる。だから、この行為を産出する手続きを一部とするような相互行為の「文化」は、アメリカ社会とか英語のスピーチコミュニティとかを越えている。では、それはどれほどの通文化的広がりを持つものだろうか。「文化」社会学としての会話分析にとっては、このような問いがひとつの重要な課題として浮かび上がってくる。

ところで、せっかくデータを提示したついでに、４節で述べたこともこのデータで例示しておく。この断片は、３人の女子大学生（ＢとＣは同じ大学の友人、Ａは別の大学に通うＢの友人）が、下宿で女性雑誌の星座占いのページを見ながら会話しているところである。この抜粋の前では、おおむね次のような会話が進行していた。双子座の欄に「彼氏と別れようか迷ったり、ほかの男の人に心が動いたり」と書いてあるのを見て、Ｂが「自分の恋人（男性）は双子座だ、ほかの男の人に心が動いたらどうしよう」という主旨のことを冗談ぽくいい、ＡとＣが笑って「それイヤー」「それすごいなー」などとコメントする。これを受けてＢは、恋人とのあいだで「もしもお互いが同性愛に目覚めたらどうするか」というような話をしたことがあること、自分は女子校出身で周囲には先輩にあこがれる人もいたこと、巷で格好いい女の人を見ると目で追ってしまうこと、などを述べていく。そのあいだ、ＡとＣはさまざまな形で、笑いやからかいめいたコメントを返していく。このようなやりとりの延長上で、１行目でＢは、「だって思わずな」といって通り過ぎる人を目で追う様子を動作で実演しているのである。

要するに、先行部分では同性愛に関わる会話が進行しており、同性愛に共感を表明するＢとそれに笑いやからかいで応じるＡ・Ｃという構図の中でやりとりが進行している。ここでは相互行為の「内部」に、同性愛に関わる性規範と呼べるような「社会文化的文脈」が観察可能である。会話者たちは、自分たちの住む社会に同性愛を逸脱的セクシュアリティと見なす性規範が存在することに指向しつ

つ、Ｂがこの性規範に対する自分の立場をＡとＣの二人に認めさせようと試みる、という活動を行っている。この文脈を記述に組み込むなら、Ｂが明示的にいわなかったことをＡが「なごりおしそうに」と言語化することは、Ｂをからかう立場からＢに共感する立場へと、性規範に対する自分の位置取りを緩めることである。また、Ｂがその言葉を反復することは、この変更を歓迎することである（ちなみに、このあとでＣはなおからかいめいたコメントを続けるが、ＡはむしろＢの立場をＣに向けて説明する役を買って出ている）。「ほのめかしの確認」と記述された同じ行為は、「社会文化的文脈」を組み込むことで、このように再記述することも可能である。

しかしながら、この再記述は、Ａの行為が「ほのめかしの確認」であるという記述を無効にするものではない。一般に、まだ記述に組み込まれていない社会文化的文脈があるという指摘は、それ自体としては、当初の記述の適切性を脅かすとは限らないのである。逆に、まだ組み込まれていない文脈を組み込むことで、当初の記述の妥当性が裏付けられるという可能性もある（Schegloff　1992a）。この事例の場合は後者であると思われる。さらにいえば、Ａの行為が「ほのめかしの確認」として記述されていることで、ここで生じた一種の（こういってよければ）性規範をめぐるミクロポリティクスの手続き的特徴がより鮮明になるのである。

以上からわかるように、会話分析は、ヴァナキュラーな言葉をそのまま記述に用いないという点では、Durkheim の警告にしたがっている。ただ、会話分析においても独特の専門用語が用いられるが、それらは二つの意味で実証主義的な専門的概念と性格を異にしている。第一に、それは人々の言葉が持つ曖昧さを解消することを目的としていない。Schegloff が「同意」や「確認」というヴァナキュラーな概念を十分と見なさなかったのは、それが文脈ごとに意味を変える曖昧さを持つので、曖昧さを解消できるより客観的な概念を求めたのではない。むしろ、それらのヴァナキュラーな概念によってはひとくくりにされてしまう行為の認識可能な違いを記述するために形式的分析が必要とされ、形式的分析をやりやすくするために固有の用語を用いるのである。それらの用語は、ヴァナキュラーな概念の文脈依存性を解消するためでなく、それを照らし出すための道具である。

第二に、会話分析は、人々が言葉を用いて指し示している意味内容の曖昧さを解消するために、専門用語を用いるのではない。上の例で、Ｂが「なごりおしそうに」と述べているのは、ヴァナキュラーな言葉による（自分自身の過去の）行為の記述の一例である。会話分析は、Ｂ自身が行った記述をより客観的にするために専門用語を用いようとするのではなく、この発話によってＢが行っている行為を記述しやすくするために、それを用いようとするのである。

相互行為の「文化」社会学という目標は、考えてみると気の遠くなるような目標である。それはまた、述べてきたように、現在確立しているディシプリンとしての社会学には収まりが悪い。しかしながら、社会学（あるいは言語学、人類学等）というディシプリンが成立した歴史的必然性を脇において、人間社会についてのトータルな探究を構想するなら、このプロジェクトはそのどこかに必ず位置を占めるはずのものである。会話分析は、現在、この目標に向けてまだ最初の数歩を歩み始めたところである。

６　意図と慣習：語用論的コミュニケーション研究との対比

以上のように、会話分析は行為とそれに作用する拘束を記述することを通じて、人間社会に関する探究を行おうとしているが、その中心的対象と方法論の両方において、主流の社会学とのあいだには少なからぬ溝がある。これに対し、言葉を用いた相互行為という同じ領域に関心を寄せてきた分野と

して、語用論的コミュニケーション研究がある[18]。語用論的コミュニケーション研究の中心的課題は、字義通りの意味とは異なる言葉の意味がどのようにして伝わるのかを探究することだが、この問題設定を貫くスタンスは、ひとつの重要な点で、従来の社会学と共通している。それは、話し手や聞き手がどのような特性を備えた存在なのかについて客観的な理論的規定を与え、その特性の「帰結」としてコミュニケーションの成り立ちを説明しようとする点である。そこで、語用論的コミュニケーション研究と本稿のスタンスを対比することは、上に行った対比を異なる観点からパラフレーズすることになるとともに、ほぼ同じ対象領域において本稿のアプローチの特徴を明確化する一助となる。

まず、言語行為論を土台とする語用論的コミュニケーション研究の流れを大づかみにしよう。語用論の領域で展開したコミュニケーションの理論が立場の違いを超えて共通に注目してきたのは、実際の言語的コミュニケーションにおいて、言葉の字義的意味（ここでは言葉の「形式的意味」だけでなく「指示」および「述定」を含んだものとしてこの言葉を用いる）のほかに「文脈的意味」と呼びうる何かが伝えられていることである。これは、Shannon & Weaver（1964）に代表されるコードモデルが、技術的問題（信号をどうやって送信するか）のレベルではともかく、意味論的問題（どうやって伝えたい意味を伝えるか）のレベルでは、コミュニケーションの理論として大きな限界を持つという認識のもとに展開された問題意識だといえる。この問題に取り組むうえで、重要な立脚点を与えたのが言語行為論である。

言語行為論の出発点は、「記述主義」的立場から陳述文の分析がなされる場合、ある種の陳述文の行為遂行的効力が適切に捉えられないという Austin の発見であった。Austin は当初そのような効力の成立基盤を慣習に求め、効力が成立しない条件（不適切性条件）に注目することで、効力の発生を可能にする慣習の存在をいわば消去法によってあぶり出そうとした（Austin　1962）。Austin の議論を体系化した Searle は、言葉を用いることは規則に従う行動であるという観点から、不適切性条件に関する考察を発語内行為の構成的規則として発展させ、これに Grice の「反射的意図」の概念を組み込むことで、効力の発生を可能にする必要十分条件を積極的に定式化する方向に向かった（Searle 1969）。

Searle のこの定式化において、「話し手」という概念には、言語行為の効力を説明する決定的特性が理論的に組み込まれた。それは、発話の命題的意味と発話を通じて成し遂げられる行為と連結させるものとしての意図である。Searle 自身の言葉でいえば、話し手とは「ある一定の発語内の効果を生じさせるということを、その効果を生じさせようという自分の意図を聞き手に認知させることによって行うことを意図しており、さらにまた、その認知が、話し手の発する言語的要素の意味がその要素と当該の効果とを慣習的に結びつけているという事実の助けをかりて達成されるということをも意図している」（Searle 1969=1986: 109）者のことである。

さて、言語行為論はコミュニケーション論の文脈でコードモデル批判として提出されたわけではないが、効力の概念が字義的意味とは異なる文脈的意味を照射する点で、語用論的コミュニケーション研究に重要な立脚点を提供した。とともに、語用論の関心からは、発語内行為動詞の分析や構成的規則の体系化という手順が、コードモデルと同様の難点をはらむとして批判されるようになる。たとえば Leech は、言語行為論が実際に行ったのは効力の語用論的分析ではなく発語内行為動詞の意味論的分析であり、後者が前者の代用になると考えることは効力を「文法化」するものだと批判する（Leech 1983=1987: 251-280）。実際の発話は複数の異なった発語内行為を遂行するものでありうるとともに、その効力には程度の違いもあると考えなければならない。その多様性は、特定の言語が用意している行為カテゴリー（動詞の種類）によって記述しわけることはできない。こう述べて Leech は、形式的規則による字義的意味の記述（文法）と、「ゴール指向的」な話し手の活動としての発話によって生

み出される文脈的意味の記述（語用論）との相補主義を唱えた。こうして Leech においては、文脈的意味を生み出すものとして「ゴール指向性」という話し手の特性が重視されることになる。

Leech のように、言語行為論がコードモデルに解消されてしまうことを語用論の立場から批判するとき、彼らが依拠するのは、話し手の意図と推論の原則によって文脈的意味を記述しようとする Grice の着想である（Grice 1989）。ただ、Searle の議論もすでに Grice への評価と批判の両面を含んでいた。Searle は反射的意図という着想は評価しつつも、Grice が慣習的記号の使用という要素を見落としていると批判したのだった（Searle 1969=1986: 77-80）。Searle も Leech も、意図性と慣習性の両方がコミュニケーションの記述に組み入れられる必要があると考える点は共通しており、違うのは次の点である。Searle においては、Austin が注目した行為遂行的発言の慣習性が構成的規則へと置き換えられるとともに、それが文法的慣習と意図とを結合するものと位置づけられる。だから、慣習性は発話の字義的意味と文脈的意味の双方の水準に、それぞれ文法的慣習と構成的規則に姿を変えて割り当てられている。Leech は、構成的規則が実は文法と大差のないものになっているという観点から、規則＝慣習は字義的意味の水準にのみ関わるものと位置づけたのである。

これに対し、より徹底した形で Grice の着想を継承したのが Sperber & Wilson の関連性理論である。彼らは、コードを必要としない「意図明示的推論的コミュニケーション」が、基本的なコミュニケーションのあり方だと考える（Sperber & Wilson 1986）。彼らによれば、送り手が意図明示的な刺激を作り出すならば、受け手がその刺激を手持ちの知識と突き合わせて推論を行うことで、新たな知識を得たり、手持ちの知識を強化したり、それを放棄したり等々の形で、自分の認知環境を変化させうる。コミュニケーションはこのようにして可能になるので、そのときに慣習化されたコードがあればより便利ではあるが、それは不可欠ではない。この観点から、彼らは Searle による Grice 理論の用い方がその可能性の中心を奪うものであると批判し、語用論は何らかの仕方で言語行為論を組み入れなければならないという広く受け入れられた前提をも放棄することを提案する[19]。

さて、きわめて大さっぱにいえば、関連性理論が今日の語用論において期待と注目を集めていることは、語用論が意図と推論という心理学的ないし認知科学的道具立てを重視するようになったことを象徴している。逆に、慣習性は、大勢として、語用論に固有の課題を解決するために中心的位置を与えられなくなってきている。慣習の位置づけは、１）「規則＝慣習」として語用論的問題を立てるための前提に置かれ、それに語用論特有の現象を扱う鍵概念としての「原則」が対置されることになるか（Leech 1983）、２）特定の種類の言語行為（たとえば儀式的場面での言語行為）の説明のためにのみ必要なものとして限定されるか（Sperber & Wilson 1986）、どちらかになっている。これらは、Searle によって体系化された言語行為論に対する、ある意味で当然のリアクションである。構成的規則という形で概念化された慣習は、現実の発話が持つ多様な文脈的意味を記述するには窮屈すぎるからである。

しかしながら、慣習性を、以上の方向とは別の形で掘り下げる道もあると思われる。Leech は、Austin や Searle が明示的な遂行動詞を含む発話文を規範的な形式と見なし、それを非明示的な言語行為の効力を解明するための規準としたことを「遂行文の誤謬」として批判している。この批判は妥当だと私も思うが、そこから向かう方向は Leech とは異なる。

Searle はこの取り扱いの根拠として「表現可能性の原理」を立て、非明示的な言語行為の場合も、実際に発話しようとすればいつでも明示的遂行文を発話することができるし、聞き手が理解できていないようであれば実際に発話するだろうと述べる（Searle 1969=1986: 32）。しかし、これは語用論的分析の水準では誤りである。非明示的な言語行為によって行われることの多くは、実際には明示的遂

行文によっては行われ得ない。たとえば、食卓の上にある醤油をとってほしいとき「私は醤油を取ってくれるようあなたに依頼する」と発話することは、依頼と聞かれるよりも何かふざけていると聞かれる可能性が高い。そして、もしも理解していない相手に対してそれをいうなら、それは依頼ではなく、言い直しや抗議や非難など別の行為を構成するだろう。そこでは同じ意図が、同じ効力が、言葉を変えてより明確にされているのではない。遂行文の誤謬が問題なのは、「ちょっと、醤油」というようなありふれた非明示的言語行為が埋め込まれている慣習性に、それ自体として注目することを忘れさせてしまうからである[20]。

Austin が当初注目した慣習性とは、「ある受け入れられた慣習的手続きが存在し、それはある慣習的な帰結をもたらす。その手続きは然るべき環境において然るべき人物が然るべき言葉を発することを含む」こと、「特定の人物と環境は、そこで発動される特定の手続きに対して適切でなければならない」ことだった（Austin 1962=1978: 26）。Turner が指摘するように（Turner 1971: 174）、この観察は、ある種の儀式的場面における明示的遂行的発言においてだけでなく、非明示的言語行為を含むすべての言語行為に当てはまると考えられるはずである。そう考えるならば、非明示的言語行為は明示的遂行文を規準としてでなく、すなわちいったん明示的遂行文に変換しそれを媒介項とするという理論的手順を踏むことによってではなく、直接に、場面や人物とのあいだに慣習的結びつきを持つものとして考えることもできる。

文法や構成的規則として慣習性を捉える場合、そこでは単一の発話に関して、用いられる記号と意味との結びつきを成立させるメカニズムとして慣習性が位置づけられる。この場合、慣習性は〈表に現れた記号〉－〈背後にある意図・意味〉というリンクを作り出す仕掛けとして捉えられている。これを便宜上「意味論的慣習性」と呼ぼう。これに対し、Austin が注目した慣習性は、〈場面や物〉－〈人物〉－〈発話や行動〉というリンクを作り出す仕掛けと見ることもできる。これを便宜上「統語論的慣習性」と呼ぼう。本稿の見るところ、語用論にとって慣習性が重要でなくなっていったのは、それが意味論的慣習性としてしか展開されなかったためである。これに対し、人々が互いのふるまいを配置することを通じて言葉の文脈的意味を認識可能にする方法を、統語論的慣習性の問題として記述しようとするのが本稿の立場である[21]。そのとき、文脈的意味の記述のために意図やゴール指向性といった特性をあらかじめ理論的に「話し手」に与えることは必要でなくなるだろう。この意味で本稿は、Austin の当初の問題提起を、語用論的コミュニケーション研究が大勢として向かった方向とは異なる方向に展開しようとするものだということができる。

語用論的コミュニケーション研究の領域で意図と推論原則という概念が重視されるようになった大きな理由は、慣習性がその目標にとって窮屈だったからである。しかし、実際の相互行為の中である言葉がある文脈的意味を持つとき、そこで文法とは異なるものとしてどのような慣習性が関与しているのか、このことをきちんと記述することは試みられていない。慣習性の解明の貧困さゆえに慣習性が軽視されてきたなら、まずは慣習性の記述を試みることが必要であろう。

7　参加の組織化という問題

前節で概観した諸理論は、コードモデルへの批判という問題意識を共有していた。ところが、ある意味では、それらはコードモデルの問題の立て方をそのまま引き継いでいる。それらの理論はいずれも、Shannon & Weaver（1964）が下の分析図式を用いて提起した基本的問いを共有しており、違うのはそれへの解答の出し方である。

情報源→送信機→（コミュニケーション・チャンネル）→受信機→目的地
↑
雑音

この図に示されたコミュニケーションに関する基本的考えは、次のようなものである。まず、「情報源」「送信機」「チャンネル」「受信機」「目的地」「雑音」といったコミュニケーションの構成要素には、一義的な理論的定義を与えることができる。人間の場合、コミュニケーションとは「情報源かつ送信機」という特性を備えた話し手と「受信機かつ目的地」という特性を備えた聞き手とのあいだで生じる過程である。それは、話し手が何らかの信号や刺激を作り出すことに端を発し、その信号や刺激をもとにして、聞き手が何らかの情報処理を終了するまでの過程である。

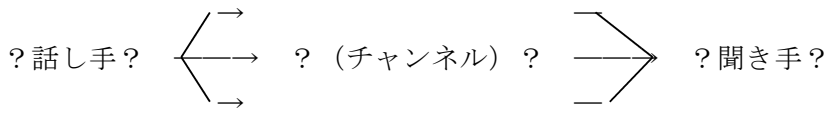
Shannon & Weaver は、この過程の成立機序を共有コードによる送り手側のメッセージの受け手側での「復元」に求めた。この考えは、コードの共有の不可能性という原理的批判を受けたが（Clark & Marshall 1981）、にもかかわらずこの図式はコミュニケーションに関する常識的理解を集約したもの（大澤 1994: 278）としてのリアリティを失ってはいない。つまり、私たちが何ごとかを伝えたと認識するとき、あるいは何ごとかを伝えられたと認識するとき、そこで生じたことを成分に分解して図示するとしたらおおむねこれに近い図になるはずである。その後のコミュニケーション論が主張してきたのは、この過程を成立させるメカニズムが共有コードではないということであって、コミュニケーションとはこのような構造を備えた活動であるということは共通の前提となっている。この図は、コードモデルという一理論の説明図式であることを超えて、コミュニケーションという活動への根源的な常識的修辞としての「導管メタファー」（Reddy 1979）の一種と見ることができる。そして、Searle における「反射的意図によって発話と効力を連結させる話し手」や Leech における「ゴールを指向する話し手」は、いずれもこのメタファーに基づく説明図式における決定的な理論的要素である。

このように見た場合、コミュニケーションという活動に関して別の問いの立て方も可能であることが分かる。すなわち、「人々のふるまいがどのように配列されることで、このような構造を持つ活動が成立していると認識可能になるのだろうか」という問いである。この問いは「どのようなふるまいの配列によって話し手という立場が特定の人に割り当てられるのか」「どのようなふるまいの配列によってチャンネルがつながっているという事態が成立するのか」等の問いに分けられる。

この問いは他方で、相互行為における人々のふるまいは通常の意味で「コミュニケーション」とは呼びにくいような仕方で組織化されることもある、ということにも目を向けさせる。北村は、コミュニケーションの情報伝達モデルの一面性を批判する中で、「行動間の相互的関係」の社会的慣習性に注目して、「共有関係」のモデルを提出している（北村 1983）。それは人々が握手し合うことや笑い合うことをコミュニケーションの一部として組み入れるために提出されたモデルである。ここでは何をコミュニケーションと呼ぶかという定義問題には踏み込まないが、相互行為の中で北村が共有関係と呼ぶような形で互いのふるまいが組織化されることがしばしばあることは重視したい。人々が相互行為の中で言葉を用いるとき、それは必ずしも上の図式に示されたような「狭義のコミュニケーション＝伝達」として組織化されているとは限らない。

そこで、われわれが出発点において描くべき図は、むしろ次のようなものなのである。人がある言葉を発話するというだけでは、その人はいまだいかなる意味で話し手なのかは確定しない。発話が誰に向けられ、どのようなコミュニケーションのチャンネルに乗っているのかも確定しない。そして、

人がある発話を耳にするというだけでは、その人はまだいかなる意味で聞き手なのかも確定しない。



このような図を出発点におくことで、互いのふるまいが「話し手から聞き手への伝達」や「共有関係」として認識可能な形式に組織化されたり、その形式からはずれるふるまいを形式に合うように調整したり、異なる形式を使い分けたりする能力を、人間のコミュニケーション能力の重要な部分として探究することが可能となる。このような探究を、「参加の組織化」に関する探究と呼ぶことができる。

すなわち、参加の組織化とは、(「話し手」「聞き手」といった言葉で表されうる）相互行為の中でのさまざまな行為者のあり方を、人々が互いのふるまいの配列において／として区別するとともに、それらの立場の布置として相互行為の場面をそのつど産出していく過程をさす。この過程に注目することは、言葉を用いた相互行為の研究において、話し手や聞き手に理論的な特性を与え、それを前提として言葉の文脈的意味がいかにして生じるのかを考える､というやり方を採らないことを意味する。それに代えて、言葉をその文脈的意味とともに通用させるとき、人々は同時に、さまざまに異なった話し手や聞き手の立場をも認識可能な形で作り出していると考え、その過程を記述することを探究課題にしようというわけである。

このように問題を立てることで、語用論的コミュニケーション研究には二つの基本的難点があることが照射される。第一に、理論的に特性を付与された話し手や聞き手の立場が特定の個人に割り当てられていることを前提にしているために、たとえば「何ごとかをいいたいとき、それを適切にいえるような状況にいかにして入るか」（Goffman 1983a）という問いが見過ごされてしまう。Searle は構成的規則を定式化するときに「正常入出力条件」という条項を立てることで、この点に関わる実際的条件の違いを考慮しなくて済む工夫を行っている（Searle 1969=1986: 102）。Sperber & Wilson（1986）は送り手が「意図明示」によって聞き手に関連性の保証を与えるだけでコミュニケーションが可能だと論じているが、いかなるふるまいが意図明示となるのかは論じていない。要するに、そこでは適切な仕方で話し手や聞き手になるとはどういうことかという問題が考察対象から除外されている。だが、人々が実際の相互行為の中で有能な（competent）成員としてふるまううえで、これは基本的問題のひとつである。

第二に、理論的に理想化された話し手の特性を前提とし、想像された発話文を素材としてコミュニケーションの分析を行う中で、実際の会話で生じる一連の現象が、「周辺的」「非本質的」な（さらには「不適切な」「未熟な」」）現象として考察対象から除外される傾向がある。たとえば、いいよどみ・いいさし・一文に満たない発話・文法的に不適格な発話・つっかえながらの発話・意味論的に無用な繰り返し・ひとりごと・オーヴァーラップ、等々である。多くの場合、半ば無意識的に生じるこれらのふるまいは、従来の語用論のモデルでは適切に扱うことができない。しかし、これらのふるまいが実にありふれたものであることは、数分程度の会話を録画してみればすぐに分かることである。また、これらのふるまいが人間のコミュニケーション能力の重要な部分であることは、対話するコンピュータの制作を試みた研究者の告白（たとえば岡田 1995）から推測される。これらは、人間が言葉を用いた相互行為を通じてその社会文化的世界を産出していく営みの、不可欠の一部であると考えなければならない。

８　本稿の目的と構成

以上のような基本的視点に立って、本稿では全体として大きく三つのことを目標とする。

第一の目標は、言葉を用いたコミュニケーションの研究において、従来焦点を当てられなかった参加の組織化という問題を中心に据えることで、コミュニケーション研究における新しい問題の立て方を提案することである。

この目標を果たすために、言葉を用いた相互行為という活動領域において話し手であることのさまざまなあり方が、どのように認識可能な仕方で区別されているのかを、会話分析の視点から分析する。人が話し手であることは、語用論的コミュニケーション研究においては、話し手の特性を理論的に定義することによって記述されてきた。これに対し本稿は、人がさまざまな異なった仕方で話し手であることが、相互行為を行っている人々によって、互いのふるまいの配置を通じて認識可能にされている現象であることを記述していく。

この対比を明確にするために、とくに次のような二つの性質を帯びた現象に注目して分析を行う。１）語用論的コミュニケーション研究において仮定されているような理想化された話し手の立場が揺らいでいる現象。２）語用論的コミュニケーション研究の考察素材である発話文の自明性を揺るがす現象、である。そして、従来の語用論的コミュニケーション研究のやり方では「周辺的」「非本質的」であると見なされてしまうこれらの現象が、本稿の立場からは精巧に秩序だったものとして記述できることを示す。また、コミュニケーションにおいて言葉が持つ働きには、何ごとかを表現・伝達するという働きだけでなく、むしろそれ以前に、ともに居合わせる人々のあいだで相互行為への参加を組織化する働きがあるということを示す。

本稿の第二の目標は、以上の目標を追究する営みを通じて、言葉を用いた相互行為の秩序を探究するという会話分析のプロジェクトが、従来の社会学とは異なる形で行為に働く拘束を探究するものであることを例証（demonstrate）することである。

この目標は、とくに６章において、会話の中の行為がいかにして「共通の成員性」に方向づけられるかに焦点を当てた記述を行うことで果たしていく。人々が共ー成員性を有する相手とそうでない相手とでふるまい方を変えることは、行為が社会構造によって拘束されるという直感を支えるもっとも広く行き渡った経験的事実のひとつである。ただ、人々があるカテゴリーの担い手であることが分かるだけでは、そのカテゴリーが行為を拘束しているという記述は正当化できない。人が「正しく」担い手であるところのカテゴリーは無数に（「男」「大人」「サラリーマン」「中産階級」「日本人」「関西人」等々）考えられるからである。重要なのは、どのカテゴリーがそれぞれの行為に関連があるかである。従来の社会学の行き方では、この問題は最終的には、どのカテゴリーに理論的な重要性を置くかによって社会学者が解決すべきものである。これに対し、本稿では、どのカテゴリーが関連あるものなのかは、個別の相互行為状況の中で人々自身が不断に解いている問題であること、その解き方がいかに構造化されているかを記述することが、行為への拘束に関するもうひとつの探究のやり方であることを例証する。

この目標は、従来の社会学理論が解を与えようとしてきた問題によりよい解を与えるべく、オールターナティヴな理論を提出する、という意味での理論的批判を意味するのではない。先に述べたように、言葉の指標性を解消することを方法論上の要請として立てていないために、エスノメソドロジー／会話分析は従来の社会学の基本的な理論的問題を共有していないからである[22]。だから、ここで

例証しようとすることも、行為への拘束を探究するには別の問題の立て方が可能であり、それを解く作業はもうひとつの社会学的探究を構成する、ということにつきる。

本稿の第三の目標は、ここで直接データとする日本語話者の相互行為から得られた知見を、英語圏のデータに即して展開されてきた会話分析の知見や、いくつかの社会を対象とした人類学者の研究成果と照らし合わせながら、相互行為手続きの通文化的広がりについて現時点で何がいえるかを考えることである。この点を考えることは、上に述べたような基本的視点の相違にもかかわらず、会話分析が、その探究の結果として獲得する知見において、従来の社会学（や人類学）の主要な関心事と持ちうるひとつの接点を探ることである。先に述べたように、会話分析が記述しようとしているのは「人々がさまざまな行為を認識可能な仕方で区別して産出する方法」という意味を与えられた限りでの「文化」であると見ることができる。そのような「文化」はどのような広がりを持つのか。

もしもその「文化」の中に、民族・言語・国家・宗教・産業などの点でさまざまに異なる社会文化的世界のあいだに共通する側面が見いだされるならば、人々はそれぞれ利用可能な素材の違いに応じて固有の社会文化的世界を作り上げているにもかかわらず、そのような固有性を産出する方法に関しては基本的な共通性を持つことになる。そして、会話分析は、人々が「固有の」社会文化的世界を産出することを可能にしている「普遍的」手続きに迫るという可能性において、社会学や人類学の関心とのひとつの接点を持ちうることになる。この問題を十分なデータを踏まえて論じることは本稿の範囲を超えているが、７章では、本稿の成果と先行研究の知見とを突き合わせることで、現段階で何が明らかになっており、どのような見通しが立てられるかを考察する。

本稿の構成は以下の通りである。２章では、分析の準備として３つのことを述べる。第一に、本稿で焦点を当てる参加の組織化という問題についての先行研究を概観し、本稿がそれらの限界をどのように乗り越えようとするのかを論じる。第二に、必要なかぎりで、会話分析の基本的分析装置を概観する。第三に、ここで扱うデータの概要とデータの分析に関わる若干の方法論上の問題を述べる。

３章から６章は、本稿の中心部分である。これら４つの章では、「話し手」というヴァナキュラーな言葉で指し示しうる会話の中の立場が、実際にどのように多様な仕方で区別されて産出されているのかを考察する。これらの分析を通じて、「話し手」という指標的概念を一義的な客観的概念に置き換えようとする従来のコミュニケーション論が、言葉を用いた相互行為という対象領域に関して、多くの基本的な現象を見落としていることを浮き彫りにする。

３章では、会話の中で二人の発話がオーヴァーラップしたときに、一度に一人が話すという状態を回復する形に参加が組織化される二つの手続きを分析する。４章では、逆に、会話の中で複数の者が発話を重ね合わせようと工夫するときに見いだされる参加の組織化を分析する。５章では、日本人の会話において頻繁に用いられる「そう」と「うん」という言葉に焦点を当て、ひとつの発話とそれを越えたレベルの両方で、これらの言葉が参加を組織化するリソース（この言葉の意味は後述）としてどう使い分けられているかを考察する。６章では、会話の中で自分の経験を語り合うやりとりに焦点を当て、そのような比較的長い発話連鎖への参加がどのように組織化され、それを通じてどのような社会的活動が行われているのかを考察する。

３章から５章の分析においては、複数の異なる会話場面を横断的に見渡しながら、それらの異なる会話場面において共通に用いられている相互行為手続きを析出する形で、分析が進められる。それはいわば、パズルのピースをひとつひとつ取り出す作業である。これに対し６章では、このような作業に加えて、ひとつの会話事例においてさまざまな相互行為手続きがいかに折り重なってその場面の固有の特徴が作り出されているのかを分析する。そして、この作業を通じて、その会話事例に立ち現れ

ている多様な社会的文脈を記述することが試みられる。それはいわば、パズルのピースが組み合わさってひとつの絵柄ができあがっている様子を分析する作業である。本稿の中で従来の社会学的関心にもっとも接近するのは６章であるが、そこに至るためには３章から５章のような作業が前もって必要となる。このような探究の道筋は、会話分析のアプローチにとって何がより基本的な分析課題を構成するかを反映しており、そこにも従来の社会学との相違が表れている。

最後に７章では、上にあげた３つの目標に照らして、総括的討論を行う。まず、第一の目標に照らして、本稿の記述がどのような点で従来の語用論的コミュニケーション研究とは異なるコミュニケーション研究となっているのかを考察する。次に、第二の目標に照らして、本稿の探究が従来の社会学に対して持つ方法論的含意はどのようなものであるかを考察するとともに、従来の社会学において「社会構造」という概念に託されてきた行為への拘束という問題に関して、異なる理解が可能であることを論じる。最後に、第三の目標を果たすために、異なる社会文化的世界における言葉を用いた相互行為の研究を概観し、それに基づいて、会話分析が見いだしてきた相互行為手続きの通文化的妥当性について考察する。

２章　参加の組織化と連鎖装置

１　はじめに

相互行為の研究において、参加の組織化という問題に最初に本格的に注目したのは Goffman である。Goffman は、相互行為の秩序を人々のふるまいの「統語論的関係」として記述しようとする中で、人々がさまざまに異なった立場で相互行為に参加し、それらが結びつく形で「社会的状況」が作り出されていることに気づいた。

たとえば、ホテルやレストランなどの場面における相互行為では、人々の立場が「演技者（performer）」と「観客（audience）」と呼びうる二つに大きく分かれ、また「演技者」たちはしばしば「チーム」をなして相互行為に参加することを指摘した（Goffman 1959）。繁華街の雑踏空間や空港のロビーや社交パーティなど多くの人々が集まる場面では、人々が同じ「注意の焦点（focus of attention」をめぐって相互行為を行う「焦点の定まった集まり（focused interaction）」への参加と、人々が互いに注意の焦点を共有しないようにふるまう「焦点の定まらない相互行為（unfocused interaction）」への参加を、大きく区別した（Goffman 1961, 1963）。そして、このような問題意識が言葉に向けられたとき、ひとつの発話に対して人々が占めるさまざまな「話し手」「聞き手」の立場を区別するという試みが行われた（Goffman 1981）。

本稿で問題にする意味での参加の組織化という主題は、直接には、Goffman のこの最後の仕事に端を発する。本章ではまず、この議論とそれに連なるいくつかの先行研究を概観したあとで、それを本稿がどのように継承・発展させようとするのかを論じる（２節）。次に、この問題に会話分析の視点からアプローチするうえで不可欠な、会話分析の概念装置を概観する（３節・４節）。最後に、本稿で扱うデータの概要と若干の方法論上の問題を論じる（５節）。

２　「話し手」「聞き手」概念の解体

Goffman（1974, 1981）によれば、従来のコミュニケーション論においてあたりまえのように議論の前提におかれていた「話し手」や「聞き手」という言葉は、実にさまざまな異なった立場をさすものである。言葉を用いた相互行為においては、人々はそれらの立場を絶えず切り替えている。そして、そのような切り替えをスムーズに行えることは、人間のコミュニケーション能力のきわめて重要な部分を構成している。

第一に、ふつう「聞き手」という言葉が用いられるとき、「話しかけられた者（addressed hearer）」「話しかけられていない参加者（unaddressed hearer）」「傍観者（overhearer）」「盗聴者（eavesdropper）」といった異なる立場が区別されることなく混在している。また、 会話の中に「従属的チャンネル（subordinate channel）」が発生したり、会話が分裂・再統合したり、道具的活動が並行して行われているために「話しても話さなくてもよい状態（open state of talk）」が生じたり、という変化に応じても異なる意味での聞き手が現れる。さらに、会話以外の焦点の定まった集まり（講演会、儀式など）や、焦点の定まらない集まり（雑踏など）に目を向ければ、さらに異なる意味での聞き手が現れる。

第二に、ふつう「話し手」という言葉が用いられるとき、「言語音を発声している者＝発声者（animator）」「言葉を選択した者＝著者（author）」「話された言葉によって立場が打ち立てられる者＝

責任主体(principal)」といった異なる立場の異なる組み合わせが混在している。たとえば、引用や朗読や同時通訳においてはこれらの立場が別々の人物に分担される。また、言葉は「話される世界」に属する人物を指示できるので、人はしばしばひとつの発話の中に異なったいくつもの立場を「登場人物(figure)」として「埋め込む(embedding)」ことができる。

第三に、人々は、相互行為の中でこれら多様な立場を切り替えるだけでなく、ひとつの立場を保留しながらその途上に別の立場を一時的に重ね合わせる。それゆえ、ひとつの立場はしばしば複数の発話にわたって保持されうる。

Levinson はこの議論を直示(deixis)の言語学のための重要な基盤を提供するものと見なし、「話し手」「聞き手」概念をより体系的に分解することで「参与役割(participation role)」の理論を構成した(Levinson 1988)。また、分類された参与役割がたとえば人称代名詞などの形で「文法化」されている度合いが言語によって異なることを示すとともに、「話し方の民族誌(ethnography of speaking)」に関わる諸研究に依拠しながら、特定の参与役割が相互行為上の役割として制度化されているかどうかが文化によって異なることも示した。こうして Levinson は、参与役割の対照言語学的研究や民族誌的研究に利用可能なひとつの記述枠組みを整備した。

これらの議論は、「話し手」「聞き手」という言葉の中に異なった立場が折り重ねられていることを明らかにする。それは、言語行為論のように「あらゆる重大な現象を孤立した話し手個人の心的生活の中に留める」(Goodwin & Goodwin forthcoming) 見方に対する、重要なオールターナティヴを提出している。しかし、たとえば北村が「共有関係」と呼んだ参加の構造は、彼らの議論においても十分な位置を与えられない。西阪(2001)が的確に指摘しているように、現実の相互行為の中に現れる立場の多様性は、Levinson の体系的分類をもはみだすのであり、重要なのは立場の分類学ではない。

これらの議論のポイントは、「話し手」「聞き手」という言葉が指標的概念であるということである。このように理解することで、語用論的コミュニケーション研究の企てが、これらの概念に客観的な定義を与えて「指標性を解消」しようとするものであることが鮮明になる。だから逆に、本稿の視点からして重要なのは、これらの概念によって記述されうる多様な立場が、どのようにふるまいの配列を通じて区別されているかを記述することである。この観点から、さらに念頭におくべき点として次の 4 点がある。

第一に、Goffman も Levinson も、相互行為が時間の流れの中で刻一刻展開していくものだという決定的な視点を欠いている。ひとつの発話を準拠点として共時的に分化する参与役割は、相互行為の中では通時的に繰り返し再配分される。だから、ひとつの発話を担う立場がどのようにして再配分されるのかを考えなければならない。このとき同時に、「ひとつの発話」という概念もまた指標的概念であることが明らかになるだろう。会話の中には文に相当するひとつの発話もあれば、文以上・文未満のひとつの発話もある。オーヴァーラップする発話もあれば、一度中断してからいい直される発話もある。参加の組織化の記述は、分化した立場の記述とともに、分化の準拠点となる言語的単位の記述も含むのである。

第二に、Goffman も Levinson も、「話し手」と「聞き手」という言葉をそれぞれ解剖しているが、この両者への区分自体が自明でないことには十分な注意を払っていない。たとえば、人が発話の途中でポーズをおく場合には「発声者」ではないが依然として「話し手」であるということが可能だし、相手の発話に対して「うんうん」とあいづちを打つ場合には、「聞き手」として「発声」しているということが可能である。重要なことは、話し手として参加することの中にはしばしば聞くという行動も含まれ、逆に聞き手として参加することの中にはしばしば発声することも含まれるという視点であ

る。

第三に、概念の解体作業が理論的に行われているために、さまざまな立場がどのようにして互いに互いを構成し合うかたちで参与者たち自身によって生み出されているのか、という問いが問われない（西阪 2001、Goodwin & Goodwin forthcoming）。これに対し、たとえば C. Goodwin は、聞き手が話し手の方を見ているかどうかを話し手がモニターするといった相互的手続きの中で、話し手であることが実現されることを明らかにした（C. Goodwin 1981）。また、また西阪は、人々のそのつどのふるまいの組織化を通じて、立場の布置としての「相互行為空間」の全体が「組替え」や「複合化」を受けることを記述して見せた（西阪 2001）。これらの仕事はいずれも、本稿がめざす方向を先取りした重要なものである。

第四に、今の点と重なるが、聞き手の位置づけがまだ受動的である（Goodwin & Goodwin forthcoming）。たとえば、発話に「登場人物」が「埋め込ま」れると Goffman が表現した現象は、もっぱら話し手による発話の組み立てによって生み出されるように捉えられている。しかし、実際には、物語の語り手がさまざまな登場人物を埋め込んで語っていく場合、それはひとり語り手の作業ではなく、語られている出来事に対してさまざまに異なる立場を占める聞き手たちの分化したふるまいと結びつきながら産出される作業である（C. Goodwin 1984, 1986, M. H. Goodwin 1990）。

C. Goodwin & M. H. Goodwin は、これら４点を統括する難点として、Goffman や Levinson の議論における話し手には、「有能な大人の仮象」という西洋中心主義的な人間像が前提とされていると指摘する（Goodwin & Goodwin forthcoming: 36）。これは、言語行為論において想定されているような、意図によって発話の意味を統括する話し手という観念が、Goffman や Levinson の議論の中にも残存しているという指摘として理解できる。逆にいえば、参加の組織化に注目して相互行為を記述するという目標は、そのような「有能な大人の仮象」を前提にしない地点から相互行為の記述を試みるという、人類学的な課題へと連結されうるはずなのである。

次節では、これら４点を踏まえつつ先に進むために、会話分析においてこれまで提出されてきた基本的な分析装置が、有効な出発点を与えてくれることを示していく。

３　ターンテイキング組織と参加の組織化

３．１　ターンテイキング組織

会話のもっとも基本的な特徴は、共時的に参加の機会が分化している（たとえば話し手と聞き手という形で）とともに、分化した参加機会が通時的に繰り返し再配分される（たとえば話し手の交替という形で）ことである。これに対し、たとえば合唱という活動への参加や、重いものを協力して運ぶという活動への参加は共時的には分化していても通時的に再配分されることはあまりない。また、たとえば行列という集まりへの参加は、参加機会が共時的に分化している（先頭、２番目…という形で）が、通時的な分化はその帰結としてもたらされるだけである。さらに、将棋のようなゲームへの参加機会は、通時的な配分が予め固定しており再配分されない。相互行為は、その参加機会がどのように分化しているかに応じて、さまざまな類型に区別することができる。

それゆえ、共時的に分化した参加機会が通時的に繰り返し再配分されるメカニズムの研究は、会話的相互行為における参加の組織化を考えるための土台を形成する。これが「ターンテイキング組織（turn-taking organization）」の研究である。以下では、Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）によって定式化された「会話のターンテイキングのもっとも簡潔な体系」を押さえたのち、この主題に関わるいく

つかの論点と研究成果を概観する。

Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）の定式化した体系は、２つの構成要素と１組の規則群からなる。

構成要素１：ターンを構成する要素

話し手がターンを構成するために用いることのできる単位（語・句・節・文など。「ターン構成単位（turn constructional unit）」という）は、その進行中に、その単位類型とそれが何をもって完了するかを投射（project）しうる。ターンを獲得した話し手は、少なくともひとつのターン構成単位を発することへの権限を持ち（entitled）、最初のターン構成単位の最初の完了可能点（possible completion）が最初の「移行適切場所（transition relevance place）」を構成する。

構成要素２：ターンを配分する要素

ターン配分テクニックは２つのグループに分かれる。(a)現在の話し手が次の話し手を選択するテクニックと、(b)次のターンを配分されることになる者が自らを選ぶテクニックである。

規則群

任意のターンについて、

1.最初のターン構成単位の最初の移行適切場所において、

(a) そこまでのターンが「現在の話者による次話者選択」テクニックを含むように構成されているなら、選ばれた者（party）が次のターンを取る権利と義務を持ち、他の者はそれを持たず、そこでターンが移動する。

(b) そこまでのターンが「現在の話者による次話者選択」テクニックを含まないように構成されているなら、次のターンへの自己選択が行われうる。最初にスタートした者がターンを取る権利を獲得し、そこでターンが移動する。

(c) そこまでのターンが「現在の話者による次話者選択」テクニックを含まないように構成されているなら、他の者が自己選択しない場合、現在の話者が続けうる。

2. 上記１(c)にのっとって、現在の話者が話し続けたなら、次の移行適切場所でふたたび規則セット１(a)-１(c)が適用され、ターンが移動するまでこれが適用される。

この定式化のポイントは、次の３つである。１）ターンの配分はそのつど「次」のターンに関してのみ行われること。２）進行中のターンの中で「いつ」話し手の移動が適切に生じうるかが限定されていること。３）その場所において「誰が」次のターンを取るかに関する選択肢のあいだに優先順位があること。これらの特性によって、この体系は、ターン間の間隙やオーヴァーラップを最小化しつつ一度に一人へのターン配分を繰り返し可能にする組織の、ひとつの可能な記述を提供している。

次に、この組織の２つの要素（ターン構成要素、ターン配分要素＋規則群）が、参加の組織化にどのように働くかを概観する。

３．２　ターン構成と参加の組織化

どのようなターン構成単位を用いてどのようにターンを構成するかは、場面や参与者の地位・社会関係、相互行為の局面などに応じて「文脈に感応（context-sensitive）」した形でなされる。ターンテイキング組織は、このために利用可能なリソースに関してはオープンな「文脈から自由（context-free）」

な組織である。いいかえれば、そのターンの種類と形状に関して何ごとかを投射し、それを通じて完了可能点を投射するという特性を持つならば、どんなリソースにもこの組織は適用されうる。

ここで、「投射」と「リソース」という語の意味を説明しておく必要があろう。まず「投射」という言葉は、当面の文脈では次の意味である。時間の進行の中で言葉が用いられているとき、ある時点までに発せられた言葉は、その発話の統語的形状（すぐ次の瞬間にどんなタイプの統語要素が発話されそうか、その発話はどんな統語構造をとりそうか、など）、その発話の種類（その発話はどんな行為を行うものになりそうか）、その発話の完了可能点（その発話はいつ完了しそうか）、を予示・予告する性質がある。いいかえると、聞き手はその時点までに発せられた言葉をリアルタイムで分析することで、以上のことについて予測することができる。進行中の言葉が、これらのことを予示・予告することを「投射」という。また、言葉に備わった投射を可能にする性質のことを「投射可能性（projectability）」という[1]。

本稿で「リソース」というのは、相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な、言語的素材（語彙、統語構造、韻律）、発話に直接伴う非言語的素材（発話のテンポ、音の大きさ、音の長さ、声調、声質、間隙、吸気、呼気、発話の位置、など）、およびその他の身体的素材（視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作、など）への総称である。

これを踏まえて、次に、日本語のターン構成を念頭に代表的なリソースを概観してみよう。

(1) そのターンの発話連鎖上の位置どり

発話連鎖上の位置どりによってそのターンで行われるべき行為の種類があらかじめ投射されているなら、その行為が行われたと認識可能な時点でそのターンは完了可能となる。たとえば「Yes/ No 質問のあと」という位置を占めるターンは「はい」「うん」だけで完了可能点を迎えうる。

(2) ターン開始部に配置される前置き的成分

「あ」「え」「あのね」「うん」「そう」「いや」「でも」「だから」「だって」など、ターン開始部に配置され、後続するターン構成単位に統語的に連結されていない成分は、ターン構成単位の統語的形状を投射する働きは弱い。しかし、これらはしばしば「どんな種類の行為がこのターンで行われようとしているか」「どんな要素が現れたらこのターンは完了に向けた動きを始めるか」等を投射しうる。

(3) ターン構成単位の統語構造

完了可能点の投射においてもっとも中心的なのは、ターン構成単位を組み立てるために用いられる言語の統語構造である。この点に関して、日本語のようなＳＯＶ型言語では英語のようなＳＶＯ型言語と違いがあることが指摘されている。また、日本語では、従属節を作る接続語が節に後置されることや、名詞句の統語的働きを示す格助詞や副助詞が後置される点なども、英語とは異なった形で投射のリソースになることが指摘されている（Tanaka 1999, 2000, Hayashi 2003）。

(4) 韻律的特徴

韻律の働きは、とりわけ統語的に完了可能な点の付近で顕著であると考えられる。たとえば、統語的完了可能点に近づいたとき、それを通り越してひと続きの韻律ユニットが形成されるように発話を産出する（「駆け抜け（rush through）」（Schegloff 1981））ことで、ターンがまだ続く

ことが投射されうる。

(5) ターン構成単位の終了部に配置される成分

日本語の特性として、「ね」「よ」「でしょ」「か」のような「ターン最終要素」（Tanaka 1999）は、いままさに完了可能点が迫っていることを投射する重要なリソースであることが指摘されている。また、これらの要素がおかれうる位置は、「けど」「から」「たら」などの従属節を形作る標識が後置されることで、またターンが続くことが投射されうる位置でもある（Hayashi 2003）。

ターンの完了可能点は、これらのリソースによって、時間の進行とともに漸進的に投射されうる。したがってそれは、いい直しやいい換え、挿入句の使用などによって何度も投射され直すことが可能である。重要なことは、何がターン構成単位を構成し、何をもってターンの完了可能点が訪れるのかは、あらかじめ理論的基準に基づいて研究者が決定できることではないということだ。それは、会話の参与者がそのつどの文脈の中で上記のようなリソースを用いて表示し、見つけ出すことである。

さて、ターンの投射可能性が参加の組織化に対して有するもっとも基本的な働きは、ターンの進行中に完了可能点を予測可能にすることで、スムーズな話し手の交替を可能にすることである。しかしこの特性はまた、ターン開始直後から、さまざまな仕方で参加の組織化に関わっている。その働きの代表的な例を４つ挙げてみよう。

第一に、ターン開始部において「どんな要素が現れたらこのターンは完了に向けた動きを始めるか」を投射するリソースが用いられる場合、その要素が現れるまでは、仮に統語的に完了可能な地点（たとえば「文」の切れ目）が来てもそのターンはまだ完了可能点に達していない、という分析が聞き手にとって可能となる。このような分析に基づいて組織されうる聞き手の参加形態のひとつは、ターンの途中で「先に進む促し（continuer）」（Schegloff 1981）を行うことである。日本語で「あいづち」と呼ばれるものの一部はこれに当たるだろう。また、もうひとつの参加形態は、開始部で予告された要素が現れるやいなや、聞き手が「分かった時点での発話開始（recognitional onset）」（Jefferson 1984a, 1986）を行うことである。これは発話のオーヴァーラップをもたらしうるが、このオーヴァーラップはターンの投射可能性が利用されることの自然な帰結である。

第二に、特定の発話連鎖上の位置、たとえば依頼のような「隣接ペアの第一部分」（後述）のあとで、「うーん」「ええと」「あのー」のような前置き成分を用いてターンが開始されたり、発話の前に間隙が置かれたりするとき、これらのリソースは開始されようとしているターンの種類が「選好されていない（dispreferred）」第二部分（依頼に対する拒否）であることを投射しうる（Sacks 1987、Pomeranz 1984、Schegloff 1988c）[(2)]。このとき、聞き手はそのターンを完了可能点まで全部いわせる前に、それを先取りして、自分の依頼をより受け入れやすい形に提示し直すなどの参加形態を選択することが可能となる（Davidson 1984, Pomeranz 1984a, Drew 1984）。このように、ターン種類が投射されうることは、そのターンで行われようとしている行為を未発に終わらせる手だてを講じる機会を作り出す。

第三に、投射可能性があることで、聞き手は開始されたターンを、完了可能点をめざして進む方向性を持った動きとしてモニターする。そこで、開始されたターンが中断されていい直されるなど、方向性を持った動きに顕著な変化が生じるとき、聞き手は自分の参加形態を変化させる機会を見いだしうる。たとえば、話し手がターン開始部を中断して「再スタート」させたり、開始してすぐに間隙を置いたりすることは、聞き手が話し手に視線を向ける機会になることが指摘されている（C. Goodwin 1980, 1981）。また、５章で詳しく見るが、開始されたターンの動きに滞りが生じることは、そのタ

ーンの統語的続きをいう形で聞き手がターン産出に参加する機会となりうる（Lerner 1996a）。

第四に、ターン構成単位の統語構造も、聞き手がターン産出に参加する機会を作り出すリソースとなりうる。たとえば、 C. Goodwin & M. H. Goodwin（1987）は、「指示＋コプラ＋強調副詞」という統語構造を用いてあるターンが産出されているとき、強調副詞のあとで評価語が発せられることを聞き手たちが予測し、話し手とオーヴァーラップしつつ口々にそれぞれの評価語を発話することを分析している。彼らによれば、評価という行為はオーヴァーラップを通じて適切に行われうる行為の一種であり、このためにターン構成単位の投射可能性が利用される。また、これも５章で詳しく見るが、Lerner（1991, 1996a）によれば、「if X, then Y」のような２つの節からなる統語構造を持つターン構成単位（「複合的ターン構成単位」）が進行中であるとき、前半の従属節の終了は、聞き手が先に進む促しを行ったり、統語的続きを自ら発話したり、主節でいわれると予測されることに先取りして反応したりといったいくつかの形で、聞き手がそのターンに「条件付き参入」を行う機会となる。

以上のように、ターンを構成するリソースは、話し手という立場を一度に一人の形でスムーズに配分するために利用されうるだけでなく、そのターンの進行中から会話者たちの参加がさまざまな形で組織化されるためのリソースともなる。

３．３　ターン配分・オーヴァーラップ・オーヴァーラップ解消装置

ターンテイキング組織は、あるターンが完了可能点に達するまえに「現在の話者が次話者を選択する」ために利用できるリソースを必要としている。そのようなリソースもまた、さまざまに文脈に感応した形で作り出されるものである。これまでに指摘されている代表的なリソースを概観しよう。

(1) 隣接ペアの第一部分＋アドレスの方法
隣接ペアについては後述するが、たとえば質問は隣接ペアの第一部分の一例である。質問だと認識可能なターン構成単位を、呼びかけの言葉や特定の相手に向けた視線とともに用いることで、特定の相手を次の話し手に選択することができる[(3)]。

(2) 先行話者を次話者に選ぶために特化した一群のリソース
「え？」「何？」「それで？」のような質問や、先行ターンの一部を上昇調の抑揚で反復すること、さらに、相手が産出中のターンを相手に向けて完了させる（詳細は５章）ことなど、先行話者を次話者に選ぶときのみ利用可能な一群のリソースがある。

(3) 当初は「現在の話者が次話者を選ぶ」形にデザインされていなかったターンを、途中からそのように変更する「再完了子（recompleter）」
英語の場合には付加疑問が代表的である。日本語の場合、ターン最終要素のうち「よね」「でしょ」などがこうしたリソースになりうる。

(4) 隣接ペアの第一部分に反応するための文脈に感応した必要条件
隣接ペアの第一部分に応じるための必要条件を満たす参与者がその場にひとりしかいないときに用いられる第一部分は、そのひとりを次話者に選ぶことができる（Lerner 2003: 190）。たとえば、ごはん茶碗が空になっている人がひとりしかいないときに、誰にも視線を向けずに「おかわりは？」というような場合。

以上のようなリソースの利用によって、規則 1(a)はさまざまに文脈に感応した仕方で参照されうる。これに対し、規則 1(b)でいわれている「次の話し手が自己選択するテクニック」とは、一般的

には「早くスタートする」ことである。このことは、ターンテイキング組織が３つの仕方でオーヴァーラップを産出する組織でもあることを意味する。

第一に、現在の話者が次話者を選択するテクニックの一部は、ターンの完了可能点付近に配置される（完了可能点付近での視線、後置される呼びかけの言葉、再完了子など）。次話者になろうとする者は、そのテクニックを見届ける前に早いスタートを切る可能性がある。このとき、オーヴァーラップが生じうる。第二に、次話者になろうとする者たちがほぼ同時にスタートを切ることで、オーヴァーラップが生じうる。第三に、話し手が複数のターン構成単位からなるターンを産出するとき、２つ目以降のターン構成単位と聞き手の早いスタートとのオーヴァーラップが生み出されうる。

Jefferson は、このように見た場合、会話の中で生じるオーヴァーラップの大半は完了可能点付近で生じていると指摘している（Jefferson 1984a, 1986）。ターンテイキング組織に指向することは、いくつかの種類のオーヴァーラップを必然的に帰結する。それゆえ、ターンテイキング組織は一度に一人が話し手になるという課題への基本的解決を提供するとともに、この組織自体が生み出すオーヴァーラップの可能性に対処するという問題をも提起している。これは、会話分析が記述する方法・装置・手続き等に一般的に当てはまる重要なポイントである。それらは特定の相互行為上の問題を解決するものであるとともに、それによって別の問題を生み出すものでもある。

ターンテイキング組織は、それが必然的に生み出す問題としてのオーヴァーラップに対処するための「二次的組織」として、「オーヴァーラップ解消装置」を必要としている。これについては、Schegloff (2000) が現時点でもっとも整備された記述を提供している。そのあらましは次のようなものである。

(1) オーヴァーラップ解消のために利用されるリソースは、発話産出における「つっかえ (hitch)」や「揺れ (perturbation)」である。たとえば、音量の急激な増大、ピッチの急激な上昇、発話テンポの急激な加速や減速、発話の中断、音の引き延ばし、語句の反復などが代表的である。

(2) これらのリソースは次のような特定の場所において用いられる。

・オーヴァーラップの開始が差し迫っているとき
（例：現在の話者が次話者候補の吸気音を聞いて発話のテンポを速める。）

・オーヴァーラップ開始直後
（例：オーヴァーラップの開始を見て取り、自分の発話の音量を上げる。）

・オーヴァーラップの解消が間近に迫ったとき
（例：相手のオーヴァーラップ発話が完了可能点に近づいたので、自分の発話が生き延びる (outlast) ようにテンポを落とし音を引き延ばす。）

・オーヴァーラップの解消直後
（例：オーヴァーラップ相手が発話を中断した直後に、自分のターンを冒頭から反復する（詳しくは３章を参照）。）

(3) これらのリソースを用いてオーヴァーラップを解消する試みは、大まかに１音節に相当する単位（１ビート）をその交渉の機会とする。話し手たちは、現在のビートと次のビートとのあいだに発話産出上の変化をつけることによって、オーヴァーラップの解消に向けて秩序だった仕方で交渉を行うことができる。

なお、オーヴァーラップにおける参加の組織化とは、たんにどちらかがオーヴァーラップを生き延びることのみを主題とするわけではなく、さまざまな「代替的成功」（Schegloff 2000）もありうる。

代表的なものにLerner（1989）が記述した「遅れた完了（delayed completion）」という手続きがある。これは、オーヴァーラップにおいて先に自発話を中断した者が、相手の生き延びた発話の完了可能点付近で、中断した自発話を完了させるというものである。中断した者は、自分の先行発話の完了部のみを発話することで、相手発話を「飛び越えて接続（skip-tying）」されていることを認識可能にする。このような統語的リソースの利用によって、オーヴァーラップを譲る代わりに自発話を完成させるという代替的成功が可能になる（遅れた完了については５章でも詳しく取り上げる）。また、別の種類の代替的成功として「分派形成（schisming）」（Egbert 1997）がある。すなわち、オーヴァーラップした二人がそれぞれ別の聞き手に向けてターンを完了させることで、会話を２つに分裂させ、いずれのターンもそれぞれの会話の中で生き延びるという方法である。

以上のように、一度に一人の話し手という線状的役割交替を記述するものとして定式化されたターンテイキング組織は、その直接の記述対象を越えて、会話における参加の組織化に広く適用可能な性格を備えている。それは、この組織が結果の秩序ではなく手続きの秩序に関するものだからである。ターンテイキング組織を用いた結果として、ひとりがえんえん話し続けることはありうるし、オーヴァーラップ解消装置を用いた結果として、二人がえんえんオーヴァーラップすることもありうる。秩序とは、そういう事態がもたらされないことではなく、そういう事態が生じたとき何が起こっているかが認識可能になることである。

４　連鎖組織と参加の組織化

ターンテイキング組織は、ターンという参加機会の配分に関わるが、配分されたターンにおいてどのような行為を行うかには直接関わらない。これに対し、連鎖組織は行為を組織化する装置である。会話分析は、発話が行為として立ち現れてくる機序に関して、言語行為論とは異なった記述の方法を開発してきた。今日の会話分析の主導者Schegloffは、会話分析にとってもっとも基本的な問いが「なぜ今それを？」であることを繰り返し述べている。これは、相互行為の中でのあらゆるふるまいはその時間上の位置（「今」）とその位置を「満たす」ために選択された形式（「それ」）によって、ある行為として認識可能になり記述可能になることを意味する[(4)]。会話分析がこの問いを重視するのは、これが研究者の問いである以前に参与者の問いだと考えているからである。会話分析は、人々自身がそれぞれの瞬間ごとに相互行為を秩序だったものとして産出している、という仮定に立つので、人々のふるまいは常に「なぜ今それを？」という潜在的問いへの答えとなるように差し出されていると考える。

４．１　連鎖組織のタイプ

連鎖組織に関する研究は会話分析の中でももっとも蓄積の厚い部分だが、連鎖組織という概念の外延は緩やかである。それらの研究を導いてきたのは、「あるタイプの発話のあとにはあるタイプの発話が来ることが規範的に期待される」「あるタイプの発話で始まりあるタイプの発話で終わるような発話同士のまとまりがある」という経験的な直感であるといえるだろう。こうした直感を導きの糸として、データの中に見出された規則的なパターンを生み出す規範的期待のセットを定式化したものが連鎖組織である。

それゆえ、連鎖組織として記述されてきたものにはさまざまな類型がある。第一は、対になった２つの発話タイプ同士の関係を定式化したもの（「対化された発話（paired utterance）」）であり、そのも

っとも強い形式が「隣接ペア(adjacency pair)」(Schegloff & Sacks 1973) である。隣接ペアとは「質問－応答」「挨拶－挨拶」「呼びかけ－応答」「依頼－受け入れ／拒否」などの２つの発話から構成される連鎖組織であり、第一の発話タイプはすぐ次のターンで対応する第二の発話タイプが発せられることへの強い「連鎖上の含み(sequential implicativeness)」を持つ。

隣接ペアよりも弱い連鎖上の含みを持つ「対化された発話」もいろいろ記述されてきた。「評価－第二の評価」(Pomerantz 1984)、「お世辞－拒否」(Pomerantz 1978)、「断定－確認／否認」(Pomerantz 1984a)、「不平－釈明」(Drew 1998) などがその例である。また、隣接ペアとそれより弱い連鎖組織が組み合わさったものといえる「ニュース告知－話題化－ニュース展開」(Button & Casey 1985) や「質問－応答－状態変化トークン」(Heritage 1984)のような３つの発話からなる連鎖組織も記述されている。

第二は、こうして見出された連鎖組織同士の組み合わせ関係を定式化したものであり、「挿入連鎖(insertion sequence)」(Schegloff 1972)、「脇道連鎖(side sequence)」(Jefferson 1972)、「前置き連鎖(pre-sequence)」(Schegloff 1980, 1988b)、「拡張行為連鎖(expanded action sequence)」(Jefferson & Schenkein 1977) などが代表的である。

第三は、これらの組み合わせによって形成される「大きなパッケージ」を定式化した概念装置で、「物語り連鎖(storytelling sequence)」(Sacks 1974, 1978, 1992, Jefferson 1978)、「トラブル語り連鎖(troubles-telling sequence)」(Jefferson & Lee 1981)、「開始部門(opening section)」の連鎖 (Schegloff 1968, 1986)、「終了部門(closing section)」の連鎖 (Schegloff & Sacks 1973) などが代表的である。

連鎖組織の類型はここに挙げたものにつきるわけではなく、また今後の研究に開かれている部分が大きい。以下ではまず、これらの連鎖組織のもっとも基本である隣接ペアを例に取って、連鎖組織が参加の組織化において果たす基本的な働きを「行為スペースの投射」として特徴づける。次いで、ひとつのターンを超えた「拡大された行為スペースを投射」することを可能にする手続きの一種として、前置き連鎖を取り上げる。

その作業に入る前に、今の「投射」という言葉は、先ほどよりも広い意味で用いていることを述べておきたい。「投射」とは、進行中の言葉がその発話の統語的形状・種類・完了可能点を予示・予告することだと先に述べた。これに加えて、進行中の言葉は、連鎖組織の一部として聞かれることで、進行中の発話連鎖にはどんな種類の発話がどんな順で現れそうか、進行中の発話連鎖の中で誰がどんな立場を占めそうか、進行中の発話連鎖はどんな種類の発話が現れることで適切に完了しうるか、ということも予示・予告することが可能である。以下では、発話が後続する発話連鎖に関してこれらのことを予示・予告することも「投射」と呼ぶ。

４．２　隣接ペアによる行為スペースの投射

あらためて明示しておけば、隣接ペアとは次のような特徴を持つ連鎖組織の一類型である(Schegloff & Sacks 1973)。

(1) 「第一ペア部分」と「第二ペア部分」という２つの成分からなる。
(2) それぞれの成分は、異なった者によって産出される。
(3) 第一ペア部分は第二ペア部分が次のターンにおいて産出されることを要請する。
(4) 第一ペア部分はそれに適合した第二ペア部分が産出されることを要請する。

ここから、隣接ペアという連鎖組織は次のような規範的期待を生み出す装置であることになる。「第一ペア部分が認識可能な形で産出されたならば、その最初の完了可能点において話し手は発話をやめ、そこで次の話し手は適合した第二ペア部分を産出すべきである」。

隣接ペアという連鎖組織が、参加の組織化において持つ働きを捉えるために、次の点に注目しよう。隣接ペアの第一部分は、適合する第二部分が現れることで適切に完了しうるような発話連鎖を開始する。それは、特定のタイプの行為によって満たされるまでは適切に終わることがない、という性格を備えた時間を後続する会話の中に作り出す。そのような時間のことを「行為スペース」と呼ぼう。そうすると、隣接ペアの第一部分は、適合する第二部分によって完了しうる行為スペースを投射するということができる。この特徴によって、隣接ペアは広範な形で、会話への参加を組織化し、参与者たちの立場を認識可能にする装置として働く。

第一に、「応答の不在」の認識可能性。たとえば、質問された者が応答を返さずに沈黙が生じるなら、その沈黙はその者に帰属される沈黙であること、その者は「質問を無視する」という行為を行っていることが認識可能となる。このとき、その者の立場は、声を発してはいないが Goffman のいう意味で「責任主体」として組織化される。隣接ペアは、声を発していないという物理的沈黙とは区別される、行為としての沈黙を認識可能にする。

第二に、「チーム」としての参加の組織化。複数の者がオーヴァーラップして、あるいは相次いで、適合的な第二部分を発するとき、それらはいずれも第一部分によって開始された発話連鎖との関係で聞かれうるため、それらの者は「チーム」として会話に参加していると認識可能になる。たとえば、Holmes（1984）は「明示的－非明示的アドレス」という複合的なアドレス形式を用いた不平（第一部分）によって、複数の者たちが相次いで不平に返答（第二部分）する機会が作り出されるケースを分析している。ある家族の食事に招かれた来客（その家の娘の恋人）が、娘に向けて「なんで君の肉が大きいんだ？」というと、娘の母親や父親が「あなたに大きいのをあげたはずだったんだけど」「まだこの娘は口を付けてないよ」などと相次いで返答するという例である。[5]。

第三に、「途中段階」の認識可能性。第一部分のあとで適合的第二部分以外のタイプの発話がなされる場合、最終的に適合的第二部分が発せられるまでその行為スペースは適切に閉じられないので、あいだのやりとりは適合的第二部分に至る「途中段階」として認識可能になる。たとえば、次の【抜粋１（12）：おやつ】に示すような「挿入連鎖（insertion sequence）」（Schegloff 1972）では、Ｑ１－Ｑ２－Ａ２－Ａ１という形式の発話連鎖が作り出されている。

【抜粋１（12）：おやつ（簡略表記）】
（（Ｘは学童保育所の児童。Ｙは指導員。））

Ｘ：何時におやつなーん？	Ｑ１─┐
Ｙ：今何時ー？	Ｑ２┐│
Ｘ：ええー、３時頃。	Ａ２┘│
Ｙ：まだ、３時半頃にするわ。	Ａ１─┘

Ｘの質問（Ｑ１）のあとには適合する応答（Ａ１）ではなく、別の質問（Ｑ２）が発せられている。しかし、これによってＱ１の効力は無効にはならない。むしろ、Ｑ２はＱ１に答えるための準備として聞かれ、それゆえに先に応答（Ａ２）されるべきものとなる。ここから分かるように、第一部分を発した話し手は、適合的第二部分が発せられるまでのあいだは、発話者の交替があり、そのあいだに

「質問－応答」が挟まっても、進行中の行為スペースにおける「質問者」という立場を保持しているものと認識可能になる。このように、ターンテイキングという観点からは話し手が線状的に交替しているだけの相互行為が、連鎖組織の働きによっていわば立体的に認識可能になる。よく似た別の例として、第二部分が次のターンで返されない場合や返されたが不十分である場合、第一部分を発した者はそれを何度でもやり直すことが規範的に適切となる。これは「反応の追求(pursuit of response)」（Schegloff 1968, Pomeranz 1984a, Davidson 1984, Button & Casey 1985 ） と呼ばれる過程である。

第四に、ある種の隣接ペアは、適合的第二部分のあとの「第三の位置」における何らかの行為によって適切に完了しうるような、行為スペースをゆるやかに投射しうる。たとえば、「質問－応答」という隣接ペアは、一般に質問者が３番目の位置において「応答が得られた」ことを示すことへの緩やかな規範的期待を生み出す。Sacks はこのことを「質問した者は相手が話したあとでもう一度話す権利を持つ」（Sacks 1992 vol.1: 49）と述べている。また、Heritage は英語の会話において「質問－応答－"Oh"」という連鎖形式が繰り返し見られることに注目している。この"Oh"をヘリテイジは「状態変化のトークン(change-of-state token)」と呼び、これは新たな情報を獲得したり、相手の主張を理解したり、自分の誤りに気づいたときに用いられると指摘している（Heritage 1984)。つまりこのトークンは、質問によって開始された発話連鎖を適切に完了するひとつの手続きなのである。

このゆるやかに投射された行為スペースも、「チーム」としてふるまうために利用可能である。たとえば、【抜粋２（９）：新幹線】にその一例が見られる。

【抜粋２（９）：新幹線】
((ＡとＣは夫婦。Ｂは訪ねてきた来客。))
　Ａ：あの(.)あれですか？(.)新幹線でおいでになった．＝
　Ｂ：＝ええ(.) 新幹［線であの::,
→　Ｃ：　　［はあ.

Ａが発した質問に対して３番目の位置で、Ｃは「はあ」とその質問によって情報を受けたことを示している（ちなみに、Ｂの応答は「ええ」および「ええ、新幹線で」までで完了可能だと分析されうる)。これによって、Ｃは自分もその応答を向けられるべき立場にいること、Ａの質問は自分とＡの二人を代表して行われたものであること、これらのことを示している。ＣはＡとひとつの「チーム」をなす者としてふるまっている。

以上のように、隣接ペアを代表とする対化された連鎖組織は、適合的第二部分によって適切に完了されうる行為スペースを投射する。また、ある種の隣接ペアは、第三の位置における何らかの行為によって適切に完了しうる行為スペースをゆるやかに投射すると見ることができる。これらの働きによって、これらの連鎖組織は参加を組織化する装置として働く。

４．３　前置き連鎖による拡大された行為スペースの投射

対化された連鎖組織は、より長い発話連鎖の「前置き連鎖(pre-sequence)」として用いられることができる。「呼びかけ－応答(summons-answer)」という隣接ペアはこの働きのために特化した連鎖組織であり、「非終末性(nonterminality)」（Schegloff 1968）という特性を持つ。この連鎖組織の終了は相互行為全体の終了を適切に構成し得ない。呼びかけは、応答のあとの３番目の位置で、少なくともひとつの行為が呼びかけた者によって行われることを投射する。また、質問－応答という隣接ペアも、

そのあとでさまざまな行為（依頼、勧誘、告知、物語りなど）を行うための前置き連鎖として利用されうる。

ある発話を前置きとして利用できることは、自分がしばらくのあいだ、通常のターンテイキングを保留した形で話し手としての立場を保持したいとき、それをあらかじめ交渉する手だてとなる。つまり、３番目以降のターンにおいて自分がある行為を行うことで初めて適切に終了しうるような、そういう性格を備えた行為スペース（これを「拡大された行為スペース」と呼ぼう）を投射する手続きが利用可能である。ターンテイキング組織は次のターンの配分に関わるだけなのに対し、連鎖組織は部分的には次の次のターン配分を交渉する手だてを提供する。

一例として、「質問－応答」という隣接ペアが「告知の前置き(pre-announcement)連鎖」として用いられている【抜粋３（３）：カレースープ】を見てみよう（「→」が「告知の前置き」としての「質問」。「⇒」が「告知」の本体)。

【抜粋３（３）：カレースープ】
((３人の大学生が、研究室で行っている会話。))
→　01 Ａ：＝あのさクアトロのカレースープって知ってる？
　　02　　(1.1)
　　03 Ｂ：°いえ°.
　　04　　(0.6)
　　05 Ｂ：°(どな［ん？)°
　　06 Ａ：　　［知らん？((Ｃに向けて))
　　07　　(0.3)((Ｃの頭部はビデオ画面をはみ出しているが、Ｃがうなづいているらしい。))
　　08 Ａ：カ‐(.)カレーポタージュスープとかゆうのがあんねん.
　　09　　(1.1)
　　10 Ｂ：ええ.
　　11　　(0.3)
⇒　12 Ａ：°(これ)°
　　13　　(0.5)
⇒　14 Ａ：(これ)も前飲んだことあんねんけど:(0.6)むちゃむちゃまずい°(よ)°.

Ａの１行目の「＊＊知ってる？」のような相手の知識を確認する発話は、質問という隣接ペアの第一部分であると同時に、この質問への応答が得られたのち告知を行うことの前置きとして用いることができる（Schegloff　1988b)。それは、自分が告知を行うための行為スペースを相手の応答のあとまで投射することができる。この種の発話を用いることで、投射された行為が完了するまで自分が複数のターンにわたって話し手としての立場を保持することを、あらかじめ求めることが可能となる(8-14行目)。ＢとＣは、Ａの８行目の発話のあとで自らターンを取らず、Ｂは「ええ」(10 行目）と先に進むよう促すことで、Ａの投射した行為スペースがまだ進行中であるという理解を示している。

前置き連鎖が参加の組織化において重要なのは、それが拡大された行為スペースを投射するとともに、その行為スペースに誰がどのような立場で参加するかを予め交渉する機会も提供するからである。この点に関してもっとも研究がなされているのは「物語り連鎖」である。物語り連鎖は大きなパッケージの一種であり、次のような基本的構造を持つとされている（Sacks 1974, 1978, 1992)。

１　前置き連鎖　(1) 語り手：物語を語ることの提案
　　(2) 聴衆　：提案の受け入れ／拒否
２　語りの連鎖　(3) 語り手：複数のターン構成単位を用いた出来事の報告
　　(4) 聴衆　：先に進む促しや理解のチェック
３　受容の連鎖　(5) 聴衆　：物語への評価やコメント
　　(6) 語り手：語り手による承認／拒否

Sacks はこの基本的構造を定式化するとともに、「配偶者トーク（spouse　talk）」というタイトルの講義で、配偶者の一方が他人の前で物語を語るときもう一方が占める独特の立場を論じている（Sacks 1992 vol 2: 437-443）。たとえば夫が来客の前で体験談を開始するとき、妻はたいていの場合、その体験談をすでに聞いたことがあるか、ともにその体験をしたかである。それゆえ、妻は来客と同じような仕方でその物語に耳を傾けることができない。妻は来客たちのように「物語がどこに行きつくか」をモニターするのではなく、「物語が正しく語られているかどうか」をモニターすることになる。この点で、物語り連鎖への配偶者の参加は、上記の基本的構造において示された聴き手の参加とは異なってくることが多いのである。

この問題を精力的に探究した Lerner（1992）によれば、重要なのは配偶者やそれに類した特定の社会関係ではなく、人々が会話の中で物語り連鎖への調整された参入を果たすやり方である。物語の前置き連鎖は、配偶者のようにその物語を知っている者が（たとえば前置きを聞いてくすっと笑ったり、「あれすごかったね」などの寸評を差し挟んだりすることで）自分の知識状態を表示し、これから開始されようとしている物語り連鎖に「共ー語り手候補（possible　co-teller）」として参加する用意があることを示す機会となる。これらの手続きは、その者が他の聴衆たちとは異なる立場で物語り連鎖に参加することを投射できる。こうして投射された立場は、物語り連鎖のあいだじゅう会話者たちによって参照され続ける。たとえば、聴衆たちが自分の理解を確かめる質問を共ー語り手候補に向ける、語り手が出来事を思い出したり言葉を選んだりするときに共ー語り手候補に援助を求める､などである。このように、物語りの前置き連鎖は、これから会話者たちがどのような立場で物語りという活動に参加するかを予め交渉する機会となる。

以上のように、前置き連鎖は、拡大された行為スペースを投射することによって、複数のターンにわたって話し手としての立場を保持することをあらかじめ交渉する方法となる。また、拡大された行為スペースにどのように参加するかをあらかじめ交渉する機会を参与者たちに提供する。このような仕方で、前置き連鎖は参加の組織化において重要な働きを持つ装置となる。

５　データの概要と若干の方法論上の問題

５．１　データの概要

本稿で分析するデータは、1992 年から 1999 年にかけて、四国地方および近畿地方でビデオ録画された以下の 13 個の会話場面である。

（１）1992 年収録（収録者：串田）。四国地方のＡ大学Ｂゼミの研究室。社会調査の実習の夕食休憩の場面。同大学の学生８名（全員女性、一人は社会人学生）が、お茶を飲みながら会話している。

約 30 分のうち約 15 分をトランスクリプトして使用。
（２）1992 年収録（収録者：串田）。四国地方のＡ大学Ｂゼミの研究室。授業のあとで、同大学の教師１名（男性）と学生６名（女性４名、男性２名）が会話している場面。約 60 分のうち約５分をトランスクリプトして使用。
（３）1993 年収録（収録者：串田）。近畿地方のＣ大学Ｄゼミの研究室。同大学の学生３名（全員男性）のうち２名が夕食を食べ、１名がお茶を飲みながら会話している場面。約 120 分のうち約 90 分をトランスクリプトして使用。
（４）1993 年収録（収録者：串田）。近畿地方のＣ大学Ｄゼミの研究室。同大学の教師１名（男性）と学生６名（女性４名、男性２名）が、学生のうち一人の作成した「自動車運転と環境問題」をテーマとするアンケート調査票の文面を検討している場面。約 90 分のうち、ユニゾンが観察された部分を選択してトランスクリプトして使用。
（５）1993 年収録（収録者：会話者のひとり）。近畿地方のＣ大学に所属する一学生のアパート。学生３名（全員女性、２名はＣ大学所属、１名は別の大学に所属）が、女性雑誌を見て、スナック菓子を食べながら会話している場面。約 60 分のうち約 30 分をトランスクリプトして使用。
（６）1993 年収録（収録者：会話者のひとり）。近畿地方のＥ大学に所属する一学生のアパート。自動車運転免許合宿で知り合った若者８名（女性４名、男性４名）が、鍋を囲んで酒を飲み、テレビをつけながら会話している場面。約 90 分のうち、ユニゾンが観察された部分を選択してトランスクリプトして使用。
（７）1993 年収録（収録者：会話者のひとり）。近畿地方のＣ大学に所属する一学生のアパート。同大学の学生３名（全員女性）が、ピザを食べ、音楽ビデオを流しながら会話している場面。約 60 分のうち約 30 分をトランスクリプトして使用。
（８）1994 年収録（収録者：会話者のひとり）。近畿地方のＣ大学に所属する一学生のアパート。同大学の学生３名（（７）と同じ３名）が、数ヶ月前に収録した（７）のビデオテープを見ながら会話している場面。約 90 分のうち約 60 分をトランスクリプトして使用。
（９）1994 年収録（収録者：串田）。近畿地方のある老夫婦の家。老夫婦の孫である幼児（男性）とその両親、および幼児のもうひとりの祖母の６名が、食事をしながら会話している場面。約 30 分をトランスクリプトして使用。
（10）1998 年収録（収録者：串田）。近畿地方のＦ学童保育所の保育室。同学童保育所の指導員５名（女性４名、男性１名）が、職場会議の始まる前に会議資料を作成しながら会話している場面。約 120 分のうち約 10 分をトランスクリプトして使用。
（11）1998 年収録（収録者：串田）。近畿地方山間部にある野外活動施設。同施設において、Ｆ学童保育所が主催した２泊３日のキャンプの夜に、指導員１名、ボランティア２名、児童の父親１名、調査者１名（全員男性）が、夜、酒を飲みながら会話している場面。約 60 分のうち約 30 分をトランスクリプトして使用。
（12）1999 年収録（収録者：串田）。近畿地方のＦ学童保育所の保育室。同学童保育所の指導員２名（ともに女性）が児童たちの登所を待っているところに、順次児童たちがやってきて、最終的に約 20 名の児童が保育室にやってくるまでの場面。約 60 分のうち約 30 分をトランスクリプトして使用。
（13）1999 年収録（収録者：串田）。近畿地方山間部にある野外活動施設。同施設において、Ｆ学童保育所が主催した２泊３日のキャンプで、ハイキング中に児童がハチに刺されたという連絡が、

本部テント前にいる指導員の携帯電話に入ったあとで、同指導員（男性）とボランティア（男性）と児童の父親２名が行ったやりとり。約 30 分のうち約 10 分をトランスクリプトして使用。

このうち、（１）から（４）は、当時私が勤務していた大学の学生に「日常会話の研究の資料にするために会話をしている場面を録画させてほしい」と依頼し、許可を得て収録したものである。（５）から（８）は、当時私が勤務していた大学において、授業で会話分析とはどのような研究分野であるかをトランスクリプトを提示しながら紹介し、「このような研究の資料とするために、さらに会話の場面を録画したいので、協力してくれる人は名乗り出てほしい」と受講生に依頼し、名乗り出てくれた学生の協力を得て収録したものである。（９）は知人に「日常会話の研究の資料とするため会話を録画したい」と依頼して、許可を得て収録したものである。（10）から（13）は、近畿地方の一学童保育所において、運営主体である父母会と指導員の許可を得て収録したものである。調査に際しては、「学童保育所におけるさまざまな活動や子供の相互行為について実地に観察しながら研究したい」という主旨の依頼を行い、夏休み期間を中心に約１年間の断続的な参与観察を行った。２年目に入って、「より詳細な形で観察記録を残すためビデオ録画を行いたい」と依頼し、許可を得て、保育活動のさまざまな場面を録画した。なお、（12）と（13）は筆者がビデオカメラを手に持って撮影した。それ以外は、すべて三脚で固定した状態で撮影した。

いずれのデータに関しても、許可を得るに当たっては、次の内容を口頭または文書で伝えた。

１）ビデオテープそのものは公開しない。

２）学会発表や論文において、トランスクリプトを公開することがある。

３）公開するトランスクリプトにおいては、会話者の名前や、会話の中で言及されている会話者の知人の名前、および会話者の所属団体名など、会話者個人の特定につながる可能性のある情報は、すべて仮名にするか伏せる。

なお、ここで取り上げる 13 個のデータは、これまで収集したビデオデータのうちのごく一部である。収集したデータの中から、これらを選択したのは、何らかの分析目的があってのことではない。主たる選択理由は、データの収録状態が比較的良好であり、トランスクリプト作成作業がやりやすいことである。また、テープの中の一部分を選択してトランスクリプトしているものが多いが、その選択基準は、収録状態が良好であることと、注目する現象が見られたことである。

５．２　若干の方法論上の問題

会話分析は、一般に、実験的統制を加えない自然な相互行為場面をデータとして用いることを重視する研究方法だと理解されている。このことは、当然、「ビデオに撮られている相互行為は自然な相互行為といえるのか」という疑問を喚起するであろう。この問題に対する私の考えはこうである。

データが自然であるかどうかということに関して重要なのは、データがどのような形で収録されたかではなく、そのデータを「何についての」データとして分析するかということである。そのデータの中で人々のふるまいが方向づけられていることを分析しようとする限り、どのような収録方法によるものであっても、それは「自然」なデータでありうる（この意味で自然という言葉を用いるとき、かぎ括弧を付す）。たとえば、実験的統制を加えた場面における相互行為は、それを用いて「人々はいかにして実験という場面を互いのふるまいの組織化として産出するのか」という問題を解明しようとする限り、実験場面についての「自然な」データとして取り扱われうる。

ただ、このことはデータを詳細に見ていく中でそのつど判断されるべきことである。本稿で取り扱

うデータにおいては、ときに、会話者がビデオに撮られていることに言及して冗談をいったり、ビデオカメラに向かって手を振ったり、ビデオをのちに見るであろう私に向けて発話をデザインしたりしている。つまり、その場面が「ビデオに撮られている場面」であることにふるまいを方向づけていることを、参与者たちは互いに対して観察可能にし、それによってビデオの存在を相互行為にとって「関連ある」文脈として構成する。しかしながら、そのようなことは収録中つねに生じているわけではない。多くの場合、参与者たちはそのような仕方でビデオの存在にふるまいを方向づけない。だから、ビデオに撮られている場面だからといって、人々がつねにそのことを意識して演技していると見なすことは適切ではない。

本稿で扱う相互行為はいずれも、参与者がビデオの存在を相互行為に「関連ある」文脈として取り扱う／扱わないという二つのオプションの中で、そのつどどちらかにふるまいを方向づける中で営まれている。参与者たちがビデオにふるまいを方向づけているなら、それは「ビデオに収録されている相互行為」に関するデータとして（すなわち、一種の「演技すること」に関するデータとして）分析されるべきであり、方向づけていないなら、それは通常の意味で自然な相互行為に関するデータとして分析されるべきである。端的にいって、ビデオに撮られている状況のもとでそれを「意識してふるまう」ことは、人間にとってじつに「自然な」ことでありうるのであって、そのような「自然さ」を記述に組み込むことは、会話分析の立場と矛盾しない（Bergmann 1990）。

だが、次のような疑問がなお残るだろう。ビデオに言及したりという形で観察可能にされていなくても、頭のどこかでビデオを意識し続けているということがあるのではないか、と。このことを否定するつもりはない。しかし重要なのは、人が誰にも知られずに頭のどこかでビデオを意識していることは、相互行為の相手にとって利用不可能なことであって、それゆえ相互行為の進行には関わらないということである。それは、言葉を用いた相互行為の「外部」にある。ちょうど、服の下に隠された相手からは見えない傷跡が、相互行為の「外部」にあるのと同じことである。

人知れずビデオを意識していたり、人知れず服の下に傷跡があることも、相互行為の中でふるまうことのリアリティの一部ではないか、といわれるかもしれない。これも、その通りである。だが、そのリアリティは、「この」相互行為の中で作られるリアリティではなく、たとえば会話をビデオに収録し終えたあとで同じ会話者たちが「事後談」をするとか、別の場面でそのことを第三者に述べるとか、文章にして発表するなどの「別の」相互行為の中で作られるリアリティだとみなすべきであろう。したがって、「この」会話の「この」時点では、それはやはり相互行為のリアリティの「外部」にあるのである。

Goffman 的な相互行為の記述においては、たとえば「事後談」において回顧的に再構成されるようなある相互行為についてのリアリティが、その相互行為そのものの進行の中で指向されているリアリティとしばしば二重写しにされ、そのような二重写しの結果として人々が演技していると記述される。このように研究者による二重写しという理論的操作を経て析出される演技と、相互行為の進行そのものの中で参与者にとって観察可能なものとしての演技とは、区別されなければならない。会話分析の記述は、録音・録画機器の助けを借りて、このような区別を可能にしている。

なお、付言しておけば、ビデオカメラの存在はさまざまに異なった仕方で相互行為にとって「関連ある」文脈になる可能性がある。つまり、ビデオカメラの意味は、それ自体、相互行為の中で構成される。たとえば、参与者のひとりが自分の恋人の不平を述べたのを聞いて、別の者が「あとでこのビデオを見せてばらそうか」などと冗談をいうとき、ビデオは「証拠物件」という意味を帯びている。ビデオをあとで見るであろう筆者に向けて発話が行われるとき、ビデオは「観客ないし盗聴者」とい

う意味を帯びている。設置されたビデオカメラを倒さないように手を添えるとき、ビデオは「倒れやすいもの」「壊してはいけないもの」「他人の所有物」といった意味を帯びている。小学校低学年の児童がビデオカメラを触りたがるとき、それはおそらく「興味深い遊び道具」という意味を帯びている。これらのいずれも、ビデオを意識したふるまいであり、それは相互行為の中で観察可能にされているが、それぞれの場合でビデオが「関連ある」ものになる仕方は異なっている[(6)]。

以上を要するに、ビデオカメラを前にした相互行為が自然であるかどうかということも、その相互行為におけるふるまいの組織化の問題であって、会話分析の視点からは他の現象と同じように扱われるべき現象の一部である。

6　結論

参加の組織化という問題は、Goffman や Levinson による「話し手」「聞き手」概念の解剖作業を通じてその輪郭が描き出された。彼らは、これらの言葉が文脈によって異なる多様な意味を持ちうること、人々は多様な意味での話し手や聞き手になりうることを明るみに出した。しかし、彼らの議論にはいくつかの限界がある。第一に、参加が組織化されるのは時間の流れの中でだという視点を欠いていたこと。第二に、「話し手」と「聞き手」概念を細分化したものの、まず大きくこの二つの立場へと区分できることは前提にしていること。第三に、さまざまな立場を分類はしたが、参与者たち自身がいかにしてそれらの立場を産出しているかという問いが欠如していること。第四に、話し手と聞き手の非対称性が強調されていることである。

これらの限界を超えて参加の組織化を記述していくために、会話分析の概念装置の中で、ターンテイキング組織と連鎖組織がとくに重要である。相互行為が時間の中で連鎖的に組織化されていく手続きを記述するこれらの装置は、相互行為への参加が時間の中で組織化されていく過程を記述するための、確固たる土台を提供する。その核心にあるのは、言葉が持つ投射可能性という性質への注目である。ターンテイキング組織や連鎖組織は、いくつかの異なったレベルにおいて、言葉の投射可能性が参加の組織化において重要な働きを持つことを明らかにしている。

最後に、本稿で扱うデータの概要を述べたあと、ビデオ録画されたデータの自然さという方法論上の問題に触れ、この問題は会話分析の視点からはそれ自体として相互行為の中の現象として理解されるべきであることを論じた。

３章　オーヴァーラップ発話の再生と継続

１　はじめに

たいていの言語的コミュニケーションの理論では、ひとつの単純な仮定が置かれている。話し手は、発話であれ文であれ、その理論が設定しているコミュニケーションの言語的単位を、最初から最後まで妨害されることなしに産出できるという仮定である。それらの理論が関心を向けるのは、その言語的単位が産出されたあと、それがいかにして聞き手に届いたり、理解されたりするのかということである。この見方からすると、もしもその単位を最初から最後まで産出するうえで支障があるなら、それはコミュニケーションにおける何らかのトラブルや乱れである。そのようなことは現実には多々あるだろうが、コミュニケーションという活動の機序にとっては「周辺的」な事情として、理論構成のうえでは無視できる、ということになる。

しかし、この見方は、言葉のコミュニケーション上の働きを考えるうえで、重要な一面を見落とすことになる。それは、言葉が参加の組織化の道具として用いられているということである。本章では、会話におけるオーヴァーラップという現象に焦点を当てることで、このことを例証する。

まず、次の２つの会話抜粋を見ていただきたい。いずれにおいても二人の話し手の発話がオーヴァーラップしているが、両者では異なる形でオーヴァーラップした発話が完成されている。

【抜粋１（３）：山下くん】
　　Ｂ：でいちおう［今回は:　,］
→　　Ａ：　　［山下くん　］山下くんのアダルトビデオ哲学.

【抜粋２（３）：ダイリキ】
　　Ｂ：でもダイリキ［いま　　］いちやわ:::.
→　　Ｃ：　　［ぼく:-］
　　(.)
→　　Ｃ：<４回>ぐらい行きました.

【抜粋１（３）：山下くん】のように、オーヴァーラップした発話部分（の一部）を、そのまま（あるいは若干の語句の変更を加えて）反復再生して自発話を完成させる手続きを「再生(recycling)」と呼ぶ。【抜粋２（３）：ダイリキ】のように、オーヴァーラップした発話部分の統語的続きとなるようデザインされた発話を行って自発話を完成させる手続きを「継続(continuing)」と呼ぶ。本章の分析課題は、オーヴァーラップした発話を完成させるという課題に直面した話し手が、再生と継続をどのように使い分けているのか、これら二種類の手続きが持つ働きの違いは何かを明らかにすることである。

この分析課題には次のような狙いが込められている。第一に、発話を通じて何か（意味、想定、思考、効力等々）を伝えるという仕事においては、伝達すべきものを運ぶように言葉を組み立てるという「意味論的」作業のほかに、その発話を相手に聞かれるように工夫するという「送信」作業が不可欠である[1]。会話の中では、送信作業はたんに相手に聞こえるよう発声するというだけでなく、相

手が然るべき形で聞き手としての注意を向けるように工夫することを含む。この作業を十分になしえない場合、「意味論的」には過不足ない形で発話を産出しても送信としては失敗する。これらの送信に関わる作業は、会話への互いの参加を組織化することの一例である。オーヴァーラップとは送信作業が脅かされる顕著な状況のひとつであるので、オーヴァーラップした発話を完成させるという課題がどのように解決されるかを見ることは、参加の組織化という問題を視野に入れて、従来のコミュニケーション論がどのような限界を持つかを照らし出すのに適している。

第二に、再生と継続という２つの選択肢は、もしも文という単位をそのまま言語的コミュニケーションの研究の素材にしようとするなら、非対称的な位置を占める。再生によって作り出される発話は文という単位に組み込まれない言葉を含む（上の例で最初の「山下くん」とそれ以降の部分には統語的なつながりは見られない）。継続によって作り出される発話は、結果的に文としての体裁を整えている。この２つのあいだでの選択は通常の意味での文文法によって記述されうる選択ではない。だが、もしも２つの手続きが気まぐれで使い分けられているのではないことが分かるなら、実際の言語使用において、話し手は自分の発話に文としての形式を与えるか否かという水準で秩序だった選択を行っていることになる。そのような選択は、文という単位をそのまま言語的コミュニケーションの研究の素材とするなら、見失われてしまう。だから逆に、そのような選択を記述する作業は、言語的コミュニケーションの研究が文という単位をどのように取り扱うことができるかに関して、ひとつの見通しを与えるものになるはずである。

本章では、このような関心を念頭に再生と継続という二つの手続きを分析することで、従来のコミュニケーション論において自明の前提とされている話し手から聞き手への送信という事態が、相互行為を通じて成し遂げられる参加の組織化の一例であることを明らかにする。また、その参加の組織化においては、文という統語的単位がリソースとして利用されていることを明らかにする。これらの作業を通じて、言葉を用いた相互行為とは「話し手ー聞き手」という立場の布置を所与として言語的単位が産出されることではなく、言語的単位が産出されるやり方を通じてこれらの立場の布置も同時に組織化されていく過程であることを示す。

２　ターン冒頭再生と日本語の遅れた投射可能性

会話分析の分野では、オーヴァーラップに関してすでに一定の研究蓄積がある[(2)]。その中で、本章が扱う現象に関してもっとも直接的な導きの糸となるのは Schegloff（1987）による「ターン冒頭再生」の研究である。この研究は、会話のターンテイキング組織に関する研究（Sacks, Schegloff & Jefferson 1974）のひとつの系として提出されている。他方、近年会話分析の立場から日本語会話におけるターンテイキングを研究したいくつかの先行研究では、英語と日本語のターン構成に関する重要な違いが指摘されている。以下では、これらの研究成果を踏まえることで、分析課題をより絞り込む。

Schegloff（1987）は、【抜粋１（３）：山下くん】のように、進行中の相手の発話にオーヴァーラップした者が、相手による発話の完了や中断によってオーヴァーラップが解消するとともに、自発話（正確には、ターン構成単位）の冒頭を再生することを「ターン冒頭再生（recycled turn beginning）」と呼ぶ。これは、会話のターンテイキング組織によって提起される問題を解決する手続きのひとつであるとされる。この組織にとっては、ターンの進行中にその完了可能点の投射が行われることが決定的であるが、ターン冒頭はそのターンの形状や種類の投射を開始する重要なリソースである。他方で、この組織は次に話し手になろうとする者が早く発話を開始することを動機づけるので、ターン冒頭は先

行発話の末尾とオーヴァーラップする可能性に系統的に晒される。この事情ゆえ、ターンテイキング組織はターン冒頭のオーヴァーラップに対処する何らかの手続きを要請する。ターン冒頭再生は、Schegloff によれば、そのような手続きの一種である。

他方、ターンの投射可能性に関して、英語と日本語では重要な違いがあることが、近年指摘されている（Fox, Hayashi & Jasperson 1996、 Hayashi 2003、 Tanaka 1999、 Tanaka 2000）。それは日本語のターンの「遅れた投射可能性（delayed projectability）」という特徴である。たとえば Fox, Hayashi & Jasperson（1996）は、Schegloff（1987）に言及しつつこう述べている。「日本語におけるターン構成単位の冒頭は、後に続く部分がどのような構造になりうるかを統語的に投射する要素を持たない傾向がある。…日本語の話し手や聞き手は、「早期の投射」という方略を容易に許さない統語的営為に携わっている。…〔このような〕言語においては、話し手は〔ターン構成単位の〕冒頭に指向するよりもむしろ末尾に指向する傾向があるだろう」（Fox, Hayashi & Jasperson 1996: 209-213、〔〕内は引用者による）。

さて、一方で、ターン冒頭再生という手続きがターンの形状や種類を投射する重要なリソースであり、他方で、日本語の場合完了可能点の投射においてターン冒頭が英語ほどの重要性を持たないならば、この手続きが日本語会話において用いられるとき、英語と同じような形で記述できるかどうかは検討に値する課題となる。私の収集した日本語の会話データにおいて、オーヴァーラップしたターン冒頭を再生する手続きはしばしば観察されるので、日本語話者も何らかの意味でターン冒頭を重要なものとして取り扱っていることは確かである[(3)]。しかし他方、上にあげたようにターン冒頭を再生せず、継続という方法で発話を完成させることもしばしば見られる。

では、日本語話者の会話において、この２つの手続きはどのように使い分けられているのだろうか。その使い分けは完了可能点の投射と関わるのだろうか。それとも、別の意味で会話への互いの参加を組織化する仕事と関わるのだろうか。またそれは、日本語の遅れた投射可能性とどんな関係があるのだろうか。これらが、以下の分析を直接に導く問いである。

３　再生と継続の働き

本節ではまず、Schegloff（1987）が扱ったのと同じタイプのオーヴァーラップ状況、すなわち、相手より遅れてターンを開始し、自分のターンがまだ完了しないうちに相手が発話を中断ないし完了することによって、オーヴァーラップが解消するという状況に焦点を当てる。（便宜上、再生や継続を用いて発話を完成させている話し手を「自分」、もう一方の話し手を「相手」と呼ぶ。）

３．１　再生の働き

この状況下で、オーヴァーラップ発話を完成させるためにターン冒頭再生が繰り返し観察される典型的な場合として、二種類のものが見出される。第一は、オーヴァーラップした自分の発話が、自分自身の先行発話の中で前触れを与えられている場合である。

【抜粋３（３）：山下くん（【抜粋１】の再掲）】
（（Ｂは自分がレンタルビデオ屋でアダルトビデオを借りるときの基準について話している。））
01 Ｂ：［ あの:２種類ありまし［て::,
02 Ａ：［°.hh .hh（……った）°　［笑えんなそれ．＝

03 Ｂ：＝あの:n-n-(0.3)↑ねっ(.)［あのビデオ女優で借りるっ - (.)→
04 Ａ：　　［ん:.
05 Ｂ：→の↑と:,
06 Ａ：は:は:.
07 Ｂ：<題で>借［りるの［と:,
08 Ａ：　　［あっ　［なるほ［ど.
09 Ｃ：　　［ん:［ん.
10 Ａ：　　［あっ(.)これ↑おもろい
11　　ですね:.　＝
12 Ｂ：＝ええ.
13 Ａ：ふん.
14　　(0.3)
15 Ｂ：でいちおう［今回は: ,］
→ 16 Ａ：　　［山下くん ］山下くんの［アダルトビデオ哲学.
17 Ｃ：　　［°(……)°

アダルトビデオに詳しいＢ（山下くん）が、最近見たのはどんなビデオかを話したあと、自分が借りるビデオを選ぶには、好きな女優のを借りる場合と題名が面白くて借りる場合と２つの基準があると説明する（01-07 行目）。これを聞いたＡは、まず「あっなるほど」とこれを理解したことを言明し（08 行目）、次いで「あっ(.)これおもろいですね:」と評価する（10-11 行目）。Ａは、「おもろいですね」と評価の言葉を述べるだけでなく「これ」という指示詞を用いて発話を組み立てている。この組み立てによって、Ａは評価する対象を自分でいったん切り取っていることを示しているが、どのように切り取ったのかはまだ述べられていない。この特徴ゆえに、この発話は、続いてＡが自分の切り取り方を明示することを会話の展開として適切なものにする。Ａが「山下くん」というターン冒頭を再生しつつ完成させた発話（16 行目）は、この切り取り方を明示するものである。この意味で、この発話はＡ自身の先行発話（10-11 行目）が前触れになっている。

再生が用いられる第二の場合は、オーヴァーラップした自分の発話が相手の先行発話への反応として開始されたが、自分より一足先に相手の方がもうひとつ次の発話を産出し始めたために、そこでオーヴァーラップが生じたときである。

【抜粋４（３）：エビ天】
((この抜粋の前に､会話者たちが所属する大学の食堂の骨付きチキンカツのことが話題になっており、Ａは、チキンカツにちょっとだけ骨がついているのが妙にうれしい、と言っていた。続いてＡは、「逆のパターンがあれやな」という前置きをおいて、ある鉄道会社の駅で出されるエビ天のことをＣに説明しはじめる。))
01 Ａ：エビ天エビ天が乗ってん(のや).
02　　(.)
03 Ｃ：はい.
04　　(0.8)
05 Ａ：エビのこう尻尾が出てる.（(尻尾をつまむ動作)）

06　　(0.5)
07 Ａ：んでこ(h)ん(h)な(h)こ(h):ん(h)な(h)((両手を大きく広げる))
08　　つ(h)い(h)［て(h)る(h)(.)→
09 Ｃ：　　［ふはは:は
10 Ａ：→ははっ(.)［ははっ(.)ははっ(.)ははっ(.)
11 Ｃ：　　［っは
12 Ａ：で:↑ピッて抜くとエビが((つまんで引き抜く動作))
13　　こ(h)れ(h)ぐ(h)ら(h)い(h)((５センチぐらいの長さを示す))
14　　［な(h)ん(h)な(h).
15 Ｃ：［は:っ((手を合わせてたたく))
16　　(.)
17 Ａ：↑逆に↑が(h)っか(h)［り(h)す(h)る(h)パターンやね.］
→ 18 Ｂ：　　［〈あ　れ　は ::　も　う:〉　　］あれは
→ 19　　もう:,　＝
20 Ａ：＝かたち似［てるんやけど.
→ 21 Ｂ：　　［ジャロに訴えなあかんと思う［(んやけど).
22 Ａ：　　［ あれほんまやな.

Ａはある鉄道会社の駅で出されるエビ天のことをＣに説明している。Ａはそのエビ天が巨大な衣にほんの少しだけエビが入っているものであることを身振り混じりに描写する（05-14 行目）。これを笑いながら見ていたＣは、Ａが「これぐらい」（13 行目）とエビの大きさを示すと、「は:っ」という笑い声とともに手をたたいて理解したことを示す（15 行目）。わずかな間をおいて、Ａは「逆にがっかりするパターンやね」と自分が行った描写を要約する発話を開始する（17 行目）。

このエビ天を知っていることをこの抜粋の前に表明していたＢは、Ａの要約発話の途中から「あれは::もう:」（18 行目）と発話を開始する。この部分は音を引き延ばしながら発話され、Ｂはオーヴァーラップを生き延びる工夫を行っているが、最初の「あれはもう」が終わるまでＡの発話は続く。そこで、ＢはＡの発話が完了すると同時に、「あれはもう」を再生し、一息ついて「ジャロに訴えなあかんと思う(んやけど)」と発話を完成させている（18-21 行目）。このＢの発話は、「あれ」という指示詞でＡの描写した対象を指示しつつ、それへの自分の独立した評価（Ａの評価への追認ではなく）を述べるものである。従って、それはＡの 14 行目までの発話（あるいはＣの 15 行目の発話）への反応としてデザインされている。

以上２つのケースに共通しているのは、相手の発話の途中から自発話が開始されているものの、それが接続すべくデザインされているのは相手のその発話ではなく、それより前に行われた誰かの発話だということである。再生は、自発話が、先に開始された相手発話の次に位置する発話として聞かれてはならない（実時間の上ではあとに位置するにもかかわらず）ということを明示する必要があるときに用いられている。【抜粋３（３）：山下くん】において、相手発話（15 行目のＢの発話）は、ビデオを借りる基準の説明という行為を終えて、今回の出来事の報告という行為を開始している。【抜粋４（３）：エビ天】において、相手発話（17 行目のＡの発話）はエビ天の描写という行為を終えて、話を締めくくる行為を開始している。再生は、自発話を冒頭からクリアーな状態で投射することを通じて、相手発話が開始しつつあるこれらの行為を制止し、自発話の先行発話に対する接続関係を保持

するという仕事を果たしている。

別のいい方をするとこういうことである。相手が発話を開始したあとで自分が追いかけて発話を開始していることは、会話におけるひとつの「スロット」を二人がそれぞれの発話で「満たし」始めている、と表現することができる。ここで「スロット」という言葉は、ターンを担って何らかの行為を行うことが可能な発話連鎖上の参加機会をさすために用いる。これは、一般に会話分析で「ターン」というとき、ひとつの参加機会をさす場合とそれを担って行われる発話そのものをさす場合の両方があるので、前者のみをとくに区別して呼ぶための用語法である。ひとつのスロットがひとりの発話によって満たされていることが、「ターンを担う」ことの基本的なあり方であるが、ときには二人以上がひとつのスロットにおいて発話を開始することがある。このようなとき、二人の発話の関係は、いろいろなものでありうる。たとえば、会話の中では一人の発話の途中からもう一人が声を重ねて同じ言葉を同時にいうことがあるが（４章参照)、これは同じスロットを満たす二人の発話が両立することを示すひとつの方法である。これに対し再生は、二人の発話が競合的関係、すなわち、自分の発話によって行いたいことを今行うためには、相手の発話が行おうとしていることを制止する必要があるという関係を示す方法なのである。

再生は、この意味で、ひとつのスロットへの二人の参加の仕方を調整するひとつの道具である。と同時に、それは、ひとつのスロットが先行発話とどのように接続しており、続く会話の展開をどう方向づけるのかを組織化するという意味で、発話連鎖への参加を組織化する道具にもなっている。

３．２　継続の働き

以上のことは、継続が行われているケースと対照することで、より明白になる。同じタイプのオーヴァーラップ状況のもとで、自発話を完成させるために継続という手続きが用いられる３種類の典型的パターンを示す。

第一は、上に見た２番目のパターンと同じように、相手の方が一足先にもうひとつ次の発話を開始しているが、そのもうひとつ次の発話が別の行為を行っていない場合である。まず、次のケースでは、相手のもうひとつ次の発話がたんなるつけ足しになっている。

【抜粋５（３)：ねずみ取り】

((Ｂがねずみ取りに捕まりそうになったときのことを話している。))

01 Ｂ：前の車の前にきゅに(0.6)あの(0.5)警察官(h)が(0.3)
02　　ビーッて入って,
03 Ａ：うん.
04 Ｂ：ハッて左見たらねずみ取り.
05　　(0.6)
06 Ｂ：やってて.
07　　(0.5)
08 Ｂ：で僕↑は(0.2)助かったん.
09　　２台目やから．で［１台目だけ捕まったん.］
→ 10 Ａ：　　［〈よ　か　っ　た　わ〉］な:::.

Ｂは、自分が「ねずみ取り」（スピード違反取り締まり）に捕まりかかったときのことを語ってい

る。Ｂの語りが「で僕は(0.2)助かったん．２台目やから」と結末と聞きうる部分まで来ると（09 行目)、Ａは「よかったわな:::」と感想を述べる（10 行目)。この発話は、一瞬早く「で」と開始されたＢの次の発話（ターン構成単位）とオーヴァーラップするが、Ａは自分の発話をゆっくりしたテンポで産出し、さらに最後の「な」の音を引き延ばすことで、このオーヴァーラップを生き延びる工夫を行っている。つまりＡは、自発話がクリアーな状態で完成させられる工夫を行っているが、ターン冒頭の再生は行っていない。

Ｂの「で１台目だけ捕まったん」(9 行目）という発話は、自分が助かったという今述べたことへのつけ足しであり、別の行為を行っていない。もちろん、何が別の行為かということは相対的な問題である。それは、このときＡが行っている行為との関係で決まってくる。Ａはねずみ取りについての順を追ったＢの語りを聞いてきて、その結末として「助かった」ことを聞いて「よかった」という感想を述べている。このＡの行為にとって、「で１台目だけ捕まったん」はつけ足しなのである。

次のケースでは、相手のもうひとつ次の発話が、再生の場合のように自発話と競合関係に立つ別の行為としては扱われていないものの、それを聞き届けたことが自発話の完成のさせ方の中に示され、たんなるつけ足し以上のものとして扱われている。

【抜粋６（３）：サツマイモ】

((Ｂが実家から送ってきたサツマイモを行きつけの飲み屋に全部持っていったときの話をしている。))

01 Ｂ：↑それで:あの:>持ってったんです飲み屋さんに．<
02 (.)
03 Ａ：は:あ．＝
04 Ｂ：＝ほんならオーブントースター全開でもうむっちゃ屁.
05 (0.3)
06 Ｂ：店暑なって.
07 (.)
08 Ａ：あ:.
09 Ｂ：オーブントースターと電子レンジ全部いも.
10 (0.7)
11 Ｂ：[焼いて.
12 Ａ：[か:::::::
13 Ｂ：「山下くん迷惑やで:」ゆう - 「持ってくんのはええけど:」
14 ゆうて「はい::ここ［で処分して゜(ください)゜」.］
→ 15 Ａ： [< 迷 惑 > や] でてなにも
→ 16 そんないきなり処(h)分(h)せ(h)ん(h)で(h)も(h).

Ｂは、実家から大量に送って来たサツマイモを自分では食べきれないので、行きつけの飲み屋に持っていったら、マスターがそれをすぐに全部料理し始めたということを語っている（1-11 行目)。Ｂが飲み屋のマスターに「山下くん迷惑やで:」「持ってくんのはええけど:」といわれたことを直接話法で実演すると（13-14 行目)、Ａは「迷惑やでて」と自分の感想を述べ始める（15 行目)。このＡの発話は、Ｂがマスターに「はい::ここで処分して(ください)」と返答したという報告の続き（14 行目）

とオーヴァーラップする。Ｂの 13-14 行目の発話は一つのターン構成単位としてデザインされているが、２つの構成要素（マスターのせりふの紹介、Ｂのせりふの紹介）をそのうちに含んでいる。Ａが感想を述べ始めたとき、２つ目の要素は未だ発話されている途中である。

このような状況のもとで、Ａは「〈迷惑〉」の部分をゆっくり発話してオーヴァーラップを生き延び、オーヴァーラップが解消すると「処分」というＢが後半部で用いた言葉を採用して発話を完成させている（16 行目）。つまり、ＡはＢの発話の後半部（オーヴァーラップ部分）を聞いたことを示す手続きを併用しつつ継続して自発話を完成させている[(4)]。このことから、Ａは、自分の感想がＢのターンの前半部のみならず後半部への感想にもなるような工夫を、ひとつの文の体裁を取った発話を産出するなかで行っていることが分かる。

継続が用いられる第二の場合は、自発話が相手に向けられていないときである。

【抜粋７（３）：ダイリキ（【抜粋２】の再掲）】

((「ダイリキ」という名前の焼き肉屋が話題になっている。))

01 Ｂ：[゜あ゜

02 Ａ：[あ知ってる？((Ｃに向けて))

03 (.)

04 Ｂ：でもダイリキ[いまいちやわ:. ((下方を向いて))

→ 05 Ｃ： [ぼく:-((Ａの方を向いて))

06 (.)

→ 07 Ｃ：〈４回〉ぐらい行きました. ((Ａの方を向いて))

08 Ａ：あほん↑と：.

「ダイリキ」という名前の焼き肉屋がＡとＢのあいだで話題になると、この抜粋の直前でＣもそれを知っていることを示す。Ａがそれを確認する質問をＣに向けると（02 行目）、Ｃが答えるより一足はやく、Ｂがその焼き肉屋についての自分の感想を述べはじめる（04 行目）。Ｂの発話の途中から「ぼく」とＡに向けて発話を開始したＣは（05 行目）、Ｂの発話が完了したあとで継続によってＡの質問への答えを完成させている（07 行目）。

次のケースは、上に見た二つのパターンの両方に当てはまる。すなわち、相手のもうひとつ次の発話が別の行為を行っていないとともに、自発話はその相手に向けられていない。

【抜粋８（８）：カルチャーギャップ】

((Ｂが自分の恋人と感じ方のギャップを感じるという話をしている。))

01 Ｂ：゜なんか゜(.)゜ああ゜(0.3)゜なんか゜ジェネレーションギャップじゃ

02 なくて:カルチャーギャップっちゅうの(h):？ほほ＝

03 Ｃ：＝ふふ:(0.3)難しいね.

04 Ｂ：うん[うふ

05 Ａ： [(ふふ)

06 Ｃ：何かそういうの(.)↑あるかもね.

07 Ｂ：うん(.)あたしはっ(.)[そんなに苦じゃないねんけど.]

→ 08 Ｃ： [今までの生活環境]の違い

→　09　　［や［ね．（(下を向いて)）
　10 Ｂ：［゜うん゜
　11 Ａ：　　［゜うん゜

Ｂは先ほどから、デートのときに電車に乗ってどこかに行こうとすると、電車通学の経験のない恋人がそれを億劫がるので、恋人とのあいだに感じ方のギャップを感じるという話をしている。その話を自分で要約して、Ｂが「カルチャーギャップちゅうの:？」というと（02 行目）、Ｃは「ふふ:(0.3)難しいね」（03 行目）「何かそうゆうの(.)あるかもね」（06 行目）と共感を示す。これを「うん」と確認したＢが「あたしはっ」と次の発話を開始すると（07 行目）、短い間隙後のＢの続きとオーヴァーラップして、Ｃは「今までの生活環境の違いやね」とコメントを発する（08-09 行目）。このケースは、Ｃの「何かそうゆうの」（06 行目）という言葉がその指示対象を明示する発話の前触れになっていると聞きうる点で、【抜粋３（３）：山下くん】とよく似ている。しかし違うのは、このケースにおいては、Ｂの「そんなに苦じゃないねんけど」（07 行目）がつけ足しだということである。また、Ｃは「今までの」までを目を伏せがちにして発話し、「生活環境の」というときには頭部ごとさらに下方に視線を落とし、そのまま誰の方も見ることなくこの発話を完成させている。Ｃは、この発話をＢとのやりとりの外部にある半ばひとりごととしてデザインしている。

継続が用いられる第三の場合は、自発話が、接続すべき特定の発話連鎖上の位置を持たないときである。

【抜粋９（７）：タバスコ】
((３人はピザを食べながら会話している。ここでＢとＡは、ともに受験期にモーツアルトに「はまった」という思い出話で盛り上がっている。))
　01 Ａ：あ:あたし::::ど:かな↑あたしにしては結構
　02　　゜フーッて゜(0.4)たぶんね:現実逃避だ(h)った(h)
　03　　よ(h)う(h)［な(h),
　04 Ｂ：　　［あたしはそう．＝
　05 Ａ：＝あたしは.
　06 Ｂ：あたし現実逃避でレクイエムにはまったんや.
　07 Ａ：んははっ.hhh(.)そうか.
　08 Ｂ：あの［歌詞で:,］
→　09 Ｃ：　　［タバスコ ］ちょうだい.
　10　　(1.2)((ＢとＡがタバスコを探し、ＡがＣに渡す))
　11 Ｂ：あの歌詞でね:(.)グーーッと来たのよ.

この会話ではしばらく前から、受験期にモーツアルトに「はまった」経験をともに持つＡとＢが、その思い出話で盛り上がっており、もうひとりの参与者であるＣはそのあいだこの話題に参加せずピザを食べている。この状況下で「タバスコちょうだい」というＣの発話（09 行目）は、ＡとＢが進行させている発話連鎖の中に適切な位置を持たない。それは時間的に並行して行われているピザを食べる行為との関係で聞かれうるため、ピザを食べているあいだは原則的にいつでも適切に行われうる。他方、この発話はひとりごと的なものではなく、他の参与者に聞かれ、適切に反応されること（依頼

に応じてもらうこと）を必要としている。ただそのために、進行中の発話連鎖への接続を必要とはしないのである。このような発話の場合、それが適切に聞かれるために、進行中の発話連鎖のどこに位置するのかを明示する必要はない。

以上の継続が用いられているケースでは、それぞれに異なった仕方においてではあるが、オーヴァーラップした相手発話と自発話が､発話連鎖上のひとつのスロットをめぐって競合する関係にはない。第一の場合、相手発話が相手自身の先行発話と別の行為を開始していないことによって、実時間のうえでは自発話とオーヴァーラップしているものの、発話連鎖上の位置としては、自発話よりもひとつ前のスロットに属するものと見なされうる。第二の場合、自発話が相手に向けられていないことによって、二つの発話は同じ発話連鎖のチャンネルに乗っていないものと見なされうる。このタイプのオーヴァーラップが４人以上の会話で生じる場合には、一時的に会話が分裂する(schsming)ことが可能である。第三の場合、自発話は進行中の発話連鎖の中に位置づけられるべきスロットを持たないことによって、スロットをめぐる競合関係を免れている。

したがって、継続という手続きを選択するとき、話し手は自発話の組み立てを選択することを通じて、相手発話をやり過ごす形に進行中の発話連鎖への参加を組織化している。そこではひとつの文の体裁を取った発話が産出されるが、それは単に話し手の内部の意図を反映すべく組み立てられた「意味論的」構成物ではない。むしろ、会話のその局面における参加の組織化を行うリソースとして、文という単位の性質が利用されているのである。この意味で、文の体裁を取った発話（継続）と文に組み込まれない言葉を含む発話（再生）とは、参加の組織化という仕事において対等な選択肢なのである。

ここまでの分析をまとめると次のようになる。

（１）再生は、相手発話と自発話が発話連鎖上の同一スロットをめぐる競合関係にあるときに、相手発話が開始している行為を制止することで、自発話の発話連鎖上の接続関係を保持するために用いることができる。
（２）継続は、相手発話と自発話が発話連鎖上の同一スロットをめぐる競合関係にないときに、相手発話をやり過ごすために用いることができる。

４　中断されたオーヴァーラップ発話の再生と継続

前節の分析に対して次のような疑問を持つ方がいるかもしれない。以上の分析で継続と呼ばれているのは、単にオーヴァーラップを気にせずに自発話を完成させたということであって、オーヴァーラップに気づいたことが示されている再生と対等な選択肢と見なすのはおかしいのではないか、と。この疑問に対しては、さしあたり、再生という手続きが利用可能である以上、利用可能な手続きを用いないことはひとつの選択であると答えたい。ここで選択と呼ぶのは、当人が自覚的に２つの選択肢を比較考量しているという意味ではなく、同じタイプの状況下で利用可能な行為のレパートリーだという意味だからである。

しかし、別のオーヴァーラップ状況下でも２つの手続きが同様の働きを持つことを示す方が、より積極的に上の疑問へ答えることになるだろう。本節ではこのために、自分と相手がほぼ同時に発話を開始することでオーヴァーラップが生じ、自分が先に発話を中断することでオーヴァーラップが解消されたのち、生き延びた相手発話の完了可能点付近で自発話を完成させるケースに焦点を当てること

にする。

４．１　中断された発話の再生

自分が先に発話を中断したとき、そのあとで中断した発話のターン冒頭を再生して完成させるケースとして、前章で見たのと同様の場合が繰り返し観察される。次のケースでは、自分の先行発話に接続されるべき発話が、再生によって完成させられている。

【抜粋 10（３）：彼氏】

((Ｃの恋人は変わり者だということを、ＢがＡに話している。))

01 Ｂ：なんかおもろ(h)い(h)っっひ［っひ
02 Ａ：　　［なにがおもろいんですか？
03　(0.8)
04 Ｂ：いや試合見に行ってあ::［:てお::小山田(.)こやってもう→
05 Ａ：　　［うん.
06 Ｂ：→せっかく↑ね:［やっぱ彼氏で来てるんじゃないです［よ:.
07 Ａ：　　［うん.　　［うん.
((15 行省略))
23 Ｂ：「そうやんか:おまえ.［>今こっち走ってきてるやろ」→
24 Ａ：　　［あ:.
25 Ｂ：→(ゆたら)<「どこどこ？」んっは
26　(0.3)
→ 27 Ｂ：［ふつう - ］
28 Ａ：［分かっ　］てないの:？＝
→ 29 Ｂ：＝ふつうね:［°(やっぱ)°彼氏なら絶えず目で追うんちゃう→
30 Ａ：　　［ うん.
→ 31 Ｂ：→かな:［と°(思うんやけど)°.
32 Ａ：　　［あ:いやっ(.)↑そんなことないよ.

Ｃ（小山田）の恋人のことを「おもろい」（01 行目）と評するＢに、「何がおもろいんですか？」（02 行目）とＡが尋ねると、Ｂはひとつの体験談を開始する（04 行目）。アメリカンフットボール選手であるＣの出場する試合を、ＢがＣの恋人と一緒に見に行ったときの体験談である。Ｂは直接話法で二人のせりふを実演しながら（23-25 行目）、Ｃが競技場のどこでプレイしているのかをＣの恋人がまったく気にかけていなかった様子を描写する。描写を終えて短い間（26 行目）をおいたＢが、「ふつう」という言葉で次の発話を開始するとき（27 行目）、Ｂは「何がおもろい」のかを説明しようとして開始した体験談のオチに入ろうとしている。この発話は、Ａの「分かってないの:？」という質問（28 行目）とオーヴァーラップして中断されるが、Ａの発話の完了とともに再生されて完成されている（29-31 行目）。Ａの生き延びた発話は理解のための質問であり、ふつうならば次に応答がなされることを強く要請する発話である。しかしＢは、それに応じることなく、「ふつう」というターン冒頭を再生することで、自分の体験談のオチに進む。

このケースの場合、次の意味で、二人の発話は同一スロットをめぐる競合関係にあると、Ｂによっ

て見なされうる。Ｂが直接話法での描写を終えて話のオチを述べようとしたときに、Ａは自分の理解を確認しようとしている。Ｂの描写は、Ｃの恋人がわざわざ競技場に来ていながら、Ｃを「目で追う」ことすら試みなかったことを例示するためになされていた。他方、Ａの「分かってないの:？」という質問は、Ｃの恋人がＣを（探しても）見つけられなかったという誤った理解を示している。この誤解を正すことは、もちろんＢには可能である。しかし、今ここでそれをすることは、Ａの誤解を正すことをはみ出して、自分がいおうとしていたオチをＡのイニシアティヴのもとで話してしまうことになる。これを防ぐために、Ｂにとって再生という方法が有効なのである。

今のケースを含め、これまで見てきた再生のケースでは、自分の予定している展開がいわば飛び越されてしまう可能性が、再生によって制止されている。これに対し、次のケースでは、自分の予定している展開を滞らせる可能性が、再生によって制止されている。

【抜粋 11（７）：リバーサイドホテル】

((音楽のビデオクリップのことが話題になっている。))

01 Ｃ：°でもね:ビデオテープ(で)°あたしが今まで見て(たので)
02　〈名作〉と思ったのはさ:,
03　(0.3)((Ｂうなずく))
04 Ｃ：リバーサイドホテル:？
05　(0.2)((Ｂうなずく))
06 Ｃ：井上陽水の.
07　(.)
08 Ｃ：あれは名作やで:.
09　(1.0)
10 Ｂ：「ホテルは:」ってゆ［うやつ:？
11 Ｃ：　［う:んそうそう．＝
12 Ｂ：＝「リバーサイド:」［ってゆうやつ(h):［(h)？っ［はっは
13 Ｃ：　［うん.　［そ:うそ(h)うそ(h)→
14 Ａ：　［んふふ:
15 Ｃ：→うそう．(み)えんえんと続くやつ．＝
16 Ｂ：＝.hhhh［h〈リバーサイ［::リバーサイ〉っ［てんふふ
→ 17 Ｃ：　［あれのね-　［ん:．あれの:-　［そ(h)うそ(h)う
18　そうそう.
19　(0.3)((吸気音のような音))
→ 20 Ｃ：あれの:(0.3)ん:(.)ビデオクリップすっごいいいよ:.

Ｃは音楽の「ビデオテープで」自分が「名作と思ったのは」、「井上陽水」の「リバーサイドホテル」という歌のビデオクリップであると告げる（01-08 行目）。これを聞いたＢは、「「ホテルは:」ってゆうやつ:？」（10 行目）「「リバーサイド:」ってゆうやつ:？」（12 行目）と自分の理解を確かめるための質問を続けて２つ行う。この理解をＣが「そ:うそうそうそう」「えんえんと続くやつ」と承認するとき（13-15 行目）、二人は、このビデオクリップの説明をＣが継続できる発話連鎖上の位置に達している。しかし、Ｃが「あれのね」と説明を継続しかけると（17 行目）、それとオーヴァーラッ

プしてＢは「リバーサイ::リバーサイ」とその歌のリフレインの部分を節を付けて口ずさむ（16 行目）。この発話は、Ｃの説明をＢが聞くという活動にとって必要な範囲を越えて、Ｂがこの曲を想起する活動に浸っているものと観察可能である。Ｃの２回にわたる「あれの」の再生は（17 行目、20 行目）、Ｂがこの曲に浸り始める手前の位置に自発話が接続することを明示しつつ、滞りかけた説明を先に進めるための工夫であると見ることができる。

次のケースは、滞る可能性がさらに拡大したものと見なすことができる。それは、自分が発話を向けている相手が、自分との会話とは別の活動に参加し始めているからである。

【抜粋 12（７）：ピザ】

((注文したピザが大きいという感想をＣとＡが述べたあと))

01 Ｂ：あたしでかいと思わんかった.
02 (.)
03 Ｃ：うそ(h):お(h).
04 (0.3)((ＢがＣにジュースを注ぎ終える))
05 Ｃ：.hhh ＝
06 Ａ：＝なん［か-((Ａが自分のグラスを持ち上げ、Ｂが注ぎ始める))
07 Ｃ：［でかいってこ［れ:::.
08 Ａ：［ふ［つう(……］→
→ 09 Ｂ：［だっていつもさ::, ］
10 Ａ：→……)［なんか:. ((Ｃに向けて))
11 Ｃ：［ふふふっ((Ａの発話を聞いて))
12 (.)
13 Ｃ：［.hh .hh .hh .hh
→ 14 Ｂ：［だって［あたしいつも<これ２枚>と: ］:>もう一個-<(.)→
15 Ａ：［(……)のに:.］((Ｃに向けて))
→ 16 Ｂ：→うちさ:家族３人でどんだけとるかってゆうとこれ一枚と
→ 17 ちっちゃいのもう一枚゜とるねん゜.

テーブルの上のピザの箱を開けたＣは、そのピザが「でかい」と感想を述べ、Ａもそれに同意する（この抜粋の直前）。Ｂが「あたしでかいと思わんかった」と反対の感想を述べると（01 行目）、Ｃは「うそ:お」（03 行目）「でかいってこれ:::」（07 行目）とＢに反論する。Ｂはこれを聞いて「だっていつもさ::」とＣへの再反論を開始するが（09 行目）、この発話は一瞬早くＡがＣに向けて開始した発話（08 行目）とオーヴァーラップし、中断される。ＣとＡは互いに顔を向け合った身体配置を取り、ＣはＡの発話を聞いて「ふふふっ」と笑う（11 行目）。つまり、ここでＢは、再反論すべき相手であるＣが、Ａとの二人だけのやりとりに参加を逸らしている状況に直面している。Ｂは二人のやりとりに一瞬開いた間隙（12 行目）を捉えて「だってあたしいつもこれ２枚と:」と再生して発話を完成にかかるが（14 行目）、ＡとＣの二人だけのやりとりはまだ継続し（15 行目）、Ｂは「もう一個」までいったところでもう一度発話を中断する。そして、「うちさ:」と言葉の組み立てをかえてふたたび再生しつつようやく発話を完成させている（16-17 行目）[5]。ここでも上のケースと同様に、Ｂは再反論という行為を行ううえで、Ｃの参加が逸れる手前の位置に自発話が接続することを明示するた

めに、再生を利用していると考えられる[6]。

以上のように、自分が先に発話を中断して相手発話が生き延びる場合にも、再生という手続きは基本的に前節と同じ形で記述できることが分かる。ただ、相手発話が生き延びることによって、そのスロットは自分が満たそうとしていたのとは別の仕方でいったん満たされることになる。このことは、ときには、自発話を完成させるという作業そのものを断念する必要を生じさせることもある[7]。また、今の二つのケースのように、再生によって自発話の接続関係を保持するために、しばしばプラスアルファの工夫が必要になってくる。

４．２　中断された発話の継続

オーヴァーラップに際して自発話を中断したのち、相手の生き延びた発話の完了可能点付近で、中断した自発話の統語的続きとなる形に発話がデザインされて完成されることもある。

第一に、同時開始した相手発話がつけ足しである場合、自発話が中断されたあとでも継続が用いられる。

【抜粋 13（８）：ごろごろ】

((Ａは家でごろごろするのが好きだと言い、そのあとで自分がどのようにごろごろするかを説明している。))

01 Ａ：自分の部屋の::(0.4)あの:::::(.)ソファーで:, ＝
02 Ｂ：＝［うん.
03 Ｃ：＝［うん.
04 (1.2)
05 Ａ：お昼寝っていうか？ごろ［んてして:(0.3)で(0.9)毛布を→
06 Ｃ：［うん.
07 Ａ：→一枚持ってきて:,
08 Ｂ：う［ん.
09 Ａ：［で(0.7)こうなって,((毛布で身体を包む動作))
10 (0.5)((首を横に倒して寝る動作))
11 って寝るのが:(0.8)一番好き:？
12 (0.6)
13 Ｃ：うん.
14 Ａ：［お布団で寝るのも好きやけ［ど.
→ 15 Ｂ：［ただ-［自分の部屋って↑あ:れだからさ:,

Ａは自分が家でどのようにごろごろするかを身振り入りで説明し（01-11 行目）、末尾を上昇調の抑揚にして、聞き手の発話を次に誘うかのように説明を終える（11 行目）。二人の聞き手のどちらからもすぐには反応がなく（12 行目）、次いでＣが「うん」（13 行目）とだけいうと、Ａは「お布団で寝るのも好きやけど」（14 行目）と説明をつけ足している。これと同時に、Ｂは「ただ」と発話を開始し、Ａの発話が完了可能点にさしかかると「自分の部屋ってあ:れだからさ:」（15 行目）と、継続を用いて、自分の側の事情を話す発話を行う。もちろん、オーヴァーラップしているＡの発話がつけ足しであるのは、Ｂが開始している行為（＝今度は自分の側の事情を話す）との関係でそう観察可能

なのである。

第二に、相手の生き延びた発話と自分の開始した発話が、同じ仕方でひとつのスロットを満たそうとしているという両立可能性を示すために、継続が用いられうる。

【抜粋 14（８）：アイス】

((Ｃが最近あまりアイスを食べないということを話している。))

01 Ｃ：だっとりあえず:(0.3)買わないから食べないで［しょ.
02 Ｂ：　　［うん.
03 Ｃ：その繰り返し．＝
04 Ｂ：＝ね(0.3)i-i-i-ひとり暮らしだったらそれできるけど:,
05 Ｃ：うん．(0.3)あ:そうだね．＝
06 Ｂ：＝うん．＝
→ 07 Ｃ：＝［うちも-］
08 Ａ：＝［いえ　］にあったら［ね.
→ 09 Ｃ：　　［いえに［帰ったらだめだと思う.
10 Ｂ：　　［うん.

一人暮らしをしているＣは、自分が最近アイスクリームをあまり食べないのは、面倒なのであまり「買わないから食べない」(01 行目)「その繰り返し」(03 行目）だと説明する。これを聞いたＢは、「ね」「一人暮らしだったらそれできるけど:」と、対照的な自分の事情を述べる前置きを発する（04 行目)。Ｃは「うん」と先を促したあと、Ｂのいわんとすることを理解したことを「あ:そうだね」と言明し（05 行目)、Ｂが「うん」と承認する（06 行目）やいなや、「うちも」と自分の共通の事情を話し始める（07 行目)。この発話は「いえにあったらね」と、Ｂの 04 行目の発話を引き取る形で自分の理解を示し始めたＡの発話（08 行目）とオーヴァーラップして中断される。中断ののちＣは、Ａの発話が「たら」まで達したときに「いえに帰ったらだめだと思う」(09 行目）というが、この発話は二重の性格を帯びている。それは、中断した「うちも」の統語的続きでありうるようにデザインされており[8]、「うちも」で開始された自発話を継続して完成させるものであるとともに、生き延びたＡの発話で用いられた「いえにあったら」という言葉を採用するものでもある。ひとつの文の体裁を備えたこのＣの発話は、たんにＣの見解を表現する「意味論的」道具なのではなく、Ａのオーヴァーラップ発話に自分は同意しており、二人の発話はこのスロットにおいて両立可能であることを示すという、参加の組織化の道具でもある。ここで継続という手続きは、ひとつのスロットを二人の発話でともに満たすために用いられている。

第三に、自発話を相手に向けて完成させないときにも、継続が用いられうる。

【抜粋 15（５）：ゲイサークル】

((Ｂが学園祭でゲイサークルの模擬店に行ったときのことを話している。))

01 Ｂ：(こう）なんか(.)中開けて入って:(0.3)人がワーッていっぱい
02　　いてもうオタオタしたのね:.「座るところないし:」とか
03　　思って．＝そんときになんか「こっちあいてますよ:」の hh
04　　その「<こっちあいてますよ>」のこの手の［出し方と:,

05 Ｃ：　　［あっはっはっはっは
06 Ａ：あ:ははははっ
07 Ｂ：この［(.)声のかけ方［と:,
08 Ｃ：　　［っひ::　　［あ:あ:あんあん.
09 Ｂ：すべてがすべてが.
10　　(0.6)
→ 11 Ｂ：［もう］((Ｃの方を向いて))
12 Ｃ：［そう］だよね:やっぱそ:ゆうとこって［ある:.
→ 13 Ｂ：　　［丸かったの.((Ａの方を向いて))

しばらく前から「ゲイの人は本当の女性よりも女性らしい」ということが話題になっている。Ｂは、その例として、自分がある大学の学園祭でゲイサークルの模擬店に行ったときの様子を語りはじめる（01 行目)。Ｂを出迎えたゲイサークルのメンバーの「手の出し方」を身振り入りでＢが実演すると（04 行目)、ＡとＣはそのふるまいを見て笑う（05-06 行目)。Ｂは「声のかけ方と:」「すべてがすべてが」までいって、「が」を下降調の韻律でいって語りをいったん結ぶ（07-09 行目）[9]。やや間隙があったあとで、ＢはＣに視線を向けて「もう」と次のターンを開始するが（11 行目)、これは「そうだよね:」と同意を主張し始めた（12 行目）Ｃの発話とオーヴァーラップして中断される。Ｃの発話が生き延びているあいだ、ＢはＣから視線を外して中空の一点を見つめるような視線を保ち、Ｃが「とこって」まで来たところで、Ａの方にくるっと視線を向けて「丸かったの」と自発話を完成させている（13 行目)。このケースでは、ＢはＣに向けて開始した発話をＡに向けて完成させることで、Ｃとのやりとりの外部においてそれを完成させている。前節で見た【抜粋７（３）：ダイリキ】【抜粋８（８）：カルチャーギャップ】とよく似たことが、ここでは行われている。

以上のように、自発話を先に中断して相手発話が生き延びる場合には、当人がオーヴァーラップに気づきそれをいったん回避したことが明白である。このオーヴァーラップ状況において、再生と継続という２つの自発話の完成手続きがやはり見られ、それらの働きは前節と基本的に同じように記述できることが分かる。本節の分析を通じて、前節での記述の妥当性をさらに確かめることができたと思う。

５　日本語におけるターン冒頭再生の論理

３節・４節を通じて行ってきた分析の意味を、２節末尾で立てた問いに即して考察しよう。今回分析したデータ群に関する限り、オーヴァーラップしたターン冒頭を再生するかしないかという選択は、二人の話し手の発話を発話連鎖中の同一スロットをめぐる競合関係にあるものとして扱うかどうか、という選択として秩序だったものである。この点で、日本語におけるターン冒頭再生の働きは、オーヴァーラップしたターンを効果的に投射するという Schegloff(1987)の記述と両立するが、その用いられ方はより限定的であるように思われる。日本語の会話においてオーヴァーラップしたターン冒頭が再生されるかどうかは、相手発話のタイプにも関係していると考えられるからである。では、英語とのこの共通性と相違はどのように理解できるだろうか。

まず、共通性に関しては、ターンの投射可能性の２つの側面を区別して論じることが有益である。Schegloff は、英語のターン冒頭がそのターンの形状と種類の投射を開始する重要なリソースである

と述べた。ここには、ターンの形状（統語的軌跡）の投射と種類（行為タイプ）の投射という二つのことがまとめて述べられている。このうち、日本語の遅れた投射可能性という指摘は、ターンの形状の投射に関わる基本的特徴を捉えたものと考えられる。しかし、２章で述べたように、ターンの種類の投射においては、しばしばそのターンの形状以外のリソースも重要である。

Sacks が指摘したように（Sacks 1992 vol.1: 49）、ある発話が質問という行為を行っていることを示す統語的構造は存在するが、応答という行為を行っていることを示す統語的構造は、一般的には存在しない。応答は、質問のあとという発話連鎖上の位置関係によってこそ、応答として理解されうる。この例が端的に示すように、行為タイプの投射という働きは当の発話の統語的構造だけでなく、その発話を発話連鎖上の然るべき位置に接続することによって行われる。ターン冒頭はそのターンが位置づけられる発話連鎖環境に最初に接触する部分であり、どの先行発話に接続することによってどのようなタイプの行為を行おうとしているのかを投射するために重要なリソースである。この事情は、英語と日本語のように統語構造に顕著な違いがあっても、変わることはない。本章で取り上げてきたケースを見ると分かるように、再生によって完成されている発話は、そこで行われようとしている行為にとって先行発話との接続関係を明示することをとりわけ必要としている。このことは、遅れた投射可能性を基本的特徴とする日本語においても、ターン冒頭がしばしば再生される必要がある事情を明らかにしている。

しかし他方、日本語の遅れた投射可能性のひとつの意味は、ターン後半に配置される統語要素によって、ターンの種類が示される余地が英語よりも大きいということだと考えられる。だから、オーヴァーラップした発話を継続という方法で完成させても、しばしばそのターンの種類は認識可能となる。たとえば、「迷惑や‖でて何もそんないきなり処分せんでも」「ぼく‖４回ぐらい行きました」「ただ‖自分の部屋ってあれだからさ」「うちも‖家に帰ったらだめだと思う」といった発話は、‖印の前のオーヴァーラップ部分が仮に聞かれなかったとしても、そこで行われている行為はほぼ認識可能である。これに対し、これらと同じ内容の発話を英語で行う場合、ターン冒頭が聞かれないとターンの種類の認識はより困難になるのではないだろうか。Schegloff がターン冒頭再生の分析において形状の投射と種類の投射をまとめて扱うことができたのは、英語において一般にターン冒頭付近に配置される「主語＋述語」という要素が、ターンの形状と種類の双方を投射するうえで重要だからではないかと思われる[10]。

６　結論

再生と継続は、オーヴァーラップという進行中の会話の一種の「乱れ」に際して、会話への参加を組織化する２つの秩序立った選択肢である。二人の発話がオーヴァーラップしていることは、まだ二人のそれぞれがいかなる意味で話し手であるのかを確定しない。会話者たちは、自分の発話をしかるべき形で組み立てることを通じて、同時に、自分と相手は互いにどのような立場にあるのか、自分は誰に対してどのような意味での話し手としてふるまっているのかを表示する。それは、二人の発話が発話連鎖上のどのスロットをどういう仕方で満たすものであるのかが組織化される過程である。話し手であることの異なったあり方は、こうして会話者たち自身によってそのつど交渉され構成される。

言葉はたんに伝えたいことを「表現」するだけでなく、それを「送信する」という仕事をも果たしうるのでなければ、コミュニケイティヴな働きを十分に担い得ない。会話のなかでは、この送信作業とは互いの参加を組織化することにほかならず、それは（視線や身振りなどの非言語的リソースとと

もに）発話の組み立てそのものを通じて行われる。オーヴァーラップ発話の再生と継続は、参加の組織化という仕事を行いうるように発話が組み立てられるという広範な現象の、ほんの一例である[11]。

従来のコミュニケーション論が言葉のコミュニケイティヴな働きを考えるとき、言葉は伝えたいことの表現手段という「意味論的」なリソースとして取り扱われ、そのために文が考察の素材とされてきた。このような仕方で文という単位を取り扱う限り、言葉がそれ自身を送信するためにも組み立てられる必要がある、という視点が抜け落ちてしまう。実際の言語使用の現場において、言葉のコミュニケイティヴな働きには、「メッセージ」を表現するという働きだけでなく、いわば「メディア」を整えるという働きもが含まれるのである。参加の組織化は、言語使用の単なる環境条件ではない[12]。それは言語使用そのものの一側面なのである。この点が自覚されないと、言語使用の研究はその目的にふさわしくない形で文という単位を素材にし続けることになる。

より適切な視点は、文という単位が相互行為への参加を組織化する仕事のためにも利用可能な、ひとつのリソースだというものである。その利用の方法は、通常の意味での文文法の枠を超えている。再生によって完成される発話には統語的つながりを持たない言葉の断片が含まれ、継続によって完成される発話は結果的にひとつの文の体裁を取る。しかしながら、これら２つはいずれも、その働きを果たすために文という単位の性質を異なる形で利用している。再生の場合、統語的に組み込まれていない言葉を用いて発話を組み立てることによって、その相互行為上の仕事を行うことができる。たとえば、「どこまでもどこまでも」という言葉の反復はひとつの文内に統語的に組み込まれ、強調のような固有の意味を持ちうる。再生は、その仕事を果たすうえで、再生される語句がそのような仕方では聞かれないことに依存している。継続は、自発話を文の体裁を取ったものとして組み立てることを通じて、その発話の開始時と完成時のあいだに生じた会話の局面の変化をやり過ごすことができる。もしもこのような仕方で文というリソースが利用できなければ、人は会話の進行のなかで何度も発話を開始し直さなければならず、その「もつれ」を調整することがより困難になるだろう。

このように、実際の会話において、言葉はたんに何かを伝達する道具ではなく、会話への互いの参加を組織化するための道具でもある。言葉がそのような二面性を備えていることによってこそ、実際のコミュニケーションにおいて言葉は機能する。従来のコミュニケーション論は、この点を見落としているのである。

４章　言葉を重ね合わせること

１　はじめに

私が小学生の頃こんな遊びがあった。会話をしていて、二人が同じ言葉を同時にいったとき、先に「ストップ１，２，３」といいながら３回相手をたたいた方が勝ち、という遊びだ。

同じような記憶を持つ人は少なくない。ある学生は、そういうとき先に「ドン」といいながら相手を指さした方が勝ち、という遊びがあったと教えてくれた。また、別の学生の住む地域では、そのようなことがあると「今日は一日いいことがある」と信じるおまじないのようなものがあったという。ある研究仲間は、かつて「ハッピー・アイスクリーム」という遊びが若者のあいだで流行ったのを思い起こさせてくれた。同じ言葉を同時にいったとき、先に「ハッピー・アイスクリーム」といった方が相手にアイスクリームをご馳走してもらえるという遊びである。

これらの他愛もない遊びやおまじないは、会話において話し手であることがどういうことなのかを考えるうえでなかなか示唆に富むものだと思う。前章で見たように、会話の中でオーヴァーラップが生じると、たいていはそれを解消し一度に一人の状態を回復させる工夫が行われる。小学生たちが、同じ言葉を同時に発することを（遊びやおまじないの対象となるような）有標な出来事として扱っていること、また二人のあいだに勝ち負けという序列をつけようとすることも、部分的には、一度に一人のターンテイキングへの基本的指向に基づくふるまいだと見なせるだろう。

しかしながら、これがそもそも遊びであること、同じ出来事を幸福の前兆として祝福しようとすることには、これとは異なる会話者の指向が感じられる。また、同じ言葉を発したときにだけこのような遊びやおまじないが行われることも、基本的指向に照らすだけではうまく説明できない。これらの遊びやおまじないは、一度に一人のターンテイキングに指向しながら会話に参加するのとは異なる参加の様式に会話者たちが指向しうることを垣間見せている。

本章は、会話の中で同じ言葉を同時に発するという現象に注目し、この現象がどのようにして生み出されるのか、この現象を通じてどのような行為が行われているのか、それらの行為には会話への参加の様式としてどのような特徴が見られるのかを考察する。この作業は一方では、一度に一人のターンテイキングとは異なる参加の組織化への指向が､会話の中に立ち現れることを明らかにするだろう。しかし他方、この作業を通じて、ターンテイキング組織の基本的な道具立ては、それに一見反するこの現象の記述においても有効であることが確認されるだろう。これら両方向を睨んだ考察を通じて、本章では、３章とはまた別の、ひとつのターンを舞台とした参加の組織化手続きを明らかにする。

２　オーヴァーラップとユニゾン

会話の中で同じ言葉を同時に発することは、一度に一人のターンテイキングの単なる乱れとして扱われることもある。次の【抜粋１（７）：フィガロ】では、「フィガロは」という言葉を二人が同時に発しているが（2-3 行目）、そのあと生じていることはわれわれが３章で見たのと同様の手続きである。

【抜粋１（７）：フィガロ】
((二人はモーツアルトの歌劇のことを話しており、本物の上演を見てみたいが、そうするなら分かる曲でないと十分楽しめないだろうということが冒頭で述べられている。))

01 Ａ：↑わかるやつ:でないと:やっぱ::,
02 Ｂ：わかんないから>あたし<「魔笛」［でないとだめなの.
03 Ａ：　　［そそ
04　　(0.4)
05 Ａ：魔笛もフィガ-フィガロもわかる.
→ 06 Ａ：［フィガロは-］
→ 07 Ｂ：［フィガロは］ね>１回しか見てないから［°(あんまよくわかんない)°.<］
08 Ａ：　　［　フィガロ　　］全曲持ってる
09　　もん.
10 Ｂ：持ってる:？
11 Ａ：うん.

Ａは「フィガロは」までで発話を中断し（６行目）、Ｂの発話が完了可能点「見てないから」（７行目）に至るのを待って[1]、「フィガロ全曲持ってるもん」と再生を行いつつターンを完成させている（8-9 行目）。３章で述べたように、この手続きによってＡは、自発話の発話連鎖上の接続関係を保持している。つまり、Ａは「フィガロ全曲持ってるもん」というターンが、「魔笛もフィガ-フィガロも分かる」（５行目）という発話への補足説明として、聞かれる工夫を行っていると考えられる。これは同時に、この手続きによってＢの生き延びた発話（７行目）が発話連鎖上消去されていることを意味する。Ｂは 10 行目で「持ってる:？」とＡの発話に反応することで、この消去を受け入れている。ここで同じ言葉が同時に発せられたということは、会話の成り行きにとっては何の影響も持たないように取り扱われている[2]。

これに対し、次の【抜粋２（３）：てんねや】では、二人が同じ言葉を同時に発しているのはたまたまではない。それは参与者自身によって、言葉を重ねるべく工夫された出来事として生じている。

【抜粋２（３）：てんねや】
((大学の研究室での３人の男子大学生の会話。ＡとＢはいまから夕食に弁当を頼もうとしているが、Ｃはお茶を飲みながら二人につきあったあとで、帰宅してから夕食を食べるという。ＡとＢが、それならあとでＣの家に行ってＣが食べるのにつきあおうかと冗談をいうと、Ｃはそれを断るために１行目からの発話を行う。))

01 Ｃ：ぼくだけが食べて:先輩らもう:食べないっちゅうのも,
02　　(1.2)
03 Ｃ：ちゅうかひとりだけ食べてふたりが食べないのとふたりが食べて
04　　ひとりが［(食べないのと)
05 Ａ：　　［なにゆ:て(h)ん(h)［ね(h)や(h)きみ　］はっ→
06 Ｂ：　　［なにゆ:てんねん.］
→ 07 Ａ：→.h.h.h な(h)に(h)［を(h)ゆ(h): てんねや.］
→ 08 Ｂ：　　［に　ゆっ　てんねや.］

ＡとＢは、それぞれがＣの発話に向けたコメント（5-6 行目）を、次には言葉を重ねて発話するよう互いに工夫している。Ａが「なにをゆ:」（７行目）といい始めたのを聞いたＢは、「にゆっ」（８行目）とひとつの語の途中から発話を開始し、Ａが「てん」をいうとき合わせて音量を上げて「てん」を発話し、「てんねや」を重ねてこのターンを完了させている。Ｂはオーヴァーラップを回避する工夫を行うのではなく、逆に、同じ言葉を同時に同じリズムでいうために、発話産出を調整していることが分かる。

本章で焦点を当てるのは、【抜粋２（３）：てんねや】のように、言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致である。これを「ユニゾン」と呼ぶことにする[3]。このような工夫が行われた結果、二人の言葉が食い違って終わる場合もある。そうした失敗に終わったユニゾンの試みもここでの考察対象に入る。本章で注目するのは言葉を重ね合わせる工夫によって生み出される現象であって、結果としての言葉の一致ではない。このことを例示するために、【抜粋３（３）：持ち物検査】を一瞥しておく。

【抜粋３（３）：持ち物検査】
((Ｂは高校でのキャンプのときに、エロ本を隠して持っていったら、それが皆のまえで発覚しそうになったという体験談を語っている。))

01 Ｂ：でそのうちに(.)持ち物検査がはじまった.
02　(0.4)
03 Ｂ：[そりゃ:[男女(.)いるまえ(.)ま]え(0.4)>はじまったんですよ. →
04 Ａ：[あっ　[そんなんあるん？　]
05 Ｂ：→ぼくは知らなかった[ん. <
06 Ａ：　[あっ(0.2)女子もいるまえで. ((「で」のときに机をたたく))
07 Ｂ：はい.
08　(0.6)
→ 09 Ａ：あ::持ち物[検査でエロ本が　]見つかってしまう.
→ 10 Ｂ：　[検査が始まったっ.]((人差し指を突き出す動作とともに))
11　(0.5)
→ 12 Ｂ：エ:ロ本が見つかってしまうっ. ((人差し指を突き出す動作とともに))

このケースでは、９行目のＡの発話を「あ::持ち物」まで聞いたところで、Ｂはその続きが「検査が始まった」になると予測して、言葉を重ねる工夫を行ったと考えられる（10 行目）。それは次のような事情による。

Ｂは１行目の「でそのうちに(.)持ち物検査が始まった」において、自分の体験談のクライマックスの描写を開始している。Ａは最初このことを捉え損ねるが（2-4 行目）、６行目で「あっ(0.2)女子もいるまえで」と机をたたきながらいい、それが緊迫した場面である意味（女子生徒もいる前でＢがエロ本を持ってきたことが暴露されようとしている）を理解したことを示す。Ｂは「はい」（６行目）と強くいうことで、この理解を承認している。そこで、このあとでＡが「あ::持ち物」と発話を開始するとき、ＢにはＡが、今や理解したクライマックスの描写を自分の口からやり直すものと予測できる。この予測可能性を利用して、Ｂは「検査が始まったっ」という言葉を重ねようとしたと考えられ

る[4]。Ｂがここでやろうとしたことは、声を合わせることでクライマックスを臨場感とともに提示し直す（さあ、持ち物検査が始まったっ！）ことであると思われる。

Ａが実際に行ったのは、「持ち物検査でエロ本が見つかってしまう」（９行目）と自分の理解した内容を述べる発話であった。このため、ここで二人の発話は異なった軌跡をたどってそれぞれ完了されている。しかしＢは、続いて、Ａの発話の中の自分がユニゾンし損なった部分だけをピックアップして「エ:ロ本が見つかってしまう」（12 行目）と反復している。「始まったっ」という強いいい切りの口調が「しまうっ」と再現されていること、また、どちらの発話をするときにもＢが人差し指を突き出す動作を行っていることから、Ｂは同じことをやり直していると考えられる。つまりＢは、ユニゾンをし損なったあとで、ユニゾンで行おうとしたことと同じ効果（クライマックスを臨場感あふれる形で提示し、オチに向けてＡを身構えさせること）をこの会話に作り出す工夫を行っているのである。

このような工夫が行われるということは、言葉を重ねることへの指向が、事実として言葉が重なるかどうかとは別の水準で、会話の中に確かに存在していることを証拠立てている。

３　ユニゾンの可能性

３．１　高められた予測可能性

ユニゾンはいかにして可能になるのだろうか。このことを考えるためには、まず、会話の中で進行中の発話が聞き手に対して予測可能なものとして立ち現れてくることを可能にするリソースに目を向ける必要がある。

会話においてターンを構成する単位は投射可能性を持つため、聞き手たちは進行中の発話を分析することで、ターンの開始直後から、その発話がこれから取る形状と種類に関する予測を行うことが可能である。ただ、ユニゾンを実現するためにはたんに発話の形状と種類に関する予測だけでは十分でない。次に来る特定の語句が予測できなければならない。Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）の着想を継承しつつ、ユニゾンにおける予測可能性をもたらすリソースを探究した Lerner も、形状や種類に関する投射可能性を越えたこの「高められた投射可能性（enhanced projectability）」（Lerner 2002: 229）に注目している。本節では、この Lerner の議論を踏まえて、私のデータの中に見られたリソースを整理する。

Lerner は、高められた投射可能性をもたらすリソースとして、１）「行為とターン構成単位の構造に関する複数のリソースの収斂」、２）「産出されつつある語の最初の音節」、３）「先行発話を反復することの投射」という３つを指摘している（Lerner 2002: 230）。

１番目の「行為とターン構成単位の構造に関する複数のリソースの収斂」とは、ある発話の統語構造や語句の構造、その発話を通じて行われつつある行為タイプ（これは発話の言語形式と発話の連鎖上の位置どりによって主に与えられる）といったリソースの複合によって、発話の末尾に来る一つ二つの語句がほぼ確実に予測可能になることである。たとえば、次のケースに見られるような複合的リソースがその例である。

【抜粋４（３）：焼きいも】
((Ｂが、実家から大量に送ってきたサツマイモを、自分一人では食べきれないので行きつけの飲み屋さんに持っていったという体験談を話している。))

01 Ｂ：でそんなん(.)まいにちさつま汁とかまいにちいも食えないでしょさ - さつまいもって.
02 Ｂ：.hhh［じゃがいもやったらなんとか消化できてもね.］
03 Ａ：　　［゜ん::::そやな:::::,゜　　］
04　　(0.8)
→ 05 Ａ：゜そや゜な:(.)最初の日にそやな:(.)いも汁［作って:］(.)２日めに焼き［いも　し　て:,］
→ 06 Ｂ：　　［((頷く))］　　［いも゜(し)゜て:,］
07　　(0.6)
08 Ａ：［゜う::ん,゜
09 Ｂ：［もうだめでしょ:.

ここでＢの体験談を聞いたＡが、「そやな:、最初の日にそやな:」(6 行目）と発話を開始するとき、Ａは大量のサツマイモを自分で消化することを想像してみる行為を開始していることが見て取れる。このためにＡは、「最初の日に」「２日目に」という順序を与えられた節を並べる統語構造を用いてターン構成単位をデザインし、最初の節に「最初の日に＋いも汁（料理名）＋作っ（動詞）＋て（接続助詞)」という構造を与えることで、２番目の節も同じ構造を持つことを予測可能にしている。また、サツマイモの料理名をさす名詞句が「焼き」という言葉で始まるなら、次には「いも」が来ることは、日本語話者にとって高度に予測可能である。(ただし、そのあとの動詞が「作る」でなく「する」になることはより不確実であろう。Ｂは「し」のときいったん小声になり、「て」で音量を戻している。）さらに、Ａは「いも汁作って」の「て」の音を発すると同時に、ボールペンを机に打ち付けて拍子を取り、「いもして」を発話しながら再びボールペンを振り下ろしている。この動作をモニターすることで、Ｂは「いもして」のリズムも予測可能になる。

２番目の「産出されつつある語の最初の一音節」というリソースの利用は、次のケースに劇的な形で現れている。ただし、このリソースは厳密な意味で音節と考えるよりも、むしろ２章で紹介したオーヴァーラップ解消装置の中で、Schegloff が「ビート」と呼んだもの（Schegloff　2000）と考えたほうがよい[(5)]。

【抜粋５（６）：結婚してます】
((20 歳前後の若者７名が鍋を囲み、テレビをつけながら会話している。))

01 Ｆ：この番組::こわいわ.
02　　(2.4) ((テレビの音が流れている))
03 Ｆ：けっこう来ますよね＝この番組ね:.　＝
04 Ｂ：＝ときどきすごいことゆうてんな:.
05 Ｆ：杉本彩のあの結婚のあれも［そうだしね:.］
06 Ｂ：　　［あ:::　　］ん.
07 Ｆ：暴露してもう(て／た).
08 Ｂ：「結婚してます」:って．ふ hh［hh
09 Ｆ：　　［思わず＝

10　　＝ゆうて［もう(て／た).］
11 Ｂ：　　［ふふ　　］ふふっ［.hh ふふっ］→
12 Ａ：　　［はっはっ ］
13 Ｂ：→［.hh Ｓ:Ｓ:-］
14 Ｄ：　［え: 結婚　］しちょうと:？杉本彩.（(Ｂのいる方に顔を向けて。)）
15　　(0.3)（(Ｂは鍋をかき混ぜており、Ｄの視線が見えているか不明。)）
16 Ｆ：(すゆ:)てた.
17　　(.)
18 Ｆ：［ それ一度この番　　］組で［ゆ-ゆ-
19 Ｂ：［゜ん：゜シャレんならん.］　　［この番組で素:でゆうね(h)ん.
20 Ｆ：ゆうてもうたわそのままゆって［もうた.
21 Ｂ：　　［「結婚したいですか::？」って
→ 22　　(.)［きい-］(0.5)［んっ ］(0.4)［いやっ　］(.)［　けっこん　してます:］
→ 23 Ｆ：　［えっ ］(0.5)［もう-］(0.4)［(たしっ) ］(.)［゜(け)゜っこんしてます:］
24 Ｆ：あっはっは＝
25 Ｂ：＝ウ:エ::［:っ
26 Ａ：　　［はっはっは

今見ているテレビ番組についてのＦの感想（「この番組::こわいわ」）にＢが同意した（「ときどきすごいことゆうてんな:」）あとで（1-4 行目）、Ｆは、若手女性タレントの杉本彩がこの番組に出たときに自分が結婚していることを暴露した、という出来事を想起するようＢを誘う（５行目）。この誘いに応じてＢがその出来事を想起したことを示す（６行目）と、ＦとＢは互いの発話に付け足しながら共同でその出来事を他の参与者たちに知らせている（7-10 行目）。Ａはこれに笑いで応じてニュースを聞き届けたことを示すが（12 行目）、Ｄは「え:結婚しちょうと:？杉本彩」（14 行目）と自分の理解をチェックする質問を行う。この質問にＦが「(すゆ:) てた」(「そうゆうてた」といっていると思われる）と答えたあと（16 行目）、二人はオーヴァーラップしながら、今ニュースとして提示した出来事を叙述し始める（18-20 行目）。

この活動の一環として、ユニゾンが生じているが、それはすんなりとは実現していない。その理由は、Ｂが「「結婚したいですか::？」って」と開始したターン（21 行目）で、リソースの収斂ではなくいわばリソースの拡散が生じていることだと思われる。一方で、「って」という標識は、統語的に「いう」「訊く」のような動詞を含む動詞句を次の成分として投射しうる。この場合、次の成分は誰かのせりふの引用ではなく、地の文である。他方で、「か::？」という音の引き延ばしは、Ｂが番組の司会者のせりふを直接話法で再現していることを示す。Ｂは 19 行目で用いている報告の語り口から実演の語り口へとシフトし、「って」のあとで一呼吸おいている。この一連の手続き、すなわち［中心の登場人物（杉本彩）の行為の報告］→［脇役の登場人物（司会者）のせりふの実演］→「って」→［間隙］という流れは、次に［中心の登場人物（杉本彩）のせりふの実演］という成分を投射しうる。つまりＢは、クライマックスに向けて準備を整えたうえで、一呼吸おいて聞き手の身構えを誘っているものと観察されうる（Ｂが地の文を続けようと思えば、「って訊いたら」までいってから一呼吸おくことが可能であるが、Ｂはそうしていないことに注意せよ)。この場合、投射される次の成分は登場人物のせりふの引用である。

このリソースの拡散ゆえに、このケースでは３ラウンドにわたって、１ビート単位での交渉が生じている。第一ラウンド。Ｂは短い間隙のあとで「きい-」といって中断する。Ｂは「訊いたら」という地の文を続けかけたと考えられる。同時にＦは、「えっ」といって中断する。Ｆはここで、上に述べた後者の投射可能性に基づいて、「えっもう結婚してます」というようなせりふの実演を開始したと考えられる。両者はともに１ビートで発話を中断し、オーヴァーラップを回避している。

第二ラウンド。Ｂは「んっ」といって中断する。Ｂが何をいいかけたのか分からないが、少なくとも「きい-」と開始した成分を続けるのはやめ、何らかの軌道修正をおこなっている。同時にＦは「もう-」といって中断する。Ｆは杉本彩のせりふを実演する作業を、再試行していると考えられる。再び両者は１ビートでオーヴァーラップを回避する。

第三ラウンド。Ｂは「いやっ」といって中断する。Ｂはここで、せりふの実演を開始したと観察可能である。同時にＦがいったのは「あたし」という言葉であるように聞こえるが、はっきりしない。いずれにせよ、Ｆには今やＢがせりふの実演を開始したことを観察可能であり、二人はともに実演にはいることが投射されている。Ｂが短い間隙のあと「け」というとき、Ｆはまだはっきりと聞こえる声で「け」とはいっていない。しかし、この最初の１ビートをきくと、次にははっきりした音量で「っこんしてます」とＢに声を合わせている。こうして今度は、１ビート単位のモニターは、ユニゾンへの調整された参入のために用いられている。

このケースは、ユニゾンへの調整された参入が、オーヴァーラップ解消のための基本的手続きを転用することで可能になっていることを例示している。自分の声と同時に発せられた相手の声を１ビート単位でモニターし、その結果を利用して次の自分の１ビートを産出するという手続きの利用。この点で、オーヴァーラップの回避を試みることとユニゾンを試みることは、コインの表と裏である。

３番目の「先行発話を反復することの投射」というリソースは、そのターンの発話連鎖上の位置やターン構成によって、次の成分に特定の先行発話の反復がくることが投射されることである。先に挙げた【抜粋３（３）：持ち物検査】に見られたのがその一例である。【抜粋３（３）：持ち物検査】では、Ａが開始した「あ::持ち物」というターンの連鎖上の位置と開始部のデザインによって、Ｂが先行部分でいった「持ち物検査が始まった」という言葉が、いま反復されつつあることが投射されていた。また、今の【抜粋５（６）：結婚してます】にも別の例を見たところである。【抜粋５（６）：結婚してます】では、Ｂの「「結婚したいですか::？」って(.)」までの進行中のターンのひとつの投射可能性として、「結婚してます」という先行部分で述べられた話題の人物のせりふが、次に実演されることが投射されていた。こちらの場合、投射されているのは先行発話であるとともに、二人の参与者がともに想起ずみの、ある人物の過去の発話でもある。このように、共に知られている誰かの過去の発話や共に知られている物語や歌の一節、あるいは慣用句なども、それらが進行中のターンの次の位置に来ることが投射されるなら、ユニゾンのリソースになるといえる。そのひとつの例を、のちに６節で取り上げる。

以上３つの高められた投射可能性をもたらすリソースは、英語と日本語という言語の相違をこえて私のデータ群にも観察されるものであり、Lerner の整理は高い一般性を持つといえる。この３つは論理的に考えられる可能性としても十分である。すなわち、相手が発しようとしている特定の語句が予測可能になるのは、極めて高い形式的予測可能性の複合によって「量から質への転化」がもたらされる場合か、あるいは知っている語句が述べられることが予測可能になる場合か、どちらかだと考えられる。そして、最初の１ビートというリソースは、これらのリソースと相まって投射可能性をさらに高めるものだといえる。

ユニゾンを実現する工夫においては、一度に一人のターンテイキングを実現するために用いられるリソースや手続きが別の目的のために利用されている。進行中のターンがその発話連鎖上の位置やターンの構成を通じて可能な統語的形状を投射するという性質は、高められた投射可能性の基礎となる性質である。また、すでに知られている語句の反復が投射されることも、ターン種類の投射の特殊ケースである。ユニゾンへの調整された参入において１ビートごとの調整を行うことは、オーヴァーラップ解消の基本的方法の転用である。このように、ターンテイキングに関して整備された分析装置は、ユニゾンへの調整された参入の記述においても有効である。前章とはまた別の形で、発話の組み立てが参加の組織化のリソースであることが確認された。

３．２　権限の緩みと参入権限

ユニゾンは、進行中のターンの次の語句が高度に予測可能になることによって可能となる。しかし、ユニゾンの可能性を考えるとき、もうひとつ問題にすべきことがある。それは相手と同じ言葉を同時にいう権限（entitlement）という問題である。

発話する権限という問題も、会話のターンテイキング組織の中で位置づけを与えられている。ターンテイキング組織は、ターンを取得する者に「最低ひとつのターン構成単位」を産出する権限を割り当てる。この権限は、次話者として選択されるか、あるいは次話者として名乗りでることによって、そのつど配分されると考えられる。ただ、ユニゾンを行う権限を考える場合には、このような視点だけでは十分でない。

論点の例示のために、やや突飛な思考実験をしてみよう。レストランのドアを開けた客が店内に入ると、気づいたウエイトレスが歩み寄ってくる。彼女が「い」という一音を発した瞬間、客は「いらっしゃいませ」という発話が行われることをほぼ確実に予測できる。しかしながら、この予測に基づいて客が「いらっしゃいませ」をユニゾンしたなら、これは相当理不尽なふるまいである。だが、このふるまいの理不尽さは、一度に一人のターンテイキングに従っていないことにあるのではない。なぜなら、「いらっしゃいませ」とオーヴァーラップして「３人座れる？」ということは、無礼かもしれないが理不尽ではないからである。また、別のウエイトレスがこの客に気づき「いらっしゃいませ」とユニゾンすることはまったく自然だからである。

同じように高度な予測可能性があるときでも、それをユニゾンの機会として利用できるためには、その発話タイプとその者の立場とのあいだに権限を与えられた結びつきが構成される必要がある。Lerner もこのような権限の問題に注意を向け、次のように指摘している。進行中のターンの話し手が、共通の思い出を想起することを誘ったり、自分自身が著者／所有者でない要素（たとえば、イディオマティックな表現や誰か他の者に帰属可能な発話）を発話しようとしたりするとき、話し手が通常自分のターンに関して持つ権限が緩められ、このことは別の参与者がそのターンの途中からユニゾンする形で参入する可能性を高める、と（Lerner 2002: 233）[6]。

また、日本語の会話における「共ー参与者による完了（co-participant's completion）」[7] を詳細に分析した林（Hayashi 2003）も、ひとりが開始したターンをもうひとりが完了させるとき、完了部がそのターンに対する自分の権限に敏感にデザインされることを指摘している。ユニゾンはこの現象の特殊ケースであること、また、林が進行中の活動への参加の組織化という問題の中に権限の問題を位置づけていること、この２点において、林の研究は重要な導きの糸になる。

これらの議論において Lerner や林が参照しているように、ここには Goffman や Levinson が論じた話し手と発話とのあいだの亀裂という問題が関わっている。ただ、２章で述べたように、Goffman た

ちの議論は、話し手と聞き手をまず区分したうえでそれぞれを下位区分する手順をとっているので、これらの立場が互いに互いを構成し合うという視点が十分でない。Lerner や林がすでにその方向に踏み出しているように、われわれも、進行中のターンの話し手側において生じる権限の緩みとともに、そのターンに参入する側の参入権限を視野に入れ、双方の権限が互いに構成し合う関係を見なければならない[(8)]。

以下では、ユニゾンが誰と誰のあいだで生じており、誰に向けられているのか、という点に注目して大きく３つの参加構造を取り出す。それらを「相互的ユニゾン」「共同的ユニゾン」「引用のユニゾン」と呼ぶ。そして、それぞれについて、権限の緩みと参入権限とが進行中の会話の中でどのように結びつきながら構成されていくかを記述する。なお、これらの参加構造の区別は、ユニゾンへの権限が構成される異なった手続きを析出するためのものである。実際の会話、とりわけ３人以上の会話においては、これらが組み合わせられたさらに複雑な参加構造が作り出される場合が多い。

４．相互的ユニゾン

第一の参加構造は、ユニゾンしている二人が互いに相手に発話を向けているときに作り出されるものである。ここでは、同じ言葉を同時に発することによって、互いに相手に向けた行為が行われる。これを「相互的ユニゾン」と呼ぼう。

相互的ユニゾンの共通の形式的特徴は､進行中のターンの末尾の語句がユニゾンされることである。また、相互的ユニゾンという形で進行中のターンに参入する者が占める立場に共通の特徴は、それに先立つ時点で当人が開始した発話連鎖や着手した行為が、何らかの仕方で滞っているということである。そして、ユニゾンは、滞った発話連鎖や行為を完成させたり促進したりする方法として、用いられている。

次の【抜粋６（３）：たかぎゆたか】では、Ａが「高木」という名前で指示した野球選手を認知する(recognize)よう求めると（１行目)、Ｂはやや遅れて「はい」と応じる（2-3 行目)。やや遅れたうえに最小限であるＢの反応は、Ｂがその選手を認知してないかもしれないという可能性に、Ａが注意を向けることを可能にする。Ａは「首切られた」という描写を付加して指示し直す（５行目）ことで、この問題を解決しようとする。他方、Ｂの方も、「はい」といったあとに間隙（４行目）が空いたことで、自分の反応がＡにとって不十分だった可能性に注意を向けうる。Ｂは自分が認知したという証拠に「た」と選手の名前を自らいい始めることでこの問題を解決しようとする。二人のこの試みは同時に開始されたため、Ｂは発話を中断してＡにターンを譲る。しかし、ＢはＡの生き延びた発話が完了可能点にたっする前に、「たかぎ」という言葉をユニゾンする形で参入している。

【抜粋６（３）：たかぎゆたか】
((プロ野球の球団「横浜大洋」の話をしている。))

01 Ａ：高木っておったやん.
02　　(0.4)
03 Ｂ：はい.
04　　(0.4)
→ 05 Ａ：［首切られた［たかぎ].
→ 06 Ｂ：［た-　　［たかぎ］ゆたか.

07 Ａ：僕見たことあんねんちゃんと間近で.

このケースではまず、オーヴァーラップした発話を完成させる方法としてユニゾンが用いられている。ユニゾンがこのように「ターン競合をターン共有へと変換する」（Lerner 2002: 240）ための方法になることはすでに指摘されているが、このケースの場合、この見方だけでは十分でない[(9)]。６行目でＢは、自分が３行目で着手した行為（＝自分がＡのいう選手を認知したことを明らかにすること）の不十分さを解決する試みを開始している。５行目で生き延びたＡのターンは、Ｂ自身が解決しようとしたことへのＡからの解決の試みである点で、いわば「Ａだけのもの」ではない。このターンを完成させることは、Ｂの行為を完成させることでもある。生き延びたＡのターンに対するこのようなＢの立場を示す方法として、オーヴァーラップ発話を完成させる他の方法（再生や継続）よりも、ユニゾンが有効なのである。

オーヴァーラップがないときにも、相互的ユニゾンは同様の仕事を果たすために用いられうる。【抜粋７（６）：ロクナナ】は、Ｃが自分の手帳に書いてある電話番号を、横に立っているＨに教えているところである。Ｃが電話番号を読み上げ終わると（1-8 行目）、Ｈは自分の手帳にそれを書き込み、座っているＣはしばらくその様子を見上げている（９行目）。次に、Ｈが手帳に書いた番号を読み上げて確認を求め始めると、ＣはＨが番号を区切るごとに、笑いながら「うん」といって頷き（10-14 行目）確認を与える。ユニゾンは、この「確認を求めるー確認を与える」という活動の最後の局面で生じている（16-17 行目）。

【抜粋７（６）：ロクナナ】
((ＣがＢに電話番号を聞きかけたとき、電話がかかってきて、Ｂは電話のところに行ってしまう。Ｃが困っているのを見たＨは、「あたし書いてある」といって手帳を出し、Ｂの番号をＨに教え始める。))

01 Ｃ：ゼロロクの::, あ:hhh ＝((言いながらＨを見上げて笑う))
02 Ｈ：＝はい？
03 (0.4)
04 Ｃ：.hh.hh
05 Ｈ：サン［ハチニ-((Ｃの手帳を覗き込んで))
06 Ｃ：［サンハチゼロの, ＝
07 Ｈ：＝°サンハ(チ)°＝
08 Ｃ：＝ハチロクロクナナ.
09 (4.3)((Ｈは手帳に書いており、Ｃはそれを見上げている))
10 Ｈ：ゼロロクの,
11 Ｃ：う(h)hh((頷きながら手帳に視線を落とす))
12 (0.3)
13 Ｈ：サンハチゼロの:,
14 Ｃ：う(h)ん((手帳を見たまま頷きながら))
15 (0.3)
→ 16 Ｈ：ハチロク:［ロクナナ.］
→ 17 Ｃ：［ロクナナ.］°んふ［ふ:°((「ロクナナ」と２回短く頷いて顔を上げる))
18 Ｈ：［あっ(.)どうもすいません.

10 行目以降を見ると、短い間隙が２回繰り返して生じている（12,15 行目）。これらの間隙は、Ｃの方から埋めることもできるものである。Ｈが次を読み上げ始めるのを待たずに、Ｃの方からもう一度番号の続きを読み上げてもよいからである。この点で、Ｃの 11 行目と 14 行目の反応は、そこまでの番号に確認を与えるとともに、Ｈに先を促す行為を行っている。Ｈが自分のペースで次を読み上げるのをＣは待っている。そして、待っているということでいえば、そもそもＣは９行目から、電話番号が確かに伝えられたことがＨから明らかにされるのを待っている。つまり、Ｈが確認を求めるために 10 行目からの連鎖を開始したことは、Ｈからの「あっ(.)どうもすいません」（18 行目）のような反応が遅らされていることを意味する。

先ほどのケースで認知に関する問題がどちらの側からの行為によっても解決され得たように、ここでも、番号がＨに伝えられたことを確実にするという仕事は、どちらの側からの行為によっても解決されうる。この意味で、10-16 行目のＨのターンは、やはり「Ｈだけのもの」ではない。このターンを完成させることは、Ｃの行為によっても解決されえた問題を解決することである。Ｈのターンに対するこのようなＣの立場を示す方法として、ユニゾンは有効である。Ｃは「ロクナナ」をユニゾンすることで、Ｈの発話の内容を確認しているとともに、それが自分の開始した活動を完成させる発話だという、発話の地位も確認している。

上にあげた二つのケースではいずれも、林が「共有されているが独立に知られた知識の表示」（Hayashi 2003: 44）と呼んだ行為がユニゾンによって行われている。しかし、このような行為を行う方法はユニゾンだけではない。重要なのは、ユニゾンが生じているターンの発話連鎖上の位置が、対になる二つの行為（「指示をやり直すー指示対象を認知した証拠を示す」「念を押すー確認を求める」など）のどちらによっても満たされうる性格を備えていることである。それは、二人のどちらもがそれぞれの仕方で満たすことが可能な位置である。このような連鎖上の位置において、いったん相手にターンを譲ったあと、相手とのターン競合を惹起する可能性を最小限にしつつ、それが自分の行為をも完成させるターンであることを明示するために、末尾の語句のユニゾンが有効なのである。

次に再掲する【抜粋４（３）：焼きいも】では、ユニゾンがターンの完了可能点よりも早い時点で行われている点がやや異なるが、基本的には同様の観点から記述することができる。なお、これは林が「共有されたパースペクティヴやスタンスの表示」（Hayashi 2003: 36）と呼んだ行為に近い例である。

【抜粋４（３）：焼きいも（再掲）】

01 Ｂ：でそんなん(.)まいにちさつま汁とかまいにちいも食えないでしょさ - さつまいもって.
02 Ｂ：.hhh［じゃがいもやったらなんとか消化できてもね.］
03 Ａ：　　［゜ん::::そやな:::::,゜　　］
04　　(0.8)
→ 05 Ａ：゜そや゜な:(.)最初の日にそやな:(.)いも汁［作って:］(.)２日めに焼き［いも　し　て:,］
→ 06 Ｂ：　　［((頷く))］　　［いも゜(し)゜て:,］
07　　(0.6)
08 Ａ：［゜う::ん,゜
09 Ｂ：［もうだめでしょ:.

さつまいもを大量にもらって困ったというＢの語りを聞いて、Ａは「ん::::そやな:::::」と考え込む作業を開始したことを表示し、やや長い間をおいてから「そやな:」と自分が想像してみたさつまいもの料理法を披露し始める。ＢはＡが「いも汁作」まで来たときに軽く頷き、「って:」とまだ続きがあることを明らかにした時点で、頷いたままの頭の位置をさらに下げる形で強く頷く。この２段階の頷きによってＢは、そこまでのＡの発話にまず同意し、続きが投射されると先を促している。

語り手Ｂにとって、これはすでにずいぶん待っていることを意味する。Ｂは「毎日いも食えない」ので飲み屋さんに持って行ったらそこで何が起こったかを語ろうとしており、「毎日いも食えないでしょ」（１行目）というのはまだ物語の背景説明部分である。Ａがこの見解に同意を示せば、Ｂはすぐに物語を進めることができる。しかし、Ａは「毎日いも食えないでしょ」という最初の反応可能な地点、「さつまいもって」という２回目の地点でともに同意を示さず、Ｂがこの問題を解決しようとして開始した補足説明（２行目）とオーヴァーラップしながら、自分で考えてみるという選択に出ている。ＢはＡがやや長い間隙をおくのを待ち、今またＡが「２日め」の料理法を披露するのを待っているのである。

Ｂにとって、「毎日いも食えない」という見解へのＡの賛同を得て先に進むひとつの方法は、自分で考えてみることを選んだＡにそれをやらせることで、Ａが料理法をあげるのに行き詰まるという結果を得ることである。この意味で、このターンもまた「Ａだけのもの」ではない。Ｂは「いもして:」とユニゾンすることで、Ａの発話内容に同意するとともに、Ａが今や行き詰まる地点にたっしたという理解を示し、自分の語りの途上でＡの同意を取りつける作業が完成しつつあることを示している。そして、このあとに空いた間隙（７行目）を捉えて、Ｂは「もうだめでしょ:」（９行目）と述べ、１行目で「毎日いも食えないでしょ」と述べた地点から続く語りにとりかかっている。

同じ発話連鎖上の位置が二人のどちらの行為によっても満たされうる性格を持つとき、二人の行為の関係は相補的である場合もあれば競合的である場合もある。【抜粋６（３）：たかぎゆたか】における「指示をやり直すー指示対象を認知した証拠を示す」、【抜粋７（６）：ロクナナ】における「念を押すー確認を求める」、【抜粋４（３）：焼きいも】における「見解を補足説明するー自分で考えてみる」といった二つの行為の関係は、相補的であり得る[10]。これに対し、次の【抜粋８（８）：ひとり暮らし】における二つの行為は、相補的であり得ない。そのような場合、相互的ユニゾンは相手のターンが投射しつつある連鎖上の含みを転轍する方法としても利用可能である。

【抜粋８（８）：ひとり暮らし】

((しばらく前から、食欲のことが話題になっている。Ｂが、ほとんど一人暮らしだった２年間は、食事を作るのが面倒で、あまりきちんと食事をとらなかったという経験を語ったところである。))

01 Ａ：え::ひとり暮らしだったってどういうことだ？
02 Ｂ：だから(.)お母さんがずっとおじいちゃんの看病でいなかった［から:,
03 Ａ：　　［あ

((23 行省略：父親は帰宅が遅く、顔を合わせることがほとんどなかったことをＢが説明する。))

27 Ｂ：で:(0.5)たまに::::::(0.8)ま:夕飯(0.5)外で［食べたりなんかする,
28 Ａ：　　［うん.
29　　(0.3)

30 Ｂ：ときだけお父さん゜と゜.
31 Ａ：ふ:ん．＝
32 Ｂ：＝一緒で.
33　（0.3）
34 Ｃ：ふ:［:ん
35 Ａ：　［お休みの日とか.
36 Ｂ：そうそう［゜そう゜．
37 Ａ：　　［ あ:ん.
38　（0.6）
39 Ａ：それはぜっったいになかったから［なうちは.］
40 Ｂ：　　［あとお　］やが帰ってきた日？
41　（0.3）
42 Ｂ：お母さん［が.
43 Ａ：　　［あ:［あ:.
44 Ｂ：　　［うん．うん．だけ.
45　（1.3）((ＡはＢをしばらく注視してから視線をはずす))
46 Ａ：へ::［え（……-）
→ 47 Ｃ：　［うちもそういう状況に立たされたことは［゜ない゜.］((顔はＡ向き、視線は下方))
→ 48 Ａ：　　［ ない .］((視線はＣ向き))
49　（0.5）
50 Ｃ：ん:.
51　（0.4）
52 Ａ：お店やから誰かはいる.

Ｂが自分はほとんど一人暮らしだったことが２年間あると語ったのを聞いて、Ａは「ひとり暮らしだったってどういうことだ？」と自分の理解を十分にするための質問をする（１行目）。Ｂは、母親が祖父の看病のため家におらず、父親は家にいたが帰宅が遅いので顔を合わせることがほとんどなかった、という説明を行う（２－ 32 行目）。このあとでもう一度自分の理解をチェック（35 行目）してから、Ａはそのような経験が自分にはないことを「ぜっったい」と強調して言明する（39 行目）。６章で詳しく述べるように、この発話は自分の経験の「部分的報告」であり、自分にはさらに語るべきことがあることを投射しうる。しかし、この発話は、Ｂが行った補足説明とオーヴァーラップしたため、ＡはＢが自分の語りを完成させるのをまずは優先させる（40 － 44 行目）。

この流れの中で、Ｂを注視してＢがもう語りを続けないのを見た（45 行目）Ａが、視線をはずしながら「へ::え」という前置きに続いて何か発話しかけるとき（46 行目）、それは 39 行目の発話によって投射された自分の語りを開始しようとしたと考えられる。しかし、この発話は今度はＣの発話とオーヴァーラップして、Ａは発話を中断する。生き延びたＣの発話は、「うちも」と共通性を主張しつつ、「そういう状況に立たされたことは」という統語的構成によって、その共通性がＡとの共通性（経験が「ない」こと）であることを投射している。先ほどのＡの言明がそうであったように、この発話もＣが自分の経験を語り始める準備として聞かれうる。

このターンの末尾の「ない」を、Ａは強勢をおいてユニゾンしている（48 行目）。このユニゾンは

まず、最初にあげた【抜粋６（３）：たかぎゆたか】と同様、オーヴァーラップした発話を完成させるために利用されている。また、ここでのＡも、自分が開始した活動を先に進める機会を待っている。しかし、これまでのケースと違うのは、Ｃが「うちも」と一人称単数で開始したターンの述部を強勢をおいてユニゾンすることは、それを自分のターンへと転轍し、Ａが自分の経験の語りにはいる工夫になっているということである。Ｃのターンは、これまでのケースのようにＡが直面している課題を相手の側から解決するものではなく、いわば「横槍」である。「ない」のユニゾンは、Ｃとのターン競合を回避するとともに、そのターンを自分の語りへの準備へとたくみに転轍してしまうために、用いられている。

以上のように、相互的ユニゾンを可能にする権限の緩みと参入権限は、進行中の発話連鎖の中で、その位置が二人のどちらの行為によっても満たされうる性格を備えていることによって、作り出されている。これを次のように整理できる。

相互的ユニゾンは、
１）自分が先立つ時点で開始した活動や着手した行為が何らかの仕方で滞っているときに、
２）その滞りを解決するためにひとつの仕方で自分に利用可能な連鎖上の位置が、
３）相手の開始したターンによって別の仕方で利用され始めたときに、
４）相手とのターン競合を最小化し、相手のターン産出を損なうことなく、
５）滞った活動や行為を完成させたり継続したりする機会として、
６）そのターンを利用する方法である。

５　共同的ユニゾン

共同的ユニゾンとは､ユニゾンしている二つの発話がいずれも第三者に向けられている場合である。それは、二人の者が「チーム」を形成して、ある行為を第三者に向けて一緒に行う手続きの一つである。このタイプのユニゾンは、相互的ユニゾンとはだいぶ様相を異にしている。二人が「チーム」であることが会話のその局面において関連している(relevant)なら、ユニゾンする権限は同じチームの成員という資格によって無理なく生じると考えられるからである。ただ、複数の者が「チーム」としてふるまうやり方はそれ自体いろいろある（Lerner 1993, Kangasharju 1996, Gordon 2003, Hayashi 2003)。そこで、本節で考えるべき問題は次の二つとなる。

まず、複数の人々が「チーム」であることは、いかなる手続きによって会話の中で関連あることとして構成されるのか。次に、「チーム」としてふるまう方法の中で、とくにユニゾンという方法が用いられるのはどのような場合か。前者の問題から取りかかろう。

第一に、一人が第三者とのあいだで相互行為を行っている途中で、ユニゾン相手を自分の側に誘い入れる場合がある。この誘い入れが受け入れられることは「チーム」形成の手続きとなり、二人は第三者に対して「チーム」としてふるまうことが適切になる。この場合、続く第三者とのやりとりにおいて、ユニゾンが行われうる。【抜粋９（３）：ほんまですよ】では、このような誘い入れのあとで、二人がユニゾンを通じてお世辞という共同行為を行っている。

【抜粋９（３）：ほんまですよ】

01 Ｂ：nn:もうぼくもう(.)尊敬し［てますから後藤さんほん［とに.
02 Ａ：　　［((咳払い))　　［よ:ゆ:わ［(こ(h)の(h))→
03 Ｂ：　　［やっ
04 Ａ：→［くそガ(h)キ(h)や［ :) ほん ::::ま［に.
→ 05 Ｂ：　［やっ　　［ほんまですよ.　［な小山田［な:.
→ 06 Ｃ：　　［((頷く))
07 Ａ：h ほ(h)ん(h)［::ま(h)に(h).
08 Ｃ：　　［((頷く))
09 Ｂ：ほん［m -
10 Ａ：　　［よ(h):ゆ(h):わ(h).
→ 11 Ｂ：ほん［: までっすよ.］
→ 12 Ｃ：　　［ほんまですよ.］
13　(0.2)
14 Ａ：°ま:ったく:. °

Ｂは最初は単独でＡ（後藤）に対して「尊敬してます」とお世辞をいうが（1 行目）、これをＡは「よ:ゆ:わ」と本気でないものとして取り扱う（2 行目）。Ａが続けた発話とオーヴァーラップしながら、Ｂは単独で「ほんまですよ」とそれが本気であることを主張したあと、「な小山田な:」とＣ（小山田）に同意を求め（5 行目）、Ｃはうなづいて同意したことを示す（6 行目）。Ｂがお世辞において表明した見解がＡによって否認されているという文脈で、ＢがＣの同意を獲得することは、ＣがＢの味方についてふるまう用意があることを示す。ゆえに、二人はＡに対して「チーム」を形成したものと認識可能になる。Ａの音量を上げた「よ:ゆ:わ」（10 行目）は、このいわば戦力増強した相手に向けてより強い形でお世辞を打ち消したものと見ることができる。これにさらに対抗して、Ｂが「ほん」と開始したターンに、すぐ追いかけて参入することで、ＣはＢとユニゾンしてＡに本気であることを主張する（11-12 行目）。

第二に、第三者が複数の参与者にひとまとめにして発話を向けることによって、発話を向けられた者たちが「チーム」としてふるまう機会が用意されることがある。この場合、この第三者の発話に応じる行為が、ユニゾンを通じて行われうる。次に再掲する【抜粋２（３）：てんねや】がその例である。

【抜粋２（３）：てんねや（再掲）】

01 Ｃ：ぼくだけが食べて:先輩らもう:食べないっちゅうのも,
02　(1.2)
03 Ｃ：ちゅうかひとりだけ食べてふたりが食べないのとふたりが食べて
04　ひとりが［(食べないのと)
05 Ａ：　　［なにゆ:て(h)ん(h)［ね(h)や(h)きみ　］はっ→
06 Ｂ：　　［なにゆ:てんねん.］
→ 07 Ａ：→.h.h.h な(h)に(h)［を(h)ゆ(h): てんねや.］
→ 08 Ｂ：　　［に　ゆっ　てんねや.］

Ｃは「先輩ら」という言葉を用いて、ＡとＢをひとまとめにして発話を向けている（1-4 行目）。このタイプの発話には、発話を向けられた者たちの誰かが代表して応じるか、全員がそれぞれに応じるかといったいくつかの選択肢がありうる（Lerner　1993）。その中でも、発話を向けられた者たちが同じ反応を行いつつあることが互いに観察可能な場合、このタイプの発話に応じるターンは「チーム」を形成する機会として利用されうる。Ｃの発話に対して、まずＡとＢはそれぞれＣを責める（5-6 行目）が、Ａがそれをもう一度だめ押しするターンを開始すると、Ｂはすぐ追いかけてユニゾンする形で参入し、二人はこのターンを「チーム」形成の機会として利用したうえで、共同でＣを責め立てている（7-8 行目）。

第三に、一人が第三者に向けて行った行為をもう一人が引き継ぐ発話を行う場合がある。それは、たとえば、一人が第三者に向けた発話をもう一人が同じ第三者に向けて反復することが投射されたり、一人が第三者に向けた発話を敷衍する発話をもう一人が開始したりするときである。行為を開始した者は、これらの引き継ぐターンにユニゾンする形で参入することによって、相手をチームメイトとして取り扱うことができる。反復（【抜粋 10（６）：そそうや】）と敷衍（【抜粋 11（４）：望むこと】）の例を一つづつあげる。

【抜粋 10（６）：そそうや】
((Ｆが最初にビールをグラスに注ごうとしてこぼしてしまう))

01 Ｆ：あ［っ hhh((同時にＡは気づいたように口を開ける))
02 Ｄ：　［あっは::［.hhhh ははははは:
03 ？：　［あはっ
→ 04 Ｂ：　［(hh)　　［それはそそうやわ．＝
→ 05 Ａ：＝あっはっはｓ:［そら:　］［そそうや::．　］　((視線はＦ向き))
→ 06 Ｂ：　　［<それは>］［そそうやわ:．］hh((視線はＦ向き))
07 Ｄ：.hh ははははっ
08 Ｂ：そ:れはそそうやわな.
09 Ｆ：あ:っ((ここまでＦはグラスとビールを置き、机の下を覗いて、この声を上げると覗いていた姿勢から起き直る))

ビールをグラスに注ごうとしてこぼしたＦを、まずＢが「それはそそうやわ」とからかう（4 行目）。これを聞いて笑ったＡは、最初の「ｓ」という子音を延ばすことでＢの発話の反復を投射する（５行目）。Ｂは直ちに「そ」と参入し、Ａが「そら:」と音をのばすあいだ「それは」をゆっくりしたテンポで発話する（６行目）。このような言葉を合わせる工夫ののちに、二人は「そそうや」の部分を重ねることで「チーム」としてＦをからかっている。

【抜粋 11（４）：望むこと】
((Ｓが作成したアンケート原案の中の「今後、メーカー・行政・運転者に望むこと」という質問項目について))

01 Ｙ：これ<望むこと>な::,
02 Ｓ：うん.

03　（0.5）
04 Ｙ：一緒にしちゃっていいの:？
05　（0.2）
→ 06 Ｙ：メーカーぎょ:せ:運転者に望むことって.
→ 07 Ａ：(それ-)それぞれに３つずつ［ぐらいあると［思う［ ねん.　］
→ 08 Ｙ：　　［うんうんうん［思う［(けど).］
09 Ｓ：　　［あ:あ:あ:あ:そっ［か.
10 Ａ：　　［だって:,

社会学専攻の大学生Ｓが作成した「自動車と環境問題」に関するアンケート調査票の文面を、他の学生５名と教師が一緒になって検討している場面である。「今後、メーカー・行政・運転者に望むこと」という調査項目についてＹが問題点を指摘した（1-6 行目）あと、Ａが「それぞれに３つずつ」とそれを敷衍するものと聞きうる発話を開始する（7 行目）。この発話の途中からＹは助走をつけるように「うんうんうん」といい、Ａが「あると」までいったところで「思う(けど)」とユニゾンしている（7-8 行目）。なお、このケースは、４行目でなされたＹの指摘の意味がすぐにはＳに了解されていない点で、相互的ユニゾンにおいて見た「開始した活動の滞り」という特徴も備えている。

第四に、一人が第三者に向けて複数の者たちを代表する発話を行ったあと、その発話がもたらした結果を利用して行われる発話は、先の発話で代表された者たちがユニゾンという形で参入する機会を与える。

【抜粋 12（４）：エアロパーツ】
((Ｓが作成したアンケート原案の検討場面))
→ 01 Ｈ：これは:んな３つまで(な)なくてある-当てはまるもの全部［な　］わけやん↑ね:.
02 Ｓ：　　［全部］.
03　（0.4）
04 Ｓ：.hhhh［でも全部-］
05 Ａ：　　［う ha:hh　］((あくび))
06　（0.3）
07 Ｓ：やるやつはとことんマルするやろうけど:普通の人はマルせえへんやろうな
08　　と思うて.
09 Ｎ：あたしも［ないわ.
→ 10 Ｙ：　　［エアロ［パーツてなに:？］((視線はアンケート紙面))
→ 11 Ｈ：　　［パーツってなに ］:？((「パ」でＳの方に顔を向けて))
12 Ｃ：　　［(……)］だけや.
13 Ａ：［(……)　］
14 Ｃ：［エアロ［パーツ.］
15 Ｓ：　　［え:？
16 Ｈ：　　［エアロパーツってなに？((Ｓに))

【抜粋 12（４）：エアロパーツ】は先に見たケースと同じ場面で、多数の回答選択肢が並んだある

質問項目が話題になっている。Hは、アンケートの作成者Sに、この質問項目は「当てはまるもの全部」にマルをつけてもらうつもりで作ったのかどうかを質問する（1 行目）。この場面で、教師はS以外の学生たちに、自分が回答者としてアンケートに答えるつもりで文面を検討するようあらかじめ指示してある。それゆえ、アンケートの答え方に関するこの質問は、たんにH個人の質問ではなく、Hが他の者たちを代表して行った質問として聞かれうる。「全部」（２行目）だというSの応答を得て、参与者たちはそのつもりでこの質問項目の回答選択肢を順に目で追いはじめる。

このあとで、選択肢のひとつについてYが「エアロパーツってなに？」（10 行目）という質問を開始するとき、これは「当てはまるもの全部」にマルをつけるのだというSの応答を受けて、特定の回答選択肢の意味を尋ねている点で、後続質問として提出されている。そして、同じ文面を見ているHは、Yが「エアロ」とターンを開始した（10 行目）のを聞くことで、Hのターンの形状と種類を予測可能となる（おそらくHは、このときまさに同じ回答選択肢に目を移したところだったのだろう）。このターンにすぐ「パーツってなに」（11 行目）と参入することで、HはYの開始した質問を二人の「チーム」の質問として完成させている。

以上のように、共同的ユニゾンにおいては、ユニゾンを通じて「チーム」としての第三者への共同行為が行われる。ユニゾンという形で進行中のターンに参入する権限は、それに先だって「チーム」としてふるまう機会が作り出されることによって準備される。その機会が作り出される手続きとして、４種類のものを明らかにした。１）一人がもう一人に第三者に対して共同行為を行うことを誘いかけること、２）第三者が複数の者をひとまとめにして発話を向けること、３）一人が第三者に対して開始した活動を、もう一人が引き継ぐ発話を開始すること、４）一人が第三者に向けて他の者たちを代表した発話を行ったあとで、もう一人がその結果を利用した発話を開始すること、である。

ただ、「チーム」としてふるまうやり方には多様なものがある。その中でユニゾンという手続きの固有性は何だろうか。上に上げたケースでユニゾンを通じて行われている共同行為は、ほとんどが、それ以前にチームの一員によって単独で行われた行為を何らかの意味で補強するものである。【抜粋９（３）：ほんまですよ】の場合、お世辞を本気にしない第三者に対して、本気であることを念押しするときにユニゾンが用いられている。【抜粋２（３）：てんねや】の場合、二人がそれぞれにCを責めたのを、だめ押しするときにユニゾンが用いられている。【抜粋 10（６）：そそうや】の場合も、からかいの追い打ちをかけるときにユニゾンが用いられている。【抜粋 11（４）：望むこと】の場合、一人が行った指摘を敷衍して理由を述べることで、その指摘をより説得的にするときにユニゾンが用いられている。【抜粋 12（４）：エアロパーツ】だけは、このような特徴づけは困難である。このケースの場合、ユニゾンが生じているターンの直前まで二人がアンケート票の文面を目で追っていたという特殊事情が、このような共同的ユニゾンの用い方を可能にしたと思われる。それゆえ、すべてではないが、ほとんどの場合に、共同行為のユニゾンは、チームの一員がすでに行った行為をより効果的に、あるいはより決定的に行うための方法として用いられている。

このように特徴づけるとき、共同的ユニゾンとは、言語行為論が定式化してきたような発話の効力とはいくぶん異なるものとしての発話の力に、人々が指向していることを例示する現象であると考えられる。まず、単独の話し手が発話するよりも複数の人々が声を合わせることで増強するようなものとしての発話の力、これを実現する方法として共同行為のユニゾンがあると考えられる。しかし、それだけではない。このような力を第三者に向けた外向きの力と呼ぶなら、それと同時に、共同的ユニゾンには声を合わせている者たち同士のあいだで働く内向きの力もあると思われる。次のような共同的ユニゾンがあることは、この見方の傍証となる。

【抜粋 13（６）：いってらっしゃい】

01 Ｈ：いってきま:す.
02 Ｂ：はい．＝
→ 03 Ａ：＝［いって［らっしゃ:　］:い.
→ 04 Ｄ：　［いって［らっしゃい].
→ 05 Ｃ：　　［らっしゃい].

【抜粋 14（６）：かんぱい】

((８人の若者が鍋を囲んで宴会を始めるところ。))

09 Ｅ：はっ［はっは
10（Ｆ）：　［か::ん［ぱ::::　［:::::::い　　］
11 Ｈ：　　［(……)］((隣のＧに))
→ 12 Ｂ：　　［はい［かんぱ:::い］
→ 13 Ｅ：　　［かんぱ:::い］
→ 14 Ａ：　　［かんぱ:::い］
((Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆがグラスを合わせる))

こうした挨拶や歓声やかけ声などのユニゾンは、ユニゾンによる共同行為の中で特別な地位を有する。これまで見てきた行為がユニゾンによっても行われうるのに対し、これらの行為はしばしばユニゾンによってこそ適切に行われるからである。Lerner も、講演会や政治討論会における「喝采」と「ブーイング」という聴衆の集合的発話について同様のことを指摘し、これらの行為が個人によって行われることは「第二の選択肢」であると述べている（Lerner 1993: 216）。また、その証拠として、Lerner は周到にも、聴衆の一人だけがいち早く拍手してしまったことが「トラブル」として扱われているケースを紹介している。これらの発話やふるまいにおいては、それぞれの場合に異なる共同行為が第三者に向けて行われているが、いずれの場合にも共通してチームへと一体化するという行為が行われていると考えることができる[11]。

人々が「チーム」としてふるまうさまざまな手続きの中で、共同行為のユニゾンという手続きが固有に果たしているのは、二重の性格を帯びた集合的力を実現することであると思われる。そのような力を発揮することは、多くの場合、１）チームとしてふるまう機会が作り出され、２）第三者に向けてすでに行われた行為をより効果的・より決定的に行う必要が作り出されることによって、発話連鎖上適切なものとなる。進行中の会話にこの二つの特徴が与えられる中で、共同的ユニゾンを可能にする権限の緩めと参入権限が構成される。

６　引用のユニゾン

最後に取り上げるのは、ユニゾンがその場の誰から誰に向けられているかという観点からいえば以上のいずれかに分類することが可能だが、より広い意味での参加構造としては区別が必要なものである。ある発話において、誰か他の者の言葉が引用されることが投射される場合、その引用部分を発話する行為は単なる「発声者」の行為となる[12]。Lerner や菅原も同様の観察をしているように（Lerner

2002, 菅原 1996a, 1998)、この単なる発声行為である引用部分はきわめてユニゾンされやすい。２節で、引用の投射は特定の語句を予測可能にするリソースであることを述べたが、それは同時に、特別な仕方で権限の緩みと参入権限を構成するものでもあると考えられる。

【抜粋 15（３）：かいゆうかん】は、社会学専攻の学生３名の会話である。この前では、大学院生Ｂがアダルトビデオ（ＡＶ）に関する蘊蓄をひとしきり傾けていた。この抜粋は、それを聞いていた別の大学院生Ａが、そんなに詳しいならそれをテーマにして論文を書いて「＊＊論集」という学術雑誌に投稿したらいい、とからかっているところである。

【抜粋 15（３）：かいゆうかん】

01 Ａ：な:ええよな:＊＊論集第３号ＡＶのＡＶＡＶの::社会学.
02 (0.3)
03 Ｂ：い:や.
04 (0.3)
05 Ｂ：ＡＶを考えるっふっ［ふっふ.hh.hh 岩本さん［のパ(h)タ(h)ン(h)］.hhhh →
06 Ａ： ［考える. ［岩本のな:. ］
→ 07 Ｂ：→んは:っ［はっっは:っはは［かいゆうか(h)んを考える.］
→ 08 Ａ： ［なっつかし:な: ［かいゆうか んを考える ］［(ゆうて.)
09 Ｃ： ［ あ : : あ(h)→
10 →［(なんか［あれ-)
11 Ｂ： ［ふ:ふ: ［ふっ
⇒ 12 Ａ： ［作文かおまえは:っ.hhh ふ:ふっふ:ふっ
13 Ｃ：っは:っはっ

ユニゾンしている「かいゆうかんを考える」(7-8 行目）というのは、二人の共通の知人である岩本の卒業論文のタイトルである。ここで、Ａが冗談めかして行った論文タイトルの提案（1 行目）をＢは「い:や」と拒否し（3 行目)、「ＡＶを考える」(5 行目）と別のタイトルをやはり冗談めかして提案する。これによってＢは、二人の共有知識をＡが想起できる手がかりを与えている。Ａがこれを「考える」（６行目）と追いかけたときには、まだＡがこれを想起したのかどうか明白ではないが、続いてＢが「岩本さん」と共通の知人の名前を出し、Ａが「岩本のな:」と追いかけるとき（5-6 行目)、Ａが岩本の論文タイトルを想起したことが相互に可視化されている。

Ｂの架空の論文タイトルを冗談で提案し合っているこの会話の展開の中で、Ａの「なっつかし:な:」（8 行目）という発話は、Ｂの架空の論文から、二人がともに想起した岩本の論文へと話題を推移させる提案として聞かれうる。そして、「なつかしい」と評価される対象がまだ明言されていないこの時点で、それは評価対象、すなわち岩本の論文タイトルが次に述べられることを投射している。つまりここで、次に発話されることが引用であることが投射されている。

ここでＢは、自分が開始した想起を誘う行為が、Ａの開始したターンによって完成されようとしていることを知ることができる。この意味で、これは相互的ユニゾンとしての性格を備えている。また、ユニゾンを聞いたＣは「あ::あ」（９行目）と反応しているので、Ｃはこのユニゾンを自分に対する想起の誘いとして聞いている。この意味で、それはＣによって共同的ユニゾンとして取り扱われている。しかし、このタイプのユニゾンには以上２つのタイプに還元できない次のような独特の特徴があ

る。なお、以下の特徴はすべて、【抜粋５（６）：結婚してます】においても確認できる。

第一に、相互的ユニゾンでは、ターンの末尾の一つ二つの要素だけがユニゾンされていたが、このケースを始めとする引用のユニゾンでは、より長い発話部分がユニゾンされうる。また、引用部分だけがユニゾンされる。相互的ユニゾンにおいては、相手のターンを損なう可能性を最小化する工夫という意味で、ユニゾンされる部分がターン末尾であることが、その手続き的特徴の一部をなしている。これに対し、引用のユニゾンでは、ユニゾンされる部分が引用であることが、その手続き的特徴をなしている。つまり、このユニゾンへの権限は、ターン内での位置やユニゾン部分の長さにかかわりなく、その部分が引用であることに基づいて構成されると考えられる。

第二に、引用のユニゾンはつねに何らかの対象を評価する活動の中で生じる。多くの場合、それは対象を「おかしな」もの「笑うべき」ものとして評価することである。もちろん、評価という行為自体は、相互的ユニゾンや共同的ユニゾンを通じても行われる。しかし、引用のユニゾンの特徴は、評価を行う発話成分ではなく、評価対象を提示する発話成分においてユニゾンが行われることである。このユニゾンは評価対象を会話の場に現出させるために用いられるのであって、評価という行為そのものを行うために用いられるのではない。

第三に、引用のユニゾンは、会話の場で発せられたのでない誰かの言葉を、その場で発せられたかのように会話の場に現出させる方法である。それによって、引用部分の「原著者」が、あたかももう一人の会話参与者としてそこにいるかのような取り扱いが可能となる。この意味で、引用のユニゾンは会話の場を一時的に演劇的空間に変容させる。それは、Goffman（1981）がいった意味で、別の場面を会話に「埋め込む」方法のひとつである。ユニゾンのあとでAは「作文かおまえは:っ」（12 行目）という発話を行っている。Aは「おまえ」と二人称代名詞を用いて、この発話をこの場にいない「岩本」に話しかける形式にデザインし、「…を考える」というタイトルが論文タイトルとしては幼稚であるとして、岩本を責めたてる演技を行っているのである。（ちなみに、【抜粋５（６）：結婚してます】では、Bは「結婚してます」という杉本彩のせりふをユニゾンしたあとで、「ウエー」（25 行目）と驚く演技を行っている。たった今、他の参与者たちに自分で叙述して見せたことに驚くのは、本当に驚いているのではない。それは、自分がテレビでそのせりふを聞いたときの場面がこの場に現出しているかのようにふるまっているということである。）もちろん、このような「引用→原著者へのコメント」という手続きは、ユニゾンなしにも利用可能である。しかし、ユニゾンによって、その言葉が特定の参与者の手を離れていわば「モノ」のようにその場にあるという効果が、より顕著に作り出されうる。

このように、引用のユニゾンは、相互的ユニゾンや共同的ユニゾンを可能にする発話連鎖上の手続きだけでなく、続く部分がその話し手に帰属する言葉でないことが投射されることによって、固有の仕方で権限の緩みと参入権限が構成される。つまり、そのターンを開始した者の立場が「発声者」へと限定される（権限の緩め）ことが投射されることによって、「発声者」としてふるまいうる知識を持つ者には、その限定された立場に関するかぎり、そのターンに参入する権限が構成されるのである。

ここでは「原著者」と「発声者」という二つの立場の分離可能性が利用されているのだが、別の見方をすれば、それは過去のある場面という歴史的文脈が会話の「内部」に表示され、そのとき行われている行為に関連あるものとして構成されるひとつの仕方でもある。一般に、会話の中で過去の出来事を語ることは、今行われている活動に関連あるものとして歴史的文脈を構成することである。だが、引用のユニゾンという手続きは、過去の場面の関連性を特別な仕方で構成している。声を合わせて過去の誰かの言葉を再現することは、その言葉を過去に自分たちが聞いた（読んだ）ということを今こ

こで示す方法である。現在において言葉を重ねるという形で共ー話し手としてふるまう手続きは、ある過去の場面を、その者たちが共ー聞き手（共ー読み手）として参加していた場面として構成するという特別な仕方で、関連ある文脈として構成する。もちろんこのとき、ユニゾンする者たちは実際にともに同じ場面で聞き手であった必要はない。重要なのは、そのような性格づけが、今ここである歴史的文脈に与えられるということである。引用のユニゾンへの権限が、相互的ユニゾンや共同的ユニゾンと識別される必要があるのは、それが、過去における共ー聞き手性を参照することで構成されるという固有の性格を持つからである。

７　結論

本章では大きく３つのことを明らかにした。第一に、会話の中では一度に一人のターンテイキングを実現しようとする指向とは異なり、言葉を重ね合わせようとする指向に基づいて参加が組織化されることがある。会話の中で同じ言葉が同時に発せられることは、ターンテイキングの一時的乱れであることもあれば、言葉を重ねるべく工夫された結果である場合もある。この区別は、分析者にとっての区別である前に、会話者たち自身がそのふるまいを通じて相互に観察可能にし、参加を組織化していくやり方の区別である。

第二に、ユニゾンは、一度に一人のターンテイキングを可能にするリソースやオーヴァーラップ解消のリソースが、別の仕方で利用される現象である。すなわち、ユニゾンは、１）複数のリソースの収斂による「量から質への転化」、２）共に知られた語句が反復・引用されることの投射、３）最初の１ビート、という３通りのリソースによって生み出される「高められた投射可能性」を利用して可能となる。

第三に、ユニゾンは、話し手側の権限の緩みと聞き手側の参入権限が互いに結びつきながら構成される中で、可能になる。相互的ユニゾンにおいては、自分が先立つ時点で開始した活動や着手した行為の滞りを解決するために、相手の進行中のターンがその機会として利用可能になることで、権限が構成される。共同的ユニゾンにおいては、複数の者が「チーム」形成する手続きが用いられるとともに、「チーム」としての共同行為をより効果的・より決定的に行うことが発話連鎖上適切になることで、権限が構成される。引用のユニゾンにおいては、特定の誰かの言葉が引用されることが投射されることで、過去における共ー聞き手性がこの会話に関連する文脈として構成されることで、権限が構成される。

最後に、この第三の点をもう少し掘り下げるために、若干の考察を行う。いずれのタイプのユニゾンにも共通していえるのは、進行中のターンの発話連鎖上の位置取りやそのターンの構成を通じて、そのターンが「話し手だけのもの」ではなく、複数の参与者がともに満たすことのできるターンとして観察可能になっていることである。そこではいわば、発話に対する話し手の「所有」が緩められている。

さて、発話に対する「所有」という問題に関して、わが国の語用論研究には重要な業績がある。神尾による「情報のなわばり理論」（神尾 1990）である。この理論との対比を通じて、本章で明らかにした「所有」の問題がどのようなものであるかをより鮮明にすることができる。

情報のなわばり理論は「心理的距離の概念に基づく情報表現の理論」（神尾 1990: 83）である。それはたとえば、ある命題を述べるときに述部の形式の選択や指示代名詞の選択が、一定の状況のもとで自然／不自然になるのはなぜかという問題を扱う。そして、自然であるかどうかは、その文で述べ

られる情報が話し手のなわばりの内にあるか外にあるか、聞き手のなわばりの内にあるか外にあるかという区別によって整合的に記述できることが主張されている。たとえば述部の選択に関しては次のような整理が行われている（下図参照）。

	話し手のなわばり内	話し手のなわばり外
聞き手の なわばり外	（1）直接形 「僕の父は鍛冶屋だ」	（3）間接形 「彼のお父さんは鍛冶屋だそうだ」
聞き手の なわばり内	（2）直接ね形 「あそこにいる人は鍛冶屋だね」	（4）間接ね形 「君のお父さんは鍛冶屋だそうだね」

（神尾 1990: 78 に掲載された図を若干修正。例文は引用者による。）

この議論は平叙文を対象とし、文全体の表す情報の「遠・近」を問題にしている。これに対し、本章では自然な会話の中で発せられるさまざまな種類の発話を対象としており、発話が何らかの情報を表すとは限らない（たとえば「かんぱーい」）。また、神尾は情報表現に用いられる言語形式を問題にしているが、本章では進行中のターンへの参加の形式を問題にしている。これらの基本的相違にもかかわらず、情報のなわばりという考え方はユニゾンする権限に適用できるように見える、ということがここでの考察のポイントである。

たとえば、相手に教えてもらった電話番号を復唱する発話は、自分よりも相手に近い情報（上図の（4））である。教えた側がこの発話にユニゾンする権限は、このなわばり関係からも説明可能であるように見える。また、チームの一員が行っている発話にユニゾンする権限は、それが両者のなわばり内にある（上図の（2））ことから生じると説明してもよさそうである。さらに、引用はどちらのなわばり内にもない発話である（上図の（3））ことから、両者とも対等にそれを発話する権限が生じると考えてもよさそうである。このように、一見したところ、この理論が扱っていることはユニゾンする権限の問題とたいへんよく似ている。

だが、この類似性は見かけのものである。たとえば、次の【抜粋 16（3）：大教と国分】を見てみよう。

【抜粋 16（3）：大教と国分】
((ＡとＢがそれぞれスピード違反取り締まりに遭遇した体験談を語ったあと、Ｃが次の発話を行う。「大教と国分のあいだ」という場所は、Ｃの通学路には含まれておらず、ＡとＢの通学路に含まれている。))

Ｃ：大教と国分の間も(0.6)張ってるみたいですね:.

Ｃはここで、ＡとＢのなわばり内にあって自分のなわばり内にはない情報（上図の（4））を言明する発話を行っている。このような「～みたいですね」「～らしいですね」といった末尾をとる発話は、会話の中でしばしば新しい話題を提案する（あるいは進行中の話題を推移させる）ために用いられ、この抜粋もその一例である。

さて、重要なことは、このような発話に聞き手がユニゾンという形で参入することはまずないということである。なぜか。このタイプの発話が話題の提案のために用いられるとき、それは新しい活動を開始する発話連鎖上の位置に置かれているからである。これに対し、本章で見てきたユニゾンされる発話は、いずれも発話連鎖上後続する位置に置かれており、多くの場合には進行中の発話連鎖を完成させうる位置に置かれている（本章３節であげたレストランの思考実験が、理不尽である理由もここにある）。ユニゾンを可能にする権限の緩みと参入権限は、あるターンが進行中の発話連鎖の中でおかれた位置取りによって構成されるのであって、単独の発話に関して考えることのできる性質ではない。これに対し、情報のなわばりは、その発話とそこで述べられる情報との関係のみを問題にしている。それゆえ、情報のなわばりという概念は、発話連鎖の中で形成されるユニゾンへの権限を捉えるためには、抽象的すぎる。

別のいい方をするなら、情報のなわばりは発話で述べられる情報に関する概念であるが、ユニゾンへの権限は、その発話が満たしている位置ないしスロットに関わる概念である。発話連鎖の中の後続する位置にあるスロットは、進行中の活動を完成させたり促進するために、複数の参与者がともに満たすことができることがしばしばある。進行中の発話連鎖の中にこのようなスロットが構成されるとき、そこを実際に満たし始めたひとつの発話は、単に「話し手だけのもの」ではない。ある参与者は、開始された発話を「自分にも満たし得たスロットを満たしているもの」として聞くことで、そうでない参与者とは異なった仕方でそのターンに参加しうる。そのような参加の突出した方法が、ユニゾンなのである。

ここから、会話への参加の組織化という問題一般にとって、重要な二つの視点が導き出される。第一に、ターンの投射可能性とは、たんに聞き手がその形状や種類を認知的に予測可能になるということではない。投射という概念を予測という概念に等置することは誤りである。投射可能性は、そのターンの形状や種類だけに関わるのでなく、そのターンの進行とともに徐々に開示されていく参与者の参加レパートリーの布置全体に関わる概念と見るべきである。開始されたターンが次の瞬間にとりうる形状や種類が投射されるとき、それにいわば「ぶらさがる」形で、あるいはそれを「包み込む」形で、参与者たちが次の瞬間に行いうる参加レパートリーの布置が一緒に投射されるのである。

第二に、あるスロットが複数の参与者によってともに満たされうる性質は、それが発話連鎖のどこに位置づけられているかに応じて生まれてくる。この性質を利用して、進行中のターンにユニゾンすることは、そのターンへのひとつの参加の仕方であるとともに、そのターンが位置づけられた発話連鎖における自分の立場をそのターンの中で示すことである。ひとつのターンに参加することは、同時に、発話連鎖を通じて行われている活動における自分の立場を表示することである。続く２つの章では、この点をさらに掘り下げていくことになる。

５章　「そう」と「うん」: ターンスペースと行為スペースへの参加の再組織化

１　はじめに

ある学生が録音してきた会話テープを書き起こしているときに、面白い体験をしたことがある。その学生を含む３人の女性の会話だったが、３人はたまたま声がよく似ていた。書きおこしを始めてまもなく私は、どこからどこまでが一人の発話なのか分からない箇所がいくつもあることに気づいた。もし３人の会話だと聞いていなかったら、きっと何人が会話しているのかも分からなかっただろう。こんな状態では研究資料にならないので、後日、その学生に書き起こしたものを見せ、テープを一緒に聞きながらチェックしてもらった。案の定、私が意味的つながりや統語構造から推定した発話の区切りは、いくつもの箇所で間違っていた。しかし私が驚いたのは、間違いを指摘するときに学生が何の迷いもなく即座に行ったことである。まったく同じテープを聞いて自分に識別できないことを、目の前でいとも簡単に識別しているその学生を見て、不思議な生き物を見るような感覚に襲われたのを覚えている。

私が間違えていた箇所には、「先取り完了(pre-emptive completion)」と呼ばれる手続きもいくつか含まれていた。これもまた、「話し手」という概念の自明性に疑問を投げかける代表的な現象である。おおざっぱにいえば、これはひとつの文を二人で作るという現象である。これが声のよく似た二人の会話で行われたなら、声だけを聞く観察者にとって、どこで発話者が交替したのか知ることは不可能に近い。上に述べた体験は、実際の会話文脈から切り離された発話や文を素材として言語的コミュニケーションを研究することが、きわめて基本的なところで、会話のリアリティを掴まえ損ねる可能性を示唆している。

本章の分析は、この先取り完了という手続きに焦点を当てることから始まる。これについては会話分析において一定の研究蓄積があり、それらを概観することで、ユニゾンとは幾分異なる形で「複数の話し手がひとつの発話を産出する」と呼びうる現象が広範に生じていることが示される。しかし、本章の関心はこの手続きそのものにではなく、この手続きによって開始される発話連鎖（協働的ターン連鎖）の中で、参加の再組織化がどのような手続きを用いて行われるかという点に向かう。この関心のもとで、とくに「そう」と「うん」という日本語のパーティクルに焦点を当て、これらのパーティクルが協働的ターン連鎖の第三の位置で代替的な選択肢として用いられていること、それらは異なった仕方で二人の立場を再組織化するために利用されていることを明らかにする。

この作業のあと、これらのパーティクルの同様の働きがより広範な発話連鎖においても見られることを明らかにする。ひとつは、協働的ターン連鎖と別の種類の発話連鎖との「交差」の中でこれらのパーティクルが用いられる場合、もうひとつは複数のターンにわたって話し手という立場を拡張するために「通りすがりの受け手性表示」としてこれらのパーティクルが用いられる場合である。

こうして本章の分析は、一人が開始したターンにもう一人が参入する先取り完了から始まり、「そう」と「うん」というパーティクルの発話連鎖上の働きの解明を経由して、複数のターンにわたる話し手という立場が会話の中で取り扱われるやり方の一部を明らかにすることで終わる。

２　協働的ターン連鎖

ここで「協働的ターン連鎖(collaborative turn sequence)」と呼ぶ発話連鎖形式は、最初 Sacks が注目したのち（Sacks 1992)、Lerner を始めとする何人かの研究者が英語のデータに関して精力的に研究を進め、かなり精巧な記述が行われている（Lerner 1991, 1994, 1996, 1996a, 2004、Ferrara 1992、Antaki, Diaz & Collins 1996、Diaz, Antaki & Collins 1996)。また、林を始めとする何人かの研究者によって、日本語のデータに関しても一定の研究蓄積がある（Hayashi 1999, 2003、Lerner & Takagi 1999、串田 2002, 2002a、森本 2002)。本節ではまず、これらの先行研究の到達点を確認する意味を込めて、協働的ターン連鎖の基本的なパターンを私のデータを用いて概観する。この作業を行いながら同時に、先行研究においてまだ十分に光を当てられていない現象として、この連鎖において「そう」と「うん」というパーティクルが基本的パターンの第三の位置に繰り返し現れることに注目し、これらのパーティクルの働きについてひとつの記述を構成する。

２．１　先取り完了

前章で扱ったユニゾンの多くは、進行中のターンに統語的に連続する次の語句を、途中からもう一人が声を重ねて発する形で開始されていた。このような進行中のターンへの参入は、言葉を重ねる工夫なしにも行われうる。現在の話し手がそのターンを完了可能点に持っていく前に、それまで聞き手であった者が当該ターンの「可能な統語的続き」としてデザインされた発話を開始し、それを完了可能点まで持っていく「先取り完了(pre-emptive completion)」という手続きである[1]。

たとえば次の【抜粋１（８）：来る直前】において、ＡはＢの進行中のターンに間隙ができた機会を捉えて、「来る直前だもんね」（３行目）とその可能な統語的続きとしてデザインされた発話を開始し、それを完了可能な地点まで持っていっている。これによって、ＡはＢが開始したターン構成単位をＢに代って完了させている。

【抜粋１（８）：来る直前】

01 Ｂ：そうだって(.)あたしあれやったのさ:,
02　　(0.6)
→ 03 Ａ：来る直前だもんね.

また、もとの話し手が自らターンの完了部を発話しようとする場合には、次の【抜粋２（９）：トマト】のようにオーヴァーラップした先取り完了が生じる。このケースを見ると明らかなように、オーヴァーラップした先取り完了はユニゾンと連続した現象である。本稿では一応の区別として、言葉を重ね合わせる工夫が観察されるケースをユニゾンとし、そのような工夫が明確には見られない場合を、オーヴァーラップした先取り完了というより広いクラスの事例として扱う。

【抜粋２（９）：トマト】

01 Ｂ：〈結局〉このトマトほとんど,
02　　(0.4)((Ｂがトマトのお皿を人差し指で指す))
03 Ｂ：［食べたね.］
→ 04 Ａ：［食べちゃ］ったね:.

この手続きの基本的特徴として、Lerner は次の４点を指摘している（Lerner 2004: 226-229）。１）先取り完了は進行中のターンを構成するために用いられている統語的形式を踏襲して組み立てられる。２）それはそこまで産出されたターンに連続する（contiguous）ことを示す形にデザインされるとともに、この連続性を示すよう時間的に位置づけられる。すなわち、そこで話者交替が生じているにもかかわらず、それが新しいターンの始まりであることを示す要素（ターン冒頭の前置き要素や進行中のターン以外への接続を示す要素）は配置されない。３）それは進行中のターンを完了させるべく、しかも最初の完了可能点で完了させるべく行われる。つまり、それを契機として最初の完了可能点を越えた発話が産出されることはない。４）それは最初の話し手によって、自分が開始したターンの可能な完了の一例として扱われる。つまり、それは進行中のターンとは別の独立したターンとは聞かれない。

先取り完了もユニゾンと同様に、進行中のターンの投射可能性を利用して行われる手続きであるが、ユニゾンのように特定の語句が投射されなくても、可能な統語的続きが投射されれば可能である。Lerner は、先取り完了を可能にするターン構成上のリソースとして、大きく２つのものを指摘している（Lerner 1996a）。第一は、「投射可能な」契機と総称されるターンの形式的特徴である。その代表は「複合的ターン構成単位（compound turn construction unit）」と呼ばれるターン構成単位の一類型であり、「if X, then Y」「because X, Y」のような２つの統語成分からなるものである。このタイプのターン構成単位は、前半の成分が発話された時点で、後半の成分をもってそのターンが完了可能になることが投射されうる。また、Lerner は同様の投射可能性をもたらすターン形式として「X said Y」のような引用形式、挿入を含むターン形式、リスト形式（Jefferson 1990）なども先取り完了のリソースになると指摘している。さらに、多くのターンにおいて、ターンの最後のアイテムは高い統語的な投射可能性を有し、先取り完了のリソースになることも指摘している。

第二は、「投射されない」契機と総称されるターン産出上の諸特徴で、ターンの「進行性（progressivity）」がさまざまな形で滞ることをさす。Lerner はターンの進行性として二種類を区別している。ひとつは時間的進行性であり、言葉が一定のリズムで切れ目なく完了可能点まで進むことを意味する。ターンの途中で笑いを挟んだり、音を引き延ばしたり、間隙を入れたりする場合、時間的進行性に滞りが生じる。もうひとつは統語的進行性であり、ひとつひとつの語が統語的連続性を保ちながら完了可能点に向けて進むことを意味する。ターンの途中で同じ語句を繰り返したり、いいかけた言葉を中断して訂正するような場合、統語的進行性に滞りが生じる。これらの進行性の滞りが生じた場合、そのターンを完了可能点まで持っていくことは会話者たちの共通の関心事となりうる。これゆえに、進行性の滞りは先取り完了の機会となりうる。

林は、Lerner のこの整理を踏まえつつ、日本語の先取り完了に固有の特徴として、先取り完了の「遅れ」という特徴を指摘した（Hayashi 1999, 2003）。林によれば、英語では先取り完了がまったく間隙なしに開始される場合がたくさんあるのに対し、日本語では【抜粋１（８）：来る直前】や【抜粋２（９）：トマト】のように、一定の間隙後に開始されることがほとんどである。林はこの特徴を、日本語の遅れた投射可能性によるものと解釈する。たとえば、日本語において複合的ターン構成単位を構成する「～たら」「～から」「～けど」のような接続助詞は、英語とは異なり従属節に後置される。それゆえ聞き手は、従属節の最後まで聞いて始めて、複合的ターン構成単位が進行中であることを知ることができる。それだけでなく、これらの接続助詞はそのあとに主節を続けるために用いられる場合もあれば、それ自体がターンの完了可能点に用いられる場合もある。どちらであるのかを知るため

に、聞き手は話し手が主節を開始するかどうかをまずモニターしなければならないことがある。これらの統語的特性により、日本語話者は間隙をおかずに先取り完了を行うことがより困難になっているという。

これらの先行研究が明らかにしているのは、「一人が最低一つのターン構成単位を完成させる」というターンテイキング組織の要請には反する先取り完了が、それにもかかわらず、ターンの投射可能性を利用して可能となっていることである。ここでもふたたび、ターンテイキング組織が、直接の記述対象とした現象以外のところでも、有効な出発点になることを確認できる。また、Lerner による進行性の滞りへの注目は、先取り完了を行うために参照できる権限がユニゾンを行う権限よりも広範な仕方で構成される事情を明らかにしている。開始されたターンを完了可能点まで持っていくことへの関心は、同じ会話に参加し、ひとつのターンテイキング組織を参照してふるまっているということだけから生じうる。進行性が滞った発話を完了する権限は、ターンテイキング組織そのものによって与えられると考えられる。さらに、林の研究は、日本語の言語的リソースの特性が、英語話者とは若干異なる仕方で参加が組織化される余地を作り出していることを明らかにしている。このように、先取り完了という手続きはいくつもの重要な点で、３章・４章の基本的論点を裏付けるものである。

２．２　協働的ターン連鎖の第三の位置の「そう」と「うん」

Lerner によれば、先取り完了は、完了を行った話し手がもとの話し手を次話者として選択する手続きの一種である。それは、一般に次話者選択の装置として利用される隣接ペアの第一部分ではないが、もとの話し手が開始したターン構成単位を完了させるという固有性ゆえに、その完了部がもとの話し手に向けられている限り、もとの話し手がその完了発話を承認したり拒否したりすることを適切なものとする。こうして、先取り完了はひとつの「ターンスペース」（Lerner 2004: 231）の内部において、発話連鎖を開始する手続きとなる。

ところが、Lerner も指摘するように、実際には先取り完了が拒否されることはほとんどない。先取り完了が承認されない場合には、それは拒否されるのでなく後にみるように「遅れた完了（delayed completion）」という手続きによって連鎖上消去される。このことにはあとで立ち戻るとして、ここではまず先取り完了が承認される場合の発話連鎖に焦点を当てる。

日本語では、先取り完了を承認するためにしばしば「そう」と「うん」という二種類のパーティクルが用いられる。英語において同様のパーティクルの使い分けがあるのかどうかは明らかでないが、Lerner を始め英語の先取り完了の研究においてはそのような指摘は見られない。日本語の場合、この二種類のパーティクルの使い分けはたいへん秩序だったものであり、協働的ターン連鎖における参加の再組織化において重要な働きを持つと考えられる。

この使い分けのひとつの例を見るために、先の【抜粋１（８）：来る直前】と【抜粋２（９）：トマト】に第三スロットの発話を補ったものをそれぞれ【抜粋３（８）：来る直前】【抜粋４（９）：トマト】として再掲する。

【抜粋３（８）：来る直前（【抜粋１】の再掲）】

01 Ｂ：そうだって(.)あたしあれやったのさ:,
02　　(0.6)
03 Ａ：来る直前だもんね.
→ 04 Ｂ：そうそうそう.

【抜粋４（９）：トマト（【抜粋２】の再掲）】

01 Ｂ：〈結局〉このトマトほとんど,

02　　(0.4)((Ｂがトマトのお皿を人差し指で指す))

03 Ｂ：［食べたね.］

04 Ａ：［食べちゃ］ったね［:.

→ 05Ｂ：　　［うん.

【抜粋３（８）：来る直前】のように、もとの話し手が自らターンを完了させることなく、先取り完了がクリアーな状態で行われる（３行目）場合には、それを承認するのに第三のスロットで「そう」が用いられる（４行目）傾向がある。【抜粋４（９）：トマト】のように、もとの話し手が自らターンを完了させている（３行目）場合には、それを承認するのに第三のスロットで「うん」が用いられる（５行目）傾向がある[(2)]。

この傾向が持つ意味をさらに考えるために、もういくつかのケースを見てみたい。次の【抜粋５（７）：理想の女性像】では、もとの話し手Ｂが自らターンを完了させようとしているが、すぐには適当な言葉が見つからずに言葉探し（「なんか(.)゜n-゜」）をしている。そのあいだに、Ａは「やっぱり(.)思い描いてる」（３行目）と先取り完了を始めており、Ｂはここまで聞いて「そう」を用いて承認している。

【抜粋５（７）：理想の女性像】

01 Ｂ：お-(.)男の人やから女性であろうとしたら:(0.4)理想の女性像(.)を:,

02　　(.)

03 Ａ：.hhhh［やっぱり(.)思い描いてる［と思うわ頭ん中で.］

→ 04 Ｂ：　　［なんか(.)゜n-゜　　［そ:そ:そ そ そ　］＝

次の【抜粋６７）：歩いてゆくのね】では、もとの話し手Ｃが発話している最中に、Ａが持っていたピザから溶けたチーズが垂れるというハプニングが生じる。３人の参与者は一時的にこのハプニングに関心を向け、Ｃ自身も「なんにもなかったかのように」（１行目）までいったあとで「んふふっ」（5 行目）と笑ってしまう。これとオーヴァーラップして、Ａが笑いながら「ど::しよ」（４行目）と垂れたチーズに言及することで、Ｃが開始したターンは完了されないまま立ち消えになる可能性に直面している。このような連鎖環境のもとで、Ｂが「歩いてゆくのね」（６行目）と先取り完了した発話をＣは「そう」で承認している。

【抜粋６（７）：歩いてゆくのね】

((Ｃはさきほどから、自分が気に入っている音楽のビデオクリップの筋を説明している。この抜粋の直前まで来たとき、Ａが手に持っていたピザから溶けたチーズが垂れる。))

01 Ｃ：ふんで:その子が(0.2)［なんにもな　　］かった［かのように,］

02 Ｂ：　　［(だめ:)きたない.］

03 Ａ：　　［.hhh はは　　］はっ→

04　　→［.hhh ど(h):(h):しよ(h).

05 Ｃ：　［んふふっ
06 Ｂ：歩いていくのね.
→　07 Ｃ：そ:うそう.

以上から、先取り完了を承認するのに「そう」が用いられるケースの共通点として、次のことを指摘できる。これらのケースでは、もとの話し手が自らターンを完了させ始めていないか、あるいは完了させるうえで何らかの困難に直面している。その結果として、もとの話し手は十分な形で自分が開始したターンを完了させておらず、先取り完了はもとの話し手に代ってターンを完了させたものと扱われうる。もとの話し手は、そのターンを通じて行おうとした行為がすでに実現されたことを相手の先取り完了から知ったときに、「そう」を用いている。つまり、「そう」によってもとの話し手は、自分の開始した行為の実現が促進されたことを認定しているのである。

これに対し、先取り完了を承認するのに「うん」が用いられるのは、先の【抜粋４（９）：トマト】のようにもとの話し手が自らターンを完了させている場合のほかに、次のような場合である。

【抜粋７（７）：ピザ屋さん】
((Ｃが部屋にいないあいだに宅配ピザ屋から電話があったということを、１行目でＡがＣに説明し始める。))
01 Ａ：あっ(.)あれからまたね:,
02 Ｃ：うん.
03　(0.4)
04 Ａ：電話あって:,
05 Ｃ：うん.
06　(0.4)
07 Ｂ：そ:なの. ＝
08 Ａ：＝ふんで:,
09　(0.9)
10 Ａ：〈なんか〉(0.3) ど-どうし-(.)どうしよ(.)どうしよっ(h)と(h)か(h)ゆっててん.
11　(0.5)
12 Ａ：あでもピザ-(.)ピザ屋さんかな:とかいっ［て:,
13 Ｃ：　［うん.
14 Ｂ：出たん［だよ↑ね.］
→　15 Ａ：　［やっぱ　］ピ-(.)うん.

【抜粋７（７）：ピザ屋さん】では、Ｂが「出たんだよね」（14 行目）という先取り完了を開始してすぐ、もとの話し手Ａ自身も「やっぱピ-」（15 行目）と完了を試みて中断している。ここで話題になっているのは、宅配ピザを注文したあとで電話があり、ピザ屋からの電話かと思って出たらやはりそうであったということである。このケースは、Ａ自身が十分な形でターンを完了させていない点で上に見た「そう」受けのケース群と似ているが、二つの点で、Ａにとって自分の開始した行為が促進されたと観察可能ではない。第一に、Ａのターン（12 行目）は、電話がかかってきたとき部屋にいなかったＣに向けて開始されており、部屋にいたＢは、Ａとともにそれを Ｃに説明できる立場にあ

る。Ｂの先取り完了はＡに向けてデザインされているので、ひとつの「チーム」内部でチームメイトに確認を求める発話になっている。それはＡの開始したＣへの説明が、Ｃによってすでに理解されたことを意味しない。第二に、Ａはここで言葉探しをしているのではなく、発話を中断している。Ａは自らのターンを完了させる言葉を選ぶのに困難を示してはいない。そして、Ｂの先取り完了（「出たんだよね」）は、Ａが行いかけて中断した完了部（「やっぱピ-」）とは異なるものとして観察可能である。だから、Ａにはここで、Ｂの先取り完了を自分に代ってターンを完了させたものとして見ない理由がある。

また、言葉探しが行われたあとで「うん」が用いられる場合もある。

【抜粋８（13）：ハチ】

((ある学童保育所が主催したキャンプにおいて、ハイキングに出かけた児童のうち２人が蜂に刺されたという知らせが、本部テントにいた指導員Ａの携帯電話に届く。Ａの指示を受けてボランティアのＪが様子を見に行き、しばらくして戻ってきて、分かったことをＡに知らせている。))

01 Ａ：で(.)本人はなんか大きい:やつやゆうてるらしいけど.
02 Ｊ：ん::んその:(.)<状況>的にやっぱ(h)り(h).hh はっきりせえへんねん.
03 (0.8)
04 Ｊ：[あたまの [方-
05 Ａ：[近く- [近くに指導員おれへんかったん.
06 (1.8)
07 Ｊ：まっ(.)佐藤君がおってん.((佐藤くんはハイキングを引率したボランティアの一人))
08 Ａ：は [:さと-
09 Ｊ： [佐藤君の班やねんけど:,
10 (0.7)
11 Ｊ：あの:::::(0.3)そのっ-
12 Ａ：足 [元やからわからへん [のか.
→ 13 Ｊ： [あれっ- [ん:. かもしれんな.
14 (1.3)
15 Ｊ：そのほんで-(0.7)足刺された子は黒いジャージや.

【抜粋８（13）：ハチ】では、ターンを開始したもとの話し手Ｊが（９行目）、その途上で言葉探しをしている（11, 13 行目）点で【抜粋５（７）：理想の女性像】とよく似ている。しかしここで、ＪはＡによる「足元やからわからへん」（12 行目）という先取り完了を、まず下降調の「ん:」で受け[3]、すぐ続いて「かもしれんな」と付け加えている（13 行目）。Ｊは、Ａが先取り完了を用いて行った推測に関して、それに対する認識的権威性(epistemic authority)を主張しないかたちで弱く肯定している。自分がＡの推測を明確に肯定（あるいは否定）するだけの情報を持たないことを示している点で、Ｊの反応は推測というＡの行為において仮定されている自分の知識状態を否定している。この意味において、ここで先取り完了は全面的に承認されてはいない。

そこで、先取り完了を受けるのに「うん」が用いられるケースの特徴として、１）もとの話し手が自らターンを完了させているとき、２）もとの話し手が相手の先取り完了とは異なる仕方でターンを完了させ始めているがゆえに、先取り完了を自分に代ってなされたものと認識可能でないとき、３）

もとの話し手が先取り完了を全面的には承認しないとき、という３種類のものが観察される。要するに、これらのケースにおいては、もとの話し手が開始した行為の実現が先取り完了によって促進されてはいない。

以上見てきたケースでは、下記のように、協働的ターン連鎖の第三スロットにおいて、先取り完了に応じるために「そう」と「うん」が用いられていた。

１Ｘ：ターン構成単位の途中まで
２Ｙ：先取り完了
３Ｘ：そう／うん

以上の検討から、この位置における「そう」と「うん」の用法について次の仮説を提出する。

（1）「そう」は、相手の先取り完了が自分の開始したターンを自分に代って完了したことを承認し、そのターンで開始した行為の実現が促進されたことを認定するために利用できる。

（2）「うん」は、相手の先取り完了を自分の開始したターンのひとつの可能な完了として聞き留めるために利用できる。それは、自分がそのターンで開始した行為の実現が促進されたとは見なされないさまざまな場合に用いられうるため、「そう」よりも多様な用途を持つ。

２．３　遅れた完了

今見たように、日本語の協働的ターン連鎖において「うん」が第三スロットで用いられるとき、それは先取り完了が「そう」のように強い形で認定されているのではなく、むしろ先取り完了をひとつの可能な完了として聞き留める手続きであると考えられる。それゆえ「うん」は、先の【抜粋８（13）：ハチ】に見るように、内容的には先取り完了を承認しない場合にも、その前置きとして用いることができる。先に、先取り完了が拒否されることはきわめてまれであると述べたが、「うん」は明示的に拒否することなしに全面的には承認しない反応を行うために利用できる。

さて、先取り完了を明示的に拒否することなしに事実上拒否するやり方については、Lerner も十分な注意を払っている。それは「遅れた完了」という手続きであり、これは日本語話者の会話においても頻繁に観察される。その一例が、次の【抜粋９（１）：時給】に見られる。

【抜粋９（１）：時給】
((デパートでのアルバイトのことが話題になっている。))

01 Ｈ：時給 いくらぐらいするんです:？そごうで．((「そごう」はデパートの名前))
02　(0.3)
03 Ｃ：ろっぴゃく:::::(0.3)>いくらぐらいかな<５０円なん゜(ぼぐらいやと思う)゜．＝
04 Ａ：＝ふ:ん．＝
05 Ｃ：＝いちんち::で:５０００円ぐらいよ［↑ね:．((Ｇに向けて))
06 Ｅ：　　［うん．＝
07 Ｇ：＝［４８００円．
08 Ｅ：＝［ケーター通してやったら::,((「ケーター」は人材派遣会社の通称))

09　　(.)
10 Ｂ：もうちょっ［と高［い.
11 Ａ：　　［もっ［と高い.
→ 12 Ｅ：　　［時給８００円［ぐらい.
13 Ａ：　　［８００円ぐらいんなる.

Ｅが「ケーター通してやったら::」（８行目）と開始したターンを、ＢとＡが相次いで「もうちょっと高い」「もっと高い」と先取り完了している（10-11 行目）。Ｅは「そう」「うん」いずれの承認手続きも用いず、代わりにＢの先取り完了が完了可能点に来ると、第三スロットにおいて「時給８００円ぐらい」（12 行目）と自ら遅れてターンを完了させている。Lerner によれば、この手続きは、１）先取り完了をまたいで（skip-tying）自分が開始したターンを完了させる方法であり、２）先取り完了発話が自分のターンへの「介入」であったことを示し、３）先取り完了が完了可能点を迎える前にオーヴァーラップして開始されることが可能であり、４）先取り完了発話が後続する会話の展開にもたらす連鎖上の含みを消去しうる（Lerner 2004: 237）という特徴を持つ。

遅れた完了は、【抜粋９（１）：時給】のように、先取り完了とは異なる形式の完了部分を用いて行われる場合だけではない。次の【抜粋 10（５）：フランクバーガー】では、先取り完了で用いられた言葉を「埋め込んで反復（embedded repetition）」する形で遅れた完了が行われている。

【抜粋 10（５）：フランクバーガー】
08 Ｃ：フランクバーガー(.)ってさ:,　＝
09 Ｂ：＝朝ご飯に食べる［やつ.
→ 10 Ｃ：　　［朝ご飯のやつや(h)ん［な(h):.

Lerner（2004）は、このような場合にも、遅れた完了は先取り完了を事実上拒否する方法になっていると述べる。先取り完了を拒否するために利用可能なリソースは、遅れた完了の形式（composition）だけではなく、その位置（position）をも含むからである。この見方を【抜粋 10（５）：フランクバーガー】に適用するなら、ＣはＢの用いた「朝ご飯」という言葉を自分の完了部に埋め込んで反復しつつも、Ｂの発話がまだ完了していない時点（「食べる」の時点）でいち早くこれを追いかけて発話を開始することにより、その早い位置取りをリソースとして事実上の拒否を行っているということになる。

しかし、この議論は、相手の用いた言葉を埋め込んで完了するときに、それを拒否として認識可能にするために別のリソース（位置）が利用可能だということを指摘しているだけである。そこでは、遅れた完了に相手の言葉を埋め込むという手続き自体が何をしているのかは、明らかにされていない。また、遅れた完了が用いられるケースにおいては、「そう」や「うん」が用いられているケースのように明示的に相手の発話が受けられてはいないので、この違いを無視して承認／拒否という二分法に当てはめるだけでは不十分である。むしろ、遅れた完了が埋め込まれた反復を用いて行われるときには、相手が自分に代ってターンを完了させたとは見なさないものの、そこで用いられた言葉の選択が適切であることは示されている。

それゆえ、協働的ターン連鎖の第三スロットにおいて行われる承認／拒否は、２つの側面にまたがっている。ひとつは、先取り完了がそのターンの完了としての地位を有することの承認／拒否であり、もうひとつは先取り完了で用いられた言葉の選択が、そのターンの統語的続きとして適切であること

の承認／拒否である。「そう」で受けることは、この両方の側面に関して承認する手続きだといえる。逆に、異なる形式の遅れた完了を行うことは、両方の側面に関して拒否する手続きだといえる。これに対し、埋め込まれた反復を伴う遅れた完了は、言葉の選択を承認しつつターンの完了としての地位を拒否する手続きである。それは、「相手の先取り完了は内容的には自分のいおうとしていたことだが、自分はそれをいうのに困難を抱えていたわけではない」ことを示す方法である。これらに対し、同じスロットで「うん」を用いることは、二つの側面に関する承認／拒否の区別を明確にすることなしに、先取り完了をさしあたりひとつの可能な完了として聞き留めることだと考えられる。このため、「うん」は、【抜粋８（13）：ハチ】に見たように、しばしば、自分でもう一度完了をやり直すための前置きとしても利用可能になる（この点については、後にもう少し詳しく取り上げる）。これら、協働的ターン連鎖の第三スロットで用いられる一連の手続きを整理すると次のようになる。

	言葉の選択の承認	言葉の選択を承認せず
開始したターンの代理完了として承認	A：「そう」受け（抜粋３，５，６）	
ひとつの可能な完了として聞き留め	B：「うん」受け（抜粋４，７，８）	
開始したターンの完了として承認せず	C：反復を埋め込んだ遅れた完了（抜粋 10）	D：異なる形式の遅れた完了（抜粋９）

一人が開始したターンをもう一人が完了させ始めるときには、そのターンスペースへの参加をめぐって、交渉の余地が生じる。いい換えると、先取り完了を開始した者がそのターンに対してどのような立場を占めるのかについて、交渉の余地が生じる。日本語話者は、この交渉において互いの参加を再組織化するために、これらの手続きを秩序だった仕方で使い分けていると考えられる。この整理から導き出されるひとつの一般的論点は、発話連鎖上の同じスロットで参加の組織化に利用可能な選択肢の中には、「そう」や「うん」のように語彙化されたリソースもあれば[(4)]、二種類の遅れた完了のように発話の位置取りや相手発話との関係というリソースもあるということである。後者のリソースは、どの言語の話者にも同じように利用可能である。これに対し、前者のリソースは、言語によって利用可能性が異なってくる。したがって、日本語話者が「そう」と「うん」を使い分けることで行っている参加の再組織化は、別の言語では語彙化されていないリソース（たとえば韻律）によって行われているかもしれない。

３　協働的ターン連鎖と他の発話連鎖との交差によって組織された「そう」と「うん」

３．１　ターンスペースへの権限と発話連鎖上のスロットへの権限

協働的ターン連鎖の中では、以上とは異なる位置で「そう」や「うん」が用いられることもある。

以上の記述に照らせば、これらのケースは変則的な事例ということになる。しかしながら、これらの「そう」や「うん」は、協働的ターン連鎖そのものによって組織されているのではない。実際の会話の中では、しばしばひとつの連鎖組織が別の連鎖組織と交差し、一方の連鎖組織によって組織されるふるまいがもう一方の連鎖組織の内部に現れることがある。協働的ターン連鎖の中で、第三スロット以外の場所で用いられる「そう」と「うん」の記述に際しては、このような連鎖組織の交差という視点が必要である。

このことを論じるためには、まず、先取り完了がもとの話し手を次話者として選ぶ手続きであるという意味を掘り下げておく必要がある。先取り完了は、一般的に次話者選択手続きとして用いられる隣接ペアの第一部分ではないのに、どうしてもとの話し手を次話者として選ぶものと聞かれうるのだろうか。２章で述べたように、ターンテイキング組織はひとたびターンを開始した者に「少なくともひとつのターン構成単位を発する」ことへの権限を割り当てる。この議論を踏まえて Lerner は、この権限が先取り完了においても緩められた形で適用されると指摘する（Lerner 2004: 229-231）。すなわち、先取り完了が行われる場合、もとの話し手がひとつのターン構成単位を完了する前に話者交替が生じるが、この話者交替はもとの話し手の管轄下にあるものとして指向され、もとの話し手が開始したターンスペース内部の出来事として理解されるのである。このことは、次の【抜粋 11（３）：缶入りお粥】を見るとよく分かる。

【抜粋 11（３）：缶入りお粥】
((３人の学生が大学の研究室で会話している。キャンパス内の自動販売機で売っている「缶入りお粥」のことをＣがＡにひとしきり説明したあとで、ＡはＣのいわんとすることを確認する発話を１行目で行う。))

01 Ａ：でそれをわたしは好きだと.
02 （0.9）
03 Ｃ：好きじゃないけどま:,
04 （0.3）
05 Ｂ：うん.
06 （0.2）
07 Ｂ：回りがゆうほどきらいじゃない.（(Ａの方を向いて)))
08 Ｃ：きらいじゃ［ない゜と゜.
→ 09 Ａ：　　［ふ::::ん.

【抜粋 11（３）：缶入りお粥】では、Ｃのいわんとすることについて Ａが自分の理解を示し、その確認をＣに求めている（1 行目）。これに「好きじゃないけどま:」（3 行目）と答え始めたＣがいいよどむと、話題となっている「缶入りお粥」のことを知っているＢは、「うん」といってから「回りがゆうほどきらいじゃない」（7 行目）とＡの方を向いて先取り完了している。つまり、ＢはここでＣを代弁することを試みている。しかし、Ａはここで反応を返さず、Ｃ自身の遅れた完了（８行目）が完了可能点に近づいたところで「ふ::::ん」（9 行目）と反応している。Ａは、自分の方に視線を向けて発せられたＢの発話にすぐに反応を返さず、それへの対応（言葉の選択の承認＋完了としての拒否）をＣが行ってから反応を返している。このことは、ＡがＢの発話に関して、それはＣのターンスペースの内部にあってＣの管轄下にあると理解していることを示している。

つまり、ひとたびターンを開始した者は、最低一つのターン構成単位が完成させられるまで、仮に話者交替が生じたとしても、そのターンスペースへの権限を保有すると見なされうる。この権限に指向することで、先取り完了は、もとの話し手による承認ないし拒否という反応がまずなされるべきものとして聞かれうる。これゆえに、先取り完了は、もとの話し手を次話者として選択する手続きになると考えられる。

ところで、【抜粋 11（３）：缶入りお粥】においては、もうひとつ別種の権限にも会話者たちが指向していると考えられる。冒頭のＡの発話は、Ｃが「缶入りお粥」について説明している発話連鎖の中で生じており、Ａがここで確認を求めているのは、Ｃが「缶入りお粥」についての説明を始めた理由である。つまり、Ａによる確認の求めは、この説明を開始した者という資格を持つＣに向けられている。この資格において、ＣはＡの理解に確認を与える権限を有している。だから、３行目でＣが開始し８行目で自ら完了させたターンは、Ｃによって満たされるべき発話連鎖上のスロットに位置づけられている。このように、【抜粋 11（３）：缶入りお粥】の場合、ターンスペースへの権限と発話連鎖上のスロットへの権限は、ともにＣに割り当てられている。しかし、これがずれる場合もある。

３．２　先取り完了のやり直しに先立つ「そう」と「うん」

このことを見るために、協働的ターン連鎖の第三の位置とは別の位置で「そう」と「うん」が用いられているケースに話を移そう。それには２つの位置がある。まずここで最初に取り上げるのは、先取り完了と同時にもとの話し手自身が発話を続けたため、先取り完了が中断され、もとの話し手の生き延びた発話を「そう」または「うん」で受けてから、先取り完了がやり直されるというものである。図示すると次のようになる。

１　Ｘ：ターン構成単位の途中まで＋［自分で続ける→→→→→→生き延びる
２　Ｙ：　　［先取り完了→中断
２’Ｙ：そう／うん＋先取り完了のやり直し

【抜粋 12（７）：イギリスロック】
((Ｂは自分が友人と好みの音楽について話した内容を、ＡとＣに紹介している。))

01 Ｂ：あたしはブリティッシュが好きなの:::ってゆって.
02　(1.8)
03 Ｂ：でもいちばん好きなのはスウェーデン゜(やけど)゜.
04　(0.2)
05 Ｃ：゜ふっふっ゜
06　(.)
07 Ａ：ふ::ん
08　(.)
09 Ａ：えっんじゃあイギリ-(0.4)どっちかっていえば［イギリス↑の］:::,
10 Ｂ：　　［イギリスロッ-］
→ 11 Ｂ：うん．>ロック(の方)が<好き．＝
12 Ａ：＝うん．あ:あへ:え.

【抜粋 12（7）：イギリスロック】では、Aが「えっんじゃあ」と開始したターン（9行目）を先取り完了し始めたBが、「イギリスロッ-」とそれを中断している（10 行目）。このとき、A自身もオーヴァーラップして内容的にはほぼ同じ「イギリスの」という言葉で自分のターンを続け、「の」の音が引き延ばされることでAの方がこのオーヴァーラップを生き延びる（9行目）。Bはこれをすぐ「うん」と受けてから、「ロック(の方)が好き」と中断した先取り完了をやり直している（11行目）。

さて、ここでBがAの生き延びた発話を受けるのに用いている「うん」（11 行目）は、前節で見た「自分の開始したターンのひとつの可能な完了として聞き留める」という用法とは異なる。ここでターンを開始したのはAの方だからである。このターンスペースだけに注目する限り、その完了を承認する権限を持つのはAである。

しかし、このターンが位置づけられている発話連鎖に注目するとき、Bの「うん」は先の仮説の延長上で記述できることが分かる。この抜粋では、Bが自分の好みの音楽について「あたしはブリティッシュが好きなの」と友人に話したことが報告され（1 行目）たあと、それへの補足として「一番好きなのはスウェーデン」だとさらに自分の音楽の好みを告げている（3行目）。Aが「えっんじゃあ」と開始したターンは、このBの告知への自分の理解をチェックするものである。それゆえ、ここでAが行おうとしていることは、Bの側からも別の形で行われることができる。それは、4章の「相互的ユニゾン」のケースに見たのと同様、Bが満たすことも可能な性質を備えた発話連鎖上のスロットである。

つまり、Bの開始した活動（自分の音楽の好みをAに告知するという活動）は、その進行に滞りを見せた（Aが理解のチェックを開始する必要があったという意味で）うえで、今、Aの開始したターンにおいて完成されようとしている。この意味で、Bの置かれた立場は自分の開始したターンが先取り完了される者の立場と共通性がある。ここでBは、自分のターンを先取り完了された者がそれを承認するときに用いる手続きと、同じ手続きを用いることができても不思議ではない。では、Bは「そう」を用いるべきか「うん」を用いるべきか。Aが「どっちかっていえば」と2つの候補のうちからひとつを選ぶ形で自分のターンをデザインしたのを受けて、BはAとオーヴァーラップして自ら「イギリス」という言葉を発している。Bは2つの候補からひとつを選ぶことをすでに済ませている。この点で、BにはAの生き延びた「イギリスの:::」という発話が、自分が行おうとしたこと（ひとつを選ぶ）を代わりに行ったと見なす理由はない。Bはこれを「うん」と聞き留めるだけで十分であり、続いて先取り完了をやり直すことで、Aの理解を承認している。

要するに、Bが開始した自分の音楽の好みを告知する発話連鎖において、Bの「うん」は下図のように第三スロットで用いられている。この「うん」は「告知ー聞き届け」と呼びうるような連鎖組織によって組織されており、先取り完了の第三スロットの「うん」と同じ用法が、別の連鎖組織の第三スロットにおいて行われたことが分かる。

１Ｂ：自分の音楽の好みの告知（＝活動を開始する発話）
２Ａ：理解のチェック（＝活動を完成させうる発話）
３Ｂ：うん

他方、このやりとりはAのターンスペース内で生じたことである。この観点からは、Aは、Bによるやり直された先取り完了(11 行目)を、自分の開始したターンの完了として承認ないし拒否することができる。そして、A自身が「イギリスの」というほぼ同じ発話を産出しているため、Aの側から

見ても、Ｂのやり直された先取り完了は自分に代ってターンを完了させたものではない。Ｂが「ロックの方が好き」（11 行目）と自らの音楽の好みを述べた発話を聞いて、Ａが「うん」（12 行目）と承認することは、それだけを考えれば奇妙である。だが、この「うん」は、ＡがＢの先取り完了を自分のターンのひとつの可能な完了として聞き留めていると考えれば、まさに前節で見てきたものの一例であることが分かる。

このケースで興味深いのは、進行中の「告知－聞き届け」の発話連鎖への協働的ターン連鎖の挿入という２つの連鎖組織の交差構造に、参与者が実際に指向していることが、Ａの最後の「うん、あ:あ、へ:え」（12 行目）というパーティクルの連続使用において示されていることである。Ａはまず「うん」と受けることで、自分の開始したターンスペースのひとつの可能な完了をＢが行ったことを承認している。次に「あ:あ」と受けることで、そのターンを通じて行おうとした理解のチェックが終了したこと（＝自分が理解に達したこと）を主張している。最後に「へ:え」と受けることで、自分がＢの告知した内容を聞き届けたことを主張している。こうしてここでは、[[[このターン構成単位を完成させる］ことを通じてＡが理解に達する］ことを通じてＡが告知内容を聞き届ける］という行為の三重構造への指向が示されている。

```
Bの「音楽の好みについての告知」                    ────┐
Aの「理解チェック」                                ──┐ │  ┐ここが
Bの「先取り完了」＝「理解チェックの確認」          ┐ │ │  │協働的
Aの「先取り完了の承認」              ：うん        ┘ │ │  ┘ターン連鎖
Aの「理解に達したこと」の主張        ：あ:あ       ──┘ │
Aの「告知の聞き届け」                ：へ:え       ────┘
```

今度は、同じ位置で「そう」が用いられているケースを検討しよう。

【抜粋 13（９）：えんどう豆】

((親族６人の食事場面。Ｂ＝Ｊ夫妻の家に、Ｔ＝Ｋ夫妻とその子どもＹ、および遠方からの来客Ｈが訪ねてきている。この抜粋のまえに、２歳の幼児であるＹが、以前にこの家に来たとき「豆ごはん」を食べたことを記憶していることが分かり、それが話題になっている。))

01 Ｂ：[あ:っはっは
02 Ｈ：[涼くんすごいね::お豆食べたの:.（(Ｙの方にかがみ込んで))
03　　(.)
04 Ｈ：ここで:.（(Ｙの方にかがみ込んで))
05 Ｙ：[おまめ.
06 Ｔ：[おいしかったね:.（(「ね」の波線下線は高く丸みを帯びた声質を示す))
07 Ｈ：(そ［う)だったの:？((Ｙの方にかがみ込んで))
08 Ｊ：　　[そうだね:.
09 Ｔ：じゃ［こも食べたね:. →
10 Ｙ：　　[まめ.
11 Ｔ：→［か-
12 Ｈ：　　[あ:ら:.（(Ｙの方にかがみ込んで))＝

13 Ｊ：＝ちょうどえんどう->えんど豆<のね:［出始めで　　］ね:. ＝
→ 14 Ｔ：　　［うん゜きせ-゜］
15 Ｔ：＝゜そうそうそう゜［いちばんおいしいときやったね::.
16 Ｊ：　　［うん.
17 Ｙ：まめ.

【抜粋 13（９）：えんどう豆】では、Ｊの「ちょうどえんどう-えんどう豆のね:」という発話（13 行目）を聞いて、Ｔはまず「うん」と受け（この「うん」については後述）てから、「きせ」と先取り完了を開始して（これは「きせつ」といおうとしたと考えられる）すぐ中断している（14 行目）。これとオーヴァーラップして、Ｊは「出始めでね:」（13 行目）と自ら続きを完了可能な点まで発話し、これがわずかにオーヴァーラップを生き延びている。ここまでの経緯は、【抜粋 12（７）：イギリスロック】と酷似している。しかし、ここでＴはまず、生き延びたＪの発話を「そう」で受けている。次いで、Ｔは中断した先取り完了をやり直しているが、そのままやり直すのではなく、中断した言葉（＝「季節」）を別の言葉（＝「一番おいしいとき」）に置き換えている（15 行目）。

【抜粋 12（７）：イギリスロック】の場合と同様、Ｔによる「そう」の使用は、「自分の開始したターンを相手が自分に代って完了したものとして認定する」という前節で見た用法とは異なっている。ここでターンを開始したのはＪだからである。このターンスペースだけに注目する限り、それに権限を持つのはＪである。実際、Ｔが「そうそうそう」というのを聞いてＪが「うん」と受けている（16 行目）のは、前節で見た協働的ターン連鎖の第三スロットにおける「うん」の、ひとつのヴァリエーションだと考えられる。Ｔは先取り完了を中断しているため、14 行目の時点でＴはまだ、Ｊが開始したターンのひとつの可能な完了と見なしうるふるまいは行っていない。だが、中断したＴがただちに「そうそうそう」と述べるとき、Ｊは、Ｔが先取り完了によってやりかけ、中断したことを、別の形で最後まで行ったと見ることができる。「そうそうそう」はそこまでで完了可能だからである。そこで、この時点でＪは、Ｔがひとつの可能な完了を行ったものと見なし、「うん」によってそれを聞き留めることができる。

これに対し、Ｔが用いた「うん」（14 行目）と「そう」（15 行目）は、このターンが位置づけられたより大きな発話連鎖の中で組織されていると考えられる。この抜粋の少し前で、２歳の幼児Ｙが以前にこの家をおとずれたときに「豆ごはん」を食べたのを覚えていることがわかり、そのことが先ほどから話題になっている。この「豆ごはん」の一件を知らないのはＨだけであり、ここではみながＨに向けてそのときのことを思い出して語るという活動が進行している。Ｈが幼児Ｙに「涼くんすごいね::お豆食べたの:. (.)ここで:.」と話しかけると、Ｙの母親Ｔが「おいしかったね:」（６行目）「じゃこも食べたね:」（９行目）とＹに話しかける形を取りながら、Ｈの質問の答えにもなる発話を行う。Ｈはそれぞれに「そうだったの:？」（７行目）「あ:ら:」（12 行目）と反応することで、依然として幼児Ｙに話しかけながらも、母親Ｔの発話を自分の質問への答えとして聞いたことを示している。

Ｊが開始したターン（13 行目）は、こうした「幼児Ｙに向けられたＨの質問に、母親ＴがＹに話しかける形をとりながらＹに代って答える」という発話連鎖の延長上で生じている。そこで、「豆ごはん」の一件を知っているＪが、「ちょうどえんどう-えんどう豆のね」と、ＨへのＴの応答を補足するターンをＴに向けて開始するとき、Ｊは【抜粋７（７）：ピザ屋さん】のＢと同様、Ｔと同じ「チーム」のチームメイトとしてふるまっている。次に示すように、Ｔの「うん」は【抜粋７（７）：ピザ屋さん】のＡの「うん」と同じタイプのものが、別の発話連鎖の中で用いられたものである。どち

らにも、「(1)第三者に向けた説明」→「(2)第三者によるそこまでの説明の聞き届け」→「(3)チームメイトによる説明の続き」→「(4)うん」という手順が見られる。

【抜粋７（７）：ピザ屋さん（部分再掲）】
(1)→ 12 Ａ：あでもピザ-(.)ピザ屋さんかな:とかいっ［て:,
(2)→ 13 Ｃ：　　［うん.
(3)→ 14 Ｂ：出たん［だよ↑ね.］
(4)→ 15 Ａ：　　［やっぱ　］ピ-(.)うん.

【抜粋 13（９）：えんどう豆（部分再掲）】
(1)→ 09 Ｔ：じゃ［こも食べたね:.　→
　　10 Ｙ：　　［まめ.
　　11 Ｔ：→［か-
(2)→ 12 Ｈ：　［あ:ら:.　((Ｙの方にかがみ込んで))＝
(3)→ 13 Ｊ：＝ちょうどえんどう->えんど豆<のね:［出始めで　　］ね:.　＝
(4)→ 14 Ｔ：　　［うん゜きせ-゜］

「そう」の方も、この進行中のより大きな発話連鎖の中に位置づけることで記述できる。Ｔが今の「うん」に続けて「季節」という言葉をいい始めることは、Ｈに「豆ごはん」の一件を説明するという進行中の活動を、Ｔが「チーム」の一員としてさらに継続することである。先ほどの【抜粋 12（７）：イギリスロック】では、「相互的ユニゾン」と同様の仕方でひとつのスロットが二人によって満たされえたのに対し、このケースでは「共同的ユニゾン」と同様の仕方で、二人によって満たされうるスロットが作り出されている。だが、Ｔがまさにこれを行いかけたとき、Ｊは同時に、「季節」という言葉よりも「詳細度(granurality)」(Schegloff 2000a)の高い「出始め」という言葉を発している。このことは、豆ごはんが「おいしかった」ことの背景説明をＴが引き継ごうとしたとき、Ｊがより的確な言葉を用いてそれを一歩先に進めた、という事態として観察可能である。それゆえ、ＴはＪの「出始めでね:」という発話部分を、自分に代って説明を促進したものとして取り扱うことができる。Ｔが「出始め」という言葉をより的確なものと見なしたことは、「そう」のあとで、中断した「季節」という言葉を「一番おいしいとき」に置き換えていることに示されている。つまり、ここでの「そう」は、「出始め」という言葉を自分の続く説明の中に組み入れる準備になっているのである。次に示すように、この「そう」は、ここで進行中のより大きな発話連鎖において第三スロットに位置している。

１Ｔ：Ｈの質問に応じる説明の継続
２Ｊ：より的確な言葉による説明の促進
３Ｔ：そう

３．３　遅れた完了のあとの「そう」と「うん」
次に、協働的ターン連鎖の中で「そう」と「うん」がもうひとつ別の位置で用いられているケースに目を移し、そこで生じていることも同様の観点から記述できることを確認しよう。それは、次のように遅れた完了のあとの第四スロットで用いられる場合である。

１Ｘ：ターン構成単位の途中まで
２Ｙ：先取り完了
３Ｘ：遅れた完了
４Ｙ：そう／うん

先取り完了を用いることは、ターンを開始した者がそれを承認または拒否する立場に立たされるという意味でイニシアティヴを逆転させる手続きだが、遅れた完了はこれをふたたび逆転させる手続きである。遅れた完了によって、もとの話し手は自分が開始したターンに相手が反応するよう、あらためて求めることができる。

このとき、第四のスロットへと拡張された協働的ターン連鎖が産出される。先の【抜粋 10（５）：フランクバーガー】の前後を補って【抜粋 14（５）：フランクバーガー】として再掲する。

【抜粋 14（５）：フランクバーガー（【抜粋 10 の再掲）】
((雑誌の星座占いのページを見ながら会話している。))

01 Ｂ：ミキちゃん何座？
02　　(0.6)
03 Ｃ：おひつじ座.
04　　(6.6)((Ｂが雑誌を読んでいる))
05 Ｂ：フランクバーガーがいいねんてラッキー［フード.
06 Ｃ：　　［ふ:ん.
07　　(.)
08 Ｃ：フランクバーガー(.)ってさ:, ＝
09 Ｂ：＝朝ご飯に食べる［やつ.
10 Ｃ：　　［朝ご飯のやつや(h)ん［な(h):.
→ 11 Ｂ：　　［うん.

先に述べたように、このケースでは、Ｂの先取り完了（９行目）の途中からＣが埋め込まれた反復を用いた遅れた完了（10 行目）を行うことにより、Ｂの言葉の選択を承認するとともに、それが自分の開始したターンの完了であることは拒否されている。Ｃがこうして自分の開始したターンを遅れて完了させたために、次の第四スロットでは、このいわば一巡して本人が完了させたターン全体に対して、Ｂが反応を返す立場になる。Ｂはこれに「うん」で応じている（11 行目）。

さて、Ｃが８行目で開始したターンは、次のような発話連鎖上の位置に置かれている。雑誌の星座占いのページを見ていたＢは、Ｃ（ミキちゃん）の星座を訊いた（1-3 行目行目）あとで、「フランクバーガーがいいねんてラッキーフード」（５行目）と告知を行う。告知という行為は、相手がそれを聞き届けたことを示すことを連鎖上の含みとする。しかし、Ｃが次に開始したのは告知に用いられた言葉に関する自分の理解をチェックすることである。この行為は、Ｃのターンが「ってさ:」まできた時点で観察可能になる（８行目）。Ｂはこの時点で、Ｃ自身がこのターンを完成させるのを待ってその理解を承認するという選択肢のほかに、自らその言葉の意味を説明するという選択肢が利用可能である。この事情は、【抜粋 12（７）：イギリスロック】とまったく同じである。

しかし、このケースの場合、Ｃは遅れた完了を用いて自らターンを完成させている。そこで、Ｂにとっては、自分のニュースが単純にＣによって聞き届けられたのと等価な発話連鎖上の位置が訪れている。ニュースを聞き届けるという行為はＣが行うべき行為であって、Ｂに代って行われたものではない。Ｂはこれを「うん」と聞き留めることで、自分が開始した告知の発話連鎖が相手の聞き届けによって首尾よく終了したことを示せばよい。

これに対し、次の【抜粋 15（11）：ボランティア】は第四のスロットで「そう」が用いられたケースである。

【抜粋 15（11）：ボランティア】

((ある保育施設が小学生を連れて行ったキャンプで、夜、指導員ＡとボランティアのＢ、Ｄ、および子どもの父親Ｃが酒を飲みながら会話している。この前日の昼間、指導員ＡがボランティアのＢに作業を頼もうとして探していたら、Ｂは一人でテントに入って昼寝をしていたということが話題になっている。))

01 Ｃ：あ:の:::(0.3)別に(0.2)なあ(0.2)恥もない,
02　　(0.3)
03 Ｂ：はは［:っ
04 Ｃ：　　［言い方でな(0.4)「寝てました:」って,＝
05 Ｄ：＝ふは:は:は:は
06 Ｃ：ええで:.
07 Ａ：でこれ仕事やったら::寝られへん［(……)
08 Ｂ：　　［寝られへん［な:.
09 Ｃ：　　［ええんちゃう？
10 Ａ：やっぱりな:ボランティアで，＝
11 Ｂ：＝これる［からやねん.
12 Ａ：　　［うっ
13 Ａ：きれるというな:,＝
→ 14 Ｂ：＝そうそうそうそう.

Ａが「やっぱりな:ボランティアで」と開始した（10 行目）ターンを、Ｂが「これるからやねん」と先取り完了している（11 行目）。これに「きれるというな:」というやや異なる形式の遅れた完了で応じることで、Ａはこのターンを自ら完了させている（13 行目）。(「これる」は明らかに「来られる」であるが、「きれる」は「来られる」といっているようにも、「いれる＝居られる」という言葉の最初に「k」の音が入ったようにも聞こえる。）次のＢの「そうそうそうそう」は、この協働的ターン連鎖の第四スロットという位置を占めている。

この位置でＢが「そう」を用いることも、やはりこの協働的ターン連鎖が位置づけられたより大きな発話連鎖のタイプに関わっている。この抜粋の直前では、昨日の昼間、みなが作業をしているときに、ボランティアのＢが人知れずテントに潜り込んで寝ていたということが話題になる。Ａが冗談交じりにＢを非難すると、Ｃはそういうときに悪びれず「寝てました」といえるところがＢのいいところだとお世辞をいう（1-6 行目）。それゆえ、６行目の終わりとともに、Ｂがお世辞に対して反応を返すことが期待される連鎖上の位置が訪れている。Pomerantz によれば、お世辞への反応は２つの異

なった拘束によって組織されている。第一の拘束は「相手の評価に同意せよ」というものであり、第二の拘束は「自己賞賛を避けよ」というものである。この相矛盾する拘束をやりくりして反応を返すひとつの方法は、お世辞が大げさであることを示しそれを限定づけする反応を返すことである（Pomerantz 1978）。

さて、この会話では次に発話したのはＡであり、それは「でこれ::仕事やったら寝られへん」（７行目）という一般的命題を主張する発話である。この一般的命題は、この連鎖上の位置においては、お世辞が大げさであることを示しそれを限定づけするものとＢによって聞かれうる。Ｃのお世辞は、Ｂが、昼寝してサボっているのがばれても悪びれずに「寝てました」といえるようないわば大物だ、という主旨である。これに対し、Ｂが今の一般的命題を自分に適用するなら、Ｂであっても仕事でキャンプに来たときに仕事をさぼって昼寝する度胸はない、という限定づけとなりうる。そこで、Ａの発話は、Ｂがお世辞に反応すべき連鎖上の位置で、お世辞を限定づけすることをＢに代って行ったものとして扱われうる。実際、この発話を聞いたＢは、「寝られへんな:」とすぐに反復することで、これに同意している（８行目）。

Ａが「やっぱりな:」と開始した問題のターン（10 行目）は、以上のやりとりを受けてＣが「ええんちゃう？」（９行目）とさらにお世辞の念押しをしたあとで、生じている。このターンはお世辞の念押しを受けて、お世辞の限定づけをもう一度行うものである。それゆえ、Ａがこのターンを遅れた完了によって自分で完了させたとき、その一巡したターンの全体は、Ｃのお世辞をＢに代って限定づけするという行為を継続しているものとして扱われうる。第四スロットで「そう」が用いられているのは、このように遅れた完了によって完成させられたターン全体が、この発話連鎖の中でＢの代弁として取り扱われうることにＢが指向していることを示している。

３．４　「うん」と「そう」の後続発話

以上、協働的ターン連鎖の中で用いられてはいるが、それと交差する別の発話連鎖によって組織されている「そう」と「うん」の事例を２タイプ検討し、それらが先の仮説の延長上で記述可能なことを示した。ここで、これらの事例をも含み込んだ形で、何らかの発話連鎖において第三スロットを占めている「そう」と「うん」についての仮説を改めて提示しておこう。

（１）「そう」は、自分が開始したターンや発話連鎖の途上で相手が発話を行ったとき、相手の発話が、自分の実現しようとしている活動を自分に代って促進したことを認定するために利用できる。

（２）「うん」は、自分が開始したターンや発話連鎖の途上で相手が発話を行ったとき、そのターンや発話連鎖を完成させるひとつの可能なやり方として、相手の発話を聞き留めたことを主張するために利用できる。

協働的ターン連鎖の第三スロットにおけるこれらのパーティクルは、次のようにターンスペースへの参加を再組織化する。二つのパーティクルはともに、自分がそのターンスペースを管轄する話し手であることを示すとともに、それぞれ異なった仕方で、相手にもそのターンの完成作業に一役買った者という限定された立場を割り当てる。同様に、より大きな発話連鎖の第三スロットでこれらのパーティクルが用いられる場合、それらはともに、自分がその行為スペースを管轄する話し手であることを示すとともに、それぞれ異なった仕方で、相手にもその行為スペースでなされるべき活動の完成作

業に一役買った者という限定された発話連鎖上の立場を割り当てる。このように、これらのパーティクルはいずれも、ある参加機会に自分が管轄する話し手として参加し続けていることに指向しつつ用いられると考えられる。

このことをより積極的な形で見るためには、「そう」や「うん」の後続発話に注目するのがよい。これらの後続発話の性質を調べることで、管轄する話し手が、あいだに介入した相手の発話を取り扱う様子がいっそうよく分かる。この作業は、上記仮説のさらなる傍証になるとともに、次節での分析への橋渡しとなる。

まず、「そう」のあとで続けて同じ話者が発話を行う場合、その後続発話は相手の貢献を踏まえた形にデザインされる。【抜粋５（７）：理想の女性像】と【抜粋６（７）：歩いてゆくのね】に後続発話を補って【抜粋 16（７）：理想の女性像】【抜粋 17（７）：歩いてゆくのね】として再掲する。

【抜粋 16（７）：理想の女性像（【抜粋５の再掲）】

01 Ｂ：お−(.)男の人やから女性であろうとしたら:(0.4)理想の女性像(.)を:,
02 (.)
03 Ａ：.hhhh［やっぱり(.)思い描いてる［と思うわ頭ん中で.］
04 Ｂ： ［なんか(.)゜n-゜ ［そ:そ:そ そ そ ］→
→ 05 →ほんで:(.)［で:それに近づけていくから:,
06 Ｃ： ［そうじゃないかな:.
07 (.)
08 Ｂ：よけいおん-おんな:の人より女らしいみたいな？

【抜粋 17（７）：歩いてゆくのね（【抜粋６の再掲）】

01 Ｃ：ふんで:その子が(0.2)［なんにもな ］かった［かのように,］
02 Ｂ： ［(だめ:)きたない.］
03 Ａ： ［.hhh はは ］はっ→
04 →［.hhh ど(h):(h):しよ(h).
05 Ｃ： ［んふふっ
06 Ｂ：歩いていくのね.
07 Ｃ：そ:うそう.
08 (0.5)
→ 09 Ｃ：井上陽水はなんか(.)「ん？」て顔してじ:っと見てるだけなんやんか.

【抜粋 16（７）：理想の女性像】においては、Ｂは「そう」を用いたあと、まず「ほんで」「で」と接続の言葉を用い、さらに「それに」と指示詞を用いて、Ａの先取り完了による貢献を踏まえていることを示す形に後続発話をデザインしている（5 行目）。すなわち、「理想の女性像」を「思い描いて」「それに近づけていく」という一続きの命題が産出されている。【抜粋 17（７）：歩いてゆくのね】においては、先取り完了を踏まえていることがこのように明示的には示されていないが、Ｃはそれを踏まえて説明を継続している。Ｃは歌手「井上陽水」の曲のビデオクリップの筋立てを説明しているが、１行目の「その子」とはこの抜粋の前からＣが説明している筋立ての中に登場した人物のことである。これに対し、「そう」のあとではＣは別の登場人物「井上陽水」に初めて言及し、二人の人物

がどのように筋の中でかかわったかという説明に話を進めている（9 行目）。すなわち、その筋の中では、「その子」が「なんにもなかったかのように」「歩いていく」と、「井上陽水」はその様子を「「ん？」て顔してじーっと見てる」というわけなのである。ここでCは、「井上陽水」が「見てる」ものが何であるのかを、聞き手が先取り完了部分に見つけ出すことができるということを当てにしている。

また、次の【抜粋 18（９）：えんどう豆（【抜粋 13 の部分再掲）】においては、相手の「出始め」という言葉を踏まえて、「きせ（つ）」という中断された言葉が「一番おいしいとき」という言葉に置き換えられている。つまり、「えんどう豆」の「出始めで」「一番おいしいときやった」という命題が産出されている。ここでも別の形で、「そう」の後続発話に相手の貢献が踏まえられているのが分かる。

【抜粋 18（９）：えんどう豆（【抜粋 13 の部分再掲）】

13 J ：＝ちょうどえんどう->えんど豆<のね:［出始めで　　］ね:. ＝
14 T ：　　［うん゜きせ-゜］
→ 15 T ：＝゜そうそうそう゜［いちばんおいしいときやったね::.
16 J ：　　［うん.

これに対し、「うん」のあとで同じ話者が続けて発話を行う場合、それは完了のやり直しとしてデザインされるか、自分がすでに行った完了へのつけ足しとしてデザインされるか、あるいは相手の完了を全面的には承認しない形にデザインされるかである。前にあげたケースから該当するものを再掲する。

《完了のやり直し》

【抜粋 19（７）：イギリスロック（【抜粋 12】の部分再掲）】

07 A ：ふ：：ん(.)えっんじゃあイギリ-(0.4) どっちかっていえば［イギリス↑の］：：：
08 B ：　　［イギリスロッ-］
→ 09 B ：うん. (.)>ロック(の方)が<好き. ＝

《つけ足し》

【抜粋 20（９）：トマト（【抜粋４】の再掲）】

01 B ：<結局>このトマトほとんど,
02　　(0.4) ((トマトのお皿を人差し指で指す))
03 B ：［食べたね.］
04 A ：［食べちゃ］ったね［:.
05 B ：　　［うん.
06　　(0.7)
→ 07 B ：まるまる.

《全面的には承認しない》
【抜粋 21（13）：ハチ（【抜粋８】の部分再掲）】
09 Ｊ：　［佐藤君の班やねんけど:,
10　（0.7）
11 Ｊ：あの:::::(0.3)そのっ-
12 Ａ：足［元やからわからへん［のか.
→ 13 Ｊ：　［あれっ-　　［ん:. かもしれんな.

以上のように、「そう」の後続発話は、相手の完了が自分に代ってターンを完了させたものであるということと整合的な形で、相手の貢献を踏まえた形にデザインされている。これに対し、「うん」の後続発話は、相手の完了がたんにひとつの可能な完了であるということと整合的な形で、相手の貢献を全面的には踏まえない形にデザインされている。これらのケースでは、二つのパーティクルは、管轄する話し手としての立場を示すことによって、そのあと後続発話という話し手としてのふるまいを回復するための準備として用いられている。

４　通りすがりの受け手性表示としての「そう」と「うん」

Jefferson はある論文の中で「通りすがりの受け手性(passing　recipientship)」という面白い言葉を用いている（Jefferson　1993)。たとえば、オーヴァーラップ発話を再生することで自発話を完成させようとするとき、再生の前に"Yeh" など「最小限の受け手としてのふるまい」が差し挟まれてから、再生という「話し手としてのふるまい」が回復されるという手続きである。これと類似の現象を発話連鎖のさまざまなレベルにわたって踏査することで、Jefferson は、「通りすがりの受け手性表示→話し手性の回復」という手順が繰り返し観察されることを明らかにした。上に見た「そう／うん→後続発話」という手順も、この「通りすがりの受け手性」という現象の一例である。

だが、Jefferson は英語の会話において、そのような受け手性に二種類の異なったものがあることは報告していない。これに対し、日本語の会話では、「そう」を用いた通りすがりの受け手性と「うん」を用いた通りすがりの受け手性が、秩序だった形で使い分けられている。本節では、協働的ターン連鎖から離れて、二つのパーティクルのこの用法を見ていく。その中でわれわれは、先の仮説がここでも妥当することを確認するだろう。

４．１　投射された行為スペースの拡張

会話の中で、話し手がしばしば複数のターンを用いて行う行為のひとつに説明という行為がある。まずこの行為を例にとって、「そう」と「うん」が説明のための行為スペースを拡張するうえで異なる働きを持つことを見ておく。

【抜粋 22（８）：寝過ぎ】は、Ｃが「最近自分はなぜあんなによく寝るか」についてしばらく説明（あるいは釈明）を行ってきた部分の最後から始まっている。Ｃは説明を終えると、「ちょっと、寝過ぎかなとは思うけど」（1 行目）と自分の説明にオチをつけ、これに「だいぶ寝過ぎやと思うあたし」（3 行目）とＡが返したコメントが二人の笑いを引き起こすことで、Ｃの説明を終了させる手続きが取られている（4-6 行目)。ここで焦点を当てるのは、Ｃに代わって自分の事情を説明し始めたＢが、10-11 行目で用いている「うん」「ん」である。

【抜粋 22（８）：寝過ぎ】

01 Ｃ：ちょっと(.)<ちょっと>(0.8)寝過ぎかなっと(h)は(h)思(h)う(h)け(h)ど(h):.
02　　(0.5)
03 Ａ：[だいぶ寝過ぎ　[と思うあたし.
04 Ｂ：[あっ　　[あはははは:
05 Ｃ：　　[あはははは:
06 Ｃ：ごめん.
07　　(0.5)
08 Ｂ：あたしっｎ:寝ようにもさ(0.4)隣行ってふとん引かんとならんやんか.　＝
09 Ｃ：＝あ:あ:(.)それがないから　[ねうちベッドやし.
→　10 Ｂ：　　[うん.
→　11 Ｂ：ん寝る-(.)寝るの:(0.3)すごい手間取る？
12 Ｃ：[うん.
13 Ｂ：[寝るっ-(.)寝るのすごく遅くなんねんそれで.

「あたし寝ようにもさ」（8 行目）とターンを開始したＢは、自分がＣのようによく寝ることはできない事情を話し始めていることが分かる。Ｂのターンが「ならんやんか」（8 行目）と完了可能点まで来ると、Ｃはすぐに「あ:あ:」と理解したことを主張し、「それがないからねうちベッドやし」（9 行目）と自分が理解した内容を自分の言葉で示している。これを見ると、ＣはＢの発話を、自分とＢとの置かれた状況の違いの説明としてのみ聞いたことが分かる。ところが、6 章で詳しく見るように、ここでＢが行っているような自分の事情を部分的に話す発話は、しばしばさらに詳しく語るための前置きとして用いられる。前置きは拡大された行為スペースを投射する方法であるが（２章参照）、前置きとして差し出した発話が相手に前置きとして扱われないこともある。その場合、行為スペースを拡張するための工夫があらためて行われる必要がある。このケースの場合、Ｃが９行目でＢの説明をもう理解したことを示したので、Ｂは自分の説明を続ける行為スペースをあらためて拡張する必要に直面している。

このような発話連鎖環境において、ＢはまずＣが「それがないから」までいったところで「うん」と受け（10 行目）、さらにＣが「うちベッドやし」までいったところでもう一度「ん」といってすぐ説明を継続している（11 行目）。「ん」に続くのは「寝る」という動詞だが、その主語は示されていない。この発話デザインによって、Ｂは「寝る」の主語を聞き手が先行発話の中に探すようインストラクトしている。「寝る」という動詞の主語が明示されていたのは、二つ前の自分のターンである。それゆえ、Ｂは直前のＣのターンをスキップして自分の発話を聞くよう聞き手に求めている。「うん→後続発話」というこの手順は、自分が開始した説明のための行為スペースが未だ閉じられてはおらず、Ｃのターンはその投射されたスペース内に介入した発話であること、しかしそれは自分が説明を継続することを促進するような貢献を行うものではないこと、これらのことを示している。このように、相手の発話の貢献を認めないで行為スペースを拡張するときには、その前に相手のターンを「うん」で受けるのが繰り返し観察される。

これに対し、説明の途中で行われた相手のターンを「そう」で受ける場合には、その後の説明は相手のターンによる貢献を組み入れた形にデザインされる。次の【抜粋 23（８）：熊本】を見てみよう。

【抜粋 23（８）：熊本】
((Ａは関西から九州各県への交通の便を順に述べている。))

01 Ａ：で(0.4)あの::(0.5)宮崎もそう（だし）［ね？
02 Ｃ：　　［うん．＝
03 Ｂ：＝うん．＝
04 Ａ：＝で(0.6)鹿児島もそうだよ［ね？
05 Ｃ：　　［そう．
06　(0.4)
07 Ａ：で(0.5)熊本::::は:(0.3)［こう行ってまっす-
08 Ｃ：　　［熊本はず::っと(.)まだ曲がるけど:でも基本的に:,
09　(0.3)
10 Ｃ：熊本大分間は近いねん．
11　(0.4)
12 Ｂ：［ふ:んふ:んふん．
→ 13 Ａ：[>そうそうそう．<だかっ大分からまっすぐ行けばいいんだけど:,

この抜粋の前では、まず奈良県出身のＢが「奈良は田舎だ」という見解を述べると、ＡとＣが口々に「そんなことはない。奈良は大阪に近いではないか」と反対の見解を述べる。Ａは静岡県出身で、Ｃは大分県出身である。Ｃは大分がいかに田舎であるかを述べ、続いて九州で一番不便なのは長崎だという。それに同意したＡは、九州の各県への交通の便をＢに説明し始める。Ａは「で」という接続の言葉をターン冒頭に用いながら、順に各県に言及していくが（1-7 行目）、熊本県の説明をしようとしたところで「熊本::::は:」と音を引き延ばし、短い間隙をあける(7 行目)。この機会を捉えて熊本への交通の便を説明したＣの発話(8-10 行目)は、Ａに代ってそれを説明する「助け船」(串田 1999)と呼びうるものである。

Ａは続いて説明を継続するときにこの発話を「そう」で受けている（13 行目)。Ｃの発話は、投射されているＡの説明の行為スペースの途上で行われたものであるが、それは【抜粋 22（８）：寝過ぎ】のように説明の受け手が「もう理解した」ことを示すものではなく、この会話の展開の中でＢに対して「チーム」を形成しているチームメイトからの「助け船」である。したがって、Ａはここで、自分の説明に対するＣの貢献を認定しつつ、それを踏まえた形で行為スペースを拡張するために「そう→後続発話」という手順を用いていると考えられる。

「そう」の後続発話もこの見方を裏付ける。Ａは「だかっ」（13 行目）と接続の言葉を用いるとともに、「こう行ってまっす-」（7 行目）と中断した発話を、Ｃが提示した「熊本大分間はちかい」（10 行目）という論点を組み入れる形で「大分からまっすぐいけばいい」（13 行目）といい直している。ちなみに、Ｃ自身がいったのは、「曲がるけど」「熊本大分間は近い」ということなので、「まっすぐ」という言葉を用いてＡが表現しているルートとは異なっている可能性がある。しかし、Ａは「大分」という言葉だけを「まっすぐ」という中断した自分の言葉につなげて後続発話を組み立てている。Ａは、自分の説明を続けるために利用できる要素だけをＣの発話からピックアップしていることが分かる[(5)]。

以上のように、すでに投射されていた行為スペースをあらためて拡張しようとするとき、通りすが

りの受け手性表示として、「うん」と「そう」は異なった働きを持つ。そして、それぞれの働きは先の仮説と整合的である。ここから、会話の中で参与者はしばしば、ひとつのターンスペースに指向するのと共通の仕方で複数のターンに渡る行為スペースに指向していることが分かる。

しかしながら、複数のターンに渡って行為スペースを拡張しようとする場合には、ひとつのターンスペースを取り扱うのとは別のさまざまな事態に対処する必要も出てくる。長い行為スペースを保持することは、はるかに不確実だからである。最後に、そのような困難に対処する方法として「そう」と「うん」が用いられている事例を見ておきたい。

４．２　「そう」「うん」の脱線阻止用法

会話の中であるターンを通じてある行為を遂行しようとする場合、その目的を成就させる反応が次のターンで返ってくるとは限らない。このようなとき、話し手はその目的を成就させるために複数のターンを必要とする。しかしながら、次のターンの次に自分がふたたびターンを取得できるという保証はない。このことは、その行為の目的が成就されないまま会話の軌跡が別の方向へと推移する可能性を意味する。それゆえ、ある行為が成就される前に会話の軌跡が逸れ始めるのに直面した話し手は、この軌跡を阻止して、自分の行為スペースをあらためて拡張する手続きを必要とする。このような仕事においても、通りすがりの受け手性表示が用いられる。

まず、次の【抜粋 24（７）：これ２枚】は、逸れかけた会話の軌跡を阻止する通りすがりに、「うん」が用いられている例である。

【抜粋 24（７）：これ２枚】
((３章の【抜粋 11】の続き。))

01 Ｂ：［だって［あたしいつも〈これ２枚〉と:　］:もう一個-(.)うちさ:家族３人で→
02 Ａ：　　［(……)のに:.］((Ｃの方を一瞬向きながら))
03 Ｂ：→どんだけとるかってゆうとこれ一枚とちっちゃいのもう一枚゜とるねん.゜((この発話
04　　の途中でＡにジュースを注ぎ終わり、自分のグラスに注ぎ始める))
05　(1.3)
06 Ｃ：えっへっへっへっへっ.hh
07　(.)
08 Ａ：何人で:？
09 Ｂ：３人で.
10　(0.3)
11 Ａ：んっへ:(.)聞き返(h)し(h)［ちゃった.((Ｃの方を向いて))
12 Ｃ：　　［あっへっへっへっへ((下を向いて))＝
13 Ａ：＝一人［っ子やんな:おじいちゃん［おばあちゃんいない((Ｃの方を向いて))→
14 Ｃ：　　［あっはっはっ(し(h)ん-)　［ん(h):.((Ａの方を向いて))
15 Ａ：→（んや）な:とか思い［ながら.((Ｃの方を向いて))
→ 16 Ｂ：　　［うんうち:３人で.
17　(0.4)
18 Ｂ：シーフードっ↑と(からあげ)と２枚と゜(……)゜.
19　(0.3)

20 Ａ：ふ::［:ん？
21 Ｂ：　　［おっきいのはシーフード［だけ.
22 Ｃ：　　［((咳払い))ふ::ん.

３章でも取り上げたこの抜粋では、注文したピザが「でかい」と主張するＣとＡに対抗して、Ｂはそれを「でかいと思わんかった」と主張し、その理由を説明し始める（３章の【抜粋 12（７）：ピザ】参照)。Ｂはこれによって、自分の見解が妥当であることを二人に納得させようとしている。Ｂがオーヴァーラップしたターンの冒頭を再生してそれを完了すると（1-3 行目)、やや長い間隙ののち、Ｃは「えっへっへ」とＢの説明に驚きを込めた笑いで応じ（6 行目)、それをまじめに聞かなかったことを示す。次いでＡが「何人で:？」と尋ねＢが「３人で」と答えるとき（8-9 行目)、この質問－応答はＢの説明の細部をＡが確認するやりとりにみえ、これはＡがＢの説明をまじめに聞いた証拠に見える。しかし、次にＡは「んっへ:(.)聞き返しちゃった」(11 行目）と先の質問をした自分への距離を示し、続いて自分はどういうつもりで今の質問をしたのかを明かす（13-15 行目)。これらの発話をＡはＣに向けており、これを聞いたＣは笑い（12-14 行目）で応じている。このとき二人は、一時的に二人のあいだに会話のチャンネルを形成し、一緒になってＢのいったことをちゃかしている。二人に自分の見解の妥当性を納得させようとしているＢにとって、これはその目的が成就されないまま、二人が会話の軌跡を逸らしている事態として観察可能である。

このような連鎖環境において、Ａの発話を途中から「うん」と受けたＢは、すぐ続けて「うち:３人で」と先の説明の一部を反復する（16 行目)。そして短い間隙ののちに、「シーフードっと(からあげ)と２枚と」と、先の説明をさらに詳細度を上げてやり直している（18 行目)。これによってＢは、逸れかけた会話の軌跡を阻止し、説明の行為スペースを拡張している。自分の目的が成就する前に行われた相手のターンは、会話の軌跡を逸らすものである以上、その目的の実現を促進するような性質のものではない。これに対して通りすがりの受け手性を示すとき、「うん」が用いられることは、これまで見てきた「うん」の働きと整合的である。こうしてＢは、ＡとＣの両方から一応聞き届けたことが主張されるまで、この行為スペースを拡張していく（20-22 行目)。

このように見ると、逸れかけた会話の軌跡を阻止する通りすがりの受け手性表示は、「うん」によってしかなしえない働きであるように思われる。しかしながら、次の【抜粋 25（７）：リバーサイドホテル】ではよく似た状況下において、「うん」だけでなく「そう」も用いられている。これは本章の【抜粋６（７）：歩いてゆくのね】の少し前の時点の会話で、３章の【抜粋 11（７）：リバーサイドホテル】と同じものである。

【抜粋 25（７）：リバーサイドホテル】
((Ｃが歌手井上陽水の「リバーサイドホテル」という曲のビデオクリップのことを話し始めている。))
01 Ｃ：でもね:>ビデオテープ(で)あたしが今まで見て(たので)<名作>と思ったのはさ:,
02　　(0.3)((Ｂうなずく))
03 Ｃ：リバーサイドホテル:？
04　　(0.2)((Ｂうなずく))
05 Ｃ：井上陽水の.
06　　(.)
07 Ｃ：あれは名作やで:.

08　（1.0）
09 Ｂ：ホテルは:ってゆ［うやつ:？
→ 10 Ｃ：　　［う:んそうそう．＝
11 Ｂ：＝リバーサイド:［ってゆうやつ(h):［(h)？っ［はっは
→ 12 Ｃ：　　［うん．　　［そ:うそ(h)うそ(h)うそう．＝(み)えんえん→
13 Ａ：　　［んふふ:
14 Ｃ：→と続くやつ．＝
15 Ｂ：＝.hhhh［h リバーサイ［::リバーサイっ［てんふふ
→ 16 Ｃ：　　［あれのね　　［ん:．あれの:-　［そ(h)うそ(h)うそうそう．
17　(0.3)((吸気音のような音が聞こえる))
18 Ｃ：あれの:(0.3)ん:(.)ビデオクリップすっごいいいよ:.

ここで焦点を当てるのは 16 行目の「そう」であるが、その前に 10 行目と 12 行目の「そう」がこれまでの議論を支持することを一瞥しておこう。

Ｃはまず、自分が名作と思ったビデオテープの名前を告知する（1-7 行目）。テープの中身を説明しないうちに「名作やで」という結論だけを述べることで、Ｃは相手がそれに興味を示し、詳しく聞きたがるような手続きを用いている（この点について詳しくは６章参照）。それゆえＣはここで一種の前置きを用いており、複数のターンに渡る行為スペースを投射している。このような連鎖環境において、聞き手Ｂが自分の理解をチェックする質問を行う（９行目、11 行目）ことは、先を聞くために必要な準備であるという意味で、話し手が投射した活動の主旨に沿った行為である。のみならず、このケースの場合、Ｃにはこのふるまいを歓迎すべき特別な事情がある。Ｃはビデオテープを指示するとき、「リバーサイドホテルー？」（3 行目）と上昇調の抑揚で、指示の仕方についての心配を示していた。しかし、このときにはＢはうなづくだけで（4 行目）、Ｂが指示対象を同定したのかどうかＣにとって確実ではない。Ｃは「井上陽水の」（5 行目）と指示をやり直したうえで「あれは名作やで」（７行目）と告知を終えるが、１秒の間隙が生じ、これはふたたびＣの心配を喚起するに十分である。このような状況のもとで、Ｂが「ホテルは:ってゆうやつ？」（9 行目）と同定できた証拠を示すことは、Ｃが行おうとしたことを、Ｃに代ってＢの側から行うふるまいである。

Ｃが「う:ん」といったあとで「そうそう」と承認しているのは（10 行目）、Ｂの発話のこのような貢献を認定していると考えられる。Ｃは、Ｂが続けて行ったもうひとつのチェック（「リバーサイドってゆうやつ？」）も同じ形で受け、今度は「えんえんと続くやつ」と後続発話を行っている（12-14 行目）。Ｂが二度目のチェックで用いた「リバーサイド:ってゆうやつ」という指示は、この歌の最後のリフレイン部分の歌詞に言及していることから、「えんえんと続くやつ」という後続発話はＢの指示の仕方を踏まえてデザインされている。

以上から、14 行目の終了時点で、Ｃはビデオテープの説明にふたたび取りかかるにふさわしい連鎖上の位置に達している。だが、Ｃがそれを行い始めたとき、Ｂは「リバーサイ::」と節をつけてその歌のリフレイン部分を歌い始める（15 行目）。これはＣの説明を聞くという活動からは脱線したふるまいである。Ｃがこれを阻止するためにターン冒頭再生を用いていることは、すでに３章で見た。ここで注目したいのは、まず「あれの」と再生する前に「ん」が用いられていることである（16 行目）。【抜粋 24（７）：これ２枚】と同様、ここでも「うん」は会話の軌跡が逸れかけたときに、それを阻止して自分が開始した活動を先に進める通りすがりに用いられている。しかし、それではまだ足

りずに、Cはいったん始めた再生をもう一度「あれの:-」と中断して、今度は「そう」を用いている（16 行目）。どうして、今度は「そう」なのだろうか。

これまでの仮説からすれば、この「そう」の用法は明らかに変則的である。しかしながら、このケースは仮説の含意をさらに掘り下げることを可能にしている。相手の発話が自分の行為の実現を促進したことを認定するという働きは、見方を変えれば、相手の発話が当面の目的にとって「すでに十分な貢献をした＝もう十分である」ことを含意しうる。だから、「そう」を用いることで、「もうあなたの貢献は十分に果たされたから先に進ませよ」という主張を行うことも可能になると考えられる。この働きを視野に入れると、逸れた会話の軌跡を阻止するという目的にとっては、「そう」の方が「うん」よりも強力な手続きとなりうる。

つまり、脱線を阻止するために「うん」を用いてもなお脱線がやまないとき、同じことを再試行するためのより強力な方法として「そう」を用いることは、「そう」に関する仮説の延長上にある働きである。この抜粋でCが用いている「ターン冒頭の中断→うん→再生とその中断→そう→二度目の再生」という一連の手続き（16-18 行目）は、一見したところCが話し手としてよろめいているように見える。しかしながら、以上の分析を踏まえるなら、それは逸れた会話の軌跡を阻止するためのきわめて精巧に組織された手順であるといえるのである。このケースは、会話における微細なふるまいが秩序だっていることを、劇的な形で証拠立てている。

５　結論

本章では、日本語会話で頻繁に用いられる「そう」と「うん」というパーティクルに焦点を当て、発話連鎖上の特定の位置におけるその働きを分析することを通じて、これらのパーティクルが、ターンスペースと複数のターンに渡る行為スペースの双方において、それぞれの形でスペースへの参加を再組織化するリソースであることを明らかにしてきた。まとめておこう。

第一に、「そう」と「うん」はまず、協働的ターン連鎖の第三スロットにおいて、先取り完了を承認するために用いられる。協働的ターン連鎖においては、話し手の交替を伴いつつもひとつのターンスペースが保持されており、そのターンスペースはターンを開始した者の管轄下にあることが指向される。「そう」と「うん」はともに、自分が管轄する話し手であることを示すとともに、相手にもそのターンの完成作業に一役買った者という限定された話し手性を割り当てる形で、そのターンへの参加を再組織化する。これに対し、同じスロットで用いられる遅れた完了は、相手がそのターンの完成作業に一役買ったということを認めないで、それを完了する方法である。

第二に、この共通性のもとで、「そう」と「うん」は異なった仕方で参加の再組織化を行う。「そう」は、相手の先取り完了が自分に代ってターンを完了させ、開始された行為の遂行を促進したことを認定するために用いられる。それは、自分で完了させるうえで何らかの困難に直面した話し手によって用いられ、相手にはいわば「共同著者」「援助者」としての立場が割り当てられているといえよう。これに対し、「うん」は、相手の先取り完了をひとつの可能な完了として聞き留めるリソースである。それは、自分自身でターンを完了させたときや、自分で完了するのに困難がなかったときや、相手の先取り完了の内容を全面的に承認しないときなど、先取り完了が実質的に行為を促進していないさまざまな場合に用いられる。このとき、相手にはこのターンを完成させる作業のためにとりあえず何らかの声を発した、という最小限の話し手性が割り当てられているといえよう。

第三に、このようにして定式化された「そう」と「うん」の用法は、より広範な発話連鎖において

も妥当であることが確認された。協働的ターン連鎖の第二や第四の位置に現れる「そう」「うん」は、実はそれと交差している進行中の発話連鎖の第三の位置にあるものとして組織されていることが明らかになった。この分析は、二つのパーティクルが一見したところバラバラな位置で用いられているように見えながら、実はその用法が精巧に秩序だっていることを裏付ける。とともに、この分析は一般に、連鎖組織の交差という視点から分析することが、実際の会話の中でからみあっている形式的構造を析出するうえできわめて重要であることを例示している。

第四に、「そう」と「うん」そのものから、それに後続する発話に焦点を少しずらすことで、これらのパーティクルが「通りすがりの受け手性表示」として用いられる場合を検討した。これらのパーティクルはともに、投射されていた行為スペースをあらためて拡張するときや、逸れた会話の軌跡を阻止するとき、その通りすがりに用いられうる。とともに、ここにでも両者の働きの違いは、われわれの仮説と整合的である。

以上の分析を通じて浮かび上がった、より一般的な知見として次のものを指摘しておくことができる。まず、先取り完了への反応の選択肢を見渡すことで、それらが「承認」や「拒否」という日本語のヴァナキュラーな行為の名前によっては捉えきれない形で、しかしながら秩序だった形で使い分けられていることが明らかである。３章や４章の分析にもまして、本章ではより徹底的な形で、ふるまいの配列を通じて異なる行為が認識可能な形で産出されていることを例証した。

次に、「そう」と「うん」というパーティクルがひとつのターンスペース内部においても、複数のターンにわたる発話連鎖の中でもパラレルな仕方で用いられるということは、会話者たちが会話の異なる水準において、同じような仕方で話し手としての参加を保持しうることを例証している。４章では、ひとつのターンの水準での話し手がそれ自体多様でありうることに焦点を当ててきたが、逆に本章では、ひとつのターンの水準で話し手になることのある側面は、ターンという単位を超えた水準での参加と共通していることを明らかにした。このようなことが生じてくるのは、話し手という言葉が、たんに実際に言葉を発している立場を指すだけでなく、ターンスペースや行為スペースという規範的スペースとの関係で組織される参加の諸形態を指すこともある、指標的表現だからである。ここでもふたたび、ヴァナキュラーな言葉は人々がふるまいの配列を通じて識別している微細な秩序を捉えられるものではない。

さらに、このような参加の組織化においては、語彙化されたリソースや発話の位置取りというリソース、さらに相手の発話との形式的関係というリソースといった、性質を異にするリソースが関与している。このことは、同じ相互行為上の局面において、同じタイプの問題を取り扱うために、ある種のリソースは当該言語の特性によって利用可能となり、別のリソースは言語の相違を超えてより普遍的に利用可能であることを意味する。英語の会話に関しては、協働的ターン連鎖に関しても通りすがりの聞き手性に関しても、「そう」と「うん」のあいだに見られる系統的な使い分けに相当するものは報告されていない。このことは、英語話者がこれに相当する行為の識別を非語彙的リソースによって行っている可能性を示唆する。このようなリソースの分布の問題は、相互行為の「文化」が、ある面では特定のスピーチコミュニティに特化した姿を見せながら、その基本的組織においては異なるスピーチコミュニティのあいだで共通しているという可能性を、体系的に記述するための手がかりとなる。

最後に、連鎖組織の交差によって組織されたターンの分析からのひとつの重要な教訓はこうである。先取り完了やその中断、その前後にちりばめられた「そう」や「うん」という具合に、ひとつのターンのレベルで「よろめき」や「もつれ」が生じるとき、それはしばしば、より大きな構造がそのター

ンの直中で指向され、取り扱われるための方法になっている。そうした「よろめき」や「もつれ」は、従来のコミュニケーション論においては「周辺的」で「派生的」な現象として視野の片隅に追いやられていたのであるが、そのことがもたらす損失はまことに大きい。そのような場所においてこそ、参与者たち自身が実際に、より大きな構造に触れているからである。相互行為の領域において、より大きな構造の痕跡を見いだすためには、しばしばもっとも微細な部分に注目することが重要なのである。

６章　経験を語り合うこと：拡大された行為スペースへの競合的共参加

１　はじめに

本章で行う考察は、ひとつのデータとの遭遇によって開始されたものである。まずそのデータの概略を説明する。

３人の大学生がそのうち一人の部屋で、ヘビイメタルロック音楽のビデオを流しながら会話している。自然に音楽のことが話題となり、その延長上でAは自分が「モーツアルトにはまる」経験をしたことがあると述べる（矢印１）。Ｂもすぐに「はまったよあたし」と共通の経験があることを主張し、曲名をリストアップしてその経験をもう少し詳しく語る（矢印２）。これに応じてＡも曲のジャンル名をあげ、自分の「はまった」経験をもう少し詳しく語る（矢印３）。二人が「はまった」のは同じ時期であることに気づいたＢがそれを確かめる質問をすると（矢印４）、二人はひとつのターンスペースに共に参加しながらその時期を一緒に想起する（矢印５）。そして二人は、これ以降えんえん 10 分以上、傍らにいるもう一人の会話者Ｃを置き去りにして、モーツアルトやその他のクラシック音楽に「はまった」経験を競うように語り続ける。

【抜粋１（７）：はまる話（簡略表記）】

(1)→ Ａ：あっ、モーツアルトにはまるとかはあるよー.
(2)→ Ｂ：はまったよあたし．受験期にはまったよレクイエムやろー、大ミサやろー、でフリーメイソンのためのなんや葬送曲ー？あっこらへん全部はまったもん.
(3)→ Ａ：あたしねえっ、歌劇？
　　Ｂ：んー.
(3)→ Ａ：歌劇、歌劇ってゆうかオペラっ.
　　Ｂ：んー.
　　Ｂ：［はまったー？
(3)→ Ａ：［モーツアルトほんま受験期にはまるなよーとか思い［ながら.
(4)→ Ｂ：　　［ちょっと待って一緒の受験期やから一緒にはまってたんちゃう？
(5)→ Ａ：だからー、うちらが入る年［のー　　あの　　モーツアルト２００年祭のー
(5)→ Ｂ：　　［入る年のー　　ねーあんときさー　　そうそうそうそうそうあれでさーもう、見まくってさ夜中に［入んのとかも全部ー.
　　Ａ：　　［んーん.

ここで生じたことは相手が自分と共通経験を持っていることの発見である。このような出来事は、程度の差はあれ、人々が互いの関係を再定義する特別な機会となりうる。自分のユニークな経験だと思っていたことが実は相手の生活史の中にもあることが分かると、その経験は「われわれの」経験として再定義され、それぞれの生活史の一部が書き換えられる。人間が誰しもただひとつの生活史しか持つことができないことは、人々を互いにユニークな存在として分離させるもっとも基本的な生の条件である（Goffman 1963a）。共通経験の発見は、この生活史的分離を出し抜くひとつの基本的機会で

ある。

では、こうした機会はいかにして作り出されるのか。一方で、人々は社会構造的に水路づけられた生を送るしかない以上、多くの人々が一定の類似性を備えた多数の経験ストックを持つことは蓋然的である。しかし他方、人々が生活史的に分離されている以上、それら多数の類似した経験の多くは、共通経験として発見されることはないままだろう。どうして特定の経験だけが、共通経験として発見されうるのか。また、なぜこの特定の会話のこの時点で共通経験の発見がなされたのか。

出発点に据えるべき単純な事実は、共通経験の発見という出来事がたいてい会話の中で生じるということである。共通経験が発見されうるのは経験が語られることを通じてである。特定の経験が、特定の会話の特定の時点で共通経験として発見されうる理由を説明しうるとしたら、考えられる唯一の道は、経験が会話の中で語られる手続きを分析することである。共通経験の発見を可能にするような仕方で経験を語るとはどのようなことなのだろうか。それはどのような発話連鎖手続きを用いて、どのような会話への参加の形式を通じて成し遂げられるのか。これが、このデータから浮かび上がる第一の問いである。

このデータで生じているもうひとつのことは、発見された共通経験がえんえん 10 分以上にわたって、次々とひもとかれていることである。このとき、二人のあいだで会話は、明らかな盛り上がりを見せている。なぜか。それは、二人がこの話題にたいへん興味を持っており、いいたいことがいくらでもあるからである。しかし他方でわれわれは、自分がいいたいことをいえないまま会話を終えることがなんとたくさんあることか。なにごとかに興味を持っていることやいいたいことがあることは、会話の中でそれが実際にえんえんと語られうることを、せいぜい部分的にしか説明しない。重要なのは、二人が競い合うように共通経験をひもとくという参加の形式が、いかなる会話手続きによって可能とされているのかである。そのような記述を構成すること、これがこのデータから浮かび上がる第二の問いである。

以下の考察は、これらの疑問に答える形でこのひとつのデータを記述することを目標にしている。この目標設定を、個性記述的な事例研究だと理解してはならない。ひとつの希有な事例が産出されるのは、他の多くの平凡な事例において繰り返し用いられる個々の手続きが、その事例においてある仕方で重なり合うからにほかならない。ひとつの事例を十分に記述する作業は、必然的に、他の多くの事例において用いられている手続きをひとつひとつ分離し、その働きを特定する作業を伴う。ここでめざされるのは、多くの平凡な事例のみならずひとつの希有な事例をも産出することを可能としているような、会話手続きを記述することである。前の３つの章が、いわばパズルのピースをひとつづつ取り出してその形状を調べることに焦点を当てていたのに対し、この章ではいくつかのピースが合わさることでひとつの絵柄が出来上がる様子に焦点を当てようというわけである。

まず２節では、会話の中で自分の経験を語ることが、どのようにして開始されるのかを分析する。共通経験が発見されることが可能になるためには、まず一人が自分の経験を端緒的に語り始めなければならない。それはどのようにして行われるのか。３節では、一人の経験が端緒的に語り始められたとき、語り手と聞き手が互いの興味をモニターする機会がどのように作り出されるかを分析する。４節では、同じ発話連鎖上の機会が、聞き手による共通経験の探索や探索結果の報告機会としても利用可能であることを明らかにする。そして、その利用の仕方には共通経験の探索を続けることを可能にする手続きが含まれるとともに、共通経験の発見の機会を作り出す手続きも含まれることを明らかにする。５節では、以上の分析によって見いだされた知見を上にあげたひとつの事例に適用し、この事例において、共通経験の探索・発見・ひもときがどのような手続きによって可能になっているのかを

分析する。最後に６節では、本章の分析が、拡大された行為スペースにおける複数の話し手のあいだの参加の組織化の一例であることを論じる。

２　私事語りの機会づけられた開始

ここで「私事語り」と呼ぶ発話タイプとは、「わたしは」「おれの」「うちの場合」などの一人称代名詞を典型的に含み、そのような発話を行わなければ相手に知られることのない自分の経験（身の上に生じた出来事や生活習慣や好き嫌いなど）を語ることである。それは、たとえば「秘密の告白」とか「悩みの打ち明け」といった何らかの深刻な問題に関わるものである場合もあるが、「私ごと」という言葉が持つニュアンス通り、ひとつひとつをとってみればさしたる重要性を持たない個人的経験の語りである場合がほとんどである。私たちの会話のほとんどは、そのようなとるに足らない「私ごと」を語ることから成り立っている[1]。

しかし、このことは私事語りが何の制約もなくいつでも気の向くままに行うことのできる発話であることを意味しない。むしろ、会話の中で私事語りが開始されるときには、共通した手続きが繰り返し観察される。このような規則性は、私事語りが方法的に開始されていることを示唆する。それはどのような方法であるのか。Sacks が指摘したように、自分の経験が自分だけのユニークなものであるかどうかを知るための最初のステップは、まず自分の経験を語ることである（Sacks 1992 vol.2: 258）。共通経験の発見を可能にするこの最初のステップにはどんな相互行為上の問題が関わっており、私事語りの開始はそれへのどんな解決として組織されているのか。

２．１　もうひとつの事例

私事語りが開始される第一の方法は、先行するやりとりにおいて言及された出来事に対するもうひとつの事例として自分の経験を報告することである。次の【抜粋２（７）：武井と涼子】は、【抜粋１（７）：はまる話】と同じ会話のもう少し前の部分である。部屋の中でヘビイメタルロック音楽が流れており、会話者たちの共通の知人「涼子」と「武井」が「この手（＝ヘビイメタルロック音楽）」を好きだということが報告されている（1-5 行目）。このあとで、「この手」と同じタイプの「この道」という指示形式で、今流れている音楽を指示しつつ「あたしこの道だけははまらんとこうと思っててん」というとき（7 行目）、Ｂは直前に報告された第三者の事例に対するもうひとつの事例として聞きうる位置で、そのように聞きうる形式を用いて、自分の経験を報告している[2]。

【抜粋２（７）：武井と涼子】
((部屋の中で流れているヘビイメタルロック音楽のことが話題になっている。))

01 Ｃ：うん武井は分かるけ［ど:,
02 Ａ：　　［うん．＝
03 Ｃ：＝涼子は違うと思ってた:.
04　　(0.2)
05 Ｂ：涼子も聴く:この手:.
06　　(1.8)
→ 07 Ｂ：あたしこの道だけははまらんとこうと思っててん.

もうひとつ例を挙げよう。次の【抜粋３（10）：すっごい関係ないこと】は、ある学童保育所の職場会議が始まる前に、職員たちが作業している場面である。Ａが時間を尋ねる（1 行目）と、Ｃは「あと５分」（4 行目）と答えたあとで、自分の答え方が質問と適合していないことに気づき「今何分てこゆ聞かれてあと５分て」（8 行目）と笑いながら自己コメントし、これにＢとＡが「的確な答えではないですね」「うん(0.3)分かりますけどね」（10-11 行目）と同意すると、さらに「答案用紙に書いたらバツってつけられて」と自虐的なコメントを発する（13 行目）。これに「そう的はずれな」（15 行目）ともう一度同意したあとで、Ａは「あたし前すっごい関係ないこと書いてしまっ(たことある)」（21 行目）と、自分の経験を報告する。この報告を聞いて、Ａが「書いた」場所は「答案用紙」だと理解するために、聞き手は先行文脈を参照する必要がある。Ａの省略された発話デザインはこの聞き方をインストラクトしており、Ｃが言及した仮想された事例に対するもうひとつの事例として聞かれうる位置と形式で、自分の経験を報告している。

【抜粋３（10）：すっごい関係ないこと】
((ある学童保育所の職員５人が、職場会議の開始時間を待ちながら作業をしている。なお「＊」を付した行は作業に関わるやりとりで、進行中の会話とは別のやりとりである。))

01 Ａ：今なんぷ:ん？
02 (0.3)
03 Ｄ：い［ま:？
04 Ｃ：　［あと５分.
05 (1.6)
06 Ｂ：°(……)°
07 (1.6)
08 Ｃ：°今何分て°こ(h)ゆ(h)聞かれて「あと５分」て，＝
09 ？：＝あはは＝
10 Ｂ：＝的確な答えではないですね(h):［hhh
11 Ａ：　［うん(0.3)分かりますけどね:.　＝
12 Ｂ：＝ん［:.
13 Ｃ：　［あはっは答案用紙に書いたらバツってつ(h)け(h)られて(h)［.hhh あはははははっ
14 Ａ：　［そう.
15 Ａ：そう的外［れな.
＊16 Ｄ：　［(うさぎ) のこと［と:,
17 ？：　［あはっ
＊18 Ｅ：°はい°
19 (0.6)
＊20 Ｄ：それから(0.6)ええ［と::こ-
→ 21 Ａ：　［°あたし前°すっごい関係［ないこと書いてしまっ(たこ［とある)
＊22 Ｄ：　［高学年合宿:　［のことと:,

２．２　理由説明への埋め込み

第二の方法は、先行発話で述べられたことへの評価やコメントを行うとき、その評価・コメントへの理由説明の中に埋め込む形で自分の経験を報告することである。次の【抜粋４（３）：サンキューおじさん】では、直前に、ＣがＡにティッシュペイパーを取ってやると、Ａが奇妙な抑揚で「サンキュー」と礼をいっている。Ａはこの会話の中ですでに何度か奇妙な抑揚の「サンキュー」を連発しており、Ｃは１行目で「サンキューおじさんなりますよ」とＡをからかう。Ａはこれを聞くと「やめて:なそれ」「おじさんゆうの困るな」と文句をいい（2-4 行目）、「おじさん呼ばわりされるの塾だけでええわ」とその文句に理由を付している（07 行目）。そして、この発話自体は文句への理由説明として提出されているものの、その中に自分が「塾」で「おじさん呼ばわり」されているという経験の報告が埋め込まれている。

【抜粋４（３）：サンキューおじさん】

((ＡがＣにティッシュペーパーを取るよう頼み、Ｃが渡す。Ａは奇妙な抑揚で「サーンキュー」と礼を言う。そのあと))

01 Ｃ：＝もサンキューおじさんなりますよ.
02 Ａ：やめて:なそれ.
03　（1.2）
04 Ａ：おじさんゆうの困るな:.
05　（0.6）
06 Ｃ：サンキューおにい［さん.
→ 07 Ａ：　　［ん:. おじさん呼ばわりされるの塾［だけでええわおれ.
08 Ｃ：　　［ふっふ

もうひとつ例を挙げよう。次の【抜粋５（３）：登校拒否】は大学の研究室で行われた会話で、大学院生Ａがデスクの上に広げている「登校拒否」に関する論文のことが話題になっている。論文の著者が「＊＊栄養大学」の所属なのを見たＣは、「給食のメニューが登校拒否の原因になるというような内容の論文ではないか」という推測を行う（1-6 行目）。Ａは「給食だったら食わなかったらええわな:. そんなの」と、Ｃの推測を却下する（7-9 行目）。これを聞いたＢは「ぼくいつもパン:いっぱい机ん中ありましたもん」（11 行目）とＡへの賛意を表明する。Ｂは自分が給食のパンを食べずにうまくやっていたという、Ａの見解を裏付ける証拠を提出しているのである。【抜粋４（３）：サンキューおじさん】とは異なり、ここでＢは賛成の評価を述べたあとでその理由を付すのではなく、賛成理由を述べることをもって賛成している。そしてそれが同時に、自分の経験の報告になっている。

【抜粋５（３）：登校拒否】

((Ａがデスクの上に広げている登校拒否に関する論文が話題になっている。))

01 Ｃ：給 食 がいやで学校:の:登校拒否になるとかそうゆうことちゃ［います？
02 Ａ：　　［あ::あ給食
03　が［いやで.］
04 Ｃ：　［メニュー］メニューを:変えろと.
05　（.）

06 Ｃ：(ゆ［うことで).
07 Ａ：　　［食事だったら食わ:かったらええわ［な:.
08 Ｃ：　　［ふっふっふっ［ふっふっふ
09 Ａ：　　［そんなの.
10　　(0.3)
→ 11 Ｂ：ぼくいつもパン:いっぱい t-机ん中ありました(もん).

２．３　小括

以上二種類の手続き（もうひとつの事例、理由説明に埋め込む）は、会話の中で自分の経験を端緒的に語り始める手続きとして、私のデータの中に頻繁に見られた。私事語りが開始される手続きはこの２つに限るわけではないが、当面の目的にとってはこれで十分である[3]。というのは、共通経験の発見に至るような発話連鎖が形成されるためにはひとつの私事語りのあとにもうひとつの私事語りが適切に行われることが必要だが、この２つの代表的な開始手続きはその主要な手続き的基盤を提供しているからである。

第一に、私事語りを適切に開始する方法がもうひとつの事例として開始することであるならば、この手続きだけで､一人の私事語りを先行事例としてもう一人が私事語りを開始することが可能となり、こうして私事語りはいくらでも連続的に行われる可能性が与えられる。第二に、理由説明は、先行発話に「選好されない」反応を返すとき（たとえば、依頼を断る、反対意見を述べる、異なる感想を述べる、Yes/No 質問を否定するなど）に広く利用可能な発話タイプである（Pomeranz 1978, 1984, Levinson 1983)。そして後に詳しくみるように、相手が語り始めた経験と共通の経験がないことを述べるときにも、しばしば理由説明が付加される。それゆえ、私事語りが理由説明の中に埋め込まれうることは、相手と共通の経験がないときでも次に自分の私事語りを行う方法を提供している。これら２点がどのような重要性を持つかは、のちに明らかになるだろう。

さて、今見た２つの手続きに共通しているのは、私事語りが機会づけられた(occasioned)形で開始されるということである。それらは、自分の経験の報告が先行するやりとりと「話題上のつながり(topical coherence)」を持つものとして聞かれるために利用可能な手続きの一種である[4]。これらの手続きを用いることで、人は自分の「私ごと」が、今相手が注意を向けていることに関連があることを示すことができる。私事語りを、機会づけられた形で開始することは、耳を傾けるに値するものとしてそれを提出するという相互行為上の課題へのひとつの解決を与える。

本節では次のことを述べてきた。私事語りを開始する２つの代表的手続きは、もうひとつの事例として開始することと理由説明の中に埋め込むことである。これらの手続きに通底する基本的指向は、私事語りを機会づけられた形で開始することである。この点で、これらの手続きは、自分の経験を会話の特定の時点で耳を傾けるに値するものとして提出するという相互行為上の課題への、解決として組織されている。また、２つの代表的手続きは、最初の私事語りを開始するための手続きであるとともに、ひとつの私事語りのあとでもうひとつの私事語りを行うための手続き的基盤でもある。

３　興味の相互的モニター

３．１　部分的報告：聞き手の興味のモニター

機会づけられた開始が指向されることは、会話における話題の導入に関する一般的指向、すなわち

「一歩ずつの話題推移(stepwise topic movement)」への指向の一例である（Sacks 1992, Jefferson 1984, Foppa 1990, 串田 1997a)。しかし他方、私事語りは特有の性格を持った話題の一例である。ある人の経験は、それについて話す権限がその人だけに特権的に配分されうることがらである（Sacks 1992)。自分の経験を語り始めることを提案するとき、それは単なる話題の連続的推移の提案ではなく、会話への参加の構造を組み替える提案を伴う。つまり、それは今からしばらく自分が「話題上の話し手(speaker-on-topic)」（Jefferson 1993）と呼びうる立場を占める形で、拡大された行為スペースを投射することでもある。

自分の経験を端緒的に語り始める者は、そのような参加の組み替えを聞き手が承認するかどうか、すなわち、聞き手が自分の私事語りに興味を示すかどうかを知る必要に直面する。もしも、聞き手がまったく興味を示さない私事を語り続けるならば､それは不当に話し手の立場を独占することになり、語り手の相互行為能力や人格に関する何らかのネガティヴな評価をもたらす可能性がある。他方、相手の側からすると、私的経験を語るよう積極的に求めることは、プライバシーへの侵害になる可能性のあることである。聞き手の側も、語り手がそれを語りたいことを知る必要に直面する。では、こうした思弁的可能性は、実際に会話者たちによって指向されているだろうか。もしも指向されているなら、これらの問題への何らかの対処が会話者たちのふるまいの特徴として見出されるはずである。

まず注目すべきことは、私事語りを端緒的に開始する発話が、多くの場合、機会づけられているという特徴を持つとともに、部分的報告という特徴を持つことである。自分の経験を部分的に報告することで、語り手は「まだ語りうることがある」ことを示しつつも、それをさらに語る機会を与えるかどうかを聞き手の選択に委ねることができる。これらの発話には、「ぜひ語りたいことがある」ことが明確に示されるものから、「相手が興味を示すならば語りうることがある」ことがほのめかされる程度のものまでヴァリエーションがあるが、ここではそれらのあいだの差異には立ち入らずに、部分的報告であるという共通性に着目して先に進もう。

次の【抜粋６（８）：全セミ】では、語り手は「あのね」という典型的な「告知先行語句(pre-announcement)」に続いて、「すごかったもん」と自分の経験の価値だけを端的に主張する形に発話をデザインしている。この発話は、「すごかった」と価値づけられる出来事が述べられていないという意味で部分的である。Pomerantz が明らかにしたように(Pomerantz 1984)、会話の中ですでに知られた対象に関して評価が行われるときには、聞き手が次にその評価への同意ないし不同意（「第二の評価」）を表明することが連鎖上の含みとなる。これに対し、この発話のように未だ聞き手に知られていない事象に関して評価のみを先行して表明することは、さしあたり語りに耳を傾けるよう求める手続きとなりうる。

【抜粋６（８）：全セミ】

01 Ｂ：あのね:,
02 (0.8)
→ 03 Ｂ：あたしだってすごかったもん全セミのとき.
(0.4)

次の【抜粋７（３）：サンキューおじさん（【抜粋４】の再掲)】では、語り手の発話はその主旨(thrust)を生み出すために聞き手が知らない出来事を利用する形にデザインされている。この発話は「おじさんゆうの困るな」（4 行目）という不平への理由説明としてデザインされており、不平を正当化する

ことがその主旨であるといえる。そして、この発話は「Ａが塾でもおじさんと呼ばれている」ことを含意している。しかし、これはこの時点まで聞き手に知られていない知識である。正当化という行為のために、聞き手がいまだ知らない知識に依拠している点で、この報告は部分的である。つまり、聞き手はその事象についてより詳しく聞くまでは、それが適切な正当化であるかどうか十分には知ることができない。

【抜粋７（３）：サンキューおじさん（【抜粋４】の再掲）】

04 Ａ：おじさんゆうの困るな:.
05　　(0.6)
06 Ｃ：サンキューおにい［さん.
→ 07 Ａ：　　［ん:. おじさん呼ばわりされるの塾［だけでええわおれ.
08 Ｃ：　　［ふっふ

以上のように、部分的報告を用いて「まだ語りうることがある」ことを示すことで、語り手はさまざまな程度において、聞き手がそれに興味を示すよう誘いかけることができる。しかしながら、この連鎖上の含みは隣接ペアの第一部分のように強力なものではない。それは聞き手が次に興味を示すことを義務的にするものではない。むしろ、聞き手が自ら進んで興味を示したいならばそのための機会を与えるという、選択的な(optional)連鎖上の含みを持つものと考えられる。語り手は、このような性格を備えた発話によって、聞き手の興味をモニターする機会を作り出すことができるのである。

３．２　先に進む機会の提供：語り手の興味のモニター

機会づけられた部分的報告によって開始される発話連鎖の軌跡はきわめて多様である。ここでは、それらのあいだの違いに関して、大きく２つの参加の構造（「単線的な参加構造」「複線的な参加構造」）を実現するものに分けるという分析の水準にとどまることにする。まず３．２、３．３では、機会づけられた部分的報告をさらに展開する機会を、聞き手が語り手に与えるときに生み出される発話連鎖を検討する。このとき、語り手のみに話題上の話し手という立場を割り当て、一人の語りを先に進めることを主軸としてやりとりが組織されるという意味で、「単線的(linear)」な話題への参加構造が作り出される。

一般に相手の知らない自分の経験を十分に語るためには、いくつかのターン構成単位を用いて語りを組み立てることが必要となる。私事語りが行われるためには、そのための拡大された行為スペースが語り手に与えられなければならない。このためのもっとも強い方法は、聞き手が積極的に語りの展開を要求することである。たとえば次の【抜粋８（３）：免停】では、ＣがＢに「この前免停になりかけたんでしょ」（1 行目）と誘い水を向けると、Ａは「なんで:なんでなんでなんで何したん？何したの？」（4 行目）と強い形でＢに詳細を語ることを要求している。

【抜粋８（３）：免停】

01 Ｃ：あこの前免停になりかけたんでしょ(.)試合の日.
02　　(1.0)
03 Ｂ：な‐(.)ふあ［:::っ
→ 04 Ａ：　　［なんで:なんでなんでなんで何したん？何したの？

しかし、このような強い方法が、機会づけられた部分的報告のあとで用いられることは、私が収集したデータではまれである。【抜粋８（３）：免停】においては、Ｂが自ら部分的報告を行ったのでなく、事情をうすうす知っているＣがまず誘い水を向けている。そしてこのことが、少なくとも部分的には、Ａのこの強い出方を可能にしていると思われる。Ｃがすでに知っていることが表明されている以上、それは純然たるＢの私事ではないからである。Ａが用いた強い形式は、自分だけが知らないことを語る要求という行為の性格に見合ったものであると考えられる。これに対し、当人による機会づけられた部分的報告に対しては、多くの場合、聞き手はより微妙な手続きを用いる。

第一の手続きは、部分的報告を、聞き留めたこと、および／あるいはそれを理解したことを表示することである。この手続きは、もしも語り手がさらに語りを展開する用意があるならば、それを行う機会を語り手に提供することができる。それは語り手が望むならば、先に進むことを促す手続きとなる。これはいくつかの異なった形で行われ、それらのあいだには他の点で相違があるが、語り手が自発的に語りを展開する機会を与えるという点では共通している。

次の【抜粋９（３）：堺】では、Ｂが機会づけられた部分的報告を行うと（1 行目）、Ｃは笑いで反応することによって、何らかの理解がなされたことを表示している（2 行目）。語り手はこれを受けて自ら語りを展開し（3 行目）、同じことが再び（3-4 行目）、また三度（5-6 行目）繰り返されたあと、語り手は独り言のような発話デザインで私事語りを終了に持ち込む（7 行目）。

【抜粋９（３）：堺】

((Ｃが自分の家からかなり離れた堺市まで恋人を車で送っていくということが、この前に話されている。これを受けて、堺市でアルバイトしているＢが私事語りを開始する。))

01 Ｂ：俺なんか:(.)堺行ってもぜんぜん苦痛じゃないけど［な:.
→ 02 Ｃ：［うっふ:っ＝
03 Ｂ：＝帰りに飲むからっはっはっ［は
→ 04 Ｃ：［ふっ
05 Ｂ：俺もう堺でがんばって(h)(ま(h)す(h)け(h)ど(h))っは:［:っ
→ 06 Ａ：［ふっ:::＝
07 Ｂ：＝ま(h)た(h)飲み屋に行く口実ができる(な).

次の【抜粋 10（８）：全セミ（【抜粋６】の再掲)】では、Ｂが機会づけられた部分的報告を行うと（1-3 行目)、Ｃは間隙ののち「そうなん？」と聞き留めたことを示しつつ確認を求めている（5 行目)。語り手は次いで、今の部分的報告をＡに向けてデザインし直し（6 行目)、Ａも「あ:あ:」と理解したことを表示する（7 行目)。こうして二人の聞き手のそれぞれから聞き留めた／理解したという反応を受けたあとで、語り手は二人に向けて語りを展開しはじめる（9 行目)。

【抜粋 10（８）：全セミ（【抜粋６】の再掲)】

01 Ｂ：あのね:,
02 (0.8)
03 Ｂ：あたしだってすごかったもん全セミのとき.
04 (0.4)

→　05 Ｃ：そうなん？
　　06 Ｂ：全国セミナーっていう［んがあってサークルの［とき.
→　07 Ａ：　　［うん　　［あ:あ:.
　　08　　(0.6)
　　09 Ｂ：もうばっくれ状態.

以上のように、語り手が望むならば先に進むことが可能な機会を作り出すことによって、今度は聞き手の方が、語り手はそれを展開したいかどうかをモニターする機会を手に入れることができる。そこで、この最初の機会に語り手が自ら語りを展開するとき、語り手が語りたいことが観察可能になる。また、最後のケースに見られたように、語り手はそれを誰に向けて語りたいかを示すためにもこの機会を利用することができる。こうして、語り手がどの程度、どのように語りたいかを聞き手がモニターすることが可能になる。以上に見た発話連鎖形式は次のように表記することができる。

１Ｘ　機会づけられた部分的報告
２Ｙ　先に進む機会の提供（笑い、聞き留めた表示、理解の表示など）
３Ｘ　私事語りの展開

３．３　語りの展開をめぐる交渉

しかし、語り手がこの最初の機会を別の形で利用することも可能である。今見たように、聞き手はたいてい強い形で展開を求めることはしないため、語り手はより明確な形で聞き手の興味を確認してから語りたいと思うかもしれない。もしも語り手がそうしたければ、語り手は最初に与えられた先に進む機会において、展開をパスすることができる。これによって、語り手は聞き手の興味を再びモニターする機会を手に入れることになる。ここで聞き手がなお語りの展開を促したいなら、聞き手はより強い手続きを用いなければならない。このために利用可能な手続きは、たとえば、次のようなものである。

次の【抜粋 11（３）：サンキューおじさん（【抜粋４】の再掲）】では、Ａの部分的報告（7 行目）のあとでＢは笑いによってＡが先に進みうる機会を作り出す（10 行目）。しかし、Ａはここで語りを展開せず、長い間隙が生じる（11 行目）。これによって、Ｂは別の仕方で語りの展開を促す必要に直面する。Ｂは自分の理解をチェックする質問を行い（12 行目）、これを受けてＡは語りを展開し始める（13 行目以降）。

【抜粋 11（３）：サンキューおじさん（【抜粋４】の再掲）】
　　07 Ａ：　　［ん:. おじさん呼ばわりされるの塾［だけでええわおれ.
　　08 Ｃ：　　［ふっふ
　　09　　(0.5)
　　10 Ｂ：んふっふっ
→　11　　(1.4)
⇒　12 Ｂ：塾ではそうゆわれてるん(ですか)？
　　13 Ａ：°うん°(.)いや塾では::おじさんともゆってくれない.
　　14　　(0.8)

15 Ａ：熊.

また、語り手が語りたいことと、聞き手がその語りに興味を持つやり方が異なることもありうる。そのような場合、聞き手は語り手による展開をより明確に促す代わりに、自分の興味をより明確に示すことで語りの展開を方向づけることもできる。

次の【抜粋 12（11）：寝られへん】では、Ａの部分的報告（1 行目）のあと、Ｂは「あ:あ:あ:あ:」（3 行目）と理解を主張することでＡが先に進みうる機会を作り出す。Ａは短い間隙ののち「それこそ」と発話を開始するが（５行目）、Ｂはやや遅れて「でも今年ようもってますもんね:」（6 行目）と同意を求める形にデザインされた発話を行う。これは Pomerantz（1980）が「釣り出し装置（fishing device）」と名づけた発話タイプの一例である。釣り出し装置とは、相手の私事について自分の「限られたアクセス」を示しつつ描写を行うことで、相手がより「権威のある」描写に置き換えることを誘う手続きである。それはいわば婉曲な質問として聞かれることで、語りの展開を求める手続きとなりうる。だが、このケースの場合、Ｂはたんに語りの展開を求めているのではなく、最初の機会に自ら展開し始めた語り手とオーヴァーラップして、別の展開へと語り手を方向づけている。Ａはこれにまず「うん」とだけ応じ、展開をパスする（7-8 行目）。が、長い間隙ののち、Ｂが「ね:」と念押しの形でもう一度展開を方向づけるとき（9 行目）、Ａの方も自ら方向づけに応じた語りを展開し始めている（10 行目）。ここで生じていることは、いわば、Ａが愚痴をいい始めたことを見て取ったＢが、Ａの語りを愚痴とは異なる方向に展開するように方向づけたということである[5]。

【抜粋 12（11）：寝られへん】

01 Ａ：ま僕はな:(.)よっぽどしんどない限り寝られへん゜(からな)゜.
02　　(0.3)
03 Ｂ：あ:あ:あ:あ:.
→ 04　　(0.3)
05 Ａ：それこそ［もう頭痛-,
⇒ 06 Ｂ：　　［でも今年よ-ようもってますもんね:.
→ 07 Ａ：うん.
→ 08　　(2.4)
⇒ 09 Ｂ：［ね:.　.
10 Ａ：［体調ええねん.

以上２ケースのように、語り手は最初の機会をパスすることで、聞き手に興味をより強い形で表明させてから語りを展開することもできる。また聞き手の方は、たんに語り手が先に進む機会を提供するだけでなく、自分の興味に合わせて語りの展開を方向づけることができる。理解のチェック質問や釣りだし装置という手続きは、聞き手の興味のあり方をより明確に観察可能にすることで、このような語りの展開をめぐる交渉の道具となる。以上に見た発話連鎖形式は次のように表記できる。

１Ｘ　機会づけられた部分的報告
２Ｙ　先に進む機会の提供
３Ｘ　展開のパス　　／　語り手なりの展開の開始

４Ｙ　先に進むことの要請　／　別の展開の方向づけ
５Ｘ　批准された方向への私事語りの展開

このことは語りの展開の仕方が聞き手の興味の示し方によって制約されることを意味する。それゆえ、もしも語り手に語りたいことがあり、それをフリーハンドで語りたいなら、語り手は最初の機会で直ちに語り始めるのがもっとも確実である。このとき聞き手には、語り手が語りたいことが観察可能になる。他方、語り手に語ってもいいことがあり、聞き手の興味をはっきり確認したうえでそれに沿って語りたいなら、語り手は最初の機会をパスすることができる。このとき語り手には、聞き手が興味を持っていることやその興味の方向性が観察可能になる。このように、以上の発話連鎖形式は、語り手が語りたい度合いや聞き手が聞きたい度合いを、互いにモニターしつつ会話を進めるための秩序だった手続きなのである。何ごとかへの興味という心理的動因は、こうして相互行為の手続きに制御されて観察可能になり、観察可能になることによってのみ相互行為の進行に影響を及ぼす[(6)]。

逆にいえば、これらの発話連鎖手続きは、興味のあることや話したいことが実際に話されるかどうかを制御する装置として作動する。部分的報告だけを行うことは、聞き手の興味をモニターするという仕事を果たすために、話したいことを話す機会を失う可能性へと身をさらすことでもある。展開のパスは、聞き手が明確に興味を示したうえで語ることを可能にするとともに、語りが結局展開されずに終わってしまう可能性へと身をさらすことでもある。こうした可能性は、次節で詳しく見るように、これらの選択肢で満たされうる発話連鎖上のスロットが別の形でも利用されうることによって、現実のものとして与えられている。

本節で示してきたことはこうである。語り手は、私事語りの開始を部分的報告としてデザインすることで、まだ語りうることがあることを示すとともに、聞き手の興味をモニターする機会を作り出すことができる。聞き手は多くの場合、積極的に語りの展開を要求するのではなく、語り手が望むならば語りを展開できる機会を提供する。（もちろん、ここでは例をあげなかったが、聞き手がこの反応をも行わない場合、語り手は聞き手の興味がないことをモニターできる。）語り手は最初の機会に自ら語りを展開するか、展開をパスしてふたたびモニター機会を作り出すかを選択できる。聞き手も、自分の興味に応じて語りの展開を方向づけることができる。このように、部分的報告から始まる発話連鎖は、語り手と聞き手が互いの興味をモニターする機会を組織することで、私事語りとそれによって導入される話題の価値を観察可能にする装置になっている。

４　共通経験の探索と発見の手続き

前節で見た発話連鎖形式は、部分的報告によって導入された話題が、その発話者を唯一の話題上の話し手とする形で話題として取り上げられていくという意味で、単線的な参加構造が作り出されていく手続きであった。これに対し、同じ発話連鎖上の各位置は、複数の者を話題上の話し手とする形で話題を形成していくためにも利用可能である。つまり、以上に見た発話連鎖上の各位置には「複線的な(multi-linear)」参加構造のもとで話題を形成していくオプションが開かれている。

４．１　探索スペース

語りが展開されることを促す／求めることができる機会は、他方で、聞き手が自分も共通経験があることを主張したり、その部分的報告を開始したりすることが可能な機会でもある。早いときには、

聞き手は部分的報告の直後のスロットでこれらを行うことがある（後述）。ここから逆に、語り手に展開の機会を与えるという選択を聞き手が行うとき、それは、自分にも共通の経験があるかどうか知らせるのを、聞き手が遅延させる方法になっていると見ることもできる。聞き手がさしあたり語り手に語りを展開させその成り行きを見ることは、自分にも共通の経験があるかどうかを探索する探索スペースとして利用されることも可能である。このような場合、聞き手は語りを最後まで聞いたあとで、そのあいだに見いだした自分の共通の経験を報告する。

このことは、次の【抜粋 13（８）：本とＣＤ】に見て取れる。Ｂの部屋には本が多いということが話題になったあとで、Ｂは「また増えたのよね」と部分的報告を行う（1 行目）。ＡとＣはこれに展開の機会を与え、Ｂは長いターンを用いて語りを展開する（3-12 行目）。この長いターンの完了可能点付近で、ＡとＣは「うんうん」「おんおんおん」とさらに展開の機会を与える（13-14 行目）。今度はＢは「うん」というだけで展開をパスする（15 行目）。ここまでの発話連鎖は、すべて前節で見た手続きを用いて産出されている。それゆえ、ＡやＣがさらに展開を求めたければ、ここはより強い手続きを用いて先に進むことを要請することのできる連鎖上の位置である。しかし、Ａはその代わりに、もうひとつの事例として、自分のよく似た経験を語り始めている（17 行目）。

【抜粋 13（８）：本とＣＤ】
((Ｂは自分の部屋に本が多いということが話題となっている。))

01 Ｂ：また増えたのよね.
02 Ｃ：［ぷっ［ふっ
03 Ｂ：　　［だから:［(.)もう置く場所なくて困っってて:,
04 Ｃ：　　［っへっへ
05 Ａ：うん．＝
06 Ｂ：＝〈ＣＤ〉を:(.)今動かしたの．ＣＤこういうボックスに入れてたんだけ［ど:,
07 Ａ：　　［うん.
08　(0.3)
09 Ｂ：それを〈出し〉て::あの(0.3)ダンボールを:(0.4)真ん中で割っっって,
10 Ａ：うん．＝
11 Ｂ：＝それを(.)横にこういうふうに並べて置いて(.)それの中にＣＤをこういうふうに
12　つっこんで［入れたん.
13 Ａ：　　［おん［おんおんおん.
14 Ｃ：　　［うんうん.
15 Ｂ：うん.
16　(0.8)
→ 17 Ａ：あたしもＣＤがねえ(0.8)この〈２回〉ぐらい？
18 Ｂ：うん．＝
→ 19 Ａ：＝もらいに行ったらもう完璧入んないあん中.

Ａが開始した第二の私事語りが、Ｂによる第一の私事語りに対してどのような関係を持っているかに注目しよう。Ｂが語っていたのは、本が「また増えた」ので「困って」、それを収納するために「ＣＤを今動かした」ということである。これに対し、Ａが語り始めたのは「ＣＤが」「入んない」とい

うことである。Ｂの部屋には本が増えたのであるが、Ａの部屋ではＣＤが増えたのである。二人の経験は、よく見ると食い違っている。しかし、Ａは「あたしも」という共通性を主張する形に発話をデザインしている。また、本がまた増えて「困った」というＢの語りが一種の愚痴（ないし自慢）であるのと同様に、Ａの発話もＣＤが「完璧入んない」という愚痴（ないし自慢）である。Ａは自分の経験をＢの経験と共通のものとして語る工夫をしている。そして、Ａが語りを開始したのは、本が「また増えた」とＢが述べた最初の完了可能点（1 行目）でも、「ＣＤを動かした」と述べた２回目の完了可能点（6 行目）でもなく、ＣＤを「こうゆうボックス」から「出した」（6-9 行目）ことが述べられたあとである。ここから、ＡはＢの語りの中にこの詳細が現れるのを聞く中で、ＣＤを（おそらくＣＤ専用の）ボックスに収納していない点に共通性を見出し、自分の経験を共通の経験として語る手がかりを得たのだと考えられる。

このように、語り手に語りを展開させることで単線的な参加構造を作り出すことは、聞き手にとって共通経験を探索するスペースとしても利用可能である[7]。聞き手が語り手の私事語りに興味を示して展開を促すとき、その興味には、自分の私事語りを開始する手がかりを見つけだすという関心も含まれうる。この点で、単線的な参加構造を作り出す手続きは、たんに語り手が語りを展開する機会を作り出すだけでなく、聞き手が共通経験を探索する機会も作り出す。

４．２　共通経験の主張と報告

ところで、Sacks によれば、一人が自分の経験を語ったあとでもう一人が次に自分の共通経験を語ることには、会話において「聞く」ことのひとつの意味が含まれている（Sacks 1992 vol.1: 768）。彼は、Fromm=Reichmann が精神療法家の訓練について、「精神療法家は相手の問題を聞いたとき、自分自身の経験を想起しないように聞く訓練をしなければならない」と述べていることに注目する。Sacks がこの点に興味を持つのは、もしも自分の経験を想起しないように聞くことが特別な訓練を必要とすることなら、逆に非精神療法的な会話において聞くということの中には、自分の経験を想起するように聞くことが自然に含まれていると考えられるからである。

ではどうして、非精神療法的な会話において、聞くことは自分の経験を想起することを伴うのか。会話において参与者が行う基本的な仕事のひとつは、相手の発話を理解したことを何らかの仕方で観察可能にすることである。そのひとつは理解を「主張（claim）」することだが、これは理解を観察可能にする方法としては弱い方法である。なぜなら、人は分からないときでも「なるほど」と理解を主張することで、分かったふりができるからだ。より強い方法は、理解を「立証（prove）」ないし「陳列（exhibit）」すること、すなわち自分が理解したかどうかを相手が分析して見つけ出すことができるような発話を行うことである。そして、一人が自分の経験という特権的に接近可能なことがらを語ったとき、それを理解したことを立証・陳列するために利用可能なのは、もう一人が自分の側のどんな経験をどのように想起したかを発話の組み立てにおいて示すことである。相手はそれを分析することで、理解がなされたのかどうかを見つけ出すことができる。

理解の立証・陳列のために利用可能なリソースとして、位置のリソースと形式のリソースの二種類が考えられる。次の【抜粋 14（２）：茶碗が三つ】について、まずこの二種類のリソースを見たあと、さらに二つの点に言及したい。

【抜粋 14（２）：茶碗が三つ】
((大学生数人と教師Ｋが研究室で会話している。自宅通学と下宿生活との比較が話題になっている。Ｋが「下宿すると親が子離れしてよい」という見解を述べると、Ｂはそれに「そうかなあ」と疑問を呈したあと、次の発話を行う。))

01 Ｂ：でも帰ったときに茶碗が三つ(.)だかお父さんとお母さんと弟の分しか
02　　出されない［のって(h)すっごい悲(h)しいけど.
03 ？：　　［あっはは
04 Ｋ：んっ［ふっふ
→ 05 Ｅ：　　［あ:あ分かるそれ:(h):(h)［うちも
06 Ｂ：　　［あはっ(.)あはっ［.hhhh「ちょっと(.)３つしか→
→ 07M：　　［あ:僕なんかもう(.)僕の＝
08 Ｂ：→［ないよ」って.
→ 09 Ｍ：　［部屋なくなってますもん．おっほ
10　　(0.7)
11 Ａ：う::ん．＝
12 Ｓ：＝応接間で寝ちゃったりする.
13 Ａ：ふ［::ん.
14 Ｓ：　［たいがい.
15 Ｍ：僕なんか居間に布団敷いて寝かされますか(h)ら(h)ね(h)んふふふ
16 Ａ：ん::［:ん.
17 Ｂ：　［それはないけど．おっ(.)部屋はあるけど.

第一に、理解の立証・陳列のリソースについて。位置のリソースとは、Ｅが用いているものである。Ｂの第一の私事語り（1-2 行目）が完了可能点に達すると、Ｅはすぐ「あ:あ分かるそれ::うちも」と自分にも共通の経験があることを主張している（5 行目）。この発話は主張としてデザインされているが、それは最初の可能な機会に行われていることで、Ｅが共通経験を想起するのに探索スペースを必要としなかったことを示している。Sacks によれば（Sacks 1992 vol.2: 257）、この位置どりは相手と「心がひとつになっている」ことを立証・陳列するためのひとつの有効な方法でありうる。Ｅは、形式としては主張である発話を用いながら、それを配置する位置によってより強いことを行っている。

形式のリソースは、Ｍが用いているものである。ＭはＥの発話のあとで発話を開始しており（7 行目）、位置に関してはＥよりも弱いリソースを用いている。しかし、ＭはＢの語りには含まれていなかったことを自分の経験から探し出してきて報告する（7-9 行目）ことで、Ｂの経験を「下宿すると実家に自分の居場所がなくなる」経験として理解したことを立証・陳列している。

第二に、理解を立証・陳列することを通じて行われている行為について。【抜粋 14（２）：茶碗が三つ】は「自宅通学と下宿生活とどちらがよいか」という話題をめぐって見解を述べ合うという活動の中で生じたものである。Ｂの第一の私事語りは、それに先立ってＫが表明した見解への不同意理由に埋め込まれて開始されている。それゆえ、ＥとＭはＢと共通の経験があることを表明することによって、Ｂが表明した見解（＝下宿生活に関する不平）に同意しているといえる。この同意という行為の行われ方に注目すると、ここでもＥとＭには相違がある。

相手の見解に同意することは単に同じ見解を表明することではない。そこでは同意を求める側と同

意する側という非対称な立場が作り出されうる。Ｅの「あたしも」という発話デザインは、自分が同意する側であることを示している。これに対し、Mは自分が同意する側になることを避ける工夫をしている。人はしばしば、相手の発話を聞く前から自分が抱いていた見解が、たまたま相手の口から先に出てきたために、それに同意する立場に追いやられることがある。このとき、その立場を回避しつつ同じ見解を表明するために利用可能なひとつの方法は、自分がその見解を、相手とは独立に／相手以前に／相手以上に抱いていたことを示すことである。Mが行っていることはその一例である。Mは「僕なんか」という言葉で自分の経験が相手以上であることを主張するとともに、Ｂの経験よりも格上げ(upgrade)された経験（自分の茶碗が出されないこと＜自分の部屋がないこと）を報告することで、これを行っている。

ここから第三に、ＥとMの反応が有する連鎖上の含みの違いを考えることができる。Ｅによる共通経験の主張を聞くと、Ｂは自ら語りをさらに展開している（6-8 行目）。このことは次のように捉えられる。共通経験の主張という手続きは、共通経験があることを述べるだけでその経験を描写してはいない。それは機会づけられた部分的報告の一種である。それゆえ、この手続きはそれを用いた者が、その経験を語る用意があることを示すものと聞かれうる。ところが、これはすでに第一の私事語りを行うための行為スペースが投射されたあとで行われているので、その行為スペースにもう一人の話題上の話し手として参入する用意があるという連鎖上の含みを持ちうる。しかし他方、この手続きはいまだ共通経験自体はまったく報告していない点で、もう一人の話題上の話し手となる提案としては、もっとも弱い形式である。なぜなら、もしも第一の語り手がこの提案を認めたくないなら、たんに自分の語りを展開するだけでよいからである。

これに対し、格上げされた経験の報告という手続きは、やはり機会づけられた部分的報告の一種であるとはいえ、この連鎖上の含みに関してはるかに強い手続きである。なぜなら、それは第一の語り手が語りを展開するためのいわば「賭金」をつり上げているからである。格上げされた経験の報告によって、第二の語り手は、第一の語り手が投射した行為スペースにもう一人の話題上の話し手として参入する用意があることを示すと同時に、その話題を格上げされた形で展開するよう提案することができる。それゆえ、第一の語り手は、自分自身が話題上の話し手として参加し続けようとするなら、格上げされた経験に関して、自分の経験との共通性を承認または拒否するという選択に直面する。この点で、この手続きは、投射された行為スペースにおける話題上の話し手という立場をめぐって、二人を競合的関係に立たせる含みがある。このケースの場合、Mの格上げされた報告のあとでＢはすぐ反応を返さず、Mの格上げに応じているのはＳである(12-14 行目)。そして、Mはこれをもう一度格上げする(15 行目)。そして、ここに至って、第一の語り手であるＢは、経験の共通性を否認している（17 行目)。ここから分かるのは、格上げされた報告という手続きは、第一の語り手が話題上の話し手という立場から降りる機会にもなるということである。

まとめておこう。第一の語り手が機会づけられた部分的報告を行ったあとで、聞き手にはその展開の機会を与える代わりに、共通経験の主張や格上げされた共通経験の報告という形で、もう一人の話題上の話し手になる用意を示すという選択肢が開かれている。すなわち、複数の話題上の話し手を含んだ複線的な参加構造のもとで、導入されつつある話題を形成することを提案することができる。しかしながら、共通経験のあることが聞き手側から表明されるだけでは、いまだ共通経験の発見がなされるとは限らない。共通経験の主張に対しては、第一の語り手は自発的に語りを展開する形で応じる可能性があるし、格上げされた報告に対しては、話題上の話し手という立場から降りる可能性があるからである。いずれの場合にも、ふたたび単線的な参加構造へと戻っていくことになる。

４．３　経験の差異の主張と理由説明

機会づけられた部分的報告から始まる発話連鎖が、単線的・複線的という二つの展開の可能性を持つことを見た。しかし、部分的報告の聞き手にはさらに、もうひとつ別の選択肢が開かれている。それは次の【抜粋 15（８）：授業さぼった】に見られるような経験の差異の主張である。

【抜粋 15（８）：授業さぼった】

((嫌いな先生の前でどんな態度を取るかということがさきほどから話題になっている。))

01 Ｂ：゜あたし゜授業さぼったことあった.
02　　(0.8)
03 Ｂ：[高校んとき.
→ 04 Ｃ：[あそ:れはないか [な.
05 Ａ：　　[う [:ん.
06 Ｂ：　　[でも.
07　　(0.6)
→ 08 Ａ：授業はさぼんなかっ [た.
09 Ｃ：　　[う:ん.
10 Ａ：[とりあえず.
11 Ｂ：[゜出なかった. ゜＝
12 Ａ：＝うん.
13　　(1.3)

Ｂの部分的報告（1 行目）に続いて、やや長い間隙が生じる（2 行目）。Ｂは聞き手からの反応がないのを見て自ら語りを付け足すが（3 行目）、同時にＣは「あそ:れはないかな」と差異を主張し（4 行目）、Ａもこれに同意する（5 行目）。これとオーヴァーラップして、Ｂはさらに「でも」と付加する（6 行目）。つまり、Ｂは「高校んときでも」と発話を修正したのである[(8)]。しかし、この修正のあとでもふたたび間隙が生じ（7 行目）、今度はＡが「授業はさぼんなかった」と差異を主張し、Ｃが同意する（8-9 行目）。Ｂはさらに、「さぼった」を「出なかった」へと置き換えて報告を反復する（11 行目）が、Ａはこれを聞き留めるだけで（12 行目）、そのあと長い間隙が生じている（13 行目）。

では、ＡやＣは経験の差異を主張することで何をしているのだろうか。ひとつ気がつくのは、Ｂがこれらの差異主張のあとでそのつど報告に追加的成分を付加したり（「高校んとき」「でも」）、言葉を換えて報告をやり直したり（「さぼった」→「出なかった」）していることである。Ｂはこれらの反応を聞いて、報告を提示し直すことが必要だと見なしている。このことは、もしも報告が提示し直されないなら、聞き手はそれ以上その報告に興味を示すことをやめるという可能性にＢが指向していることを意味する。経験の差異の主張は、まず開始された私事語りの発話連鎖を終了に持ち込む準備として聞かれうる。

しかし、この記述はまだ不十分である。共通経験がないなら、聞き手はそれをわざわざ主張しなくてもよいはずだ。この発話連鎖を終了に持ち込みたいなら、聞き手は自分から新しい話題を提案することも可能である。しかし、ここでＣもＡも差異を主張するだけで、それ以上発話しようとはしていない。ここから、差異を主張することは単なる終了の提案なのではなく、むしろ語りが提示し直され

る機会を提供する手続きなのだと考えられる。それは聞き手がなおこの語りに興味を失っていないことを示す一方法であると考えられる。

この点をさらに掘り下げるために、先に引用した Sacks の講義において、「精神療法的な聞き方」と「非精神療法的な聞き方」が対比されていたことを思い起こそう。聞き手がわざわざ経験の差異を主張することで示すことができるのは、相手にある経験が自分にないということが述べるに値することだということである。この手続きは、相手の経験が自分の経験と比較可能なものとして聞かれたこと、それは自分にも当てはまりうるはずだと聞かれたこと、それを聞いて共通の経験があるかどうかを調べてみたこと、これらのことを示す方法になっている。つまり、それは相手と自分が共通の成員性(co-membership)を有することを示すひとつの方法なのである。「非精神療法的な会話」とは、互いが共通の成員性を有することを参照しつつ行われる会話であるといい換えることができる[9]。経験の差異を主張するという手続きは、人々が実際に共通の経験を見つけ出せないとき、にもかかわらず「われわれ」としてふるまうためのひとつの方法なのである。それは、個々人の経験の事実的分布によっては掘り崩されない「社会構造的」事実としての「われわれ」という関係が、会話の中で手続き的に実現されるひとつの例である。

このことは、このケースにおいて次に生じたことを見ることでさらに裏付けられる。

【抜粋 15（８）：授業さぼった（続き）】

11 Ｂ：[°出なかった°．＝
12 Ａ：＝うん.
13　　(1.3)
14 Ｂ：[出なかった.
→ 15 Ｃ：[あたし s-すぐわかるもんだ(h)って(h)授(h)業(h)さ(h)ぼ(h)っ [た(h)ら(h).
16 Ｂ：　　[う:ははっ.

Ｂが「出なかった」(11 行目）と報告を提示し直したあとで長い間隙が空くとき、この発話連鎖は終了の可能性に直面している（13 行目)。それゆえ、Ｂがもう一度「出なかった」(14 行目）と反復するとき、これは話題の継続の強い要請となる。ところが、これと同時にＣは別の仕方でこの話題を継続する工夫を行っている。それはＢと自分との経験の差異への理由説明を行うことである（15 行目)。Ｃは二人の差異を理由説明の必要なことだと見なしている。二人が共通の経験を持たないことに理由が必要だとしたら、それは二人が共通の成員性を有するからである。共通の成員性に指向することは、経験の差異を主張することを適切にするだけでなく、差異の理由を探すことも適切にする。Ｃはこうして、二人の経験の事実的相違によっては掘り崩されない「われわれ」という関係に指向していることを、ふたたび別の形で示している。

このように、「差異主張＋理由説明」という手続きは、聞き手が共通経験を想起できない場合にもなお、話題を継続する用意があることを示すために利用可能な方法である。ここで思い出してほしいのは、私事語りが機会づけられて開始されるひとつのやり方は、理由説明に埋め込んで行うことだということである。実際、Ｃの発話は理由説明に埋め込まれた私事語りとしてデザインされている。経験の差異の主張という手続きは、一方で発話連鎖に終了の可能性をもたらすものでありつつも、他方では共通の成員性に指向しつつ話題を継続する用意を示す方法であることによって、もうひとつの私事語りが理由説明に埋め込まれて行われる機会を作り出す。

４．４　先取りされた私事語りの承認

以上でようやくわれわれは、機会づけられた部分的報告の聞き手が第二の位置や第四の位置で行いうる反応の選択肢を、一通り分離して記述する作業を終えた。しかし、最後にもうひとつ見ておくべきことがある。それは共通経験の発見を相互的に批准された出来事として達成する手続きである。これを先取りされた私事語りの承認と呼ぼう。

次にあげる【抜粋 16（10）：すっごい関係ないこと（続き）】は【抜粋３（10）：すっごい関係ないこと】の続きである。Ａは「すっごい関係ないこと」と評価語を用いて、自分の語りの価値だけを端的に主張する部分的報告として私事語りを開始している（21 行目）。Ｂはこの発話を聞くとすぐに手に持っていたペンを置いてはたと顔を上げ、Ａの腕にＡを制止するように手を伸ばし（23 行目）、その姿勢を保持しつつ「あたしなっ(0.6)わからんかったらな」と第二の私事語りを開始している（25 行目）。そして、Ａの方が「うん」と先を促すことで（26 行目）、Ｂの方が先に自分の私事語りを展開し始める（27 行目）。

【抜粋 16（10）：すっごい関係ないこと】

((「＊」を付した行はここで注目する会話とは別のやりとり。))

21 Ａ：　　[゜あたし前゜すっごい関係［ないこと書いてしまっ(たこ［とある)

*22 Ｄ：　　［高学年合宿:　　［のことと:,

→ 23　　(0.7)((Ｂがペンを置いてＡに手を伸ばす))

* 24 Ｄ：[(……)

→ 25 Ｂ：[あ(h)た(h)し(h)な(h)っ(0.6)わからんかったらなっ,

26 Ａ：うん.

→ 27 Ｂ：あのテストとかで答えわからんかったらな<絶対>もう(.)とんでもないこと書(h)いてんにゃんか:.

まず今までの分析を踏まえて、Ｂの反応（23-25 行目）の特徴を要約しよう。１）位置のリソースの利用。Ｂの反応は、機会づけられた部分的報告の次の第二の位置、すなわち最初の可能な機会に開始されている。Ｂが発話を開始したのはやや間隙（23 行目）をおいてからだが、ＢはＡの発話が完了するとすぐ、書きものに使っていたペンをパタリと机の上に置き、続いてＡの方に手を伸ばし、Ａの腕を掌で押さえてから、この発話を開始している。２）複線的な発話連鎖の開始。Ｂは語りの展開を促したり求めたりするのではなく、自分の私事語りを開始している。このことは「あたしなっ」というターン冒頭で観察可能である。３）形式のリソースの利用。Ｂは何らかの独立にアクセスした自分の経験を報告しはじめている。ここでＢは、Ａの腕を掌で押さえる動作とともに、「あたしな」に笑いを重ねることで、自分が何かを想起したことを強い形で示している。

この３つの特徴から、ＢはＡの部分的報告を聞いて何らかの自分の経験を直ちに想起したことを立証・陳列し始めていることが分かる。つまりＢは、Ａの部分的報告によって投射された行為スペースに、もう一人の話題上の話し手として参入する用意があることを強い形で示している。これを聞いたＡは、Ｂが「あたしなっ」といって 0.6 秒のポーズをおいた時点では反応を返していないが、「わからんかったらな」といった時点で「うん」と先に進むことを促している。「わからんかったらな」の時点で観察可能になるのは、ＢがＡの発話をひとつの仕方で理解したことである。Ａは「すっごい関

係ないこと」を「書いた」とだけ述べているが、それは「テスト」で「答え」が「わからんかった」ときであるに違いない。「わからんかったらな」は、Ｂのこの理解を陳列することで、Ｂが共通経験を想起したことをＡにとって観察可能にする。

先に進む機会を与えられたＢは、自分が答えの分からないときに「絶対もう」「とんでもないこと」を書いていると述べる。Ａが「書いてしまったことある」と少ない頻度の出来事の報告として発話をデザインしていたのに対し、Ｂはまず「絶対」という「極端な定式化」（Pomeranz 1986）を用い、「関係ないこと」よりもやや強い表現である「とんでもないこと」を用い、しかも「書いてる」と恒常的な出来事として報告することで、格上げされた形で自分の語りを展開し始める。そこで、もしもＡがこうして先取りして語られたＢの経験を聞いたうえで、なお二人の経験の共通性を承認するなら、そこでは経験の共通性の相互性が強い仕方で観察可能にされる。つまり、Ａの部分的報告を聞いただけでＢは直ちに独立の共通経験を想起し、Ｂがそれを格上げした形で語ったのを聞いてもなおＡは、二人の経験が共通であることを確認した、ということが観察可能にされる。このワンセットの手続きこそが、共通経験の発見を相互的に批准された出来事にしうる。続きを見てみよう。

【抜粋 16（10）：すっごい関係ないこと（続き）】

27 Ｂ：あのテストとかで答えわからんかったらな〈絶対〉もう(.)とんでもないこと書(h)いて
28　　んにゃんか:.
29　　(0.6)
30 Ｂ：で(.)返ってきたらな:(.)笑(h)けんにゃんか.［でも(.)そんときは＝
→ 31 Ａ：　　［ああ.
32　　すごい［必死に考えて出てきた答えがそれやね［ん.
→ 33 Ａ：　　［そう(.)あたしも,　　［ん:. 船で来た(0.3)な(.)な(0.4)船で
→ 34　　来たのは何人(ナニジン)ですかっての３人て書いたことあんもん［あたし.
35 Ｂ：　　［あはっは:
36 Ｃ：あっはっ［はっはっははっはは:あはっ
37 Ｄ：　　［な(h)んて:？あっはっはっはははは:
38 Ｃ：ナニジンじゃなくてナンニ(h)ン(h)［て(h)答えたん？
39 Ａ：　　［ナンニンと思ったから:(0.3)あ３人ぐらい
40　　かな:と思って［３人て書いてバツ.
41 Ｄ：　　［あっはっはっは
42　　(0.6)
43 Ｃ：hhhh［おっ［かしい:.
44 Ａ：　　［そんなんもある.
45 Ｂ：　　［まあそうゆうのあるよな:.
46 Ａ：あるやろ:.
47 Ｅ：んはは
48 Ａ：そんときはめっちゃ真面目に考えてんねん［けどな:.
49 Ｂ：　　［あと何の問題か忘れたけどな:
50　　なんかのテストでな:自分の答案用紙に「金魚」って書いてあってんやんか.

Aが「ああ」（31 行目）と反応しているのは、Bが自分の経験の固有の詳細（「返ってきたら」「笑ける」）を述べた直後である。Aは「そう」を用いて、これを自分の開始した活動を自分に代って促進したものと認定し、「あたしも」と共通性を主張し、そのあと初めて自分の語りを展開している（33-34 行目）。こうして、今やAの語りは、Bとの共通経験としての地位が相互に批准されたうえで、Bの語りを踏まえて展開されている。二人はこのあと、経験の共通性をふたたび確認し（44-46 行目）、さらにそれぞれの経験をひもとき始める（48-49 行目）。

このケースでは、このあとまもなく会議の開始時間が来て、二人の経験のひもときはそこで中断される。しかし、以上から分かるように、この外在的な事情による中断を除けば、このケースで生じたことは本章の冒頭に掲げたケースと同じタイプのものである。このように、先取りされた私事語りの承認によって、最初に投射された行為スペースに二人がともに話題上の話し手として参入し、複線化された参加構造の中で話題が形成される発話連鎖のことを、「相互的競合的私事語り」と呼びたい。

５．事例研究：共通経験の探索・発見・ひもとき

本節では、以上において分離・特定してきたそれぞれの手続きが冒頭にあげたひとつの事例の中でどのように用いられているかを分析する。そこに見いだされるのは、機会づけられた部分的報告の聞き手たちが共通経験を想起できないながらもその探索を継続する中で、共通経験が発見されひもとかれる相互的競合的私事語りの機会が作り出されていくプロセスである。なお、以下の分析においては、そのつどの分析で扱う部分を会話の進行に沿って順に切り取って掲載していく。全体を通したこの事例のトランスクリプトは、補遺②に掲載した。

５．１　共通経験の探索

まずここで扱う部分のあらましを述べておく。Bが機会づけられた部分的報告によって、自分の音楽遍歴について語る用意があることを示すが、CとAは順次、経験の差異を主張し、またその理由説明を行う。Aの理由説明が二人に経験を探索し直す機会を提供すると、Cが自分の経験を部分的報告として差しだす。これが展開の機会を与えられ、Bは共通経験があることを主張し、さらに格上げされた経験を報告する。しかし、Cは共通性を否定する。

【抜粋 17（７）：はまる話－１】

01 Ｂ：<u>涼</u>子も聴く:この手:.
02　　(1.8)
03 Ｂ：あたしこの道だけは<u>は</u>まらんとこうと思っててん.
04　　(0.3)
05 Ｂ：中学校んときの二の舞になるから.
06　　(0.6)
07 Ｃ：ん:.
08　　(1.3)

最初のところで、「涼子」が「この手（＝ヘビイメタルロック音楽）」を聴くという第三者の事例が報告されている（1 行目）。話題の人物を「涼子」と名前で指示することで、この発話は３人がと

もに「涼子の友人」であるという共通の成員性を利用して産出されており、この抜粋はこの共通の成員性へと指向しつつ開始されている。

第三者の事例に続くもうひとつの事例として、Ｂが私事語りを開始する（3 行目）。この発話は「ＸだけはＹしないようにと思っていた」という含蓄のある形式を用いている。この形式は、「自分がＸを知り尽くしているとともに、そのＸを回避してきた複雑な遍歴（この場合、音楽遍歴）がある」ことを報告するものといえる（たとえば「あの人だけは好きになるまいと思っていた」「家業だけは継ぐまいと思っていた」などのいい方を想起せよ。）しかしながら、ＢがどのようにＸを知り尽くしており、それを回避するどんな音楽遍歴を辿ったのかは述べられていないので、聞き手にすればなぜＢが「この道だけははまらんとこうと思っていた」のか不明である。この点で、これは部分的報告としてデザインされており、Ｂがこれらのことについて語る用意があることを示している。

聞き手は反応を返さず、短い間隙が生じる（4 行目）。Ｂは「中学校んときの二の舞になるから」と自らの音楽遍歴の一部を補足する形に自発的に語りを展開する（5 行目）。これはそれ自体ふたたび部分的報告である。これは先の発話への理由説明であるが、その主旨を生み出すために「中学校んとき」という聞き手の知らないことを既知の事実であるように利用している。ふたたび聞き手は反応を返さず、より長い間隙が空く（6 行目）。ここまででＢは、聞き手が自分の開始した語りに興味を持っていないことをモニター可能である。間隙ののちＣは「ん:」と聞き留めたことを弱く主張し、Ｂがさらに語りたければ語りを展開しうる機会を作り出す。しかし、ここまでの成り行きは、聞き手の興味の度合いについてＢに不安を抱かせるに十分である。Ｂがより明確に聞き手の興味をモニターするためには、いったん展開をパスし、聞き手がより強い形で展開を求めるかどうかを見ればよい。Ｂはここで展開をパスするが、聞き手もすぐに展開を求めることはせず、長い間隙が生じる（8 行目）。双方が先に進める手だてをパスすることで、Ｂの部分的報告によって開始された発話連鎖は最初の終了可能な地点を迎える。

【抜粋 17（７）：はまる話－２】

08　（1.3）
09 Ｃ：あたしたぶん心配ないと思うわはまる:.
10　（0.7）
11 Ａ：［((口を開いて何か言いかける))
12 Ｃ：［あたしど::も分からんねんこ(h)の良さ［が:.
13 Ｂ：［あたしちゃく-　　［あたし着実に戻りつつ［あるフィールドだな.
14 Ｃ：　　［あっはっは
15　（1.5）

最初の終了可能地点は、Ｃが経験の差異の主張（9 行目）を行うことによって、実際の終了に至ることが回避される。Ｃはこれによって、共通の成員性に指向しつつ、Ｂの経験を自分にも当てはまりうることとして聞いたことを示している。また、Ｃは「たぶん～と思う」と認識上の権威性(epistemic authority)を弱めた形にデザインすることで、自分がヘビメタルロック音楽を聴くことを想像してみたことを示している。Ｃはただ興味がないのでなく、これまでのやりとりを探索スペースとして利用したことが観察可能にされる。以上から、Ｃの発話は２つの連鎖上の含みを有する。第一にそれは、Ｂが語りを提示し直す機会を提供している。第二にそれは、二人に共通の経験がないことへの理由説

明を行うことを適切にする。

やや長い間隙（10 行目）が生じているのは、このような位置において互いに相手の出方を待ったためであると考えられる。このことは、間隙ののち、３人が同時に発話を試みていることに示されている。まずＣは、経験の差異への理由説明を付加している（12 行目）。これはこの話題を展開するひとつの糸口を提供しうるが、同時に発話を開始したＢはターン冒頭再生によってこの展開の可能性を制止し、自分の報告を再提示（(「ＸだけはＹしないように思っていた」という複雑な形式からより直截な形式へと）している（13 行目）。しかし、この再提示を聞いたＣは笑いで応じるのみで、ふたたびこの発話連鎖は展開の糸口を失う。長い間隙が空き（15 行目）、この発話連鎖は２回目の終了可能な地点を迎える。

しかし、さきほど何か発話しかけた（11 行目）Ａは、まだそれをいっていない。Ａにとって、Ｃの「笑い→沈黙」という手順は、Ｂの報告に対するＣの反応が終了したものと観察可能であり、先ほどいいかけたことをいいたいなら、今がその機会として利用可能である。

【抜粋 17（７）：はまる話－３】

15　（1.5）
16 Ａ：あたしなんかにはまるってことがあんまりないからなあ.
17　（0.5）
18 Ｃ：[↑ん↓ん.（(「そうなん」という調子で)）
19 Ａ：[　そもそも.
20　（0.7）
21 Ｂ：すごいであたし.
22　（0.4）
23 Ｂ：はまっ［たら(……-)］
24 Ｃ：　　［゜あたし゜　］一時的にはまるね.

Ａはこの最初の反応を、経験の差異の理由説明としてデザインする（16 行目）。これによってＡもＣと同様に、Ｂが報告した経験と共通の経験を持たないものの、共通の成員性に指向することで自分にも当てはまりうる経験として聞いたことを示している。また、この発話はＡが自分の中に共通経験をどのように探索したのかを示している。Ａは単に「ヘビイメタルロック音楽にはまる」経験を探索したのでなく、「はまる」経験一般を探索してみたこと、これが観察可能にされている。これは、前節で見た格上げされた経験とは対照的に、Ａが格下げされた形で経験を探索したものと特徴づけることができる。この発話も、二つの連鎖上の含みを持つ。第一に、それはＢが語りを提示し直す機会を提供する。第二に、それはこの理由説明を糸口としてこの話題を展開する機会を提供する。

やや間隙があったのち、Ｃは「↑ん↓ん」とＡに展開の機会を提供する反応を行う（18 行目）。Ａの理由説明にはＡ自身の経験の部分的報告が埋め込まれているので、Ｃはそれに展開の機会を提供することで、これを新たな第一の私事語りとして扱う用意があることを示したといえる。しかし、これと同時にＡは「そもそも」（19 行目）と自分の先行ターンにつけ足しを行い、それ以上の展開はパスしている。他方、ここでもう一度語りを提示し直す機会を与えられたＢは、「すごいであたし」（21 行目）と価値だけを主張する部分的報告を用いて、改めて語りの開始をやり直す。しかし、これを自ら展開しかけたＢの発話（23 行目）は、Ｃが一瞬遅れて開始した発話とオーヴァーラップして中断

される。

Ｃの方は、Ａの理由説明（16 行目）を糸口として話題を展開する工夫としてまずＡ自身に展開の機会を与えたが、Ａがこれをパスしたため、今度はＡの格下げに応じて経験を探索し直して報告したものといえる（24 行目）。Ｃは最初のＢの報告と（音楽に「はまる」経験という点で）共通性を持つ経験を、あらためて別の仕方で探索したのである。共通経験が見つからないときでも共通の成員性を参照できることは、このように、差異の主張や理由説明を可能にするだけでなく、格下げされた形で共通経験を探索することも可能にする。

【抜粋 17（７）：はまる話－４】

24 Ｃ：　　［゜あたし゜　］一時的にはまるね.
25　　(0.5)
26　Ａ：ふ:ん.
27　Ｂ：ふ［:ん
28　Ｃ：　［とりあえず:一時期だからそれしか聴かな［くなって:,
29　Ａ：　　［うんうん.
30　　(0.4)((Ｂが手を挙げる))
31　Ｃ：んでず:［::　　］っと終わると:(0.3)ふんで:↑フンて忘れるんやんか［:.
32　Ｂ：　　［そうなる(よ).］
33　Ａ：　　［あっ
34　　(0.8)
35　Ａ：ま：↑そうゆうのは(.)あるけど:,
36　　(1.2)
37　Ｂ：あたし３つぐらい同時にはまれんで. ＝
38　Ｃ：＝ん:ふふふふっ
39　　(0.6)
40　Ａ：ん:［::ん.（(考え込む調子で)）
41　Ｃ：　　［そ(h)れはないな.
42　　(0.7)

Ｃの「あたし一時的にはまるね」（24 行目）は、３つの特徴を持つ。第一に、それは「音楽にはまる」経験の報告である点で、この会話で初めて、Ｂの最初の報告への共通経験候補を報告するものである。しかし第二に、それは差異の主張とその理由説明を経由して見いだされた、格下げされた共通経験である。第三に、このような連鎖上の位置どりのため、それはＢの最初の報告への第二の語りとしてはデザインされておらず、それ自身が新たな部分的報告としてデザインされている。

Ｂは、自分の最初の報告への共通経験候補であるという点において、Ａは、自分の理由説明を糸口とした展開であるという点において、それぞれにＣの報告に興味を持つ理由がある。二人はともに「ふーん」と聞き留めたことを主張し（26-27 行目）、Ｃに展開の機会を提供する。Ｃが直ちに自発的に語りを展開することで、ここにはより大きな発話連鎖（Ｂの最初の部分的報告によって開始された発話連鎖）に挿入された形で、Ｃを話題上の話し手とする単線的な参加構造が作り出される（28-31 行目）。

Ｃが展開した語りに対して、ＢとＡは対照的な反応を行う。Ｃが自分の経験に固有の詳細をまずひとつ語る（28 行目）と、Ｂは直ちに生徒が教室で挙手するように手を挙げ（30 行目）、続いてオーヴァーラップして共通性を主張する（32 行目）。Ａはまず「うんうん」とＣにさらに続きを促し（29 行目）、Ｃの語りを完了可能点まで聞いてから、「あっ」と何かに気づいたことを主張し（33 行目）、十分な間を取ってから、それは自分が探索していた経験とは異なるタイプのものであることを含んだ発話を行い（35 行目）、さらに間をおく（36 行目）。ここから、Ｂは位置リソースを用いてＣの経験を理解したことを立証・陳列しており、二人がともに話題上の話し手になる形で話題を展開する用意があることを示しているが、Ａは依然として共通経験の探索を続けていることが分かる。

要するにここで、この会話において初めて、相互的競合的私事語りがＢとＣのあいだで開始される機会が生み出されている。しかし、この最初の機会は流される。ＢはＣの報告した経験への格上げされた共通経験を報告し（37 行目）、Ｃがそれを承認すれば相互的競合的私事語りが開始されうる手続きを用いているが、Ｃはこれに笑いで応じたあとで、差異を主張したからである（41 行目）。こうしてここで、この発話連鎖は３回目の終了可能な地点を迎えている。

以上のように、Ｂの最初の部分的報告によって開始されたこの発話連鎖は、聞き手二人が共通経験を見いだせないまま、たび重なる終了の可能性に直面している。しかし、聞き手二人は共通の成員性に指向していることを、経験の差異の主張・理由説明の提供・格下げされた共通経験の探索と報告といった手続きによって示し続けてもいる。このように、共通経験が見つからないときにも探索を可能にする発話連鎖手続きが利用可能であることによって、共通経験の発見される機会が相互行為の中に作り出されうる。

５．２　共通経験の発見

ここで扱う部分のあらまし。ＢとＣとのあいだでの相互的競合的私事語りが未発に終わったあと、共通経験の探索を続けていたＡが音楽に「はまる」経験を見つけ出し報告する。Ｂはこれを直ちに格上げし、先取りして自分の経験を語るが、Ｃはここで共通経験の探索をやめる。ＡがＢによる先取りされた私事語りを承認し、二人は共通経験を相互的に批准された形で発見する。Ｃはこの話題に参加しなくなる。

【抜粋 17（７）：はまる話－５】

42　（0.7）
43 Ｃ：(見［るの)たいへんやろ:゜と［思うわ゜.
44 Ａ：　［(それって:-)　　［あっ
45　（0.9）
46 Ａ：↑モーツアルトにはまるとか(h)は(h)［あ(h)る(h)よ(h):(h).
47 Ｃ：　　［あはっ
48　（0.2）
49 Ｃ：［.hhhhh　］
50 Ｂ：［はまったよ］あたし.
51 Ｃ：あ(h)や(h)し(h)い(h)［:.
52 Ｂ：　　［受験期にはまったよレクイエムやろ:,

３回目の終了可能性に直面して、Ｃは自分が行った差異の主張に理由説明を付加し、この話題を継続する工夫を行う（43 行目）。が、これとオーヴァーラップしてＡは「それって:」と探索をなお行っていることを示したあと、「あっ」と何かに気づいたことを表示する（44 行目）。そして、十分間を取ってから「モーツアルトにはまるとかはあるよ」と探索の結果見いだされた共通経験を部分的に報告する（46 行目）。これは、この会話でＡが初めて行った、音楽に「はまる」経験の報告である。

この発話は、これ以降、この会話への参加の構造を大きく変化させる直接の契機となっている。少し足を止めて、この発話の特徴を詳しく調べてみよう。

Ａはこの発話に笑いを重ねている。Jefferson（1985）によれば、笑いを重ねて発話することは、その発話が「微妙な」性格を持っていることに話し手が気づいていることを示す方法である。では、この発話のどこが微妙なのか。ポイントは「はまる」というここまでの話題のキーワードにあると思われる。ヘビイメタルロック音楽という激しいリズムの大衆音楽と「共－選択（co-selection）」[10] されたときの「はまる」の意味は、モーツアルトという著名な古典音楽家の名前と共－選択され直すとき、一定のずれを生じうる。「モーツアルト」と「はまる」は、この会話の展開の中では不協和でありうる。そして、ここまでの話題のキーワードに意味のずれが導入されかけていることによって、ここでは話題のスムーズな転換の可能性がもたらされている。Ａが高いピッチで「モーツアルト」という言葉を有標化して発音し、「はまる」という言葉も「とか」を付加して有標化し、さらに笑いを重ねてこの発話を有標化するとき、Ａは自分の発話が進行中の話題に対して不協和である可能性に気づいていることを示していると思われる。

少なくとも、Ｃはそのように聞いたようである。Ｃが「あはっ」と笑い（47 行目）、その笑いの延長した吸気音（49 行目）に続いてさらに、「あ(h)や(h)し(h)い(h)」と笑いながらいうとき（51 行目）、Ｃは不協和に焦点を当ててコメントしている。このことは、ＣがＡの発話によって用意された話題転換の可能性に応じるのでなく、それに、今までの話題に参加していた者としての立場からコメントしていることを意味する。このような反応は、ここまで一度も現れていなかったことに注目してほしい。ＡとＣは共通経験が見つからなくても差異を主張したり、理由説明を行ったり、共通経験を探索して報告したりしていた。これらの反応はいずれも共通の成員性に指向することで可能になっていると考えられた。これに対し、このＣの反応は共通の成員性に指向することをやめ、共通経験を探索することをやめる手続きだと特徴づけられる。

要するに、ＣはＡの報告に「われわれらしからぬ」経験の報告を聞き取り、自分が指向している共通の成員性の「外部」にその経験を位置づけているのである。これは、人々が会話の中で社会的成員性の境界をリアルなものとして指向し、その成員性の内側から境界を管理する手続きの一事例だといえる。Ａが「はまる」という言葉の意味にズレを導入するとともに笑いを重ねたとき、Ａはこの境界を踏み越えつつ、その踏み越えている発話に距離を表示している。それは、Goffman（1961）が「役割距離」と呼んだふるまいの一種である。Ａはそのような二重の参加（参加と距離化の組み合わせ）を通じて、この境界への指向を示している。Ｃが行っていることは、この距離化の方と手を結ぶ（affiliate）ことを通じて、境界の踏み越えの方と手を切る（disaffiliate）という手続きにほかならない。ここでは「われわれらしさ」あるいは「われわれは何者か」をめぐる微細な交渉が生じているのである。

これと前後して、Ｂは対照的な反応をしている。ＢはＡの発話に重ねられた笑いにはまったく反応せず、代わりに共通経験があることを最初の可能な機会に主張し（50 行目）、それが独立にアクセスされた経験であることを際立たせ（Ｂは「あたしも」とはいっていない）、続いてすぐに自発的にそれを展開し始めている（52 行目）。Ｂはここで、この会話において２回目の、相互的競合的私事語り

が開始される機会を作り出している。

【抜粋 17（７）：はまる話－６】

52 Ｂ：　　［受験期にはまったよレクイエムやろ:,
53　　(0.2)
54 Ｃ：んふっ＝
55 Ｂ：＝大ミサやろ:,
56　　(.)
57 Ａ：ん(h)っ
58　　(0.5)
59 Ｂ：でフリーメイソンのためのなんや葬送曲:？
60 Ａ：ん:［ あたし-
61 Ｂ：　　［(あっこら)へん全部はまった゜(もん．)゜
62　　(0.3)
63 Ａ：あたしね(h)え(h)っ(1.0)歌(h)劇(h):？
64 Ｂ：ん:.
65　　(.)
66 Ａ：.hh 歌劇-(.)歌劇ってゆうかオペラ(h)っ(h).
67 Ｂ：ん:.
68　　(0.2)
69 Ｂ：［はまった:？
70 Ａ：［モーツア(h)ル(h)ト(h)゜ほ(h)んま(h)゜.hhh 受験期にはまるなよ:
71　　と(h)か(h)［思(h)い(h)［ながら.

Ｂが先取りして展開した語り（52-61 行目）は三つの重要な特徴を持っている。第一に、Ｂはモーツアルトにはまった時期を「受験期」と指示している（52 行目）。一般に、時間や空間は多様な仕方で指示されうる(Schegloff　1972)。Ｂはたとえば「～歳のときに」「～年前に」等々ではなく、「受験期」という指示の仕方をすることで、はまった経験を格上げしている。つまり、その時期を受験勉強という重大な責務があった時期として特徴づけることで、その経験が抗いがたいものであったことを示している。

第二に、Ｂはモーツアルトの曲名をリストアップする形式を用いて語りをデザインしている（52-59 行目）。これによってＢはまず、自分がこの共通経験に独立にアクセスしていることを立証・陳列している。また、直ちに曲名をリストアップできることを示すことで、この手続きもモーツアルトにはまった経験を格上げしている。

第三に、Ｂは最初「ＸだけはＹしないようにと思っていた」という形式で、自分の開始している語りをたんにヘビイメタルロック音楽に関するものではなく、むしろ音楽遍歴に関するものとして聞かれる工夫をしていた。また、そのときに「中学校んとき」と時期を指示していた。そのあと、聞き手からの経験の差異の主張を受けて語りを提示し直すときに、Ｂは「すごいであたし、はまったら」「あたし３つぐらい同時にはまれんで」と、自分がはまるときの「すごさ」を「３つ」という数を例示しつつ主張していた。Ｂがここで「受験期」という学校生活に結びついた指示をふたたび用い、実際に

直ちに３つの曲をリストアップして見せるとき、それは自分の「音楽遍歴」の「すごさ」を語るこれら先行する試みのやり直しであるといえる。

さて、４．４で見た【抜粋 16（10）：すっごい関係ないこと】では、これと同様の発話連鎖上の位置において、先取りされた私事語りが「そう」受けを用いて認定されることで、共通経験の発見が相互的に批准されていた。これに対し、このケースではまず「うん」受けが用いられている。ＡはＢが３曲をリストアップした時点で「ん:あたし」と発話を開始し（60 行目）、Ｂの語りを聞き留めつつ自分の語りを展開しようとしている。この意味で、Ｂの格上げされた経験は、このケースにおいては直ちに共通経験として承認されてはいない。

しかしながら、続いてＡは、自分自身に対してあきれていることを示すような苦笑を重ねながら、「歌劇」「オペラ」と曲のジャンル名をあげ（63-66 行目）、次いで「受験期」というＢが用いた言葉を埋め込んで反復し、「受験期にはまるなよ」と苦笑の意味を明らかにしている（70 行目）。これらの工夫によって、Ａもやはりその経験の抗いがたさを示しており、【抜粋 16（10）：すっごい関係ないこと】に見られたよりは弱い形で、先取りされた私事語りが承認されている。

【抜粋 17（７）：はまる話－７】

70 Ａ：［モーツア(h)ル(h)ト(h)°ほ(h)んま(h)°.hhh 受験期にはまるなよ:
71　　と(h)か(h)［思(h)い(h)［ながら.
72 Ｃ：　　［ん:っふ
73 Ｂ：　　［ちょっと待って一緒の受験期やから一緒にはまってた
74　　んちゃう？＝
75 Ａ：＝だから:(.) うちらが入る年［の::,
76 Ｂ：　　［入る年の::,
77　　(0.2)
78 Ａ：あの，＝
79 Ｂ：＝ね:「あんときさ:,］
80 Ａ：　　［モーツアル ］ト二百［年祭の::,　　］
81 Ｂ：　　［そうそうそう］そうあれでさ:もう:(0.2)
82　　見まくってさ夜中に［入んのとかも全部:.
83 Ａ：　　［ん:ん.

Ａによる承認手続きが弱いものであったために、このケースでは共通経験の発見が相互的に批准された出来事となるために、もう一段の手続きが用いられている。Ａの発話が完了可能点にさしかかると、Ｂは「ちょっと待って」と制止する（73 行目）。完了可能点である以上、ここでＢが制止しているのはＡのターン産出ではない。それはこの話題の展開に関する制止である。Ｂはここで、「ともにモーツアルトにはまった」という共通経験が、「ともに受験期にモーツアルトにはまった」という格上げされた共通経験として発見されているのだということを、明確に確認することを求めている（73-74 行目）。そして、そのような性格を帯びたものとして、この話題を展開することを提案している。

ここでもう一度足を止めて、このＢの発話に用いられた「一緒に」という言葉の用法に注目したい。これは Sacks が「昔の知人(ex-relationals)」と呼ぶ手続き（Sacks 1992 vol.2: 462-463）のひとつのヴァ

リエーションである。Sacks によれば、ある挫折した人生を歩んだ者が「僕は昔カーク・ダグラスと一緒に俳優養成学校に通っていたんだ」というような発話を行うとき、「一緒に」という言葉は「昔の知人」という独特の社会関係を作り出す手続きである。この発話者が学校に通っていた時点で、「カーク・ダグラス」はいまだ「カーク・ダグラス」として知られるその人ではないし、二人は友人として「一緒に」通っていたわけでもない。この「一緒」は発話を通じて作り出された関係であり、「俳優養成学校」というすでに死んだ集団はそのために今ここで活性化されている。同様の意味で、ＡとＢは「一緒にモーツアルトにはまっていた」わけではない。Ｂはこの会話のこの時点において、共通経験の発見を相互的に批准するという行為を遂行するために、「受験期」という死んだ時間を活性化する手続きを用いている。この意味で、この発話は今ここで互いの生活史を書き換えることを提案している。

そこで、次に開始されたターンは、生活史の書き換えによる社会関係の更新を実行するための会話手続きの一事例として理解することができる。そこで用いられている手続きは、大きく３つを指摘できよう。第一に、Ａは「うちらが」と一人称複数代名詞を用いてターンを開始する。この手続きは、この会話でこれまで「わたし」と「わたし」を比較可能な存在として取り扱うことにおいて指向されていた共通の成員性とは、別の種類の共通の成員性に、いまやＡが指向しつつ発話していることを示す。前者は「カテゴリー的同一性」と呼びうるのに対し、後者は「共属性」と呼びうるだろう。

第二に、これに続いてＡは「入る年の::」と音をのばして、言葉探しを行う。ＢもＡを追いかけて同じ言葉を発し、同じように音をのばしている。こうして、二人は同じスロットにおいて、そのターンの次にくるべき言葉を一緒に探している。このことは、このターンが二人のどちらによっても満たされうる性格を持つだけでなく、二人が同じ満たし方をできるスロットであることを示している。これは、相互的ユニゾンのときに見たような、二人の満たし方が相補的になるスロットとは異なるのである。このスロットはまさに「うちら」のスロットなのである。

第三に、こうして開始された共同言葉探しにおいて、Ａが提示した「モーツアルト２００年祭」という言葉をＢが「そう」受けによって認定し、それを組み込んで後続発話を行う。こうして今度は明確な形で、共通経験の発見が相互的に批准されている。

以上を要するに、このケースにおける共通経験の発見は、次のように方法的に達成されている。第一に、Ｂの最初の部分的報告を受けて、ＡとＣは共通経験が見つからないにもかかわらず、共通の成員性に指向した手続き（差異の主張・理由説明の提供・共通経験の探索）を用いることで、この話題を継続する用意があることを示し続けている。第二に、Ｂは聞き手が共通経験を探してきて報告すると、それをそのつどピックアップして格上げし、それが承認される機会を作り出している。このような、協働的な共通経験の探索手続きによって、何度かの終了の可能性に抗して、この発話連鎖はその延長上に共通経験が発見される可能性を作り出している。

５．３　共通経験の競合的ひもとき：「豊穣な話題」の形成

ここで扱う部分のあらまし。ＡとＢは、先取りされた私事語りの承認によって、ともに話題上の話し手としてひとつの行為スペースに参入することが可能になる。こうして、この話題は複線的な参加構造の中で展開され始める。ふたりは、発見された共通経験を競い合うようにひもとき始め、話題は「受験期にモーツアルトにはまった」ことから「モーツアルトの音楽全般」へ、さらに「他のクラシック音楽」へと広がっていく。二人のあいだで「豊穣な話題」と呼びうる話題が形成されていく。

【抜粋 17（７）：はまる話－８】

82　見まくってさ夜中に［入んのとかも全部:.
83 Ａ：　［ん:ん.
84　(0.6)
85 Ｂ：あ［のげいじゅ　］つげきじょうとか［で:.
86 Ａ：　［(あれ……じゅう-)］　［十二時ぐら
87　い［までやるやつやろもう:,］
88 Ｂ：　［そうそうそうそうそう　］もう［はまっ-
89 Ａ：　［「あかんわこんなんやっ
90　たら」［>とか思いながら．<((頭を抱える動作。続いてＢも同じ動作。))
91 Ｂ：　［「いけない:」とか言いながら見とってん「ふ［::ん」て.
92 Ａ：　［うん.

この相互的競合的私事語りの手続き的特徴を明らかにしておこう。第一に、ＢとＡはひとつの行為スペースにともに話題上の話し手として参加するという点で、競合的関係を作り出す。二人は、オーヴァーラップした発話を中断し、それを再生するという手続きによって、自分たちの参加の仕方がターンテイキング上、競合的関係にあることに指向している（86, 88, 91 行目）。

しかし第二に、二人は互いに相手の発話に感応しながら自分の語りを組み立てるという点では協働的に、語りを展開し始める。二人は互いの経験の細部を照合し（「夜中に入るの」（82 行目）→「１２時ぐらいまでやるやつ」（86-87 行目））、そのときの自分の気持ちをＡが直接話法で引用するとＢもただちにそれに追随する（「あかんわこんなんやったら」（89-90 行目）→「いけない:」（91 行目））。また、Ａが頭を抱える動作をすると、Ｂもすぐ同じ動作をする（90 行目）。

こうして、実際には別々の場所で互いに知ることなく経験したことがらは、今ここでともにひとつの拡大された行為スペースに参加し、同じ語り口と同じ動作を用いて語られることで、まさに「一緒にはまって」いることとして実演される。会話における行為スペースに一緒に参加するという発話連鎖上の手続きは、互いの生活史上の分離されていた出来事を一緒に経験し直す機会を提供している。このような形で会話に参加することによって、二人はいわば、発見された共通経験（common experience）を、今ここで共有経験（shared　experience）として経験し直しているのである。このような手続きを経た二人は、このあとえんえん 10 分以上にわたって、自分たちがはまったクラシック音楽の話を継続することになる。

最後に、このような手続きを経て形成された話題の特徴について、一瞥しておきたい。ここで生じたことは、会話の中で「豊穣な話題」と呼びうる話題が形成される手続きの一例だと考えられる。Sacks は、暴走族の少年たちの会話を題材にした講義において「超－豊穣な話題（ultra-rich topic）」という興味深い概念を提出している（Sacks 1992 vol. 2: 75-83）。暴走族の少年たちにとって「車の話」は超－豊穣な話題である。これはたんに、少年たちが車のことばかり話しているという量的な問題ではない。重要なのは彼らが車の話をするときの手続きである。たとえば、少年Ａが「今度タイヤをＸに交換しようと思うんだ」というなら、他の少年たちはこれを単にＡの計画の表明としては聞かない。彼らはむしろ、これを自分の愛車に関して検討してみるべき提案と聞く。そこで少年Ｂが「おれならタイヤをＸにするなら、エンジンもＹに換えるね」などということになる。これはふたたび、みなが検討してみるべき提案と聞かれる。このような手続きを通じて車のことが話題になる場合、それは「くめど

も尽きせぬ(inexhaustible)」話題という性格を帯びる。

この講義でいわれていることとよく似たことが、このデータにも観察される。このあと 10 分以上にわたって続く二人のやりとりから、ひとつだけ例をあげよう。

【抜粋 18（７）：アヴェヴェルムコルプス】

((この直前にはモーツアルトの「レクイエム」が話題になっており、Ｂはその頃、頭をたたけばすぐ歌えるほどレクイエムにはまっていたことが述べられている。))

01 Ｂ：楽譜持ってるよあっこらへん゜けっこう゜.
02　　(0.7)
03 Ａ：゜ほんまに:. ゜((思案顔になる))
04 Ｂ：うん.
05　　(1.0)
06 Ａ：゜（あれは:-）゜＝((首をかしげながら中空視線で))
07 Ｂ：＝アヴェヴェルムコルプ-(0.4)コルプス:？＝
08 Ａ：＝ん:.
09 Ｂ：とか.
10 Ａ：あっ(0.3)>ア゜ヴェヴェルムコルプスね. ゜<＝あれ::はっ(0.3)なんで持ってん
11　　のかな:.
12　　(1.0)
13 Ｂ：うちね:(.)カラヤン゜(の)゜.
14　　(0.6)
15 Ａ：゜ふ:ん゜あのね:(0.4)じゃなくて:(0.4)なんかいろんな編成のやつ:？＝
16 Ｂ：＝うんうん.
17　　(0.9)
18 Ａ：金管:::アンサンブル［五重奏？
19 Ｂ：　　［うんうんうん.
20 Ａ：で持って(.)て:(0.2)あと:,
21　　(1.3)((Ｂが指を２回Ａの方につきだす動作))
22 Ｂ：ね：(.)［あれ持ってない？ブラームスの:(0.3)四重協奏曲.
23 Ａ：　　［゜ん：゜？

Ｂは「レクイエム」を「(頭を）たたけば歌えた」ぐらいはまっていたことを述べたあと、「楽譜持ってるよあっこらへんけっこう」という（1 行目)。Ａは「ほんまに:」といったあとで思案顔になり、「あれは:」と中空に視線を向けて自分の経験を探索する。つまり、ＡはＢの報告を自分の側の対応する経験を探索する誘いとして聞いている。Ｂが「アヴェヴェルムコルプス」という別の曲の楽譜も持っていることを付加すると（7-9 行目、Ａは「あれ::はっ(0.3)なんで持ってんのかな:」(10-11 行目）と、今度はその曲に関して探索をはじめ、自問する。このＡの自問をＢは自分に対する問いかけとして聞き、「うちね:(.)カラヤンの」と自分の探索結果を報告する（13 行目)。Ａはこれを問いかけとして聞き、自分は「カラヤン」の「じゃなくて」「金管:::アンサンブル五重奏」だと述べる（15-18 行目)。Ａがさらに自分の持ち物の探索を続けるうちに、演奏のスタイルに言及したＡの発話を聞い

て、Ｂは「ブラームスの四重協奏曲」を自分が持っていないことに思い当たる（22 行目）。このように二人は、一人が自分の経験の詳細をひとつ語ると、もう一人はそれを、対応する自分の経験の詳細を捜し出すことへの誘いや問いかけとして聞いている。互いにこのような聞き方をすることで、二人は、いいたいことが次々と引き出されていく。

５．４　小括

まとめておこう。会話において自分の経験を語りたい者は、それを進行中の会話の特定の位置で、語るに値するものとして端緒的に語り始める手続きが利用できる。また、相手の興味をモニターする手続きを利用できる。聞き手の側は、語り手が語りたい度合いをモニターする手続きを利用できるとともに、共通経験を探索して報告することができる。実際に共通経験が見つからないときにも、共通の成員性に指向することで、共通経験の探索を続けていること、導入されつつある話題に興味を持ち続けていることを示すことができる。

相手が報告した経験と共通の経験を格上げされた形で先取りして報告することで、自分は共通経験に独立にアクセスしたことを示し、格上げされた形で話題形成することを提案することができる。この提案が承認される場合、それは共通経験を相互的に批准された形で発見するという行為を可能にする。このようにして投射された行為スペースに、ともに話題上の話し手として参入することで、その話題は複線的な参加構造のもとで展開されうるようになる。そして、この参加構造を利用して互いの経験がひもとかれるとき､そこには相互的競合的私事語りと呼びうる独特の発話連鎖が作り出される。それは、その話題を「豊穣な話題」として形成する手続きの一種だと考えられる。

ＡとＢがともに同じ頃に同じ作曲家の音楽に夢中になっていたことは、ある意味では偶然であるとともに、別の意味では二人の生が社会的に水路づけられていたことから来る蓋然性の範囲内で生じたことである。しかしながら、それがこの会話のこの時点で「受験期」に「モーツアルトにはまった」経験として定式化され、共通経験として発見されたことは、たんなる蓋然性でもなければ偶然でもない。むしろ、会話の中で互いの経験を語り合う発話連鎖手続きを通じて、３人の社会関係や生活史という社会的文脈が関連ある(relevant)ものとして会話の「内部に」表示され、この会話にとって意味ある文脈として構成される中で、共通経験の発見が行われたのである。

３人は、共通の友人を「涼子」と名前で指示することにおいて、ある共通の成員性に指向しつつ、経験を語り合う活動を開始している。この成員性は、おそらく「仲間集団」と呼びうるようなものであるが、その成員性の境界は会話に先立って与えられているわけではない。逆に、「モーツアルトにはまる」という経験を報告する中で、それがこの成員性の境界を踏み越える経験である可能性が指向され、それによって成員性の境界が照射されている。それゆえ、Ｃがこの経験を「あやしい」と笑うのに対し、Ｂの方は格上げされた共通経験を直ちに報告するとき、そこではこの成員性の境界線に関する交渉が行われている。この仲間集団がどのような仲間集団であるのかは、この会話において構成されている。

だから、ここで生じたことは社会関係の微少な更新なのである。そしてそのときには、ＡとＢが同じ作曲家の音楽に「はまって」いたのは「受験期」であるという仕方で、もうひとつの社会的文脈が表示される。二人がともに受験生として社会構造的に水路づけられた生活史を持つことは、この会話においては共通経験を格上げするものとして、その関連性を与えられている。受験という制度や受験生という地位は、この会話において「好きな音楽にはまる経験を引き立てるもの」として利用されている。これが、この会話の「内部」で構成されたこの制度や地位の意味なのである。

以上のように、この会話における共通経験の発見とひもときは、それを可能にする仕方で発話連鎖が組織される中で、それを可能にするための社会的文脈を構成することを通じて、手続き上の必然性を持った形で行われている。

6　結論

本章の結びとして、相互的競合的私事語りという発話連鎖形式が、会話への参加構造としてどのような特徴を持つのかをまとめておく。会話においてある話題が導入されるとき、その話題をどのように進行させるかに関して、大きく２つの選択肢がありうる。ひとつは、一人の参与者を話題上の話し手にする参与形式によって、話題を進行させることである。開始された私事語りをきいた聞き手が、それを展開することを求めたり、展開する機会を与えたりするとき、その話題は一人を話題上の話し手とし、他の者を「話題上の聞き手(hearer-on-topic)」にする形で進行する。英語圏の会話分析においてこれまで話題を導入する発話連鎖についてなされた研究は、この参加構造のもとで話題を形成する手続きである（Button & Casey 1984, 1985）。

これに対し、相互的競合的私事語りという現象は、もうひとつの話題形成の仕方があることを示している。すなわち、話題の端緒として私事語りが開始されるとき、私事語りの先取りを行うことで、聞き手は自分ももう一人の話題上の話し手として参加することを提案することができる。この提案が承認されるならば、その話題は複数の話題上の話し手を持つ話題として形成される。このとき、複数の話し手たちは、複数のターンにわたる行為スペースに、ともに話し手としての立場を保持しながら参加することが可能となる。複数の話題上の話し手たちは、ターンテイキングのうえでは一度に一人の話者交替に指向し､オーヴァーラップを解消する方法を用いるなどその競合的関係に指向しながら、同時に、相手の発話に感応しながら自らの語りを展開させることで、拡大された行為スペースに協働的に参加する。ここに、個々のターンを超えたレベルでの複線的な参加構造が作り出されうる。

このような参加構造が作り出される可能性をより一般的に捉えるなら、次のようにいうことができる。部分的報告としてデザインされた端緒的な私事語りは、その語りが展開されるべき拡大された行為スペースを投射しうる。部分的報告は、後続すべき発話へのある種の前置きとして聞かれ、取り扱われることができる。このとき、次のスロットで行われるべき行為は、報告者に展開の機会を提供することになる。しかし、部分的報告が持ちうるこの連鎖上の含みは、たとえば隣接ペアの第一部分が持つ連鎖上の含みのように強いものではない。それは選択的な含みである。もうひとつの可能性として、部分的報告はそれ自身の資格において完結した報告としても聞かれ、取り扱われることが可能である。このとき、次のスロットでは相手が自分の共通経験を報告したり、経験の差異を主張したりすることが適切でありうる。

会話の中ではしばしば、このように前置きとして聞かれうると同時に、それ自身の資格においても聞かれうる発話が産出される。この性格を持つ発話は、後続する会話の展開を、単線的なものにするか複線的なものにするかという交渉の機会を作り出す。この交渉は、それぞれのスロットごとに可能である。部分的報告を聞いた者がもう一人の話題上の話し手になることを提案するなら、部分的報告を行った者は相手に先に進む機会を与え、単線的な参加構造を選ぶこともできる。他方、自分がさらに語りを展開することで、相手の方に話題上の聞き手になるよう求めることもできる。しかし、双方が自らの語りを展開しようとするならば、そこでは相互的競合的私事語りが産出されうる。

この過程は、オーヴァーラップ解消手続きとユニゾンへの調整された参入手続きとの関係とパラレ

ルである。オーヴァーラップに際して１ビート単位で交渉が行われ、一度に一人の参加構造が回復されることは、単線的発話連鎖による語りが生み出される手続きとパラレルである。逆に、オーヴァーラップに際して１ビート単位で交渉が行われる中で、ユニゾンへの調整された参入が果たされることは、複線的な相互的競合的私事語りが生み出される手続きとパラレルである。ターンテイキング組織や連鎖組織は、基本的には会話の線状的構造を記述するために定式化された概念装置である。しかしそれらは、人々がそのような構造をめぐって交渉する過程を記述するうえでも、有効な記述用具なのである。

７章　討論

１　はじめに

本稿では、次の三つの目標を掲げて考察を行ってきた。第一に、言葉を用いたコミュニケーションの研究において、従来焦点を当てられなかった参加の組織化という問題を中心に据えることで、コミュニケーション研究における新しい問題の立て方を提案することである。第二に、従来の社会学とは異なる形で行為への拘束を探究することが可能だということを、言葉を用いた相互行為という対象領域に焦点を定めて例証（demonstrate）することである。第三に、英語圏で展開されてきた会話分析の成果とつきあわせながら、日本語話者の日常会話を分析することで、会話分析が析出してきた相互行為の手続きの通文化的広がりについて現時点で何がいえるかを考えることである。

最初の二つの目標は、３章から６章までの会話データの分析を通じて果たしてきた。３番目の目標に関しては、それらの分析の中で折に触れて言及してはきたものの、まだ正面から取り上げてはいない。本章では、３章から６章までの分析がどのように最初の二つの目標を果たしてきたのかをより広い視野から総括するとともに、３番目の目標を果たすための考察を行う。

まず第一の目標に照らして、本稿の分析がもっとも直接のターゲットとしてきた話し手という立場の組織化を、序論で述べた言葉の指標性という論点と結びつけながら考察する。また、それを通じて、本稿の分析がコミュニケーション研究に対していかなる視点を提供するものかを論じる（２節）。次に、第二の目標に照らして、本稿の分析がどのような点で従来の社会学とは異なる形で行為への社会的拘束を記述しているのか、またそれは従来の社会学のやり方に対してどのような疑問を投げかけるものであるのかを考察する（３節）。さらに、英語圏の会話分析の知見と本稿で得られた知見を結びつけ、またそれらを他のいくつかの社会文化的世界に関する先行研究と結びつけることで、第三の目標を果たしていく（４節）。最後に、これら三つの考察をまとめ、全体の結論を述べる（５節）。

２　時間の中での参加の組織化

２．１　参加の道具としての言葉

序論で述べたように、従来の社会学や言語学において、言葉を用いた相互行為は「派生的」で「無秩序」な領域として位置づけられる傾向があった。このような取り扱いは、これらの学問において、言葉の指標性を解消することが方法論上の要請として組み込まれていることの、必然的な帰結であると考えることができた。これに対し、エスノメソドロジーの問題提起を受けて展開してきた会話分析の立場からは、言葉が指標性を帯びつつ通用していることが解明すべき研究対象となる。本稿では、このような考えに立って、会話の中で人々が言葉の指標性を利用しつつそれぞれの行為を認識可能にしている手続きを分析してきた。

言葉が指標性を帯びつつ通用していくことは、人間社会の基本的リアリティを構成していると考えられる。この点に注目することは、言葉を用いることがコミュニケーションにおいて持つ働きに関して、これまであまり注目されなかった側面に注目することを可能にする。それは、言葉が何かを表現・伝達するための道具である以前に、ともに居合わせる状況への参加を組織化するための道具だということである。

言葉がコミュニケーションの主要な道具であり、それを通じて社会関係を作り出したり維持したり更新したりするという社会的機能を果たすことは、誰もが認めるところであろう。しかしながら、これらの社会的機能はこれまで主として、言葉を用いて情報や思考が伝達・交換されることや、言葉を用いて感情や態度が表現されることを媒介として働く機能だと捉えられてきた。つまり、言葉は何かを表現するという意味論的な働きを通じて、その「意味内容」が社会的であるがゆえに社会的機能を果たすと考えられてきた。これに対し、本稿の分析を通じて示してきたのは、言葉が指標性を備えているがゆえに、言葉を通用させる営みは必然的にその言葉が埋め込まれた文脈を組織化することだということである。その文脈とは、自分たちがどのような場面において何者としてどのような種類の相互行為を行っており、その中で「今ここ」はどのような場所であるのか、といったことの全体を含んでいる。

このことを、本稿ではとくに、言葉が相互行為への参加を組織化する道具としてどのように働いているかを分析することで示してきた。相互行為を行う人々は、そのつどさまざまに異なった仕方で話し手や聞き手という立場を占めている。参加の組織化とは、これらの立場がそのつど区別され、結びつけられていく過程をさしている。この過程において言葉が持つ働きを考えることは、それ自体として、言葉の社会的機能を考えるひとつのやり方である。3章から6章の分析を通じて示してきたのは、この過程において、言葉は何かを表現する働きを媒介としてではなく、形式的構造を備えていること自体によって、いわば直接に、ひとつの社会的機能を果たしているということである。ちょうど音楽がリズムやメロディという時間の中で開示されるパターンを持つがゆえに踊りという活動への参加を組織化する道具となるように、言葉も、時間の中で開示される形式的構造によって人々の相互行為への参加を組織化する道具たり得ている。

この点をもっとも中心的に扱っているのは3章であり、またそれに続いて4章と5章である。3章では、言葉の形式的構造の一部としての文という構造が、参加を組織化する道具として利用されていることを明らかにした。再生と継続という選択において、文は何かを表現するという働きにおいてではなく、完結性を帯びた形式的構造であるという資格において利用される。再生においてはそれは反復という操作によって、継続においてはそれは統語的構造の引き継ぎという操作によって可能となっている。

4章で分析したユニゾンや5章で分析した先取り完了も、自分の発話に完結性を持った統語的形式を与えるかどうかという水準で行われる別の選択の例である。相手の発話を途中からユニゾンしたり、相手の発話を先取り完了したりするためには、独立したターン構成単位としての開始部を欠いた形に自発話をデザインすることが選択されている。と同時に、それは相手の進行中の発話の形式的構造を利用して、形式的構造の中の特定の位置に発話を配置すること、相手が産出した統語的形式を引き継ぐことを含んでいる。また、先取り完了を受けてなされる遅れた完了においては、相手が用いた言葉を埋め込んで反復するのか、それを別の言葉に置き換えるのかという選択が行われる。また、置き換えの中で、6章の分析ではとくに格上げと格下げというサブタイプに注目した。

本稿で扱った現象以外にも、このような仕方で言葉が利用される手続きは枚挙にいとまがない。そもそも、会話において一度に一人のターンテイキングを実現すること自体が、相手の進行中の発話の形式的構造を参照し、その特定の位置に発話を配置することで可能となる。相手の長い発話にあいづちを打ちながら聞くことにも、同様の形式的構造の利用が含まれている。私たちのコミュニケーションにおいてはしばしば、発話の意味など分からなくても、適切なタイミングであいづちをうつだけのことがきわめて重要である。そのようなコミュニケーションにおいて言葉の持つ社会的機能とは、あ

いづちのタイミングを構造化する機能にほかならない。

Schegloff, Jefferson & Sacks（1977）をはじめとする一連の「修復（repair）」の研究が明らかにしてきたように、直前のターン（の一部）を上昇調の抑揚で反復することは、「他者開始修復（other-initiated repair）」の基本的方法のひとつである。これは聞き損ないや理解し損ないを取り扱う方法だという点で、まさに伝達という活動を成立させる不可欠の手続きでもある。また、M. H. Goodwin（1990）は、子供のけんかにおいて「形式合わせ（format tying）」という手続きが用いられることを指摘している。それはたとえば「お前のかあちゃんデーベソ」といわれたなら、「お前のとおちゃんデーッパ」といい返すような、相手の発話の統語的形式を踏襲しつつ一部を置換する手続きである。けんかがけんかという社会的意味を持つ活動として組織化されていくときに核心的なのは、「デベソ」や「デッパ」という言葉の意味論的働きである以上に、形式合わせが行われ続けているというその事実である。

要するに、言葉が時間の中で開示される形式的構造を備えていることで参加を組織化する道具になるということは、一般的にいえば、少なくとも次のような言葉の使用法を含んでいる。

(1) 自分の発話（や身体動作）を特定の位置に配置すること
(2) 自分や相手の発話（の一部）を反復すること
(3) 自分や相手の発話の統語的形式を引き継ぐこと
(4) 自分や相手の発話の統語的形式を踏襲すること
(5) 自分や相手の発話の一部を置換（格上げ・格下げ）すること

会話の参与者たちは、相手の言葉が何を表現しているかを分析しうるだけでなく、それがたとえば先行発話の反復や踏襲等々であるのかどうかを分析しうる。また、自分が発話を行うとき、表現したいこととの関係で言葉を選択しうるだけでなく、相手の先行発話を反復や踏襲等々をするのかどうかという点に関しても選択を行いうる。そして、これらの分析や選択を通じて、参与者たちは相互行為への参加の仕方をモニターしたり表示したりすることができる。

このような言葉の使用法に注目しつつ相互行為を分析することは、言葉が指標性を帯びつつ通用しているしくみを解明するという目標にとって、もっとも基本的な作業を構成する。上に上げた諸点は、人々がそれぞれの言葉を進行中の相互行為の中に位置づけている方法であり、言葉を一定の仕方で位置づけることはその言葉を「文脈ーの中のー言葉」として通用させることに他ならないからである。会話分析にとって、ターンテイキング組織や連鎖組織の研究がもっとも基本的な作業となるのは、それらが、言葉を相互行為の中に位置づけるために人々が用いている手続きのもっとも基本的なものだと考えられるからである。

言葉がその形式的構造の利用可能性によって社会的機能を果たすということは、言葉を用いた相互行為の基本的な成り立ちに関わっていることがわかるだろう。こう述べることでわれわれは、Malinowski が行った次の指摘がコミュニケーション研究において持つ重要性を再認識しているとともに、そこから一歩先に進むことのできる地点に立っている。

「言語交際（phatic communion）における言葉は、意味、つまり象徴的にその言葉に属する意味を伝えるために、本来使われるのであるか。決してそうではない。それは社会的機能を果たすものである。…それは知的反省の結果でもなければ、また聴者に反省を起こさしめるともかぎらない。ふたたびわれわれは、ここでも言語は思想伝達の手段として働くものではない、といってよろしい。」

（Malinowski 1923=1967: 406）

本稿はこの指摘に、次の２点を付け加えることができる。第一に、言葉が「思想伝達」ではない仕方で「社会的機能」を持ちうるのは、Malinowski が「言語交際」と呼んだような言語使用の特定のジャンルに限ったことではない。それは、言葉が時間の中で開示される形式的構造を持つ限りにおいて、またそれを利用して相互行為への参加が組織化される限りで、いつでも生じていることである。この意味での社会的機能は、「思想伝達」のために用いられる言葉においても働いている。第二に、本稿で折に触れてみてきたように、このような言葉の働きは、進行する会話の中の一音一音という微細な時間レベルにおいて正確なタイミングにおいて発揮されることが可能であり、それは人間の言葉の「原始的」働きであるどころか、言葉を用いて行われうることの中でもきわめて「高度な」ことのひとつだと考えることができる。このように捉え直すことで、Malinowski が「言語交際」という言葉によって照射したコミュニケーションのあり方は、新たな観点から、人間のコミュニケーション研究の中心部に位置づけ直すことが可能になる。

この地点からふり返ったとき、従来の語用論的コミュニケーション研究が、人間のコミュニケーションの基本的あり方に十分な光を当てられていないことが照射される。そこでは、「話し手」という概念に意図によって発話の意味を統括する者という規定が与えられ、意図を実現する言葉の基本的な形式として「文」に焦点が当てられる。この「意図＝文」という結合が理論の中心におかれることで、人々が言葉を用いた相互行為において日常的に行っている多くのことがらが視野の周辺におかれる。すなわち、オーヴァーラップ、発話の中断や再生、ユニゾン、ひとつの文を二人で作ること、といった一連の現象は、コミュニケーションのあり方として「周辺的」な現象だと見なされてしまう。

しかしながら、これらの現象はいずれも精巧に秩序だったものであり、それを秩序立てている手続きとはまさに上に上げたような言葉の使用法である。コミュニケーション研究は、どのような理論的立場から行われるにせよ、これらの秩序だった言葉の使用に対してそれに見合った地位を割り当てることができなければならない。すなわち、人々が言葉を「文脈ーの中のー言葉」として用いている方法、人々が言葉を相互行為の中に位置づけている方法が、その探究の基本的部分に組み込まれなければならない。

２．２　参加・投射・自己

参加の組織化という主題に注目して言葉の働きを分析することは、以上のように、コミュニケーションにおいて言葉が持つ働きについての新たな理解を可能にしている。とともに、この主題を会話分析の視点から考えることは、この主題に最初に注目した Goffman がそれに託した課題を、より明確な形で追究することを可能にしている。

Goffman はかつて、互いの面前にいる人々は「状況の定義づけ」を「投射（project）」しあうのだと述べたことがある（Goffman 1959: 20）。このいい方には、社会学において行為者の主観的な状況解釈を意味するために用いられてきた「状況の定義づけ」という概念を、相互行為への参加のあり方に関する概念として捉え直す重要な視点の転換が含まれていたと思う。Goffman は、人々が相互行為において言語的・身体的に表示する参加のあり方が互いに結びつくことで、相互行為の「状況」がふるまいの統語論的関係として「定義づけ」られていくという見方を提出した。それは、相互行為の背後に行為者（自己）を想定することから、相互行為の中に関連あるものとして立ち現れてくるものとして行為者（自己）を捉えることへの、視点の転換の萌芽であったということもできる。

この文脈に、会話分析の「投射可能性」という概念を置いてみることは興味深い。この言葉を用いたとき、Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）が Goffman の表現を念頭に置いていたのかどうかは定かでない。だが、投射可能性という概念は、状況の定義づけの投射という Goffman の漠然としたアイデアのある部分を、ターンテイキング組織や連鎖組織という装置の働きとして具体化したものと見なすことが可能である。これらの装置が持つ投射可能性とは、時間の流れの中で刻一刻参与者がふるまいを方向づけることのできる性質であり、またそこで何が投射されるのかが明確になっている。たとえば、進行中のターンの「種類」や「形状」の投射、進行中のターンの「完了可能点」の投射、進行中のターンが開始している「行為スペース」の投射、といった具合である。ひとことでいえば、これらは状況の定義づけの投射を可能にしている「統語論的な」装置の一部を具体的に析出したものにほかならないと見ることができる。参加の組織化とは、これらの装置によって投射される相互行為の可能な次の軌跡に対して、参与者たちが互いのふるまいを方向づける過程と見ることができる。

周知のように、Goffman が上記の視点の転換を通じて提出したのは、自己が相互行為の中で生み出される「劇的効果」なのだという「自己呈示」論である。この議論は、「印象操作」（Goffman 1959）という概念に引きずられて、人々が戦略的に外観を操作することに関するものだと理解されたり、あるいはまた「相互行為儀礼」（Goffman 1967）という概念に引きずられて、人々が互いの面子をつぶさないように協調的な外観を作り出すことに関するものだと理解されたりしてきた。しかしながら、私見によれば、これらは彼の研究の中で、研究対象としたアングロサクソン中産階級の人々に関する「民族誌的」側面だと理解した方がよい。これに対し、「諸個人がいて、そのあとにさまざまな場面があるのではない。諸場面があって、そのあとにさまざまな個人がいるのだ」（Goffman 1967: 3）と述べた彼の理論的洞察の焦点は､そのような戦略的・儀礼的自己が呈示されることを可能にしている、前人称的な相互行為の組織化にあったと私は考える。

本稿で行ってきたのは、会話を連鎖的に組織化する前人称的な装置にふるまいが方向づけられていくことで、話し手という人称的立場が組織化されていく過程である。そこでは、次のような多様な話し手のあり方が示された。

（１）言語音を発しているという意味での話し手。

（２）ひとつの発話（ターン構成単位）が産出されるとき、そのスロットが自分一人の発話によって満たされることが指向されている、そういう話し手のあり方（３章：オーヴァーラップ発話の再生）。これは、コミュニケーションチャネルにおける独占的な送信者という立場を占める点で、従来のコミュニケーション論が想定してきた話し手概念にもっとも近いあり方である。

（３）ひとつの発話が産出されるとき、そのスロットにおいて、何らかの仕方で相補的な、あるいは少なくとも競合しない二人の発話が共存しうることが指向されている、そういう話し手のあり方（３章：オーヴァーラップ発話の継続、４章：相互的ユニゾン、５章：先取り完了の「うん」受け）。このなかには、一度に一人が交替で発話する場合もあるが、事実として一度に一人の形になっていることと、一度に一人であるべきことが指向されていることは、異なる話し手のあり方である。

（４）ひとつの発話が産出されるとき、そのスロットにおいて自分が「チーム」の一員として第三者に対していることが指向されている、そういう話し手のあり方（４章：共同的ユニゾン）。この場合、人は第三者との関係においては上に述べた第一や第二の意味での話し手であるとともに、「チームメイト」に対しては言葉を重ねることを通じて「一体化」を行うというまったく異なる意味での話し手となる。この立場は、そのような二重性として存在する。

（５）ひとつの発話が産出されるとき、今の二重性に加えて、過去の別の場面において「共ー聞き手／共ー読み手」であったことが指向されている、そういう話し手のあり方（４章：引用のユニゾン）。この意味での話し手は、今ここにおける二重の話し手性に、さらに過去における聞き手性／読み手性が重なり合った、複雑な話し手のあり方を構成している。
（６）ひとりが開始した発話がもうひとりによって完成されたとき、開始した者がその発話が完成されるまで管轄する立場であり続けることが指向される、そういう話し手のあり方（５章：先取り完了の「そう」受け）。この意味での話し手は、自分の開始した発話を完成させている相手の発話を、自分の「代弁」として取り扱うという形で実現される。それは、実際に発話を行っていることと、話し手であることが分化するという現象の一例である。
（７）複数のターンにまたがって保持されていることが指向されている、そういう話し手のあり方（４章：相互的ユニゾン、５章：通りすがりの受け手性表示、６章：話題上の話し手）。この意味での話し手は、自分が開始した発話連鎖がどのような種類の発話が現れることで適切に終了しうるかを投射する何らかの手続きを用いることにより、そのような発話があらわれるまでのあいだの発話連鎖において、行為スペースを管轄する立場を保持しうる。

これらの分析はすべて、参加の組織化の分析を会話の連鎖装置（ターンテイキング組織や連鎖組織）という確固たる土台の上におくことで、Goffman の自己呈示論や「話し手」「聞き手」概念の解体作業を、ふるまいの統語論的組織化のあり方として捉え直す試みであった。このような捉え方を通じて、「自己呈示」という問題にもより明確な理論的特徴づけを与えることができる。

Goffman の自己呈示論は、自己が相互行為の中で可変的・多元的に立ち現れることを描き出したが、これは、自律的個人という観念を前提にしていた欧米の社会学者を戸惑わせる性格を持っていた。彼の議論は、一方では固有の統一体としての自己の存在を否定しているものと見なされ、他方では社会的役割に拘束され尽くさない自己の主体性を照射しているものと見なされた。たしかに Goffman の論述にはこれら両方の見方を許容する揺れがあるが、いずれの見方も、相互行為を「統語論的関係」から分析しようという Goffman の基本的方針と整合的なものではない。

本稿の見るところ、自己の可変性・多元性とは、人々が「何者であるか」が相互行為の統語論的関係において／として組織され、それを通じて認識可能となるという以上のことではない。「話し手であること」も、そのようにして相互行為の中で組織されている。このことは、人々がそれぞれ（多少とも）統一された自律的人格としてある、という経験的リアリティを否定するものではない。重要なことは、このリアリティを否定しないことと、そのような自己に「主体性」や「意図」のような一義的な理論的特性を与え、それが相互行為の背後で人々のふるまいを統括しているものの正体だと見なすことは別のことだということである。そのように見なすとき、自己が可変的・多元的であるという命題は、相互行為を統括するものという地位を自己から奪うために、その地位を別の要因（社会構造）の方に割り当てる議論のように見える。だが、「統語論的関係」から分析するという基本的方針のもとにおくならば、この方針は相互行為の背後に何かをおくことを方法論上要請していないのであるから、自己から何も奪い取ってはいないのである。

以上のように、会話分析の視点に立脚することは、Goffman が提起した参加の組織化という問題をより明確な形で探究することを可能にしている。もちろん、Goffman が参加や自己呈示という主題に関して行った洞察が、本稿の記述においてくみ尽くされたわけでは決してない。たとえば、身体的外見によって投射される状況の定義づけがどのような種類の投射可能性として記述できるのかといった

問題は、まだ十分に解明されていない。これは、Goffman から会話分析が引き継ぐべき大きな宿題のひとつであろう[1]。

３　もうひとつの社会学的探究

３．１　内側からの分析

さて、以上に振り返った分析の全体を通じて、本稿では言葉を用いた相互行為という領域における人々のふるまいが、精巧に秩序だったものとして記述可能であることを示してきた。では、この知見は、従来の社会学（あるいは、人間科学）に対して、どのような問題を提起しているだろうか。

第一に、控えめにいって、それは、従来の人間科学が十分に光を当てていなかった現象領域が系統的な探究に向けて開かれていることを明らかにしている。その領域は、言語学・社会学・心理学・人類学といった学問の守備範囲に隣接しているが、いずれの学問によっても十分に探究されてこなかった。これを「落ち穂拾い」的な探究だと見なすことはできない。言葉を用いた相互行為は、社会を形成しつつ生きる人間という動物の生にとって、欠くことのできない基本的な活動領域だからである。新生児は、まずこの活動領域の中に身を置くことによって言葉を話すことを学習し、文化的なふるまいの形式や期待を身につけ、自分をとりまく人々をカテゴリー化することを覚える。人間が社会の一成員となる／であり続けることは、この活動領域に適切に参加する／参加し続けることを不可欠の契機としている。これだけでも、この領域の研究は、人間科学において正当に存在価値を認められる必要がある。

だが第二に、序論で述べたように、この領域はたまたま関心を向けられてこなかったのではなく、「派生的」「無秩序」な領域だという仮定のもとで、視野の外におかれるべくしておかれてきた。その仮定を支えていたのは、言葉の指標性を解消するという方法論的要請であると考えられた。したがって、この領域の探究は、たんに「もうひとつの現象領域」という以上に、人間科学に対して「もうひとつの方法論」を提案するという含意を持つことになる。その方法論的特徴を、従来の実証主義的社会学のやり方と対比させながら、以下で掘り下げてみたい。

３章から６章の分析を貫いて示してきた第一の点は、ひとつひとつのふるまいが互いに結びついていく仕方をリアルタイムでモニターする方法を人々が持っていることによって、それぞれの行為がそのつどの「今ここ」で人々自身にとって認識可能なものとして現れているということである。それらは、社会学の理論的装備をもった研究者によって、その理論的装備ゆえに認識可能になるのではない。逆に、それらはまず人々自身にとって認識可能であるからこそ、自ら「人々」のひとりである研究者にとっても、認識可能となるのである。たとえば、「そう」と「うん」によって行われている行為の違いが認識可能であることは、会話分析研究者にとって、彼／彼女が自ら人々の一員であるという資格によって、与えられている。

第二に、それぞれの行為は、人々が時間の経過の中でひとつのふるまいに対してもうひとつのふるまいを一定の仕方で配置していく方法を持っていることによって、そのつどの「今ここ」で人々自身によって認識可能な形で作り出されている。５章の分析においては、協動的ターン連鎖の第三の位置で「そう」と「うん」が系統的に使い分けられいていることを、データの集積の中にパターンとして見いだした。また、この見いだされたパターンからはずれているという意味で変則的な事例（第二の位置や第四の位置における「そう」と「うん」）も、連鎖組織の交差に「感応して」実現された同じ手続きだと分析した。これらの分析は、そもそも、会話者たち自身がなかば無意識のうちに一定の方

法を用いて「そう」と「うん」をしかるべき位置に配置し合っているから可能なのだと考えられる。会話分析研究者は、その理論的装備ゆえに相互行為の秩序を「発見」しているのではなく、自らも人々の一員としてなかば無自覚に行使している方法を、データの詳細な観察を通じて「再発見」しているのである。

この二つの表裏一体となった特徴ゆえに、会話分析研究者が行うことは次のようなものとして特徴づけられる。彼／彼女は、まず、自ら常識的知識を備えた社会の成員として、データの中で起こっていることを「理解」する。たとえば、「そう」と「うん」がともに何らかの意味で相手の発話を承認していると理解する。次に、そのような理解が可能であるのは、そのふるまいがどのような仕方で進行中の相互行為の中に位置づけられており、またどのようにデザインされているからなのかを「分析」する。この過程で、しばしば最初の理解は修正される必要が出てくる。たとえば、「そう」と「うん」が位置づけられている場所は、異なった特徴を持つことがわかる。それを詳しく調べることで、両者は大まかにいえばどちらも相手の発話を承認しているとしても、それらは異なった意味での承認であるという記述が得られる。このように記述された行為が、ふたたび社会の成員としての自分にとって理解可能であるとき、最初の理解は分析を経て修正される。このようなプロセスが繰り返される。

したがって、そこで分析の対象となっているのは、正確には、人々のふるまいそのものというよりも、社会の一成員としての研究者にとって理解可能なものとして立ち現れている限りでの、人々のふるまいである。このような仕方で理解をまったく得られないふるまいの場合、そのデータは会話分析にとって分析のための前提を欠いている。研究者は、そのような理解が得られることに依拠しつつ、いかにしてそのように理解可能になっているのかを分析する。人々が用いている方法は、会話分析者にとって研究のための装備であるとともに研究の対象でもある。この意味で、それは「内側からの分析」である[(2)]。

これに対し、従来の主流の社会学で行われてきたやり方は「外側からの分析」と呼ぶことができる。Sharrock & Button（1991）によれば、従来の社会学理論の中で繰り返されてきた「社会構造」対「行為者」をめぐる論争においては、理論的立場の相違にもかかわらず、社会学的探究とはどのような営みであるのかについてひとつの前提が共有されている。それは、社会学的探究が、社会現象や社会的行為を一般化された理論という装置の構築を通じて「説明する」営みだという了解である。この了解のもとで、社会構造や行為者という概念には、説明という仕事において解を供給するという決定的任務が賭けられている。このとき、社会構造という概念は「社会関係の安定した配置」として、行為者という概念は「人の諸特性の安定した配置」として、一義的な客観的意味が与えられる必要がある（Sharrock & Button 1991: 138-142）。

しかしながら、Schutz（1962=1983: 51-52）が指摘したように、社会学の概念を個々の社会現象に適用して説明しようとするとき、それらの社会現象はまず人々が常識的知識と日常的言葉を用いて理解・記述したものである。日常的言葉で行われる行為についての記述は、その記述が行われる実際的状況の中では、何ら問題なく、指標的表現として通用する。社会調査者はその状況に参加している一成員であることによって、何ら問題なく、与えられた記述を理解する。他方、こうした「実際的状況の中で指標的言葉を互いに過不足ないものとして通用させること」の一環として得られたデータを説明すべく整備された概念の方は、実証科学に固有の関心に沿って、データを組み立てている言葉の指標性を解消するために誂えられている。指標性を帯びているからこそ理解可能なデータから、その指標性を解消することがめざされているわけである。

この結果、社会学者が扱っているのは現実の社会ではなく、社会について自分たちが構築した概念

になる。だから、その概念をその特性（一義性・客観性・合理性等々）を忠実に保ったまま現実の中に戻してやると、とても変なことが起こるのである。これが Garfinkel の期待破棄実験の意味であり、また、Sacks が従来の社会学を「奇妙」だという理由である。「奇妙なこと」をやる必要があるのは、従来の社会学が、人々が行為している実際的状況の外部に社会秩序の問題の解を見つけようとしているからである。これに対し、エスノメソドロジー／会話分析が提案したのは、社会秩序の問題に別様にアプローチすることが可能だということである。それは、人々が行為を行っている状況は十全な仕方で「自らを組織化している」（Sharrock & Button 1991: 141）と見なすことによってである。この場合、社会構造や行為者についての理論的概念に、秩序を説明するための決定的任務を託することは必要とされない。

エスノメソドロジー／会話分析は、社会構造や行為者といった概念の何らかのヴァージョンを研究の不可欠の道具立てとして採用し、それに依拠する代わりに、それらの概念が捉えようとしている社会的現実について別の仕方で系統的に語ることをめざす。会話分析がもうひとつの社会学的探究であるという意味は、これらの概念に依拠することなしに「社会ーの中のー行為」について語る営みだということである。たしかに、会話分析においても「ターン構成単位」「隣接ペア」「前置き連鎖」等の固有の用語が用いられる。しかしそれらは、説明するという営みにおいて解を供給するという決定的任務を託されてはいない。それらは、分析を進めるうえでの「覚え書き」のようなものであり、いつでも破棄されてよい。あえて言葉をひとつ選ぶとするなら、これらの概念は「説明する」ための道具ではなく「解きほぐす」ための道具であるといえよう。

前節で述べてきたことは、本稿の分析の全体が、話し手であることを解きほぐす試みであったということである。話し手であることは行為者であることのひとつのあり方である。そして、「話し手」概念に「諸特性の安定した配置」としての理論的定義を与えることから出発しているのが、語用論的コミュニケーション研究である。これに対し、本稿では、話し手を「人々が受ける取り扱いの過程」（Sharrock & Button: 141）として記述してきたのである。だが、従来の社会学のもう一方の鍵概念である社会構造については、本稿では主に 6 章において限られた記述を試みただけである。それを補う意味で、次に、6 章の記述を振り返りながら、序論で述べた相互行為の「内部」の社会構造を記述するということの意味を掘り下げてみたい。

３．２　一般的拘束

社会構造という概念に託されてきたのは、人間の行為が社会的拘束を受けているという経験的リアリティを説明することだといえる。このことを、もちろん、会話分析は否定しない。行為は、それが実際的状況のもとで行われる実際的行為である限り、さまざまな実際的拘束のもとにある。これは、物理学にとって外界の存在が探究の出発点にあるのと同じように、いかなる社会学的探究にとっても出発点にあるはずの事実である。だが、重要なのは、人間の行為が拘束のもとにあるかどうかではなく、どのような拘束のもとにあるかである。実際、会話におけるターンテイキング組織や連鎖組織として記述されてきたのは、言葉を用いた相互行為の中におかれた人間に働く実際的拘束の主要な一部にほかならない。われわれは、言葉を用いて何ごとかを行おうとする限り、これらの拘束に自らのふるまいを方向づけざるを得ない。この意味で、会話分析の仕事も行為への拘束を記述している。

では、実際的状況の中で生じる行為に働いている実際的拘束に対して、従来の社会学における「社会構造」（あるいはそれに関連した）概念の方はどのような関係にあるのか。実証主義的な社会学的探究において社会構造を記述するための代表的な手続きは、統計的手法に基づいたサーベイ調査に見

られる。Benson & Hughes（1991）によれば、Lazarsfeld が定着させた実証主義的方法論の要は、人間を「一般的諸特性を表示している対象」として扱う点にある。すなわち、個々の人間は性別・年齢・階層・人種等々の一般的諸特性の束として記述されうるため、社会学者はこれらの諸特性を「変数」として抽出し、それら変数のあいだに見いだされる統計的パターンとして社会構造を記述する。変数のあいだのパターンを見いだすためには、当然、多数の事例を統計的に分析しなければならない。それゆえ、「諸特性が個別の分析単位に対して有する結びつきは、それらが分析単位の集積に対して有する結びつきを経由することで、はじめて主張される」（Benson & Hughes 1991: 115）。この意味において、そのような操作によって記述される社会構造は、概念内容において個別の状況を超えたものになっているだけでなく、方法論上、個別の実際的状況の「外部」に見いだされている。

たしかに、社会的拘束という概念には、ある「一般性」の観念が含まれる必要がある。しかしながら、「一般的である」という性質を備えた拘束は、上のような仕方でしか見いだされえないものではない（Sharrock & Button 159-160）。いやむしろ、実証主義的アプローチが一般性を見いだすとしたら、それは、個別の実際的状況の直中に観察可能なもうひとつの一般性ゆえに、そもそも可能となるのだと考えられる。それはたとえば、自殺の社会的原因の研究のために自殺の事例を収集しようとするとき、ひとつひとつの事例を「自殺の一事例」として認識可能にしている拘束である（Atkinson 1978）。

Sacks は、「一般的であると自称する記述」について次のようにコメントしている。

> 「特定の事例についての記述であろうとするいかなる記述も、「その種の事例」についての記述として読まれうる。だから、一般的であると自称している記述によって何がえられるのかは、まったく曖昧である。〔中略〕一般的であると自称している記述を書くことで得られる性急な結論は、それによって特定の対象が一般的対象の「一ヴァージョン」となることである。その次には、世界におけるいかなる対象も「不完全」なものとして扱われることになる。たとえば、ふるまいが合理的だと記述されたふるまいに一致しないとき、それは「部分的に非合理的な」ものとして語られることになる。」（Sacks 1963: 14、〔〕内引用者）。

隣接ペアという概念をこの観点からふりかえってみよう。質問がなされた直後には圧倒的に多くの場合に応答が行われる。実証主義的な一般性の理解によれば、「質問の後には応答が来る」という規則性は、極めて高い一般性を有するものといえる。しかしながら、隣接ペアという概念によって記述されているのは、このような意味での一般性ではない。むしろ、あるふるまいが質問として認識可能であるとき、それは同時に、「次に応答が返されるべき発話」として認識されることが不可避であるという仕方で、隣接ペアの一般的拘束は存在する。「質問の後に応答が来るべきである」ことは、ひとつの発話が質問として認識可能であることのうちに、すでに一般的拘束として実現されているのである。だから、ひとつひとつの質問は何か「理想的質問」なるものの不完全な一ヴァージョンなのではない。質問の後に応答が来ないとき、それは「部分的に非合理的な」質問なのではない[(3)]。それはそれ自体として十全な質問であり、応答が来ないことの意味（相手は聞いていない、相手は知らない、相手は怒っている、等々）の方が、この一般的拘束に基づいて認識可能となるのである。

同様に、6 章で記述した「共通の成員としてふるまうこと」に関する拘束も、個々の相互行為そのもののうちに一般的拘束として表示されている。一人が自分のある経験を報告することで、それを聞いた者は「自分の経験を類似の経験として話す」ことへの一般的拘束に方向づけられる。だから、一人の経験報告は、たんに私的経験として聞かれるのでなく「われわれの経験」として聞かれる。また、

「自分の経験を類似の経験として話す」ことは、たんに自分が持ち合わせていた類似の経験を見つけ出して報告するという形でしか実現されないのではない。そのような経験を持ち合わせていない場合には、それが「ない」ことを見て取ったことを報告したり、「ない」理由を探索していることを示したりすることが試みられる。これらのふるまいはいずれも、類似の経験が見つからないという状況のもとで「自分の経験を類似の経験として話す」という拘束にふるまいを方向づけるやり方なのである。だから逆に、たとえば診察室で患者の身体的経験を聞いた医者が、自分の類似の身体的経験を報告したり、類似の経験が「ない」理由を探ろうとしたりしないのは、この一般的拘束が働いていないからではない。むしろ、そのような一般的拘束があるがゆえに、医者は「今ここで私はあなたと共通の成員としてふるまってはいない」ことを認識可能にできるのである。

もうひとつ、6章の記述から一般的拘束の例をあげよう。ここで扱った会話事例においては、「受験期にはまった」という言葉が共通経験を格上げする手続きとして用いられていると述べた。この会話者たちの住む社会的世界に受験という制度があり、多くの若者が人生の一時期においてその制度に日常生活を縛られることは、この特定の会話の特定の時点で「受験期」という言葉が経験の格上げという行為に利用できることのうちに実現されている。「受験期」についてこのような仕方で話すことは、この会話が「受験という制度のある社会的世界においてその制度の一方の中核的参加者（＝受験生）という立場をすでに（成功裏に）通過し終えている」者同士の会話であるという、この会話が埋め込まれた社会的文脈を、この場の相互行為にとって関連あるものとして構成している。その種の社会においてその種の立場にある者たちは、事実としてどのくらいの統計的頻度でそうするかはともかく、「私は受験期にＸにはまった」（Ｘには「受験に直接役立たない活動」というクラスの中の任意の要素が代入可能）という話し方によって経験Ｘを格上げするという行為を行うことが可能である[(4)]。この可能性をもたらすのが、一般的拘束なのである。

このような仕方で行為への拘束を記述することで、実際の相互行為場面は幾重にも折り重なった「社会ーの中のー行為」の組織化として成立しているものと記述される。たとえば、6章で扱った会話場面は、少なくとも次のような「社会ーの中のー行為」の折り重なりとして組織化されている。

(a)「ある仲間集団にともに属する者」たちが「自分たちの共通の成員性」にふるまいを方向づけることで、ひとりの報告した経験を「われわれの経験」として聞いており、それを通じて自分たちの「共通の成員性の境界を交渉」している。

(b)「受験という社会制度のある社会」において「受験生という立場をすでに（成功裏に）通過し終えた者」同士が、「その社会制度と自分たちとの関係」にふるまいを方向づけることで、「生活史上の共通経験を発見」し、「共通経験をひもとき」、それによって互いの「生活史の部分的書き換え」が行われている。

(c)「ともにヘビイメタルロック音楽のビデオを見ている」者たちが、その場面的文脈を利用してひとつの「話題を開始」し、ひとりがその話題から「連続的に新しい話題を導入」しようとしたときに、別の者が導入されつつある話題の「もうひとりの話題上の話し手としての名乗り」を上げ、両者が「ともに話し手となる形で新しい話題が展開」されはじめている。

(d) ある発話が先行発話に対して「格上げ」を行っていたり、オーヴァーラップした相手の発話を「制止する」ことが行われていたり、「ひとつの発話を二人で協同で完成させる」ことが行われていたりという形で、秩序だった発話連鎖がつくりだされている。

要するに、言葉を用いた相互行為を行う人々は、ふるまいのデザインや配列を通じて、１）ふるまいをある行為として認識可能なものにし、２）その行為が方向づけられた社会的文脈を認識可能なものにし、３）そうした「社会－の中の－行為」が固有の仕方で折り重なったものとしてその固有の場面を認識可能にしている。このような形で相互行為を記述することの一環として見いだされる一般的拘束は、相互行為そのものの「内部」に観察可能な形で表示されている。会話分析にとって、行為への拘束を捉えるという課題は、このような一般的拘束の折り重なりを解きほぐすこととして理解される。

たしかに、人々が何らかの社会構造に拘束されているということは、概念内容において個別の状況を超えたものに、ふるまいが方向づけられているということである。だが、このことは社会構造を記述するために、方法論上も、それを個別の状況の外部に見いださなければならないという理由にはならない。むしろ、実証主義的な方法によって析出された社会構造は、個別の状況の中での個別の行為を拘束していることが蓋然性としてしか与えられないのに対し、会話分析のやり方で見いだされた一般的拘束はひとつひとつのふるまいに手続き上の結びつきを持っている。それらの手続きは個別の状況を超えたものを相互行為にとって関連ある文脈たらしめることを可能にし、だからこそそのような手続きを通して／において、人々は状況を超えたものに拘束されるのだ、という見方が可能である。

会話におけるオーヴァーラップ発話の完成手続き、「そう」「うん」といった小さなパーティクルなど、一見したところトリヴィアルなふるまいに注目することの、ひとつの方法論的重要性がここにある。これらの微細なふるまいは、行為が幾重にも折り重なった一般的拘束に方向づけられていることを映し出す、いわば鏡なのである。人々はふるまいの配列や細部のデザインにおいて、一般的拘束の折り重なりを映し出している。それらは、記述された一般的拘束の適切さを保証するという方法論的重要性を持っているのである。

さて、以上を踏まえたとき、次のことが疑問として残るだろう。相互行為の実際的状況において行為に働いている拘束には、会話分析の方法で記述できない拘束もあるのではないか、と。この疑問に一般的な形で答えることは困難である。会話分析の視点からは、そのような拘束があると思われるなら、それに参与者のふるまいが方向づけられているかどうかを徹底的に調べることしかない。だが、別の形でこうした疑問との接点を探るひとつの試みとして、次の問題を考えてみたい。すなわち、会話分析が記述するような一般的拘束は、社会文化的世界によって異なるのか、それともそれを超えた普遍的ともいえる性格を持つのか。

この問題を考えるために、以下の考察では、上に述べた意味での「内側からの分析」から歩み出ることになる。この作業は、それを行う研究者がどこに立っているかという問題を惹起する危うい作業であるが、会話分析の知見をより広い人間科学の関心の中に位置づけてみるためには一定の意味があると思う。また、このような作業を通じて、「内側からの分析」をさらに掘り下げるヒントが見つかる可能性もあると思う。次節では、この問題について考えるための素材が比較的豊富な二つのテーマとしてターンテイキング組織と連鎖組織に焦点を当て、通文化的な考察を行ってみたい。

４　相互行為の「文化」

６章の分析では、Sacks がアメリカの暴走族の少年たちの会話について述べた「超－豊穣な話題」という概念を引用し、それは会話への参加が「共通の成員であることをする」ものとして組織化されるひとつの顕著な形式であることを見た。この Sacks の着想は、そもそも、Evans-Pritchard が『ヌア

ー族』の中で述べている「ヌアー族の人々は牛の話ばかりしている」というくだりにヒントを得たものである（Sacks 1992 vol.1: 601）。アメリカの暴走族の少年たちの「車」の会話、ヌアー族の人々の「牛」の会話、６章で見た日本の大学生の「音楽」の会話には、社会文化的世界の相違を超えて、人々が「共通の成員であることをする」ための共通した手続きが用いられている可能性がある。このような事例からは、会話分析の方法で記述される一般的拘束が、社会文化的世界の境界を超えて広く共通に見られるものではないかという予感を受ける。

だが、言葉を用いた相互行為という領域に関心を向けた人類学者たちは、対象社会で会話分析の見いだした拘束が必ずしも当てはまらないことをしばしば報告してきた。また、この指摘はしばしば、彼らが西洋のコミュニケーション論の一面性に向けた批判と軌を一にしてきた。まず、このことを確認することから始めよう。

４．１　コミュニケーション論における西洋中心主義の相対化

言葉を用いた相互行為という活動領域に焦点を定めた研究を行った人類学者は、対象社会で見いだされた知見を踏まえて、しばしば西洋で生み出されたコミュニケーション論の一面性を批判してきた。すなわち、言葉はそれと独立に存在する事象（外的事象であれ、「意図」のような内的事象であれ）を「反映」するものであると見る構えを批判してきた。これは広い意味で、語用論的コミュニケーション研究を批判してきた本稿とめざす方向を共有している。

たとえば、サモアにおける政治的＝立法的集会（fono）での相互行為を分析した Duranti は、意図によって支配される発話の効力という観念がサモアの人々のあいだでは通用せず、発話への責任は意図よりもそれが引き起こした帰結によって帰属されることを指摘している（Duranti 1988, 1993）。サモアの乳幼児と養育者との相互行為を研究した Ochs の知見も、これを裏付ける。Ochs によれば、典型的なアングロサクソンの中産階級の家庭とは異なり、サモアの養育者は乳幼児のふるまいや発声に何らかの意図を帰属して解釈することはほとんどないという（Ochs 1982）。

フィリピンのルソン島に住むイロンゴット族の調査を行った M. Rosaldo は、イロンゴットにとって行為の区別は誠実性と真理への関心に基づくのではなく、社会的絆と相互行為的意味に基づくと述べ、Searle による言語行為の分類学がここでは有効でないと結論づけている。彼女によれば、「サールは英語の遂行的動詞を何か普遍的な法則のようなものへのガイドとして用いているが、彼の取り組みはむしろひとつの民族誌として理解した方がよい」（M. Rosaldo 1982: 228）[5]。

Du Bois は、３つの民族誌で報告された託宣の言葉（ナイジェリアのヨルバ族の託宣、スーダンのアザンデ族の託宣、ガーナ北部のシサラ族の託宣）を言語行為論の理論的前提と突き合わせて検討している。その結果、託宣の言葉がその機能を果たすのは、それが（超自然的存在をも含む）いかなる者の意図にも支配されていないと見なされているためであるとし、言葉の社会的機能の背後に常に意図を仮定する言語行為論の一面性を指摘している。ここから導き出されるのは、発話の背後に意図を見いだすことも見いださないことも、言葉がその社会的機能を果たすべく取り扱われる異なったやり方の一部なのだという見方である（Du Bois 1993）[6]。

しかし他方、人類学者は、英語圏の会話をデータとして生み出された会話分析の知見に対しても、しばしば、ある種の西洋中心主義を見いだしてきた。また、本稿では、日本という非西洋社会のひとつにおいて、会話分析の知見を適用しつつ分析を行ってきた。これら３者を突き合わせることで、相互行為手続きの通文化的比較において現時点で何がいえるか、また今後の探究に向けてどのような見通しを立てることができるかを論じてみたい。

４．２　ターンテイキング組織の「文化」と普遍性

人類学者たちが会話分析の知見に西洋中心主義を見て取るとき、焦点が当てられてきたトピックのひとつはオーヴァーラップである。いくつかの非西洋社会（サモア、オーストラリア中部ピジャンジャジャラ、西インド諸島のアンティグア島、ザイールのエフェ、ボツワナのグイ、カメルーンのバカ）において、一度に一人という規範への指向はそれほど顕著ではなく、人々は会話の中で頻繁にオーヴァーラップを行い、生じたオーヴァーラップを解消しようとするとは限らず、ときにはオーヴァーラップを積極的に求めることで連帯や平等性を表出する、という指摘がなされてきた（Duranti　1997, Liberman 1982、Reisman 1974、澤田 1996、 菅原 1991, 1996a, 1998、木村 2003 ）。

ターンテイキングは会話への参加の組織化のもっとも基本的な局面である。会話の中で行われるさまざまな行為は、ターンを獲得し、発話連鎖の中でしかるべき位置を占めることによって可能になるのである以上、ターンテイキングは人々がさまざまな行為を産出するためのもっとも基本的な条件である。プロクセミクスの創始者 Hall は、異なる文化に住む人々が異なる個体距離や社会距離を持つために、異なる世界に住んでいるのだという強烈な文化相対主義的見解を提出した（Hall 1959, 1966）。もしも、ターンテイキング組織が異なるならば、Hall が述べたのと同じくらい強い意味において、異なるターンテイキング組織を用いている社会の人々は、異なる世界に住んでいるのだといわなければならない。そうなのだろうか。

非西洋社会の人々のあいだでオーヴァーラップは常態である、という指摘を含む民族誌として、比較的早い時期に書かれたのは、奇しくも Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）と同じ年に発表された Reisman の報告である。西インド諸島のアイティグア島で調査を行った Reisman （1974）は、島の人々の会話が、英語話者の会話と異なり、「各々の声が旋律を持ち、それを維持する」とともに「それらの声はしばしば同時に別々に歌う」という点で「対位法的」であると特徴づけた。Reisman によれば、アンティグアの人々の会話においては「基本的に、二つあるいはそれ以上の声が出されないように求める慣例化した規制はない。新しい声が始まったからといって、そのこと自体は、今話している人が話をやめたり、どちらがフロアをとるべきかを決めるプロセスが開始されたりするしるしにはならない。」（Reisman 1974: 113）

近年、Reisman の報告の妥当性を会話分析の手法で確かめようとした Sidnell（2001）は、アンティグア島の人々と同じスピーチコミュニティと見なしうるガイアナのカリブ人の村落（いずれもクレオール英語）において会話を収集し、トランスクリプトを詳細に検討した。その結果明らかにされたのは、カリブ人が用いているターンテイキング組織が、英語で見いだされたターンテイキング組織と基本的に同じであるということだった。彼は、オーヴァーラップの開始位置、競合的オーヴァーラップにおける１ビートごとの交渉、といった論点をそれぞれ取り上げ、いずれにおいても基本的な相違がないことを示している。この結果に基づいて、Sidnell は、ターンテイキング組織がスピーチコミュニティによって異なるものではなく、むしろ種としての人間に普遍的なものであると推論している。

Sidnell の議論の基調は、会話分析と民族誌の統合を唱えている Moerman（1988）によってもすでに先取りされている。タイの農村で調査を行った Moerman は、会話分析の手法を用いて村人同士の会話や村人と役人の会話を分析することで、Sacks らが定式化したターンテイキング組織、修復組織、人物指示組織などが、タイの農村の会話においても同じように用いられていることを確認した。彼が分析している事例の中には、３章で見たオーヴァーラップ発話の継続や、４章で見た共同的ユニゾンとまったく同じ形式も確認できる（Moerman 1988: 26）。Moerman の分析を本稿と突き合わせる限り、

英語圏と日本とタイにおいて、ターンテイキング組織に基本的な違いは見られない。

ただ近年、アフリカの一部の狩猟採集民において、これらの国々とはかなり異なるターンテイキングの「文化」が見られる可能性が、Reisman（1974）よりも精密な方法で報告されている。カメルーンの狩猟採集民バカの調査を行った木村（2003）によれば、バカの会話では日本人の会話より頻繁に発話重複が生じるとともに、重複したときに一方が発話を中断するという解消の工夫があまり行われない。また、数十秒から長いときには数分にわたる沈黙が訪れても、人々は平然としている。木村はこの印象を、近隣の農耕民バクウェレおよび日本人の会話との計量的比較によって裏付けており、バカの会話の外観が英語圏や日本の会話と異なるという報告には説得力がある。ただ、量的に測定された外観の相違が「文化」の相違を意味するのか、さらにはターンテイキング組織の相違を意味するのかは、バカが発話重複によって何を行っているかが分からないと即断はできない。これについては、今後の研究を待つ必要がある。

また、菅原はボツワナの狩猟採集民グイの会話において、西洋社会や日本の会話には見られない長いオーヴァーラップが頻繁に生じていることを、会話のトランスクリプトの検討を通じて示している（菅原 1991, 1996a, 1998）。とりわけ衝撃的なのは、菅原が日本人の感覚からしてもっとも理解しにくいと報告している「並行的同時発話」、すなわち、同じ会話場にいる複数の人々が互いに内容上の関連の薄い発話をかなり長い時間にわたってオーヴァーラップして発話するという参加形式である。では、並行的同時発話を極とするグイの会話には、異なるターンテイキングの「文化」が見られるのだろうか。またそれは、ターンテイキング組織の違いをも意味するるのだろうか。菅原の議論は、この点で両義的である。

一方で彼は、Sacks らの記述したターンテイキング組織が「かなり高い普遍性をもっている」とし、それは「実際に起こる会話の多様性をほとんど包摂するに足る柔軟性をそなえ」ているとする（菅原 1998: 103）。この結論は、一度はグイの会話世界に異なるターンテイキングの規則が見られるという結論に傾いた（菅原 1991）彼が、グイの会話のターン構成単位と見なしうる韻律ユニットに着目して再分析したうえで到達した結論であるがゆえに（菅原 1996）、その持つ意味はたいへん大きい。グイが会話において指向しているリソースを見定めることで、菅原は頻繁な同時発話という外観を生み出しているターンテイキング組織に到達したと考えられるからである。

他方で彼は、グイの会話においては「なんらかの文脈的な特性によって、順番どりシステムではうまく説明できないような相互行為のモードへの切り替わりが起きる」（菅原 1998: 160）と述べる。また、「インタラクションのセンス」という言葉を用いて、グイの会話は「随意に他者たちのプレイから注意を逸らしうるし、さらには別個のゲームを始めることもできる」（菅原 1998: 326）ような「並行的な共在」と呼びうるセンスに貫かれていると論じる。これらの論点を踏まえて書かれた次の箇所では、ターンテイキング組織が同じであるとしても、その利用の仕方においてグイには特有の「文化」があることが指摘されていると読める。「クイが多様な文脈と関係に応じてこのルール［ターンテイキングの規則］を解体させてしまうそのありさまをもルールの概念で整序できるわけはない。彼らはある種のセンスに導かれて同時発話をかぶせるのである」（菅原 1998: 329、［］内引用者）。

さて、本稿では３章および４章を通じて、日本人の会話に見られるオーヴァーラップの分析にかなりの紙面を費やしてきた。では、以上のような先行研究と本稿の分析と突き合わせるとき、何がいえるだろうか。

第一に、ターンテイキング組織のリソースは、相互行為の中でさまざまに異なる行為のために異なった仕方で利用されうる。その利用の中には、ユニゾンを含むさまざまな形態のオーヴァーラップも

含まれる。日本語話者たちのあいだでも、さらには同じ会話者たちのあいだでも、ターンテイキング組織は異なった行為を行うために異なった仕方で利用されること、これは３章から５章の分析において十分に示されたと思う。だから重要なのは、オーヴァーラップが（頻繁に）生じるか生じないかということではなく、特定のタイプのオーヴァーラップが生じるとき、それを通じて何が行われているのかということである[7]。

オーヴァーラップ・ユニゾン・協働的ターン連鎖といった現象は、いずれもターンテイキング組織の変則的な利用によって可能になっている。これらの手続きに関する英語圏の報告（Shegloff 1987, 1995, 2000, Lerner 1989, 1991, 1993, 1996a, 2002, 2004, Jefferson 1984a, 1986 など）と本稿の分析を突き合わせると、それがどのような行為のために利用されているかについて、英語話者と日本語話者の基本的な違いは見られない。また、菅原によるグイの会話トランスクリプトの詳細な分析のおかげで、われわれはグイとのあいだにも、細部にわたる共通性を確認できる。たとえば、４章【抜粋６（３）：たかぎゆたか】の「ターンの同時開始→中断→相手ターンの末尾への相互的ユニゾン」とまったく同じ手順（菅原 1998: 168）、３章【抜粋 10（３）：彼氏】の「ターンの同時開始→中断→相手のターンの完了→ターン冒頭再生」とまったく同じ手順（菅原 1998: 168）、４章【抜粋８（８）：ひとり暮らし】の「相互的ユニゾン→次のターンの取得」という手順と５章【抜粋 10（５）：フランクバーガー】の「ターン開始→相手による先取り完了→埋め込まれた反復を伴う遅れた完了」という手順が組み合わせられた手順（菅原 1998: 173-176）が、確認できる。

地理的環境、民族、言語等の諸条件に関してまったく異なるこれら３つの社会において、半ば無意識的に用いられているであろう会話手続きが細部にわたって共通していることは、驚くべきことである。これは、相互行為秩序の「相対的独立性」、あるいは会話を組織化する装置の「文脈から自由な」性質を支持する、たいへん強力な証拠である。Sidnell や Moerman の研究も含め、録音・録画したデータとトランスクリプトの精査を通じて会話手続きをひとつひとつ丁寧に分離する手法をとった研究は、ターンテイキング組織の通文化的妥当性を支持する証拠を増やしている。これをまず、現段階の到達地点として確認できるだろう。

第二に、３章で明らかにしたように、日本語の遅れた投射可能性という性質は、オーヴァーラップ発話の完成という同じ問題に直面したときに、日本語話者に英語話者よりも継続という方法を利用しやすくしていると考えられる。英語話者が再生という方法で行っていることの一部は、日本語話者においては継続という方法で行いうるものになっていると思われる。ここから考えられるのは、日本語話者から見た場合に、英語話者は再生というより有標な方法を用いてより明確な形でそのスロットへの要求を行うように見え、逆に英語話者から見た場合、日本語話者はそうした要求を明確に行わない傾向があるように見える、という可能性である。これら二つのスピーチコミュニティの場合、その相違は大きなものとは思われない。しかしこのような違いは、英語話者と日本語話者における「インタラクションのセンス」の相違の一側面であるように思われる。それはひとつの意味で「文化」の相違と呼びうるであろう。

英語話者と日本語話者のあいだに、用いられているターンテイキング組織の違いがあるとは思われない。しかしながら、ターンを構成するために用いられる統語的リソースには、その投射可能性に関して一定の相違がある。このことは、同じターンテイキング組織によってもたらされる同じ問題に対処するために、英語話者と日本語話者が利用可能な選択肢のレパートリーや優先順位に相違をもたらしうる。また、５章で明らかにしたように、日本語の「そう」「うん」というパーティクルは、多様な発話連鎖上の位置で利用可能な語彙化されたリソースである。しかし、それでもなお、この分析は

これら二つのパーティクルの働きの一部を記述したにすぎない。これと同じくらい汎用的な語彙化されたリソースを持たない言語の話者においては、「そう」や「うん」が行っていることの一部は、たとえば相手の発話にユニゾンすることによって行われている可能性もある（相互的ユニゾンの転轍用法と、「そう」「うん」の通りすがりの受け手性表示用法との、パラレルな関係を想起せよ）。

そこで一般的にいえば、異なるスピーチコミュニティのあいだに見られるターンテイキングの「文化」の違いを解明するために、少なくとも部分的には、次の作業仮説に沿った分析に着実な成果が期待できる。すなわち、ターンテイキング組織という「文脈から自由」な組織がそれぞれの言語の統語的・語彙的リソースという「文脈に感応」して利用されるとき、そのような利用によって生み出される帰結として、オーヴァーラップのやり方やオーヴァーラップした発話の取り扱い方における「文化」の違いがもたらされうる、という作業仮説である。このためには、ターンの形状や種類の投射可能性に関してそれぞれの言語的リソースの有する特性が、いっそう探究される必要がある[(8)]。

第三に、菅原は「順番どりシステムによってはうまく説明できないような相互行為のモードへの切り替わり」という指摘を行っている。これをどう考えればよいだろうか。６章で見たように、グイの並行的同時発話ほどではないが、日本人の会話においても、複数の者がともに話題上の話し手としてふるまう複線的な参加構造が作り出されうる。それは「モードの切り替わり」の萌芽的形態として位置づけられると思われる。６章の分析のひとつのポイントは、拡大された行為スペースを投射する前置き連鎖が､そのスペースに誰がどのように参加するかの交渉の機会を提供するということであった。そのような交渉で「先取りされた私事語りの承認」という手順を用いることは、二人の参与者がともに話題上の話し手になることが批准されることだと考えられた。したがって、これは「モードの切り替わり」のひとつの手続きを記述したものと見なしうる。

こうして開始された話題の中には、菅原が並行的同時発話という現象の鍵として重視している、複数の話者による「異なる連関性」の追求の萌芽的な形態も見られる。一例として、６章で分析したデータにおいて、二人が 10 分以上にわたってモーツアルトの話をしている中から【抜粋１（７）：親が何も言わなかった】を見よう。

【抜粋１（７）：親が何も言わなかった】
((この抜粋の前では、Ｂが通っていた塾の近くにある某オーケストラの練習場で、「レクイエム」のＣＤを無料で聞きまくっていたことが述べられている。))

→ 01 Ｂ：はまった.
　 02 　(0.7)
→ 03 Ｂ：家帰ってもずっと聞いてたもん楽譜見ながら.
　 04 　(0.3)
⇒ 05 Ａ：それでも親が何も言わなかったところがすごい.
　 06 　(0.4)
⇒ 07 Ａ：「あんた:電気ちゃんと消して寝(h)な(h)(さ(h)［い(h)よ(h):(h).)」］
　 08 Ｃ：　　［んふふ　　］ふん:
　 09 　ちがう［ちがう::.］
　 10 Ｂ：　　［ちがう::.］
⇒ 11 Ａ：〈勉強〉は？［んふふ
→ 12 Ｂ：　　［あたしも-(0.3)録りまくってたもんあんときモーツアルト.

13　(.)
→　14 Ｂ：°フィガロの結婚一個とり損ね［たな:とか.°
⇒　15 Ａ：　　［お母さんも一緒に見ててさっ(0.3)「ど:しよ:
16　これ:. (0.2)衛星だよねえ:. (0.3)向こういっちゃったら見れないよねえ」

Ｂは自分が塾の帰りにある場所で「レクイエム」を聞きまくっていたことを語ったあとで、「家帰ってもずっと聞いてた」（３行目）とその続きを語っている。これを聞いたＡは、「それでも親が何もいわなかったところがすごい」（５行目）と、あたかもＢの語りの続きであるように発話をデザインしているが、これはＡの体験である。続けてＡは７行目、11 行目、15-16 行目と、自分と母親とのやりとりを再現している。これに対し、Ｂは「あたしも」「録りまくってた」（12 行目）とふたたび語りを継続するが、Ａは先立つ部分で自分が何かを「録りまくってた」ことを語ってはいないので、「あたしも」という共通性を主張する発話デザインは、実は内容を伴っていない。このように、二人はそれぞれ自分の過去の体験という異なる連関性を追求（「→」と「⇒」で表示）して語っているのだが、互いの発話に感応しつつ語っている。

グイの並行的同時発話とのこうした共通性を踏まえるなら、「モードの切り替わり」を記述するうえで、前置き連鎖が持つような拡大された行為スペースの投射を可能にする手続きの解明がひとつの鍵になると思われる。前置き連鎖に関しては英語圏の会話分析でかなりの蓄積があるが、それらは多くの場合、単線的な参加構造に関するものか、あるいは「チーム」による共同物語り、共同説明などにの共同行為に関するものである。菅原によるグイの同時発話論と本稿６章の分析は、前置き連鎖のより広範な利用可能性に目を向ける必要があることを示唆している。それとともに、それぞれの言語において、拡大された行為スペースを投射するどのような手続きが利用可能なのか、この点をさらに探究することが重要な課題となろう。

４．３　連鎖組織の「文化」と普遍性

今の３点目において明らかなように、ターンテイキングにおける「文化」の違いと思われる現象を解きほぐすうえでは、しばしば連鎖組織をも視野に入れなければならない。そこで次に、英語圏の会話分析が見いだしてきた連鎖組織に関する、他の社会での報告を検討する。

この点に関してもっとも研究の蓄積があるのは、電話の開始部のやりとりの相違に関する研究である。アメリカでの電話に関する会話分析の知見によれば、電話の会話は典型的(canonical)には、「呼び出しと応答」「会話者の相互認知」「挨拶の交換」といった「開始部」を構成する発話連鎖を経て、「最初の話題」に至る（Schegloff 1986)。これは、電話の開始部において、１）相手に対してチャンネル（自分の耳と声）が開かれたことを示す、２）お互いに相手の個人的ないしカテゴリー的アイデンティティを認知する、３）お互いを相互行為への批准された参加者として認定するといった一連の問題が解決される手続きを記述している。電話の開始部でこれらの課題がこの順序で解決されていくことは、他の多くの国々（フランス、ギリシア、エジプト、オランダ、スウェーデン、中国、台湾、日本）にも基本的に当てはまることが報告されている(Schegloff 1986, Houtkoop-Steenstra 1991, Hopper et. al. 1990/1991, Lindstrom 1994, Hopper & Chen 1996, Sun 2002, 西阪 2004)。

しかし、開始部においてこれらの課題がどのように行われるかに関しては、多様なヴァリエーションが報告されている。たとえば、会話者の相互認知に関して、アメリカでは相手の方が声を聞いて気づく（多めの推測＋少なめの告知）形で相互認知が行われることが選好されている（Schegloff 1979）

のに対し、オランダでは自分から名乗る方が選好されているという（Houtkoop-Steenstra 1991）。スウェーデンではこの中間であり、自分から名乗ることが選好されると同時に、相手が気づくようにするリソースも使われるという（Lindstrom 1994）。中国では、アメリカ以上に気づくことが選好され、相手がすぐに気づかないときには、名乗らずに相手に当てさせようとするという（Sun 2002）。台湾では、敬称などで相手との距離を示しつつ相手の名を尋ねる（少なめの推測＋少なめの挨拶）というやり方がとられるという（Hopper & Chen 1996）。

だが、これらの違いが「文化」の相違を意味するのかどうかについては、何か確実なことをいう前に考えるべきことが非常にたくさんある。Houtkoop-Steenstra（1991）はオランダとアメリカの相互認知のやり方の違いが、「フォーマルさ」に関する文化的相違を意味することを示唆している。しかし、Lindstrom（1994）はこの点について、「受け手が第一スロットで名乗る／名乗らないこと」と「掛け手が第二スロットで名乗る／名乗らないこと」との、発話連鎖上の位置の違いを考慮する必要を指摘する。相手がまだ誰か分からない時点で名乗ることは、相手に対する信頼を示すことでありうる。だが他方、掛け手が第二スロットで名乗らないことは、相手が自分を声だけで分かるはずだという主張となりうるため、それは親密にふるまう方法となりうる。また、Hopper et. al.（1990/1991）は、文化的相違として報告されたヴァリエーションはすべて、知り合いか否か、近い過去に電話で話した相手かどうか、業務上の電話かどうかといった違いに応じてアメリカの中でも観察されるヴァリエーションであると指摘するとともに、文化的相違を報告する者がしばしば文化の相違と言語の相違を区別していないと批判している。さらに、Hopper & Chen（1996）は、親密な者の電話と見知らぬ者同士の業務上の電話では、さほど親密ではない知り合い同士の電話に比して、それぞれ異なった仕方で開始部の発話連鎖が圧縮されることを指摘しており、このような社会関係に応じた圧縮という傾向自体は文化や言語の違いを超えた特徴であるとしている。

本稿には、これらの問題に深入りする準備はない。ここではむしろ、以上の先行研究で報告されているヴァリエーションがどのような仕方で生じているかについて、本稿の分析と結びつけうる二つの一般的ポイントを引き出してみよう。

第一に、会話の中ではしばしば、同じ相互行為上の課題が二人のどちら側からの行為によっても解決されうるスロットが作り出される。電話の開始部で相互認知が行われるスロットも、このような性質を持つもののひとつである。そこで一般的にいえば、ある相互行為上の課題がどちら側からの行為によっても解決されうるスロットが作り出されるとき、それらの選択肢のあいだにどのような優先順位をつけるかに関して、文化あるいは社会関係によるヴァリエーションが生じうる。これが、電話の開始部の比較研究から得られるひとつの知見である。

サモア人の会話を分析した Ochs（1988）の報告の中にも、この観点から理解できるものがある。Ochs によれば、会話の中で相手の曖昧な発話やふるまいの意味を明確化しようとする（他者開始修復）とき、白人中産階級の人々の会話とサモア人の会話とでは、優先される方略が異なっている。白人中産階級の会話においては、「自分の推測をあらわにする」という方略がまず用いられる。たとえば、相手の発話の一部が聞き取れなかったとき、「＊＊さんがどこに行ったって？」というように、自分がどこまで聞き取れたかを観察可能にする形で聞き返すというやり方である[(9)]。これに対し、サモア人の会話では「最小の理解」という方略が優先される。たとえば、今と同様の状況で、単に「え？」と聞き返すというやり方である。この二つの方略は、相手に明確化を求める二つのやり方であるが、別の見方をすれば、自分が聞き取れたことを自分の口からいうか、相手にいわせるかという選択でもある。この点で、それは同じ課題をどちら側からの行為によって解決するかという選択の、また別の

事例と見なすことができる。

興味深いことに、どちら側からの行為によっても満たされうるスロットは、４章と５章で見たように、ユニゾンや協働的ターン連鎖といったターンテイキング上変則的な参加の組織化が、しばしば観察される場所でもある。そのようなスロットは、たんに文化や社会関係に応じた相違が見られるだけでなく、同じ会話者たちのあいだでもそのつどの会話の文脈に感応して、多様な仕方で利用されると考えられる。逆にいえば、そのようなスロットは、発話連鎖の形状を通じて社会的文脈が表示されるひとつの典型的場所であると考えられる。

第二のポイントは、連鎖組織の圧縮と引き延ばしという問題である。圧縮や引き延ばしは、ひとつの発話が複数の連鎖上の含みを持ちうることから生じてくる。たとえば、呼び出しに応じることは「応答」という行為を行っている（呼び出し－応答という連鎖を終了させる含み）と同時に、「声の標本」を提供する（相互認知を開始する含み）ことでもある。ひとつの発話が複数の連鎖上の含みを持ちうることによって、相手がどちらの含みに応じるかに選択の余地が生じる。また、多くの発話は「それ自身の資格において」聞かれることもできれば、「後続するであろう何かへの前置きや前触れ」として聞かれることもできる。これは、ある連鎖組織が別の連鎖組織の前置きとして利用できること、ある連鎖組織と別の連鎖組織が交差しうることなどから生じる。５章で明らかにしたように、ひとつの発話は交差する二つの連鎖組織によって、それぞれ異なった仕方で連鎖上の位置を与えられる。これらの事情から、会話の中の多くの発話は、同時に複数の異なる発話連鎖上の位置にあるものとして認識可能となる。連鎖上の位置がどう認識されるかに応じて、その発話が持つ連鎖上の含みは異なっている。そこで一般に、電話の開始部の比較研究から、ひとつの発話が持ちうる複数の連鎖上の含みにどのような優先順位をつけるかに関して、文化あるいは社会関係によるヴァリエーションが生じうることが明らかにされた、と理解できる。

６章では、機会づけられた部分的報告の聞き手が、語り手に先に進む機会を与えるか、自らの共通経験や経験の差異を報告するかという大きく二つの選択肢（単線的参加構造、複線的参加構造）があることを示した。前者の場合、部分的報告はより長い語りのための前置きとして取り扱われ、後者の場合はそれ自身の資格において取り扱われているといえる。先ほどと同様に、ここでもこれらの選択肢のあいだでの選択は、たんに文化や社会関係に応じてヴァリエーションが生じうるだけでなく、同じ会話者たちのあいだで、発話連鎖の形状を通じて社会的文脈が表示される場所になっていると考えられる。

英語圏の会話分析では、ひとりの物語りのあとにもうひとりが「第二の物語」を語るという単線的な物語の連鎖が報告されてきた（たとえば Sacks 1992, Ryave 1978）。これに対し、私が収集したデータの範囲内でいえば、日本人の親密な関係にある者同士の会話（とりわけ女性同士の会話）では、部分的報告のあと、聞き手が直ちに自らの経験の共通性や差異を報告するのがしばしば観察される。これは、電話の開始部の比較研究で明らかにされた発話連鎖の文化的相違とよく似た種類の相違である。だが、ここからたとえば、日本語話者は（あるいは女性日本語話者は）英語話者よりも、共通の成員性を表示する形で発話連鎖を形成する傾向がある、というような「文化」の違いを結論づけるのは時期尚早であると思う。

以上２点からいえることは、二つの社会のあいだで連鎖組織の体系（たとえば、隣接ペアのレパートリー）が共通であっても、実際に生み出される相互行為の外観は相当異なったものになりうるということである。ある社会で二つの選択肢のうち一方が優先されるということの中心的意味は、そちらの選択肢が最初の可能な機会に用いられるということである。もしも、その行為が最初のやり方で成

功しないなら、人々は別の選択肢を用いて、会話の後続するスロットで、同じことを行うべくさらに試みることができる。だが、もしも最初のやり方が成功するなら、それ以外の選択肢は実現されない。会話が時間の流れの中で連鎖的に組織されるということは、同じ課題を果たすことのできる選択肢の中で、実際には多くの場合に優先順位の高い選択肢だけが用いられるということを意味する。これは、会話分析が見いだしてきた連鎖組織が、文化的相違として報告されている広範なヴァリエーションを生み出しうる手続きの体系であることを示唆する。

ただ同時に、Hopper & Chen（1996）による次の指摘の重要性も見落とすことはできない。アメリカの典型的な電話開始部の発話連鎖とされるものは、親密ではないが業務上の電話でもないという関係を表示する連鎖になっている。アメリカ人でも、関係の親密さを表示するときや、業務上の関係を表示するときには、典型的な発話連鎖が圧縮される。だが、それだけではない。親密な関係や業務上の関係を表示する形で発話連鎖が圧縮されるときには、圧縮の仕方に関して、文化的相違がより顕著に表れるようになるという。このことは、第一に、典型的とされる発話連鎖が、近代都市的な環境におけるインフォーマルな相互行為という、西洋的な社交のあり方をもっとも反映していそうなタイプの相互行為をもとに定式化されたことを示唆する。第二に、近代都市的環境におけるインフォーマルな相互行為は、文化的相違がもっとも小さくなる種類の相互行為であることを示唆する。

それゆえ、われわれは、相互行為手続きの通文化的妥当性が見いだされているように見えるとき、そこに種としての人類に普遍的であるものが見いだされつつあるという可能性のほかに、世界的規模で日々拡大している近代都市的生活様式の特性が見いだされているという可能性にも、常に留意しておく必要があるのである。

４．４　小括

以上の作業から現時点で得られる結論として、２点をあげておきたい。

第一に、異なる社会文化的世界のあいだでの相互行為のあり方の多様性と、ある社会文化的世界の中で社会関係や場面の違いに応じて生じてくる相互行為のあり方の多様性とを、最初から異なる水準の現象だと区別してかかることはできない。むしろ、どちらの多様性も同じ「文脈から自由」な装置が「文脈に感応」することによって生み出されたものとして記述できるという可能性が、真剣に考慮されるべきである。

第二に、会話分析が見いだしてきた「文脈から自由」な装置は、異なる社会文化的世界を貫いて共通に用いられているものである可能性がある。もしもそうであるなら、人間はそれぞれ固有の社会文化的世界を作り上げているが、他方で、行為がそれぞれの社会文化的世界のもとにあることを互いに認識可能にする方法は、共通している可能性がある。

５　結論

社会的状況における相互行為は、社会学において長いあいだ正面から取り上げられることのなかった研究対象である。この対象領域に関して初めて広範な経験的研究を行った Goffman は、ふるまいの統語論的関係に注目せよという核心に迫る提言を行い、参加の組織化という重要な主題を明記したが、その関心が言葉に正面から向けられることは少なかった。他方、言語学においてもこの対象領域は長いこと顧みられなかったが、言語行為論に端を発する語用論的コミュニケーション研究は、言葉の文脈的意味に注目することで、実際のコミュニケーションにおける言葉の働きを初めて本格的に探

究し始めた。これらの研究は、言葉を用いた相互行為のいくつかの重要な側面を照らし出すのに大いに貢献してきたが、どうしてこの領域が社会学や言語学において「派生的」で「無秩序」だと見なされてきたのか、という基本的問題が掘り下げられることはなかった。

それを掘り下げることで、確固たる土台を提供したのが、エスノメソドロジーである。エスノメソドロジーは、言葉の指標性を解消することが従来の社会学方法論の要請になっていることを見抜くことで、言葉が指標性を帯びつつ通用している手続きを記述するという新たな探究目標を開示した。この目標と、ふるまいの統語論的関係を分析するという Goffman の視点が会話分析において合流することで、初めてこの対象領域における精巧な秩序を系統的に記述することが可能となったのである。本稿では、会話分析に依拠しつつ日本語会話における参加の組織化の手続きを記述する中で、以下のことを論じてきた。

第一に、従来のコミュニケーション論においては話し手の特性に関して理論的な規定が与えられ、それがコミュニケーションを説明する決定的要因と見なされてきた。参加の組織化という問題に注目することは、このような問題の立て方を変更し、人々が相互行為の中で話し手であることはふるまいの統語論的配列を通して／として、さまざまな形でそのつど認識可能になるものであることを明らかにする。この過程において、言葉はたんに何かを表現・伝達する道具としてではなく、それが時間の中で開示される形式的構造を備えていることによって、相互行為への参加を組織化する道具となる。このような言葉の働きの核心にあるのは、人々が進行中の相互行為の中に言葉を位置づけるために用いている手続き、そして時間の中で用いられる言葉に備わった投射可能性という性質である。このような見方をすることで、従来のコミュニケーション論に対して新たな問題提起が可能になる。

第二に、会話分析の視点から行われる相互行為の分析は、従来の社会学のやり方とは異なるもうひとつの社会学的探究を構成している。従来の実証主義的社会学のやり方は、行為者や社会構造に理論的に定められた特性を与え、それらの概念に社会秩序の成立を説明する決定的任務を託する点において「外側からの分析」といえる。これに対し会話分析は、人々が互いに理解可能な仕方で行為を産出する方法を研究の装備として利用するとともに、それを研究対象にするという「内側からの分析」である。この相違のもとで、両者においては、行為への拘束をどのように捉えるかが異なってくる。前者においては、行為を拘束する社会構造は、概念内容において個別の状況を超えているだけでなく、方法論上も、個別の状況を超えている。このため、個別の状況の中の行為に対する社会構造的要因の拘束は、蓋然性として記述される。これに対し、後者においては、行為はその個々の事例が文脈の中で認識可能になるとき、同時にさまざまな一般的拘束へと観察可能な形で方向づけられていると記述される。一般的拘束は、概念内容において個別の状況を超えているが、それは個別の状況のただ中において、行為に対する手続き上の結びつきを持って見いだされる。このような意味において、会話分析は人間社会を系統的に探究するためのもうひとつの一貫した方法論となっている。

第三に、会話分析がやろうとしていることのひとつの可能な特徴づけとして、それを一種の「文化」社会学と見なすとき、従来の社会学や人類学との関心とのひとつの接点が見いだされうる。ただ、この意味での「文化」は、従来区別されてきた社会文化的世界に収まるものではない。まだ確かなことをいえる段階ではないが、会話分析の見いだした「文脈から自由な」手続きは、たんにひとつの社会文化的世界の中で個別の状況を貫いているだけでなく、異なる言語的リソースを持った異なる社会文化的世界をも貫くものであることを支持する証拠が増えている。それらの手続きは、個々の言語的リソースという「文脈に感応」しつつ固有の社会文化的世界を形成するものであるが、同時に、人間が手に入る資源を用いて固有の社会文化的世界を作り出すことを可能にしている普遍的方法の一部であ

る可能性がある。

もちろん、以上３点のそれぞれについて、残された課題も多い。第一の点についていえば、相互行為への参加が組織化されるリソースとして、言葉のみならず身体的リソースが重要であることが近年ますます明らかにされてきている。本稿の分析でも、重要だと思われた部分では参与者の身体的ふるまいに注意を向けてきたが、近年のこの領域の進展を踏まえたとき、分析が不十分であることは認めざるを得ない。本稿の探究を通じて、言葉が参加の道具として働くという論点がいちおう説得的に提示できたとするなら、参加の組織化という仕事において言葉と身体がそれぞれどのように用いられているのかを本格的に探究することが、今後の重要な課題となる。

第二の点についていえば、相互行為の秩序という Goffman の着想を発展させ、行為への社会的拘束を「状況に溶け込むこと」として探究するという方針に見通しを与えることはできたものの、それはまだ例示にとどまっている。またこれと関連して、ここで取り上げたデータの多くがくだけた会話であるために、社会学者が関心を寄せてきたような社会的拘束との接点は限られたものになっている。この点を補っていくためには、「社会構造」「制度」「権力」等の拘束がより赤裸々に相互行為の「内部」に立ち現れるデータにも目を向け、本稿の記述をさらに発展させることが必要である。またその過程では、Sacks の着想の中でまだ十分に発展させられていない「成員カテゴリー化装置」に関する議論を発展させていくことも課題となる。

第三の点に関しては、日本語という言語的リソースの特性がいっそう探究されなければならず、そのためには言語学者との積極的な対話が必要となる。また、他の社会文化的世界で相互行為の研究に着手している人類学者の仕事とも、さらなる対話の継続が必要である。幸いなことに、わが国においても近年、このような対話に興味を示す言語学者や人類学者が次第に増えつつある。彼らとの共同作業の中で、人間社会に関するトータルな探究の一翼を担うことをめざすこと、この遠大な目標に向かっても歩みをさらに進めなければならない。

ただ最後に、相互行為の秩序の探究にとって、その可能性の中心には、会話分析が切り開いてきた連鎖分析があることが忘れられてはならない。本稿の議論が上記の諸点を犠牲にせざるを得なかったのは、このような認識のもとで探究の土台固めをすることが急務であったからである。とくに、日本語話者の相互行為に関しては、相互行為を連鎖的に組織化する装置そのものが、まだ本当にわずかしか解明されていない。上記いずれの課題を果たすにも、それらの装置が解明されていかないことには、足元の危うい作業しかできない。それゆえ、日本語話者の相互行為を的確に記述しうる連鎖装置をよりいっそう解明していくことこそ、上記の課題のすべてにつながるもっとも重要な今後の課題である。

注

１章

（１）　「会話分析」という名称がカヴァーする研究の範囲について明確な合意があるわけではなく、この立場を自称している研究者たちが一枚岩だというわけでもない。狭義には、それは Harvey Sacks、Emanuel A. Schegloff、Gail Jefferson の共同研究（たとえば、Sacks, Schegloff & Jefferson 1974、Schegloff & Sacks 1973、Schegloff, Jefferson & Sacks 1977、など ）を通じて土台が築かれた「連鎖分析（sequential analysis）」をさすと捉えるのが、一般的である。しかし、基本的にこの立場に立つ研究者の中でも、社会制度の特徴を解明する手だてとして連鎖分析を用いている研究者たち（たとえば、Drew & Heritage（eds.）1992 に所収の諸論文、Clayman & Heritage 2002 など）の仕事は、純粋な連鎖分析に対して応用編としての位置を占め、研究の中心的目標に若干の相違が見られる。また、連鎖分析を土台にしつつも、視線や身体行動の分析を重視する仕事（たとえば、C. Goodwin 1981、C. Heath 1986、M.H.Goodwin 1990 など）は、狭義の会話分析とはやや異なるものと理解されることがある。また、Harvey Sacks の仕事の中で「成員カテゴリー分析（membership categorization analysis）」を発展させようとしている Stephen Hester や Peter Eglin たちは、自分たちの仕事を会話分析と対置している（たとえば、Hester & Eglin 1997）。さらに、近年「相互行為的社会言語学（interactional sociolinguistics）」と呼ばれているような会話分析の手法に依拠した言語学者の研究は、連鎖分析の考え方を踏まえながらより言語学的な目標を掲げている（たとえば、Ochs, Schegloff & Thompson（eds.）1996 に所収の諸論文など ）。本稿では、基本的には連鎖分析のことを念頭に「会話分析」という言葉を用いるが、それは私なりの関心や理解によって屈折させられているものであることもお断りしておく。

（２）　おそらく数少ない例外のひとつは、C. W. Mills による「動機の語彙」論である（Mills 1940）。人々がどんな言葉を用いて動機を表明したり付与したりするかに注目することで、当該社会の知識体系・観念体系に迫ろうとした Mills の構想は、一面では、後に述べるような「文化」社会学としての会話分析のあり方を先取りしている。

（３）　今日の定量的社会調査の基盤を築いた Lazarsfeld の方法論について、Benson & Hughes（1991）はこうコメントしている。「〔調査対象の〕諸特性や諸属性は変数と見なされ、それは数を数えるための基本的な数学的要請を満たさなければならないことになる。すなわち、基本的には、同一性と等価性という要請である。諸特性によって分類された諸単位は、あるカテゴリーに属するまたは属さないものとしてきっぱりと分類できねばならず、そのカテゴリーに属するまたは属さないものと分類された諸特性は、等価なものとなるのである。」（Benson & Hughes 1991: 118、〔〕内引用者））

（４）　研究の途上で言葉の壁に直面せざるをえない人類学者は、概して、社会学者よりも調査対象とする人々の言葉を重視してきたと思われる。しかし、人類学に会話分析を導入しようとした Moerman は、解釈人類学の泰斗 Geertz の「シンボルが…体現する意味は、しばしば捕まえどころがなく、曖昧で、揺れ動き、絡まり合っている」という不平を見逃さない。Geertz は、シンボルが明晰で安定した一義的な意味を欠いていることを、人類学者の探究にとって障害だと見なしているが、Moerman はこれを批判して、「およそシンボルの意味が固定され、明確になるのは、それが状況の中で用いられる実際の場面において」であり、そのことを顧みずに「世界が現にあるのとは違うものであることを求めるならば、約束されているのは失望である」（Moerman 1988: 97）と述べる。

（５）　今日、「エスノメソドロジー」を自称する人々と「会話分析」を自称する人々とのあいだには、少なからぬ距離ができている。それは、１）相互行為の形式的分析に重点を置くこと、２）形式的分析のために独自の専門用語を用いるのを好むこと、３）しばしば異なる場面を横断的に比較しながら分析が行われること、４）これらを通じて「自然な観察科学」であろうとすること、といった会話分析の方向性と、徹頭徹尾「内側からの研究」をめざし、いかなる意味でも常識に対して認識的優位に立つことのない探究をめざす（その意味で「科学」を自称しようとはしない）エスノメソドロジーの方向性とが分岐してきているためである。このあたりの事情に関しては、たとえばLynch（1993），Lynch & Bogen（1994），Maynard & Clayman（1991）などを参照されたい。また、このような分岐に関連して、初期Sacksの構想と今日の会話分析とのあいだの距離を指摘する議論もある（Lynch 2000）。ただ本稿では、会話分析の形式的分析や専門用語や横断的分析は、「内側からの研究」のひとつのやり方であると考えている。この点については７章で論じる。

（６）　彼らにおいて「社会学的探究」という言葉は、「実践的社会学的推論（practical sociological reasoning）」とも呼びかえられ、専門の社会学者の学的探究だけでなく、素人が社会的事象について筋道だって考えることも含んでいる。

（７）　C. Goodwin（Goodwin 1995）は、"yes" "no" "and"の３語しか話せなくなった失語症の男性とその妻との相互行為を分析している。そこで見いだされたことは、Garfinkel のこの実験が実生活におけるわれわれの相互行為の基本的特徴をよく捉えていることを裏付けている。

（８）　たとえば、Bales（1950）が行った小集団における意思決定過程の相互行為過程分析では、初期の会話分析と同様、テープによる録音がデータとして用いられたが、分析は、理論的に構築された「カテゴリー体系」の各カテゴリーに基づいて、個々の発言をコーディングするという方法で行われた。Goffman（1961）が早くから関連ある指摘を行っていたように、この研究に代表される小集団研究は、実際に話された言葉の指標性を解消するという方法論的スタンスがいかに相互行為の秩序の解明を妨げるか、その格好の実例である。

（９）　Schegloff は、Goffman 自身がこの方針を自ら十分に実行せず、個人とその心理学を記述に滑り込ませていると批判している（Schegloff 1988）。これは、「面子」「印象操作」などの概念に集約される Goffman の相互行為論の性格を念頭においてのことである。この批判は、晩年の Goffman（Goffman 1981）が会話分析に向けた批判的コメント（会話分析は相互行為の「システム的制約」にばかり注目しており「儀礼的制約」に注目していない）への反批判という文脈でなされた。この論争の文脈内で Schegloff の反批判は妥当であるが、この文脈を離れて捉えれば、Goffman の議論は会話分析にとって別様にも理解できるものである。なぜなら、面子や印象操作は人々の経験的リアリティの一部として、相互行為の「内部に」見いだされうるのであって、会話分析としてはそれを記述されるべきリアリティの一部として積極的に受け止めることが可能だからである。実際、視線や身体行動などを含めた記述を精力的に展開している Goodwin 夫妻や Heath らの仕事は、そのような方向を示している（たとえば Heath 1986, C. Goodwin 1981, M. H. Godwin 1990 など）。また、この問題に関して串田（1995, 1999）も参照されたい。

（10）　ここで「実際上の制約」というとき主として念頭にあるのは、会話参与者たちが互いに知り合っている民族誌的背景について研究者の知識が不足しているために、参与者たちが互いに観察可能な形である文脈にふるまいを方向づけているにもかかわらず、研究者がそれを分析において見逃してしまう可能性である。これは、いかなる研究方法にもつきまとう問題であろう。

（11）　このいい方はいささか綱領的すぎるかもしれない。会話分析が社会的文脈を視野に入れていないという批判には、仮に会話分析に方法論的キャパシティがあるとしても、より広い社会的文脈を照射するためにそれを十分に活用していない（たとえば、菅原 1998: 30）、という含意がある場合が多いと思われる。このような批判の受け止め方にはいくつかの立場がありうる。第一は、Drew & Heritage（1992）に代表されるいわゆる「制度的場面の会話分析」であり、会話分析の分析装置を用いて、相互行為が位置づけられた特定の制度的文脈（たとえば、医療・学校・法廷等）の特徴を解明しようとする方向である。第二の立場として、Hutchby（1999）はより積極的に主流の社会学的関心に答えるべきだとする。彼は、会話分析の標榜する方法論的懐疑が、これまでのところ懐疑を超えて「不可知論」にまで推し進められていると論じる。この観点から、たとえば制度的場面の会話分析が「非対称性」という相互行為のうえに観察可能な特徴としてしか制度的特徴を記述しないのに対し、それを「権力」の相互行為的構成として積極的に記述すべきだとする。第三に、Moerman（1988）が提唱した「文化的文脈に位置づけられた会話分析」がある。会話分析の装置と民族誌的手法を併用することで、会話分析の手法だけでは実際問題として届きにくい民族誌的文脈を記述に組み込むことを重視する方向である。ただ、私自身は、会話分析の中心的目標を、特定の場面や制度や文化の特徴を記述することではなく、むしろ種としての人間が共通に持っているかもしれない相互行為の装置を解明することに置く立場（Schegloff 1999）に共感を覚える。６章は、このような立場を前提として、相互行為の「内部の」社会構造を記述するひとつの試みを含んでいる。

（12）「もしもし」についての以上の論述は、Sacks が 1972 年春の第３講義（Sacks 1992 vol. 2: 542- 553）で述べていることに示唆を受けている。また、西阪（2004）も参照されたい。

（13）　だから、それらの行為の違いはしばしば比喩によって表現されるしかないわけである。このことを自覚的に利用して、「ゲーム」「演劇」「スパイ」「賭け」等の比喩を用いることで、それまで気づかれていなかった多くの行為を浮かび上がらせるというのが、Goffman の論述のやり方だった。

（14）　Weber から Schutz にいたる理解社会学の理論的系譜を丁寧にフォローしつつ、独自の「意味の社会学」を展開している西原和久は、「ウエーバーの理解社会学の”方法”の”提唱”以降、自らが直接的にその”方法”の嫡子だと自認して経験的研究をすすめた例は寡聞にして知らない」と述べている（西原 1991: 116）。

（15）　その格好の例として、ザイールの農耕民ボンカンドのもとで調査を行った木村大治による、「ボナンゴ」と名づけられた行為についての論述を参照されたい（木村 2003）。

（16）　会話トランスクリプトに用いる記号は、本稿冒頭にまとめて掲載した。本稿で用いるデータの概要は、２章５節で述べる。なお、トランスクリプトの抜粋には各章の中で通し番号を振り、そのあとの（）内にビデオテープの番号を記す。

（17）　だから重要なのは、「ほのめかしの確認」という Schegloff が貼った行為ラベルではなく、この行為に施された記述である。このラベル自体は取り替え可能である。

（18）ここで「語用論的コミュニケーション研究」というのは、言語行為論や Grice の反射的意図および協調原則の理論を土台にしつつ、その着想を適用することで、現実に行われている言語使用が説明できると考える立場への総称である。

（19）　関連性理論では、受け手の推論において最大の関連性ではなく「最適の」関連性が重視されている。この点に注目して福島（2001）は、関連性理論がコミュニケーションにおける慣習性を計算主義的・認知心理学的なメタファーによって表現したものと見なすこともできると指摘している。また能川（1993）は、関連性理論が想定の「集合」を顕在化させる過程としてコミュニケーションを理論化

しているため、聞き手の推論としては「話者が意図した想定にたどり着くこと」から「深読み」を経て「もはや発言解釈でない聞き手独自の情報処理」に至るまでの連続的段階のすべてが理論的射程に入る、と指摘している。これらの指摘を含め、関連性理論において推論には慣習の働きが介在する余地が大きい。ただ、送り手がまず意図明示的刺激を作り出し、しかるのちに受け手が推論を行うという理論構成は、実際の相互行為の記述においてたいへん窮屈である。次節において、関連性理論も Shannon & Weaver の問いの立て方を継承していると見なすのはこのためである。Sperber & Wilson (1984)は、直接証拠を提示することをコミュニケーションと見なさない。また、後に述べるように、ある発話連鎖上の位置（例：質問のあと）においては何もしないことによってある行為（例：無視）が行われたと認識可能となるが、彼らにいわせれば、沈黙が無視を意味することを定める慣習はないので、これは慣習の問題ではないことになろう。しかし、このようにいうとき、彼らは慣習を規則やコードと等値することで、必要以上に慣習概念を狭めている。むしろ、何ごとかを意図明示としてそもそも認識可能にするのも、ふるまいの慣習的配列であると考えられる。そして、その中には、直接証拠を提示することも含まれうる。この点において、Grice の「自然的意味」と「非自然的意味」を連続的に捉え、発話を「徴候」と見なす形で推論モデルを再構成することを提案している高梨(1999)のやり方は、推論モデルの継承の仕方としてより有望だと思われる。

（20） Hughes(1984)は、言語行為論の枠内に「集団的言語行為(group speech act)」という概念を位置づけようと試みる中で、表現可能性の原理が同様の問題を引き起こすことを指摘している。たとえば、先進国首脳会議の決議事項を共同声明として発することは、首脳たちの集団による言語行為と見なしうるが、それは声明文の曖昧さによってこそ成立するのであって、それをより明確に言い換えようとしたとたんに成立しなくなるのである。本文で述べたのは、これが集団的言語行為に限った問題ではないということである。なお、言語行為論が実際の相互行為の中での発話の分析に関して持つ限界は、Cicourel(1980), Turner(1971), Goffman(1983a), Heritage(1990/1991), Levinson(1983), Schegloff (1996a), Schegloff(1988b)などにおいても指摘されている。また、会話分析の視点からの情報伝達モデルへの批判については Schegloff(1995)を参照。さらに、ある発話の聞き手が行いうることは、語用論的コミュニケーション研究が想定しているよりはるかに多様であることについては Goffman (1981), Grimshaw(1980)が指摘している。

（21） コミュニケーション研究の中核に「コンテクスト化(contextualization)」という問題を位置づけようとする Gumperz は、コミュニケーション能力を「話し手が会話の協調を創造し、維持するために備えていなくてはならない、言語的、あるいはそれに関係するコミュニケーション上の慣習を知っていること」(Gumperz 1984=2004: 280) と定義している。この立場は、慣習性の捉え方に関して、本稿ときわめて近いものといえる。

（22） 浜が的確に述べるように、Parsons とっての秩序問題が、「二人の者が同一の物を欲求し、それが同時に享受できないものであるとき」に帰結しうる「万人の万人に対する闘争」の問題だったのに対し、エスノメソドロジーにとっての秩序問題は「二人の者が同一の物を欲求」することがいかに可能なのか、すなわち複数の人々にとって対象が「同じ」意味を持つことがいかに可能なのかという問題であった。前者の視点からは、「同一の物」を客観的言葉で定義することが可能であり必要でもあるが、後者の視点に立つと、人々が指標的言葉を用いながら対象の「同じ」意味を作り出すことがいかに可能なのかが問題となる（浜 1998)。

２章

（１）　「投射」や「投射可能性」という言葉は、会話分析が言葉を時間の中で方向性をもって進行する動きとして捉えていることを代表するものである。この見方は、発話の行為としての効力に関して、言語行為論とはまったく異なった捉え方をすることにつながる。言語行為論においては、完結した発話文が考察の対象となり、それに効力をもたらすのは話し手の意図である。そこでは、時間という要素は考慮されない。これに対し、会話分析では、発話は一音一音、一語一語、完了可能点に向けて聞き手の前に開示されていくものである。このことは、単位としての発話がどの時点で実際に終了するかが、話し手によって独占的に決定されるのではないことを意味する。聞き手が発話の途中で「もう分かった」ことを示せば、そこで話し手は発話をやめるかもしれない。完了可能点に至っても聞き手からの反応がなければ、話し手は発話をつけ足すかもしれない。言語行為論にとって、効力の乗り物としての発話単位が話し手の意図によって統括されているのに対し、会話分析においては、どこまででひとつの単位になるかという問題が、すでに相互行為の中でしか解決されない。このため、たとえば質問としての言語形式を備えた発話が完了可能点にいたったとき、それはまだ「質問になりうるもの（possible question）」であって、質問であることは確定していないと考える。実際、質問としてデザインされた発話は、しばしばそれ以外の行為（たとえば、非難）を行っているものと聞かれる。そのことは、相手の次の反応において示される。この場合、「質問になりうるもの」は実際には質問にならなかったわけである。だから、ある発話の効力がさしあたり確定するのは、次の相手の反応によってである。

（２）　「選好される／されない」という区別は、隣接ペアの文脈では二つの意味合いがある。第一は、隣接ペアの第一部分が第二部分を投射する仕方に関する区別である（Sacks 1987）。たとえば「醤油とって」という依頼（第一部分）は、依頼の応諾を「選好される」第二部分として、拒否を「選好されない」第二部分として投射する。第二は、第二部分のデザインの特徴に関する区別である。たとえば、第二部分が最初の可能な機会に、単純な形式で行われるとき、それは「選好された」ものとしてデザインされている。逆に、遅延されたり、弱められた形式をとったり、理由説明を伴ったりするとき、それは「選好されない」ものとしてデザインされている（Pomerantz 1984）。多くの場合、選好される第二部分は選好されたものとしてデザインされる。しかし、二つの区別が食い違うこともある。たとえば、悪いニュースを推測する質問に対しては、否定の応答という選好されない第二部分が選好されたものとしてデザインされる（Schegloff 1988b）。なお、「選好される」／されない」という区別は、「自己訂正の選好（preference for self-correction）」（Schegloff, Jefferson & Sacks 1977=1990）、人物指示における「最小化の選好（preference for minimization）」「受け手デザインの選好（preference for recipient design）」（Sacks & Schegloff 1979）など、以上二つとはまた別の文脈で用いられることもある。これらのあいだの関係をどう整理するかは、今後の会話分析の重要な課題のひとつであろう。

（３）　ただ視線は、視線を向けられた聞き手が「自分が見られている」ことを見ており、かつ、それ以外の聞き手が「自分は見られていない」ことを見ている場合にのみ確実なアドレスの方法であるので、それ以外のリソースと組み合わせられる必要がある場合が多い。Lerner は英語において"you"という二人称代名詞を用いてターンを構成することが「誰か特定の一人が次話者に選ばれている」ことを知らせ、「それは誰なのか？」をモニターするよう聞き手たちに指示する働きがあると指摘している（Lerner 2003）。

（４）　ただし、位置を形式が「満たす」といういい方はややミスリーディングである。位置と形式

は再帰的(reflexive)な関係にあり(Schegloff 1996a: 453)、ある形式が選択されることで、それがどんな位置を満たしているのかも示される。物理的時間のうえでひとつの位置でも、発話連鎖上は「発話Ａの次」「発話Ｂから数えて３番目」「来るべき発話Ｃの前」「発話Ｄによって開始された発話連鎖の終了可能地点」「短い間隙のあと」などいろいろな位置でありうる。今行われている発話が、これらのうちのどの位置を「満たす」べく行われているのかを示すのは、その発話の形式である。

（５）　同様の形で隣接ペアの第一部分がチームとしての参加の機会を作り出すことは、Lerner (1993)、Kangasharju (1996)、Gordon (2003)でも分析されている。

（６）　このようなことがらはすべて、事物や道具の意味が相互行為の中でどのように構成されるかという広範なテーマの一部として、それ自体、会話分析の視点から相互行為を分析するときの興味深い主題となりうる。

３章

（１）　ここで「意味論的」という言葉は Shannon & Weaver (1964) が用いた意味で使っており、必ずしも言語研究の一領域としての意味論と対応しているわけではない。

（２）　オーヴァーラップの開始に関しては Jefferson (1984a, 1986)、オーヴァーラップの解消に関しては Schegloff (2000)、オーヴァーラップ発話の完成に関しては Schegloff (1987), Lerner (1989) などが代表的である。また、会話の中で「解消されるべきトラブル」として扱われないオーヴァーラップに関しては Goodwin & Goodwin (1987), Lerner (2002), 串田(1997)および４章を参照されたい。

（３）　オーヴァーラップした発話（部分）を再生するという手続きは、ターン（構成単位）冒頭の再生だけではない。しかし、今回分析対象とした会話データに関しては、オーヴァーラップしてのちに再生されているのは、圧倒的にターン（構成単位）冒頭であった。また、発話を中断して再生するという手続きは、「自己修復」においても用いられ、Fox らはこの手続きについて日英差を指摘している。すなわち、英語においては句を越えて節の冒頭まで遡った長い再生が見られるのに対し、日本語においては句内の短い再生しか見られないという (Fox, Hayashi & Jasperson 1996)。ところが、オーヴァーラップ後のターン冒頭再生に関しては、少数ではあるが、句を越えてターン冒頭まで遡る再生も見られる。このこともまた、日本語においてターン冒頭がターンの他の部分とは異なる重要性を持つことを示唆している。これらの理由から、本章ではターン冒頭がオーヴァーラップした場合に限定して分析している。

（４）　ターン冒頭再生が行われない場合に、ターンの後半部の組み立てに相手のオーヴァーラップ発話を聞いたことが示されるという手続きは、Schegloff (1987)においても指摘されている。

（５）　このケースで、Ｂは最初「これ２枚ともう一個」と言いかけて中断し、あとで「これ一枚とちっちゃいのもう一枚」といっている。ここでは、オーヴァーラップに際しての再生とともに、発話の訂正が一緒に行われていると考えられる。

（６）　【抜粋９（７）：タバスコ】の 08 行目と 11 行目に見られるターン冒頭再生も、同様の例のひとつである。

（７）　オーヴァーラップした自発話の完成を断念するとは、たとえば次のような場合である。

【抜粋 16（３）：そんなことない】
→　　Ｂ：［で話しす－　］
　　Ａ：［（さすが）　　］山下くんが:そ:か両方から話を聞いて楽しんでるわけやな.
　　(.)
→　　Ｂ：いや:>↑そんなことないですよ．<

（８）　ここでは「うち」を「いえ」にいい直しているように見えるかもしれないが、「うち」は自分の所属家庭を、「いえ」は実家を指しており、統語的に連続した発話としてデザインされていると考えられる（ただし関西弁の「うち」ではない）。その証拠は、「うちもいえに帰ったら」という具合にひと続きの韻律で発せられていることである。なお、韻律によって発話の再開始（restarting）と継続（continuing）が区別されることについては、Local（1992）が論じている。
（９）　このターンでＢが用いているのは「～と～と」という「リスト構造」である。Jefferson（1990）によれば、リスト構造は３項並ぶことによって完了するものとして扱われるのがふつうであり、３項目として挙げる項目がない場合にも３項形式を作り出すさまざまな工夫が見られる。Ｂの「すべてがすべてが」（９行目）もその一例であり、Jefferson が「一般的リスト完了子（generalized list completer）」と呼ぶものである。Ｂのターンは統語的には完了可能でないがリスト構造として完了可能点を迎えている。
（10）ただし、Schegloff（1987）を含め、オーヴァーラップしたターン冒頭の再生と継続を英語に関して比較した研究はまだ目にしていない。英語において、継続という方法がどの程度、どのような場合に利用可能なのかは今後の研究を待たなければならない。
（11）Sacks は、会話における次話者選択テクニックがひとつの発話の中に組み込まれていることは「文の研究にとって根本的重要性を持つ」と指摘している（Sacks 1992 vol.2: 42）。本章ではオーヴァーラップ発話の完成というトピックに話を絞っているが、次話者選択も含め、参加の組織化という仕事が発話の組み立てを通じて行われることは、きわめて一般的な論点である。このことは、続く各章の分析でも確認できるだろう。また、この点に関して、発話の組み立てと聞き手の視線との密接な呼応関係を詳細に分析した Goodwin（1981）や Heath（1986）も非常に重要である。
（12）参加を組織化するという仕事を言葉の働きの環境条件として位置づけた代表的な例は、Searle が言語行為の構成的規則を定式化した際に「正常入出力条件」という条項を設けたことである（Searle 1969=1986: 102）。

４章

（１）　Ａが８行目で「フィガロ」と発話を開始したのはターンの途中に見えるが、これはＢの発話が産出された結果を見ることのできる観察者の視点であって、リアルタイムの時間の流れの中では「見てないから」（７行目）と下降調でいわれている時点が完了可能点として聞かれうる。日本語の節末に用いられる「～から」「～けど」のような接続助詞が完了可能点として取り扱われうることについては Hayashi（2003）の４章で論じられている。
（２）　ただし、このケースでも二人が同時に「フィガロは」とターンを開始したことには単なる偶然以上のものが関与している。Ｃが「あたし魔笛でないとだめなの」（２行目）といったあとでＢが「魔笛もフィガロも分かる」（５行目）というとき、ＢはＣとは異なる経験を持つことが報告されて

いる。６章で詳しく述べるが、このように経験の差異が示されたあとでは、差異の理由説明を行うという手順がよく見られる。［経験報告Ａ→経験報告Ｂ→ＡとＢの差異の理由説明］というこの連鎖形式は、会話において繰り返し利用可能なひとつのフォーマットだと考えられる。Ｂの「魔笛もフィガロも分かる」の次に、二人が開始しているターンはともに差異の理由を説明しようとするものである点で、連鎖上の必然性を持つ。会話を連鎖的に組織化する装置は、会話者たちが特定の瞬間に何に注意を向けるかを相当程度絞り込むものであることが、ここから推測される。

（３）　本章の「ユニゾン」は Lerner（2002）が「唱和的共産出（choral co-production）」と呼んだものと基本的に同じであるが、ここでは筆者自身のかつての用語法（串田 1997）を踏襲する。

（４）　もう少し詳しくいうと、Ｂは「持ち物検査が始まった」（1 行目）と述べてから「男女いるまえ」（3 行目）であったことを補足している。これに対し、Ａはまず「女子もいるまえ」（6 行目）であることを理解したことを示し、次に「あ::持ち物」（9 行目）とターンを開始している。このＸ－Ｙ－Ｙ'－Ｘ'という形式は、ある発話連鎖の中にもうひとつの発話連鎖が挿入されているときの典型的形式である（Schegloff 1972）。Ｂはこの形式が進行中であると分析することで、Ａのターンの種類を予測可能になる。なお、このケースは後に述べる「相互的ユニゾン」をし損なったものといえる。

（５）　ここでいう「ビート」が音声学的にどんな単位なのかは今後解明される必要がある。

（６）　菅原および串田も同様のことをすでに指摘している（菅原 1998: 180、串田 1997: 287）。

（７）　「共－参与者による完了」は、５章で扱う「先取り完了」と同じものである。

（８）　発話する権限の問題は、本文で言及した Lerner や林の研究以外にも、これまで会話分析の中で折に触れて注目されている。Sacks は、ある出来事を直接目撃した者がそれについて物語る権限のことを「経験への権限」と呼んで論じた（Sacks 1992 vol.2: 242-248）。Pomerantz は、人が「行為主体」としての資格において自分の身に生じたことを描写する権限に注目している（Pomeranz 1980）。M. H. Goodwin や Shuman は、うわさ話の分析において他人のことを物語る権限の問題に注目している（M. H. Goodwin 1990, Shuman 1986）。Peräkylä & Silverman は、エイズカウンセリング場面のやりとりを、経験を語る権限に注目して分析している（Peräkylä & Silverman 1991）。Lerner は「先取り完了（pre-emptive completion）」の分析においても、「自分のことを自分でいう」権限に注目している（Lerner 1996）。ユニゾンする権限の問題は、これら広範な事象にわたる問題の一部である。なお、筆者はかつてこの問題を「著作権」という言葉で捉えようとしたことがある（串田 1997）。

（９）　Lerner が挙げているのは、「チーム」をなす二人が第三者に向けて説明を行うときに、二人の説明においてオーヴァーラップが生じる例である（Lerner 2002: 239-240）。この場合、「チーム」という単位がレリヴァントになっていることが、オーヴァーラップをユニゾンによって解決する権限を構成すると思われる。これに対し、相互的ユニゾンの場合には、別の仕方で権限が構成される。

（10）　ここで「相補的」というのは、別の意味での競合的関係が生じ得ないということではない。たとえば、【抜粋４（３）：焼きいも】では、Ｂが「２日目」でさつまいもの料理方法をリストアップする作業が行き詰まるものとして扱ったのに対し、Ａはこの抜粋のあとでさらに「３日目」「４日目」の料理方法をひねり出している。二人が行ったことは、この作業を終わるか続けるかに関しては競合的である。

（11）　１章の注（20）で述べたように、集団的言語行為（Hughes 1984）には言葉の意味が曖昧であるからこそ集合的行為として機能するという特性がある。共同的ユニゾンが固有の仕方で集合的力を発揮するという意味は、通常の集合的言語行為に潜在しうる不一致が存在しないという意味で「一体になっている」ことを実演（demonstrate）する手続きだということである。

(12)　ただし、韻律や笑いを重ねるなどの発話産出上のリソースによって、自分が単なる「発声者」でないことを表示することは可能である。

５章

（１）　先取り完了は、「協働的発話(collaborative utterance)」「協働的完了(collaborative completion)」「共ー参与者の完了(co-participant's completion)」などとも呼ばれる。なお、会話の中で先行発話と統語的に連続した形で行われる発話には４種類を区別できる。開始部に関しては、完了可能点に達していない先行発話の「続きをいう」か、完了可能点に達した発話に「つけ足し」をするかという区別。終了部に関しては、「完了可能点まで持っていく」か「持っていかない」かという区別が可能である。これを組み合わせると下図のようになる。先取り完了とは通常Ａ類型をさすが、本章ではＣ類型も含めて分析している。

	開　始　部	続きをいう	つけ足す
終了部	完了させる	A	B
	完了させない	C	D

（２）　このケースについては、「そう」と「うん」が同じ位置でのオールターナティヴであるという点について、若干の留保が必要である。言語学の立場から「そう」と「うん」の意味論的違いを検討した定延（2002）によれば、両者はともに他者の発話に対する肯定応答として用いられるが、「そう」が自然に用いられるのは「権威者が教える」という構図に当てはまる場合に限られる（定延 2002: 101-103)。このケースでは、「Ｂの２歳の息子がお皿に盛られたトマトをほとんど食べてしまった」という目の前の出来事が述べられているため、Ｂは「権威者」としてふるまってはおらず、「うん」が「そう」のオールターナティヴだとはいいにくい。ただ、父親であるＢがここで「権威者」としてふるまうことは、不可能ではない。たとえば、Ｂがこの出来事の指摘に続いて息子の日頃の習慣的ふるまいを解説しようとする場合、B「結局このトマトほとんど」→A「ひとりで平らげちゃったのね」→B「そうそう、もういっつもなんだよ。」といった具合にやりとりが進行することは想定可能であろう。

（３）　このケースで「ん:.」と表記されているものは、「うん」とは違う言葉なのではないかという疑問があるかもしれない。この可能性は完全には排除できないが、ここでの「ん:.」は「んーよくわからんなあ」と考えながらいうときのように平坦な抑揚ではなく、下降調の抑揚で発せられているため、本稿では発声上のヴァリアントだと見なしている。

（４）　さらにいえば、「そう」と「うん」はその文法化の度合いが異なっている。「そう」は統語構造に組み込まれうるが、「うん」は組み込まれえない。この相違が、二つのパーティクルの用法にどのような違いをもたらしているのかは、まだ明らかでない（ただし、定延（2002）を参照せよ)。また、第三のスロットにおける「そう」はたいてい２回以上繰り返されるが、「うん」はたいてい単発で用いられる。この違いがどのような意味を持つのかについて、本章の分析の範囲内では答えを出

すことができなかった。

（５）　「そう」は相手のターンの中から行為スペースを拡張する手がかりをピックアップするために利用できるため、上の２ケースのように予め投射されていた行為スペースを拡張するときだけでなく、回顧的に行為スペースを接ぎ木する形で拡張するときにも用いられる。【抜粋 26（７）：オニオン】がその一例である。

【抜粋 26（７）：オニオン】

((３人はピザを食べながら会話している。))

01 Ａ：いまさらゆうのもなんだが(0.2)やっぱりオニオン入った方がい(h)い(h)な(h):.
02 Ｃ：んふっふ
03　(0.3)
04 Ｂ：同感.
05　(1.2)
06 Ｃ：だから君たちの(……)こうゆうのは.((Ａ＆Ｂへの反論のよう))
07　(1.8)
08 Ｃ：あたしがああゆうときに(……［…-)
09 Ｂ：　［まえ(0.3)(なに……おもっ-)(0.5)ちょっと(.)
10　ピリ↑リと来た.((Ａに向けて))
11　(0.4)
12 Ａ：ん:？
13　(0.9)((Ｂはこのあいだに口の中のモノを飲み込んでいるよう))
14 Ｂ：ピリリと来るんやろ？オニオン入れたら.
15 Ａ：うん.
16 Ｂ：(はっと:.)＝
→ 17 Ａ：＝で:(.)そうそう(0.2)これが:(0.2)なんか:しなしなして:.
18　(.)
19 Ｂ：うん.
20 Ａ：で:(0.2)タマネギが:シャリっって感じで,
21　(0.6)((ＡとＢはうなずき合う))
22 Ａ：シャリシャリって［ゆうの(あれ:)が　］いいんだよね.＝
23 Ｂ：　［そうそうそうそうその-］
24 Ｂ：＝口の中で［出会う<ハーモニー［::>.
25 Ｃ：　［<はいはい　［はいはいはい.>］
26 Ａ：　［そうそ(h)::　］.hh

ピザを食べ始めてしばらくしてから、Ａは「いまさらゆうのもなんだが」と前置きしたうえで「やっぱりオニオン入った方がいいな」と感想を漏らす（1 行目）。続く展開から読みとれるように、これはこの場面でＣへの不平として聞かれうる感想である（収録した会話の前に、どんなピザを注文するかについて３人のあいだでやりとりがあり、最終的にＣが決定したようである）。この感想にＣが笑いで応じ（2 行目）、Ｂが「同感」と応じることで（4 行目）、Ａの感想はさしあたり二人に聞き届

けられている。ところが、このあと比較的長い間隙のあとでＣが釈明らしき発話を行い（6 行目）、ふたたび長い間隙のあとでＣがその続きらしき発話を行うと（8 行目）、ＢはＡに向けて、以前にオニオンを入れたピザを食べたときの感想らしき発話を行う（9-10 行目）。この発話を「ん:？」（12 行目）と聞き返していることから分かるように、Ａはこのとき、ピザへの感想を述べるという行為からはすでに関心を逸らせていたが、Ｂが「ピリリと来るんやろ？オニオン入れたら」と質問すると、これを「うん」と受けたあとで、「で」とそれに接続する形でターンを開始し、「そう」に続いてオニオンが入ったピザの食感はどんなものかをパラフレーズする（17-22 行目）。ここでは、いったん閉じられたＡの感想を述べる行為スペースが、Ｂの質問に応じる機会を利用してふたたび開始されている。その準備として「そう」が用いられている。「そう」はここで、回顧的に行為スペースを接ぎ木するために利用されている。

６章

（１）　「私ごとで恐縮ですが」という決まり文句があるように、多少とも公的な場面において私事語りを行うには特別な手続きが必要となる。逆に、くだけた会話において頻繁に行われることのひとつは、互いに私ごとを語り合うことである。ただ、私のこれまでの経験や観察から推測すると、家族成員同士の会話において本章で扱うような「経験を語り合うこと」はあまり行われないようだ。それがもっとも行われやすいのは、半公的＝半私的と呼びうる場面であると思われる。それは、完全に公的でない場面だから許容されるとともに、完全に私的でない場面だからこそ語るに値する、という特徴を持つ活動のように思われる。

（２）　私事語りが第三者の事例のあとで開始されることは、ゴシップ（第三者についてのうわさ話）と私事語りとが会話の中で連続的に現れやすいことを意味する。また逆に、ここでは立ち入らないが、私事語りから開始される発話連鎖はしばしば次のようにしてゴシップへと発展する。後に述べるように、私事語りを相互的に行うことには、共通経験が見つからないときでも共通の成員性であることを示し合う手続きが含まれているが、本文で取り上げた以外のそうした手続きとして、より大きな差異を持つ第三者についての報告を行うという手続きがデータ中に観察される。私事語りとゴシップというこの２つの活動には密接な関係があり、その関係の解明は今後の重要な課題のひとつである。この点に関して Bergmann（1993）が非常に重要である。

（３）　他の方法のひとつは、私事語りの機会を自ら作り出すことである。それは相手の私事について質問することである。次の【抜粋 19（８）：自分のうち】では、３人の学生が、半年ほど前に録画した自分たちの会話をビデオで再生しながら会話している。ビデオの中には半年ほど前のＣの部屋が映し出されており、この抜粋の直前では、ＡとＢには部屋の雰囲気が変わったようには見えないが、Ｃ本人は変わった感じがするということが話題となっている。これを受けてＢは「見慣れてるからだよね？」（1 行目）と確認を求めたあと、Ｃに向けて「やっぱり自分のうちっていやなの？」（4 行目）と質問を発する。この質問に答えてＣがひとつの私事語り（15-35 行目）を行ったあとで、Ｂは自分の私事語りを開始する（40 行目以降）。重要なことは、この手続きにおいても、機会を与えられて開始することへの指向が保持されていることである。Ｂはいきなり私事語りを開始することも可能だがそうせず、まずは相手の事例を語らせることを選んでいる。適切な機会が用意されていない場合には、私事語りのための機会づくりが優先される。

【抜粋 19（８）：自分のうち】
((３人は、半年ほど前に録画した自分たちの会話をビデオで見ながら会話している。ビデオの中には、半年ほど前のＣの部屋が映し出されている。この抜粋の前では、Ｃの部屋の雰囲気が変わったかどうかが話題になっている。))

01 Ｂ：見慣れてるからだよね？
02 Ａ：うん［うん.
03 Ｃ：　　［ん:.
→ 04 Ｂ：　　［ね:やっぱり自分のうちっていやなの？

((10 行省略：Ｂの質問の意味を確認するやりとり))

15 Ｃ：あたしは:(0.3)何てゆうん？(0.3)自分の家は:［(0.9)自分だけのもの？

((19 行省略：「自分のうち」をどう思うかに関するＣの語り))

35 Ｃ：　　［それがいや？(0.3)だから(0.3)別に(0.9)。自分の家がいやになることはない。
36　(1.6)
37 Ａ：［ん:.
38 Ｃ：［(どういうの,) ＝
39 Ａ：＝ん［:.
→ 40 Ｂ：　　［あたしなんかだったらいっ-(.)たまに遊びに行くんじゃない？(.)やっぱり.
41 Ｃ：うんうんうんうん.
42　(0.5)
→ 43 Ｂ：だから別にあたし何とも思わなかったんだけ［ど:,

このように、相手の私事について質問することは、自分の私事語りに対する一種の前置き連鎖として利用可能である。この前置きとしての性格は、質問を受けた機会を捕らえて自分の語りたいように私事を語ろうとする者にとって、対処すべき問題となりうる。【抜粋８（３）：免停】に続きを補った次の【抜粋 20（３）：免停】では、Ａの質問（４行目）を受けて私事語りを開始するとき、Ｂは「いや」という切断(disjunct)標識をターン冒頭においている（８行目)。このように、相手からの質問を受けて私事語りを開始するときにはたいてい何らかの切断手続きが用いられるが、これは上記の問題への対処と見ることができるかもしれない。

【抜粋 20（３）：免停（【抜粋８】の再掲)】

01 Ｃ：あこの前免停になりかけたんでしょ(.)試合の日.
02　(1.0)
03 Ｂ：な‐(.)ふあ［:::っ
04 Ａ：　　［なんで:［なんでなんでなんで何したん？［何したの？　］
05 Ｃ：　　［ふふふっ
06 Ｂ：　　［びっくりした.］

07　（0.3）
→　08 Ｂ：いや(0.3)車に乗ってたんですよ普通にね：.
09 Ａ：うん.
10 Ｂ：ダー:乗ってて:パッと見たら:ね:,

（４）　「話題上のつながり」について、詳しくは串田(1997a)を参照されたい。
（５）　【抜粋 12（11）：寝られへん】は、ある学童保育所主催のキャンプの夜に保育指導員と青年ボランティアとのあいだで交わされた会話である。この抜粋の直前では、会話者たちの横（テントの外）で眠ってしまったある児童の父親（50 歳前後）のことが話題になり、Ａは「このおっさんもタフやね」と感想を述べたあとで、「僕はよっぽどしんどない限り寝られへん」（1 行目）と私事語りを開始している。Ａは前年に大きな病気をして仕事を休んだことがあり、それによって職場の同僚たちに迷惑をかけたのを気にしていることをＢは知っている。だからここで、ＢがＡの語りを愚痴とは違う方向に誘導するとき、Ｂはふつうの意味で「愚痴など聞きたくない」から話題を逸らしているのではなく、むしろ「ネガティヴでありうる事柄にポジティヴな面を見いだす」ことをやっていると思われる。また、Ａは 40 歳代前半、Ｂは 30 歳になったばかりである。Ａが 50 歳前後の人物に並ぶもうひとつの事例として自分の肉体的不調を語り始めるとき、それはＢにとって、自分よりも上の年齢層に属する者に固有の経験として語られているものと聞かれうる。これらのことから、Ｂにはここで「自分自身の経験を想起するような仕方で聞く」（詳しくは４．２、４．３を参照）ことも見合わせる事情がある。
（６）　もちろんこれは、たとえば非言語的なリソースを通じて興味がモニターされうる可能性を否定するものではない。重要なことは、非言語的要素も特定の発話連鎖上の位置においてモニターされることで、特定の意味を持つということである。
（７）逆に、語り手の方も、聞き手が共通経験を探索しながら聞くことに指向することが可能である。次の【抜粋 21（３）：机ん中パンだらけ】では、Ｂが部分的報告を行うと（11 行目）、聞き手はまったく反応を返さない（12-14 行目）。これを見てＢは、語りを展開するのでなく、聞き手に共通の経験を探索することを促す（15 行目）。Ａはこれに「何が？」と修復開始で応じ（17 行目）、これによってＡが先の部分的報告を聞いていなかったことが判明する。Ｂは部分的報告をやり直す形で修復を実行し、さらに聞き手の探索を促す（19 行目）。

【抜粋 21（３）：机ん中パンだらけ】
11 Ｂ：ぼくいつもパン:いっぱい t 机ん中ありました(もん).
12　(.)
13 Ｂ：はい.
14　(1.1)
→　15 Ｂ：よういたでしょ.
16　(0.3)
17 Ａ：何が？
18　(0.3)
19 Ｂ：パン::あｎ机ん中パンだらけ.

（８）　「高校んときに授業さぼった」という報告を「高校んときでも」と修正することは、３人の大学生の会話において、「大学に入ってからだけでなく高校んときでも」ということを含意すべく行われたと考えられる。このあと「さぼった」を「出なかった」といい換えていることも含めて、ここでＢは「高校んときに授業をさぼった」という報告を緩和する方向に修正していると思われる。
（９）　本章注（５）で述べたように、【抜粋 12（11）：寝られへん】のＢは、Ａによる肉体的不調に関する私事語りに対して「非精神療法的聞き方」をしていない。それは、単なる私事語りではなく、ひとつの「トラブル語り（troubles telling）」（Jefferson & Lee 1981）として聞かれていると思われる。
（10）　「共－選択」は会話における話題形成の基本的手続きである。詳しくは串田（1997a）参照。

７章

（１）　Schegloff（1998a）における「身体をねじった姿勢（body torque）」が持つ投射可能性の分析は、この点にかかわる試みのひとつである。また、Goodwin 夫妻や Heath の一連の仕事にも、この点にかかわる分析が散りばめられている。
（２）　このことは、異文化の会話分析ができないことを意味しない。異文化であれ自文化であれ、人々のふるまいが理解可能である限りそれは分析可能である。また、このためには、会話を行っている人々が持っている「常識」を可能な限り研究者も利用可能になっていることが望ましい。会話分析は、録音・録画された場面に映し出されたことだけを手がかりに分析を行うものではなく、参与者たち自身が互いのふるまいを理解するために利用可能な民族誌的背景知識を、可能な限り利用しつつ進められるべきである。
（３）　Searle が体系化した言語行為論は、言語行為に対してまさにこのような見方を招来するものである。
（４）　この点に関して６章の記述は十分なものではない。それは、「受験期」という指示がどのような特徴を備えた指示なのかを、それ以外のものごとの指示にも通用するほどの一般性を持って記述していないからである。たとえばわれわれの社会に限っても、「月末に」「納品前に」「論文執筆中に」「田植えの時期に」といった指示が、それぞれの相互行為の「文脈に感応」しつつ同じような働きを持ちうると思われる。６章の記述を超えてさらに、これらの「文脈から自由」な記述をめざすことは、「指示の手続きの体系」を記述するという非常に大きな主題の一部をなす。この主題に関する現段階までの代表的試みとしては、Sacks（1972）、Sacks（1972a）、Sacks & Schegloff（1979）、Schegloff（1972）、Schegloff（1996b）がある。
（５）　Sanders（1999）も、Searle の言語行為論と民族誌の意外な親和性を指摘している。彼は、Moerman（1988）が提唱する「文化的文脈に埋め込まれた会話分析」というプログラムは不可能だと論じ、それは会話分析と民族誌がそれぞれ異なるタイプの語用論的意味に関わっているからだという。そして、民族誌が関わっている方の語用論的意味に、言語行為論も関わっているという。彼によれば、構成的規則は、実は、発話の発語内的効力に関わっているのではなく、ある発話において前提とされている成員の文化に関わっている。だから、相互行為の中である発話が実際に持つ効力をうまく記述できるのは会話分析であるのに対し、その発話が（ある文化の成員としての）参与者にとって持つ意味は言語行為論によってうまく記述される。Sanders は、この主張の例示として、トランスクリプトからは分からない（つまり、会話の相手によっては認知されず、会話の成り行きには影響を持たなかった）ある語の文化的意味が、後に会話者の一方から調査者に対して明かされた事例を紹介している。ちな

みに、この事例で生じたことを会話分析の観点から考えるなら、その語がその文化的意味を持ったのは、最初の会話においてではなく調査者との会話においてなのである、ということになるだろう。

（６）　また Du　Bois（1993）によれば、サモアの政治的＝立法的集会における発言では発話者に意図を帰属することなしにその責任が帰属されるのに対し、託宣の言葉ではその発話者に責任の帰属すら行われない。この点で、それは言語行為論の前提へのより強力な反証となる。

（７）　Duranti はサモアの儀式的挨拶におけるオーヴァーラップを分析し、少しだけタイミングや発話形式をずらしながらオーヴァーラップした挨拶が行われるという「ポリフォニックな」参加構造に注目している。この参加構造は、一方では参与者たちを（挨拶－挨拶という隣接ペアの利用によって）地位に関わりなく二つの立場へと組織化するとともに、他方では、さまざまな政治的・系譜的・神話的地位を担った諸個人の差異が表示されることを可能にしているという（Duranti 1997）。これもまた、ターンテイキング組織の利用によって行われうる社会的活動の一例と見なせる。と同時に、この研究はターンテイキング組織の利用が特有の自己呈示の方法になっていることを明らかにしている点でも重要である。

（８）　統語的リソースの違いがターンの投射可能性にもたらすさまざまな違いについては、日本語（Tanaka 1999, 2001, Hayashi 1999, 2003, 2004）、デンマーク語とトルコ語（Steensig 2001）、韓国語（Kim 1999）フィンランド語（Helasvuo 2004）などの言語に関して、すでに多くの重要な指摘がなされている。

（９）　この点については、Schegloff, Jefferson & Sacks（1977=1990）, Schegloff（1997）, Schegloff（2000）などを参照されたい。

補遺①　本稿で用いる会話分析の基本用語

会話分析ではさまざまな独特の用語が用いられるが、それらが論文の中で明示的に定義されることはあまり多くない。むしろ、ある会話の抜粋が示され、その特徴が述べられる中で「このような手続きを…と呼ぶ」というふうな例示的な定義のことも多い。また、それらの用語のほとんどは何らかの学説史的背景が示されることはなく、研究者がデータの中の特定の特徴に注目を促すべく分析の過程で独自に作成したものがほとんどだと推測される。これらのことが会話分析を理解しにくくしている面があるのは確かだが、他方で、会話分析の用語が持つ固有の性格がそのような取り扱いを要請している面があることも見逃されてはならない。

一般に、用語を定義するという営みは、用語に一義的で客観的な意味を与えることができるという前提のもとで、その意味を過不足なく述べようとすることである。だが、序論で述べたように、会話分析は、言葉の指標性を解消することを方法論上の要件としない探究を企てている。会話分析の用語の意味を定義的文章によって説明することは、それらが一義的な意味を持つというまさに会話分析が避けようとしている主張を含意してしまう可能性がある。そして、一義的な意味を持つかのように用語だけが一人歩きしてしまうという危険がある。

会話分析の用語は、その方法論的スタンスからいって、徹頭徹尾、データと並置して読まれるべきものだと私は考える。それらはデータの中の特定の特徴に目を向けやすいようにしたり、それを記憶にとどめやすいようにしたりする「覚え書き」として用いられていると理解するのがよい。それらは分析が終了した暁には破棄されてもよいのだ。別のいい方をすると、それらの用語は、その意味を述べた定義的文章と等価なものというよりも、むしろトランスクリプトやビデオ画像の特定の部分を指さすことと等価なものというべきであろう。だから、会話分析の用語の意味を説明することは、いわば「これ」「それ」などの直示に用いられる表現の意味を説明することに似た困難を抱えている。

だが、「これ」「それ」といった言葉を定義するのが困難だからといって、それらの言葉が曖昧で使い物にならない言葉だというわけではない。むしろ、それらの言葉は、それによって指し示されているものと並置されているという実際の文脈の中では、十分に明確で有効なものである。同じように、会話分析の用語は、データと並置されているという文脈の中において初めて、その明確な意味と現象を照らし出す働きを帯びるものだといえる。

したがって、ここで行う用語説明は、決して、用語の意味を過不足なく述べるという「用語の定義」の試みではない。それらは、本文中の個々のデータ分析を読むときの助けとして、「ハンドブック」的に用いることができるものとして意図されている。なお、会話分析での標準的な用語法のほかに、本稿で独自の用い方をするものもいくつかある。その区別には、そのつど触れる。

「ターンテイキング組織(turn-taking organization)」

何らかの活動において、ある限られた参加機会の担い手が交替することを**「ターンテイキング(turn-taking)」**という。会話において交替で話し手になること、将棋において交替で差し手を打つこと、ひとつのおもちゃで順番に遊ぶこと、サービス窓口の行列において順にひとりずつサービスを受けること、などさまざまな現象に適用されうる。ターンテイキングを秩序だった形で可能にする手続きの複合体を**「ターンテイキング組織(turn-taking organization)」**という。

言葉を用いた相互行為の場合、発話をする参加機会のこと、あるいは、その参加機会において産出

される発話のことを**「ターン(turn)」**と呼ぶ。会話のターンテイキング組織については、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)において定式化された「ターン構成単位」「ターン配分テクニック」およびこれらを連結する「規則群」の複合体が、現在までもっとも整備された記述を提供している。

言葉を用いた相互行為には、これ以外のターンテイキング組織が用いられているものもある。それらは、「ターンをいつ誰がとるかがあらかじめ定められているかどうか」「ターンが人々に原則として均等に配分されるかどうか」の二つの観点から、いくつかのタイプに区別して考えてみることができる。たとえば、会話は「あらかじめ定められておらず」「均等」な相互行為の例である。儀式は「あらかじめ定められており」「不均等」な相互行為の例である。ディベートは「あらかじめ定められており」「均等」な相互行為の例である。

なお、「ターン」という言葉は、発話を行ういる参加機会と発話自体のどちらをさすときにも使われるので、本稿では、とくに参加機会をさしていることを明確にしたいときには**「スロット」**という言葉を用いる。

「ターン構成単位(turn constructional unit)」

言葉を用いた相互行為において、発話者としてターンを担ってふるまうために利用できるリソースとしての言語的単位のこと。英語の場合、語・句・節・文などがその例である。この用語には、とくに「文」概念が言葉を用いた相互行為の分析単位として有効でないことを強調する狙いが込められている。会話におけるターンを組み立てるための言語的単位は「文」であるとは限らず、会話の文脈ごとに可変的であり、ときには一語で完結したひとつの行為が成し遂げられうる。つまり、ターン構成単位とは、会話の中でそのつど参与者自身にとって完了可能性を帯びたものとして認識可能になることによって、ターンテイキングのために利用できるようになるあらゆる種類の言語的リソースである。そのような認識可能性にとってもっとも中心的だと考えられるのは、当該言語の統語構造である。いかなる言語の話者たちも、ターンテイキングを行っている限り、何らかのターン構成単位をリソースとして用いていると考えられる。しかし、何が当該言語においてターン構成単位となるのかは、それぞれの言語の話者たちの会話の分析を通じて、経験的に見いだされなければならない。

「ターン配分(turn allocation)」

ひとりがターンを担っている状態において、次のターンの担い手を選ぶこと。現在のターンの担い手が、そのターンを用いて次に誰が話すべきかを選択する場合と、次に話そうとする者が自己選択する場合の二種類がある。これについても、ターン構成単位と同様に、たとえば何が「次のターンの担い手を選ぶ」ことを構成するのかは、あくまで経験的に探究されるべき問題であり、まだ解明されていないことが多い。

「投射(projection)」

相互行為の時間的進行の中におかれた言葉には、それが発話されている最中に、どのような統語的形状をたどりそうか、どのような種類の行為が行われそうか、いつどのようにして完了しそうかといったことを予示・予告する性質がある。この予示・予告する働きを**「投射(projection)」**という。また、このような予示・予告を行うことができるという言葉の性質を**「投射可能性(projectability)」**という。それは聞き手の側からすると、進行中の発話を分析することで、以上のことを予測できるという性質である。

投射や投射可能性という言葉は、ターン構成単位がその形状・種類・完了可能な点を前もって予示・予告することを論じるときに用いられることが多い。しかし本稿では、より広い意味でこの言葉を用いる。言葉がその進行中に予示・予告しうることには、進行中の発話連鎖においてどんな種類の発話がどんな順で現れそうか、進行中の発話連鎖において誰がどんな立場を占めそうか、進行中の発話連鎖はどんな種類の発話によって適切に完了しそうか、といったこともしばしば含まれる。これらの働きをすべて、本稿では投射と呼ぶ。

「完了可能点(possible completion)」「移行適切場所(transition relevance place)」

進行中のターン構成単位は遅かれ早かれその単位の終わりと分析できる言語要素に到達する。その言語要素、またはその時点のことを**「完了可能点(possible completion)」**という。完了可能点は、何らかの付加的手続きがターンの構成に用いられない限り、原則として、ターンの担い手が交替することが適切な場所（＝**「移行適切場所(transition relevance place)」**）となる。完了可能点でターンが交替する場合、そこは実際にターンの完了点となる。完了可能点でターンが交替しない場合、同じ者のターンがさらに続くことになり、実際のターンの完了点にはならない。また、現在の話し手が、自分はそのターンで複数のターン構成単位を用いて発話を組み立てることを知らせる付加的手続きを用いる場合（たとえば「いいたいことが３つあります」)、それぞれのターン構成単位の完了可能点は、そのターンの移行適切場所を構成しない。

なお、会話において、ひとたびターンの担い手となった者は、少なくともひとつのターン構成単位の完了可能点まで、原則として、そのターンを担う権利を有することが指向されていると考えられる。この権利に聞き手が指向するとき、最初のターン構成単位が完了可能点に接近するまで聞き手は発話を開始しないはずであり、実際ほとんどの場合に聞き手はそのようにふるまう。しかし、ときにはひとつのターン構成単位の途中で話し手が交替することもある（詳しくは５章)。それは、「文」のようなアプリオリに措定された統語的単位の途中で話し手が交替するということではなく、ターンを開始した者の参加機会の内部で生じた変則的な交替であることが、参与者自身によって指向されている交替のことである。本稿では、この現象に注目するとき、開始されたターン構成単位が完了可能点に持って行かれるまでの（話し手の交替を伴った）区間を**「ターンスペース」**と呼ぶ。

「連鎖組織(sequence organization)」

複数の発話タイプのあいだに何らかの**「連鎖的(sequential)」**関係があるとき、そのように関係づけられた発話タイプのセットを総称して**「連鎖組織(sequence organization)」**という。「連鎖的」関係とは、複数の発話がたんに連続的に現れているということではなく、それらのあいだに何らかの規範的つながりがあり、実際に相互行為の中で連続的に現れなくても、その規範的関係へとふるまいを方向づけることが可能であるような、そういう関係のことである。いいかえると、ある発話タイプが何らかの協働的な活動を開始しているものとして認識可能であり、その協働的な活動がどのような発話タイプの出現によって適切に終了しうるかが認識可能であるとき、それらの発話タイプのあいだには連鎖的関係がある。ターン構成単位やターン配分と同様に、どのような連鎖組織が存在するのかという問題もあくまで経験的に探究されるべき問題である。連鎖組織の具体例としては、次の「隣接ペア」と「前置き連鎖」を参照されたい。

「隣接ペア(adjacency pair)」

もっとも基本的な連鎖組織で、次のような性質を持つもの。

（1）**「第一ペア部分(first pair part)」**と**「第二ペア部分(second pair part)」**という二つの成分からなる。

（2）それぞれの成分は、異なった者によって産出される。

（3）第一ペア部分は、第二ペア部分が次のターンにおいて産出されるという連鎖上の含みを持つ。

（4）第一ペア部分は、それに適合した第二ペア部分が産出されるという連鎖上の含みを持つ。

上に述べた**「連鎖上の含み(sequential implicativeness)」**とは、ある発話タイプが発せられると、次に特定のタイプの発話がなされることへの規範的期待が生じることをさす。隣接ペアの第一ペア部分が発せられると、次に適合する第二ペア部分が発せられることが当然のこととして期待され、もしも発せられない場合、その「不在」が観察可能になる。たとえば、沈黙。「エティックな」見方からは、人間は言語音を発しているとき以外はすべて沈黙しているということができるが、「イーミック」には、それらのうちのごくわずかしか「Ｘさんは沈黙している」と認識可能でない。隣接ペアとは、このような意味で「第二部分の不在」としての沈黙を観察可能にする装置である。

具体的には、「質問－応答」「挨拶－挨拶」「呼びかけ－応答」「依頼－応諾／拒否」「提案－受け入れ／拒否」などの類型がある。実際には、第一ペア部分が発せられた次のターンで第二ペア部分が発せられないことも多いが、そのような場合に、人々はさまざまなやり方で「本来、第二部分がここで発せられるべきである」ということにふるまいを方向づけているのが観察される。たとえば、第一ペア部分が誰かに向けられると他の参与者がそちらを見る、第二ペア部分が返されないと第一ペア部分が反復される、適合的な第二ペア部分以外の発話は「適合的第二ペア部分にいたるための準備」として聞かれたりする、等々である。

「前置き連鎖(pre-sequence)」

隣接ペアに代表される二つの発話からなる連鎖組織が、会話のあとの時点で行われる発話タイプを投射しているとき、それを**「前置き連鎖(pre-sequence)」**という。代表的な例として**「物語の前置き連鎖(story preface sequence)」**がある。たとえば「昨日すごいことがあったんだ」という発話は、相手が「何？」などといったあとで、物語が開始されることを投射している。また、別の例として、**「前置きの前置き(preliminaries to preliminaries)」**と呼ばれるものがある。たとえば、「ちょっと質問していい？」という発話は、あとで質問が行われることを投射している。だが、このタイプの発話のあとに来るのは、ふつうは質問ではなく、質問のための準備を行う（たとえば、自分がなぜ質問するかの背景を説明することなど）発話である。つまりそれは、質問を行うために何らかの準備作業が必要なとき、それを「来るべき質問への準備作業」として聞くようあらかじめインストラクトすることを可能にする手続きである。

「修復(repair)」

発話すること・聞くこと・理解することにかかわる何らかのトラブルを解決することを**「修復(repair)」**という。たとえば、自分で言葉を言い直すこと、聞こえなかったことを聞き返してもう一度いわせること、相手の誤解をただすこと、などである。修復という活動は、**「トラブルの源(trouble source)」「修復開始(repair initiation)」「修復実行(repair)」**という三つの成分からなるが、トラブルの源は修復が開始されることで回顧的に明らかになるものなので、会話の進行においては修復開

始によってこの活動が開始される。修復開始には、**「自己開始修復(self-initiated repair)」「他者開始修復(other-initiated repair)」**がある。前者は、発話を中断すること、音を引き延ばすこと、「ちがうよ」と相手の誤解を指摘すること、などである。後者は、聞き返すこと、自分が理解したことを述べてチェックを求めること、自分の誤解に気づいたことを示すこと、などである。修復実行にも**「自己修復(self-repair)」「他者修復(other-repair)」**がある。自己修復とは、自分で言葉を置き換えること、自分でもう一度言い直すこと、などである。他者修復とは、相手の言い間違いに対して正しい言葉を差し出すこと、誤解したあとで自分で正しい理解を示すこと、などである。これらのことを行うために利用可能な手続きの複合体を**「修復組織(repair organization)」**という。

「選好構造(preference structure)」「選好組織(preference organization)」

多様な現象に適用される語であるが、基本的意味は次のようなものである。ある行為を行うために二つの対照的な選択肢があるとき、それらの選択肢の用い方を系統立てていると考えられる装置を「選好構造(preference structure)」または「選好組織(preference organization)」という。**「選好される(preferred)」**選択肢とは、そちらの選択肢が採用される方が規範的に適切であることが指向されていると考えられるもので、一般に「早い位置で」「直裁に」「単純な形で」行われる。**「選好されない(dispreferred)」**選択肢とは、規範的により適切でないことが指向されていると考えられるもので、一般に「遅い位置で」「間接的に」「複雑な形で」行われる。いいかえるなら、「選好される」選択肢とはある行為を行うための「デフォルトの」やり方であり、「選好されない」選択肢とは「付加的手続きが必要な」やり方である。

隣接ペアの文脈では、ある第一ペア部分に適合する第二ペア部分が二種類あるとき、それらの用い方が選好組織によって組織化されると指摘されている。たとえば、誘い（第一ペア部分）には「誘いに応じる」「誘いを断る」という二種類の適合する第二ペア部分がある。「誘いに応じる」ことは選好される選択肢であり、「誘いを断る」ことは選好されない選択肢である。この非対称的な配置に行為者が方向づけられていることは、たとえば、「明日飲みに行かない？」という誘いに応じるときは「行く行く」と直ちに応じる形で行われるのに対し、断ることは「(間）ええー？明日ー？ちょっと待って。明日夕方約束があったんじゃないかな（手帳を取り出す)」といった複雑な形をとる、ということに見て取れる。一般に、選好される／されない第二ペア部分は、上のような意味で「選好された／されない形に」デザインされる。しかし、これがずれる場合も指摘されている。たとえば、「悪いニュースを推測する Yes/　No 質問」（例：「明日の飲み会キャンセルになったんでしょ？」）に関しては、肯定応答が選好されない形にデザインされ（例「うーん、ちょっとどうもねー、都合の悪い人が多いみたいでさ」)、否定応答が選好された形にデザインされる（例「え？、なってないよ」)。

修復組織の文脈では、自己開始修復が他者開始修復より選好され、自己修復が他者修復よりも選好されることが指摘されている。たとえば、誤解の余地のある言葉を本人が訂正する場合、その最初の機会は当該発話の産出中に訪れ、言葉を置き換えることだけが行われ、したがって訂正という仕事のために会話の流れを中断する必要がない。これに対し、他者が誤解の余地のある言葉を取り扱う場合、当該発話の次のターンで最初の機会が訪れ、言葉を直截に置き換える代わりに「え？＊＊＊って？」と聞き返すなどの形がとられ、したがって訂正という仕事のために会話の流れが中断される。

指示(reference)の文脈では、**「分かる指示(recognitional reference)」**が選好され、**「分からない指示(non-recognitional reference)」**が選好されないことが指摘されている。「分かる指示」とは、「自分が指示しているものはあなたも知っているものであるから、それをあなたの記憶の中に探して

くれ」とインストラクトする働きがある指示の仕方であり、たとえば自分の知人を指示するのに「＊＊さんがね」というのは分かる指示である。「分からない指示」とは、「自分が指示しているものはあなたの知らないものであるから、それを記憶の中に探さなくてよい」とインストラクトする働きがある指示の仕方であり、たとえば自分の知人を指示するのに「＊＊さんていう人がいてね」というのは分からない指示である。

補遺②　「はまる」話

以下は、６章の【抜粋２（７）：武井と涼子】および【抜粋 17（７）：はまる話】を続けて掲載したものである。行番号は【抜粋 17（７）：はまる話】に合わせている。

((部屋の中で流れているヘビイメタルロック音楽のことが話題になっている。))

Ｃ：うん武井は分かるけ［ど:,
Ａ：　　［うん．＝
Ｃ：＝涼子は違うと思ってた:.
(0.2)
01 Ｂ：涼子も聴く:この手:.
02 (1.8)
03 Ｂ：あたしこの道だけははまらんとこうと思っててん.
04 (0.3)
05 Ｂ：中学校んときの二の舞になるから.
06 (0.6)
07 Ｃ：ん:.
08 (1.3)
09 Ｃ：あたしたぶん心配ないと思うわはまる:.
10 (0.7)
11 Ａ：［((口を開いて何か言いかける))
12 Ｃ：［あたしど::も分からんねんこ(h)の良さ［が:.
13 Ｂ：［あたしちゃく-　　［あたし着実に戻りつつ［あるフィールドだな.
14 Ｃ：　　［あっはっは
15 (1.5)
16 Ａ：あたしなんかにはまるってことがあんまりないからなあ.
17 (0.5)
18 Ｃ：［↑ん↓ん．((「そうなん」という調子で))
19 Ａ：［　そもそも.
20 (0.7)
21 Ｂ：すごいであたし.
22 (0.4)
23 Ｂ：はまっ［たら(……-)］
24 Ｃ：　　［゜あたし゜　］一時的にはまるね.
25 (0.5)
26 Ａ：ふ:ん.
27 Ｂ：ふ［:ん
28 Ｃ：　［とりあえず:一時期だからそれしか聴かな［くなって:,
29 Ａ：　　［うんうん.

30　　(0.4)((Ｂが手を挙げる))
31　Ｃ：んでず:［::　　］っと終わると:(0.3)ふんで:↑フンて忘れるんやんか［:.
32　Ｂ：　　［そうなる(よ).］
33　Ａ：　　［あっ
34　　(0.8)
35　Ａ：ま：↑そうゆうのは(.)あるけど:,
36　　(1.2)
37　Ｂ：あたし３つぐらい同時にはまれんで．＝
38　Ｃ：＝ん:ふふふふっ
39　　(0.6)
40　Ａ：ん:［::ん．((考え込む調子で))
41　Ｃ：　　［そ(h)れはないな.
42　　(0.7)
43 Ｃ：(見［るの)たいへんやろ:゜と［思うわ゜.
44 Ａ：　　［(それって:-)　　［あっ
45　(0.9)
46 Ａ：↑モーツアルトにはまるとか(h)は(h)［あ(h)る(h)よ(h):(h).
47 Ｃ：　　［あはっ
48　(0.2)
49 Ｃ：［.hhhhh　　］
50 Ｂ：［はまったよ］あたし.
51 Ｃ：あ(h)や(h)し(h)い(h)［:.
52 Ｂ：　　［受験期にはまったよレクイエムやろ:,
53　(0.2)
54 Ｃ：んふっ＝
55 Ｂ：＝大ミサやろ:,
56　(.)
57 Ａ：ん(h)っ
58　(0.5)
59 Ｂ：でフリーメイソンのためのなんや葬送曲:？
60 Ａ：ん:［ あたし-
61 Ｂ：　　［(あっこら)へん全部はまった゜(もん．)゜
62　(0.3)
63 Ａ：あたしね(h)え(h)っ(1.0)歌(h)劇(h):？
64 Ｂ：ん:.
65　(.)
66 Ａ：.hh 歌劇-(.)歌劇ってゆうかオペラ(h)っ(h).
67 Ｂ：ん:.
68　(0.2)
69 Ｂ：［はまった:？

70 Ａ：［モーツア(h)ル(h)ト(h)°ほ(h)んま(h)°.hhh 受験期にはまるなよ:
71　　と(h)か(h)［思(h)い(h)［ながら.
72 Ｃ：　　［ん:っふ
73 Ｂ：　　［ちょっと待って一緒の受験期やから一緒にはまってた
74　　んちゃう？＝
75 Ａ：＝だから:(.) うちらが入る年［の::,
76 Ｂ：　　［入る年の::,
77　　(0.2)
78 Ａ：あの，＝
79 Ｂ：＝ね:［あんときさ:,］
80 Ａ：　　［モーツアル ］ト二百［年祭の::,　　］
81 Ｂ：　　［そうそうそう］そうあれでさ:もう:(0.2)
82　　見まくってさ夜中に［入んのとかも全部:.
83 Ａ：　　［ん:ん.
84　　(0.6)
85 Ｂ：あ［のげいじゅ　　］つげきじょうとか［で:.
86 Ａ：　　［(あれ……じゅう-)］　　［十二時ぐら
87　　い［までやるやつやろもう:,］
88 Ｂ：　　［そうそうそうそうそう　］もう［はまっ-
89 Ａ：　　［「あかんわこんなんやっ
90　　たら」[>とか思いながら. <((頭を抱える動作。続いてＢも。))
91 Ｂ：　　［「いけない:」とか言いながら見とってん「ふ［::ん」て.
92 Ａ：　　［うん.

初出一覧

１章　書き下ろし

２章　書き下ろし

３章　串田秀也（近刊）「参加の道具としての文：オーヴァーラップ発話の再生と継続」
（串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房、所収）を若干修正。

４章　串田秀也 1997「ユニゾンにおける伝達と交感：会話における「著作権」の記述をめざして」
（谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社, pp. 249-294. ）をもとに全面的に改稿。

５章　串田秀也 2002「会話の中の「うん」と「そう」: 話者性の交渉との関わりで」
（定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房, pp. 5-46.）をもとに全面的に改稿。

６章　串田秀也 2001「私は－私は連鎖：経験の「分かちあい」と共－成員性の可視化」
『社会学評論』第 52 巻第２号、pp. 36-54. をもとに全面的に改稿。

７章　書き下ろし

引用文献

Antaki, C., Diaz, F. & Collins, A. F.（1996）. Keeping your footing: conversational completion in three-part sequences. *Journal of Pragmatics* 25: 151-171.

Atkinson, J. M.（1978）. *Discovering Suicide: Studies in the Social Organization of Sudden Death*. London: Macmillan Press.

Atkinson, J. M. & Heritage, J.（eds.）(1984）. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis.* Cambridge: Cambridge University Press.

Austin, J. L.（1962）. *How to Do Things with Words.* Oxford: Oxford University Press.（坂本百大訳.（1978）.『言語と行為』東京：大修館書店.）

Bales, R. E.（1950）. *Interaction Process Analysis: A Method for the Study of Small Groups.* Cambridge: Addison-Wesley Press.

Benson, D. & Hughes, J.（1991）. Method: evidence and inference － evidence and inference for ethnomethodology. In G. Button（ed.）, *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 109-136.

Bergmann, J. R.（1990）. On the local sensitivity of conversation. In I. Markova & K. Foppa（eds.）, *The Dynamics of Dialogue*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. pp. 201-226.

Bergmann, J. R.（1992）. Veiled morality: notes on discretion in psychiatry. In P. Drew & J. Heritage（eds.）, *Talk at work*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 137-162.

Bergmann, J. R.（1993）. *Discreet Indiscretions: The Social Organization of Gossip.* New York: Aldine.

Boden, D. & Zimmerman, D.（eds.）(1991）. *Talk and Social Structure.* Berkeley: University of California Press.

Button, G. & Casey, N.（1984）. Generating topic: the use of topic initial elicitors. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 167-190.

Button, G. & Casey, N.（1985）. Topic nomination and topic pursuit. *Human Studies* 9: 3-55.

Button, G & Lee, J. R. E.（eds.）(1987）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters.

Cicourel, A. V.（1980）. Language and social interaction: philosophical and empirical issues. *Sociological Inquiry* 50（3/4）: pp. 1-30.

Cicourel, A. V.（1987）. The interpenetration of communicative contexts: examples from medical encounters. *Social Psychology Quarterly* 50（2）: 217-226.

Clark, H. H. & Marshall, C. R.（1981） Definite reference and mutual knowledge. In A. K. Joshi, B. L. Webber & I. A. Sag（eds.）, *Elements of Discourse Understanding*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.10-63.

Clayman, S. & Heritage, J.（2002）. *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air.* Cambridge: Cambridge University Press.

Davidson, J.（1984）. Subsequent versions of invitations, offers, requests, and proposals dealing with potential or actual rejection. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 102-128.

Diaz, F., Antaki, C. & Collins, A. F.（1996）. Using completion to formulate a statement collectively. *Journal of Pragmatics* 26: 525-542.

Drew, P.（1984）. Speakers' reportings in invitation sequences. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 129-151.

Drew, P.（1998）. Complaints about transgressions and misconduct. *Research on Language and Social Interaction* 31-3/4: 295-325.

Drew, P. & Heritage, K.（eds.）(1992）. *Talk at work.* Cambridge: Cambridge University Press.

Drew, P. & Wootton, A.（eds.）(1988）. *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order.* Cambridge: Polity Press.

Du Bois, J. W.（1993）. Meaning without intention: lessons from divination. In J. H. Hill & J. T. Irvine（eds.）, *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 48-71.

Duranti, A.（1988）. Intentions, language and social action in a Samoan context. *Journal of Pragmatics* 12: 13-33.

Duranti, A.（1993）. Intentions, self and responsibility: an essay in Samoan ethnopragmatics. In J. H. Hill & J. T. Irvine（eds.）, *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 24-47.

Duranti, A.（1997）. Polyphonic discourse: overlapping in Samoan ceremonial greetings. *Text* 17（3）: 349-381.

Duranti, A. & Goodwin, C.（eds.）(1992）. *Rethinking Context: Language as an interpretive phenomenon.* Cambridge: Cambridge University Press.

Durkheim, É.（1895）. *Les Règles de la Méthode Sociologique.* Presses Universitaires de France.（宮島喬訳（1978）『社会学的方法の規準』東京：岩波書店）

Egbert, M. M.（1997） Schisming: the collaborative transformation from a single conversation to multiple conversations. *Research on Language and Social Interaction* 30: 1-51.

Erickson, F.（1992）. They know all the lines: rhythmic organization and contextualization in a conversational listing routine. In P. Auer & A. Di Luzio（eds.）, *The Contextualization of Language*, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. pp. 365-398.

Ferrara, K.（1992）. The interactive Achievement of a Sentence: Joint Productions in Therapeutic Discourse. *Discourse Processes* 15: 207-228.

Foppa, K.（1990）. Topic progression and intention. In I. Markova & K. Foppa（eds.）, *The Dynamics of Dialogue*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. pp.178-200.

Fox, B. A., Hayashi, M. & Jasperson, R.（1996）. Resources and repair: a cross-linguistic study of syntax and repair. In E. Ochs, E. A. Schegloff & S. A. Thompson.（eds）, *Interaction and Grammar*, New York: Cambridge University Press. 185-237.

Garfinkel, H.（1967）. *Studies in Ethnomethodology.* New Jersey: Prentice Hall.

Garfinkel, H. & Sacks, H.（1970）. On fornmal structures of practical actions. In J. Mckinney & E. Tyryakian（eds.） *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, New York: Appleton Century Crofts. pp. 337-366.

Geertz, C.（1973）. *The Interpretation of Cultures: Selected Essays.* Nwe York: Basic Books. （吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳.（1987）. 『文化の解釈学Ｉ』東京：岩波書店）

Goffman, E.（1959）. *The Presentation of Self in Everyday Life.* New York: Doubleday Anchor. （石黒毅訳.（1974）.『日常生活における自己呈示』東京：誠信書房）

Goffman, E.（1961）. *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction.* Indianapolis: Bobbs- Merrill.（佐藤毅・折橋徹彦訳.（1985）.『出会い』東京：誠信書房）

Goffman, E.（1961a）. *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates.* New York: Doubleday Anchor. （石黒毅訳.（1984）『アサイラム』東京：誠信書房）

Goffman, E.（1963）. *Behaviour in Public Places: Notes on the Organization of Gatherings.* New York: The Free Press. （丸木恵佑・本名信行訳.（1980）.『集まりの構造』東京：誠信書房）

Goffman, E.（1963a）. *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity.* New Jersey: Prentice-Hall.（石黒毅訳.（1980）.『スティグマの社会学』東京：せりか書房）

Goffman, E.（1964）. The neglected situation. *American Anthropologist* 66-6: 133-136.

Goffman, E.（1967）. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour.* New York: Doubleday Anchor.

Goffman, E.（1971）. *Relations in Public: Microstudies of the Public Order.* Basic Books.

Goffman, E.（1974）. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience.* New York: Harper & Row.

Goffman, E.（1981）. *Forms of Talk.* University of Pennsylvania Press.

Goffman, E.（1983）. The interaction order. *American Sociological Review* 48: 1-17.

Goffman, E.（1983a）. Felicity's condition. *American Journal of Sociology* 89-1: 1-53.

Goodwin, C.（1979）. The interactive construction of a sentence in natural conversation. In G. Psathas（ed）, *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington. pp. 97-121.

Goodwin, C.（1980）. Restarts, pauses and the achievement of a state of mutual gaze at turn beginning. *Sociological Inquiry* 50: 272-302.

Goodwin, C.（1981）. *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers.* New York: Academic Press.

Goodwin, C.（1984）. Notes on story structure and the organization of participation. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 225-246.

Goowin, C.（1986）. Audience diversity, participation and interpretation. *Text* 6: 283-316.

Goodwin, C.（1986a）. Between and within: alternative and sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies* 9: 205-218.

Goodwin, C.（1987）. Forgetfulness as an interactive resource. *Social Psychology Quarterly* 50: 115-131.

Goodwin, C.（1987a）. Unilateral departure. In G. Button & J. R. E. Lee（eds）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters. pp. 206-218.

Goodwin, C.（1995）. Co-Constructing Meaning in Conversations with an Aphasic Man. *Research on Language and Social Interaction* 28: 233-260.

Goodwin, C.（1995a）. Sentence construction within interaction. In U. M. Quasthoff（ed.）, Aspects of Oral Communication, Berlin: Walter de Gruyter. pp. 198-219.

Goodwin, C. & Duranti, A.（1992）. *Rethinking Context: Language as an interpretive phenomenon.* Cambridge: Cambridge University Press.

Goodwin, C. & Goodwin, M. H.（1987）. Concurrent operations on talk: notes on the interactive organization

of assessments. *IPRA Papers in Pragmatics* 1: 1-54.

Goodwin, C. & Goodwin, M. H.（1992）. Assessments and the construction of context. In A. Duranti & C. Goodwin（eds）, *Rethinking Context: Language as an interpretive phenomenon*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 147-190.

Goodwin, C. & Goodwin, M. H.（forthcoming）. Participation. In A. Duranti（ed.）*A Companion to Linguistic Anthropology*, Basil Blackwell.

Goodwin, M. H.（1990）. *He-Said-She-Said: Talk as Social Organization among Black Children.* Bloomington: Indiana University Press.

Goodwin, M. H. & Goodwin, C.（1986）. Gesture and coparticipation in the activity of searching for a word. *Semiotica* 62（1/2）: 51-75.

Gordon, C.（2003）. Aligning as a team: forms of conjoined participation in（stepfamily） interaction. *Research on Language and Social Interaction* 36（4）: 395-432.

Grice, P.（1989）. *Studies in the Way of Words.* Cambridge: Harvard University Press,（清塚邦彦訳（1998）.『論理と会話』東京：勁草書房）

Grimshaw, A. D.（1980）. Mishearings, misunderstandings, and other nonsuccess in talk: A plea for redress of speaker-oriented bias. *Sociological Inquiry* 50（3/4）:31-74.

Gumperz, J.（1982）. *Discourse Strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.（井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳（2004）.『認知と相互行為の社会言語学』東京：松柏社）

Hall, E. T.（1959）. *The Silent Language*, New York: Doubleday. （國弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳.（1966）.『沈黙のことば』東京：南雲堂）

Hall, E. T.（1966）. *The Hidden Dimension.* New York: Doubleday.（日高敏隆・佐藤信行訳.（1970）『かくれた次元』東京：みすず書房）

浜日出夫（1998）. エスノメソドロジーの原風景. 山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房. pp. 30-43.

Hayashi, M.（1999）. Where grammar and interaction meet: a study of co-participant completion in Japanese conversation. *Human Studies* 22（2-4）: 475-499.

Hayashi, M.（2003）. *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Heath, C.（1986）. *Body Movement and Speech in Medical Interaction.* Cambridge: Cambridge University Press.

Helasvuo, M.（2004）. Shared syntax: the grammar of co-constructions. *Journal of Pragmatics* 36: 1315-1336.

Heritage, J.（1984） A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 299-345.

Heritage, J.（1990/1991）. Intention, meaning and strategy: observations on constraints on interaction analysis. *Research on Language and Social Interaction* 24: 311-332.

Hester, S. & Eglin, P.（eds.）（1997）. *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis.* Washington, D. C.: University Press of America.

Holmes, D.（1984）. Explicit-Implicit Address. *Journal of Pragmatics* 8: 311-320.

Hopper R. & Chen, C.（1996）. Languages, cultures, relationships: telephone openings in Taiwan. *Research on*

Language and Social Interaction 29（4）: 291-313.

Hopper, R., Doany, N., Johnson, M. & Drummond, K.（1990/1991）. Universals and particulars in telephone openings. *Research on Language and Social Interaction* 24: 369-387.

Houtkoop-Steenstra, H.（1991） Opening sequences in Dutch telephone conversations. In D. Boden & D. Zimmerman（eds.）, *Talk and Social Structure*, Berkeley: University of California Press. pp. 232-250.

Hughes, J.（1984）. Group speech acts. *Linguistics and Philosophy* 7: 379-395.

福島真人（2001）. 状況・行為・内省. 茂呂雄二編『実践のエスノグラフィ』金子書房. pp. 129-178.

Hutchby, I.（1999）. Beyond agnosticism?: conversation analysis and the sociological agenda. *Research on Language and Social Interaction* 32（1/2）: 85-93.

Hutchby, I. & Wooffitt, R.（1998）. *Conversation Analysis.* Cambridge: Polity Press.

Jefferson, G.（1972）. Side sequences. In D. Sudnow（ed.）, *Studies in Social Interaction.* New York: The Free Press. pp. 294-338.

Jefferson, G.（1973）. A case of precision timing in ordinary conversation: overlapped tag-positioned address terms in closing sequences. *Semiotica* 9: 47-96.

Jefferson, G.（1974）. Error correction as an interactional resource. *Language in Society* 2: 181-199.

Jefferson, G.（1978）. Sequential aspects of storytelling in conversation, In J. Schenkein（ed.）, *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, New York: Academic Press. pp.219-248.

Jefferson, G.（1984）. On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 191-222.

Jefferson, G.（1984a）. Notes on some orderliness of overlap onset. In V. D'Urso & P. Leonardi（eds.）*Discourse Analysis and Natural Rhetorics*, Cleup Editore. pp.11-38.

Jefferson, G.（1985）. On the interactional unpackaging of a 'gloss'. *Language in Society* 14: 435-466.

Jefferson, G.（1985a）. An excercise in the transcription and analysis of laughter. In T. A. van Dijk（ed.）, *Handbook of Discourse Analysis vol.3*, New York: Academic Press. pp. 25-34.

Jefferson, G.（1986）. Notes on 'latency' in overlap onset. *Human Studies* 9: 153-183.

Jefferson, G.（1987）. On exposed and embedded correction in conversation. In G. Button & J. R. E. Lee（eds.）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters. pp. 86-100.

Jefferson, G.（1988）. On the sequential organization of troubles-talk in ordinary conversation. *Social Problems* 35（4）: 418-441.

Jefferson, G.（1990）. List-construction as a task and resource. In George Psathas（ed.）, *Interaction Competence*, Washington, D. C.: University Press of America. pp. 63-92.

Jefferson, G.（1993）. Caveat speaker: preliminary notes on recipient topic-shift implicature. *Research on Language and Social Interaction* 26（1）: 1-30.

Jefferson, G. & Lee, J. R. E.（1981）. The rejection of advice: managing the problematic convergence of a 'troubles-telling' and a 'service encounter'. *Journal of Pragmatics* 5: 399-422.

Jefferson, G., Sacks, H. & Schegloff, E. A.（1987）. Notes on laughter in the pursuit of intimacy. In G. Button & J. R. E. Lee（eds.）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters. pp. 152-205.

Jefferson, G. & Schenkein, J.（1977）. Some sequential negotiations in conversation: unexpanded and expanded

versions of projected action sequences. *Sociology* 11: 87-103.
神尾昭雄（1990）.『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』東京：大修館書店
Kangasharju, H.（1996）. Aligning as a team in multiparty conversation. *Journal of Pragmatics* 26: 291-319.
Kim, K.（1999）. Phrasal unit boundaries and organization of turns and sequences in Korean conversation. *Human Studies* 22（2-4）: 425-446.
北村光二（1983）. 対面的相互作用におけるコミュニケーション：「笑い合う」ことと「一方だけが笑う」こととの対比を手がかりに.『季刊人類学』14-1: 3-28.
木村大治（2003）. 『共在感覚：アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都：京都大学学術出版会
串田秀也（1995）. トピック性と修復活動：会話における「スムーズな」トピック推移の一形式をめぐって.『大阪教育大学紀要　第二部門』44（1）: 1-25.
串田秀也（1997）. ユニゾンにおける伝達と交換：会話における「著作権」の記述をめざして. 谷泰編『コミュニケーションの自然誌』東京：新曜社. pp. 249-294.
串田秀也（1997a）. 会話のトピックはいかにつくられていくか. 谷泰編『コミュニケーションの自然誌』東京：新曜社. pp. 173-212.
串田秀也（1999）. 助け船とお節介：会話における参与とカテゴリー化に関する一考察. 好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』京都：世界思想社. pp. 124-147.
串田秀也（2001）. 私は－私は連鎖：経験の「分かちあい」と共－成員性の可視化. 『社会学評論』52（2）: 36-54.
串田秀也（2002）. 統語的単位の開放性と参与の組織化（１）：引き取りのシークエンス環境. 『大阪教育大学紀要　第二部門』50（2）: 37-64.
串田秀也（2002a）. 統語的単位の開放性と参与の組織化（２）：引き取りにおける参与の交渉. 『大阪教育大学紀要　第二部門』51（1）: 43-66.
串田秀也（2002b）. 会話の中の「うん」と「そう」：話者性の交渉との関わりで. 定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』東京：ひつじ書房. pp. 5-46.
串田秀也（近刊） 参加の道具としての文：オーヴァーラップ発話の再生と継続. 串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』東京：ひつじ書房
Leech, G. N.（1983）. *Principles of Pragmatics*. London: Longman. （池上嘉彦・河上誓作訳（1987）『語用論』東京：紀伊國屋書店）
Lerner, G. H.（1989）. Notes on overlap management in conversation: the case of delayed completion. *Western Journal of Speech Communication* 53: 167-177.
Lerner, G. H.（1991）. On the syntax of sentense-in-progress. *Language in Society* 20: 441-458.
Lerner, G. H.（1992）. Assisted storytelling: deploying shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology* 15（3）: 247-271.
Lerner, G. H.（1993）. Collectivities in action: establishing the relevance of conjoined participation in conversation, *Text* 13（2）: 213-245.
Lerner, G. H.（1994）. Responsive list construction: a conversational resource for accomplishing multifaceted social action. *Journal of Language and Social Psychology* 13（1）: 20-33.
Lerner, G. H.（1995）. Turn design and the organization of participation in instructional activities. *Discourse Processes* 19: 111-131.

Lerner, G. H.（1996）. Finding "face" in the preference structures of talk-in-interaction. *Social Psychology Quarterly* 59（4）: 303-321.

Lerner, G. H.（1996a）. On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation: conditional entry into the turn space of another speaker. In E. Ochs, E. A. Schegloff & S. A. Thompson（eds.）, *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 238-276.

Lerner, G. H.（2002）. Turn-sharing: the choral co-production of talk-in-interaction. In C. E. Ford, B. A. Fox & S. A. Thompson（eds.）, *The Language of Turn and Sequence*, Oxford: Oxford University Press. pp. 225-256.

Lerner, G. H.（2003）. Selecting next speaker: the context-sensitive operations of a context-free organization. *Language in Society* 32: 177-201.

Lerner, G. H.（2004）. Collaborative turn sequences. In G. H. Lerner（ed.） *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp. 225-256.

Lerner, G. H. & Takagi, T.（1999）. On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: a co-investigation of English and Japanese grammatical practices. *Journal of Pragmatics* 31: 49-75.

Levinson, S. C.（1983）. *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press. （安井稔・奥田夏子訳（1990）.『英語語用論』東京：研究社出版）

Levinson, S. C.（1988）. Putting linguistics on a proper footing: explorations in Goffman's concepts of participation. In P. Drew & A. Wootton（eds.）, *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Cambridge: Polity Press. pp. 161-227.

Liberman, K.（1982）. Some linguistic features of congenial fellowship among the Pitjantjatjara. *International Journal of Society and Language* 36: 35-51.

Lindström, A. (1994). Identification and recognition in Swedish telephone conversation openings. *Language in Society* 23: 231-252.

Local, J.（1992）. Continuing and restarting. In P. Auer and A. di Luzio（eds.）, *The Contextualization of Language*, Amsterdam/Philadelphia: Johns Benjamins. pp. 273-296.

Lynch, M.（1993）. *Scientific Practice and Ordinary Action.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lynch, M.（2000）. The ethnomethodological foundations of conversation analysis. *Text* 20（4）: 517-532.

Lynch, M. & Bogen, D.（1994）. Harvey Sacks's primitive natural science. *Theory, Culture and Society* 11（4）: 65-104.

Malinowski, B.（1923）. The problem of meaning in primitive languages. In C. K. Ogden & I. A. Richards, *The Meaning of Meaning*, Kegan Paul （石橋幸太郎訳（1967）. 原始言語における意味の問題.『意味の意味』東京：新泉社）

Mandelbaum, J.（1987）. Couples sharing stories. *Communication Quarterly* 35: 144-170.

Mandelbaum, J.（1990/1991）. Beyond mundane reason: conversation analysis and context. *Research on Language and Social Interaction* 24: 333-350.

Maynard, D. & Clayman, S. E.（1991）. The diversity of ethnomethodology. *Annual Review of Sociology* 17: 385-418.

Mills, C. W.（1940）. Situated actions and vocabularies of motive. *American Sociological Review* 6: 904-913.

Moerman, M.（1988）. *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis.* Philadelphia: University of

Pennsylvania Press.
Mori, J.（1999）. *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective Expressions and Turn Construction.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
森本郁代（2002）. 発話権の尊重と会話進行：日本語母語話者と非母語話者の会話に見られる「引き取り」をめぐって.『相互行為の民族誌記述：社会的文脈・認知過程・規則』（平成 11-13 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)（研究代表者菅原和孝）研究成果報告書）pp.59-78.
西阪仰（2001）.『心と行為：エスノメソドロジーの視点』東京：岩波書店
西阪仰（2004）. 電話の会話分析：日本語の電話の開始. 山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』東京：有斐閣
西原和久（1991）. ウェーバーからシュッツへ、そして……. 西原和久編『現象学的社会学の展開』東京：青土社
野家啓一（1993）.『言語行為の現象学』東京：勁草書房
能川元一（1993）. 有意性理論における合理的対話者.『年報人間科学』14: 101-116.
Ochs, E.（1982）. Talking to children in Western Samoa. *Language in Society* 11: 77-104.
Ochs, E.（1988）. *Culture and Language Development: Language Aquisition and Language Socialization in a Samoan Village.* Cambridge: Cambridge University Press.
Ochs, E., Schegloff, E. A. & Thompson, S. A.（eds.）（1996）. *Interaction and Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.
大澤真幸（1994）.『意味と他者性』東京：勁草書房
岡田美智男（1995）.『ロごもるコンピュータ』東京：共立出版
Peräkylä, A. & Silverman, D.（1991）. Owning experience: describing the experience of other persons. *Text* 11（3）: 441-480.
Pomerantz, A.（1978） Compliment responses: notes on the cooperation of multiple constraints. In J.N. Schenkein（ed.）, *Studies in the organization of conversational interaction*, New York: Academic Press. pp. 79-112.
Pomeranz, A.（1980）. Telling my side: "limited access" as a fishing device. *Sociological Inquiry* 50: 186-198.
Pomeranz,（1984）. Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes, In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press,.pp. 57-101.
Pomeranz, A.（1984a）. Pursuing a response. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 152-164.
Pomeranz, A.（1986）. Extreme case formulations: a way of legitimating claims. *Human Studies* 9: 219-230.
Reisman, K.（1974）. Contrapuntal conversations in Antiguan village. In R. Bauman & J. Sherzer（eds.）*Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 110-124.
Reddy, M. J.（1979）. The conduit metaphor- a case of frame conflict in our language about language. In A. Ortony（ed.）, *Metaphor and Thought*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.284-324.
Rosaldo, M. Z.（1982）. The things we do with words: Illongot speech acts and speech act theory in philosophy. *Language in Society* 11: 203-237.
Ryave, A. L.（1978）. On the achievement of a series of stories. In J. Schenkein（ed.）*Studies in the Organization of Conversational Interaction*, New York: Academic Press. pp. 113-132.

Sacks, H.（1963）. Sociological description. *Berkeley Journal of Sociology* 8: 1-16.

Sacks, H.（1972）. An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow（ed.）, *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press. pp. 31-74.

Sacks, H.（1972a）. On the analyzability of stories by children. In J. J. Gumperz & D. Hymes（eds.）, *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York: Basil Blackwell. pp. 325-345.

Sacks, H.（1974）. An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In J. Sherzer & R. Bauman（eds.）, *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 337-353.

Sacks, H.（1975）. Everyone has to lie. In M. Sanches & B. G. Blount（eds.）, *Sociocultural Dimensions of Language Use*, Nwe York: Academic Press. pp. 57-79.

Sacks, H.（1978）. Some technical considerations of a dirty joke, In J. Schenkein（ed.）, *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, New York: Academic Press. pp. 249-270.

Sacks, H.（1979）. Hotrodder: a revolutionary category. In G. Psathas（ed.）, *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington. pp. 7-14.

Sacks, H.（1984）. Notes on methodology. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 21-27.

Sacks, H.（1987）. On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation. In G. Button & J. R. E. Lee（eds.）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters. pp. 54-69.

Sacks, H.（1992）. *Lectures on Conversation*, 2 vols. Cambridge: Blackwell.

Sacks, H. & Schegloff, E. A.（1979）. Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In G. Psathas（ed.）, *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington. pp. 15-21.

Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G.（1974）. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50: 696-735.

定延利之(2002). 「うん」と「そう」に意味はあるか. 定延利之編. 『「うん」と「そう」の言語学』東京：ひつじ書房. pp.75-112.

Sanders, R. E.（1999）. The impossibility of culturally contexted conversation analysis: on simultaneous, distinct types of pragmatic meaning. *Research on Language and Social Interaction* 32（1/2）: 129-140.

澤田昌人（1996）. 音声コミュニケーションがつくる二つの世界. 菅原和孝・野村雅一編. 『コミュニケーションとしての身体』東京：大修館書店. pp. 222-245.

Schegloff, E. A.（1968）. Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist* 70: 1075-1095.

Schegloff, E. A.（1972）. Notes on a conversational practice: formulating place. In D. Sudnow（ed.）, *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press. pp. 75-119.

Schegloff, E. A.（1979）. The relevance of repair to syntax-for-conversation. In T. Givon（ed.）, *Syntax and Semantics vol.12: Discourse and Syntax*, New York:Academic Press. pp.261-286.

Schegloff, E. A.（1979a）. Identification and recognition in telephone conversation openings. In G. Psathas（ed.）, *Everyday Language*, New York: Irvington. pp.23-78.

Schegloff, E. A.（1980）. Preliminaries to prelinimaries: "can I ask you a question?". *Sociological Inquiry* 50（3/4）: 104-152.

Schegloff, E. A.（1981）. Discourse as an interactional achievement: some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. In D. Tannen（ed.）, *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics 1981: Analyzing Discourse: Text and Talk.* pp.71-93.

Schegloff, E. A.（1984）. On some questions and ambiguities in conversation. In J. M. Atkinson & J. Heritage（eds.）, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 28-52.

Schegloff, E.A.（1986）. The routine as achievement. *Human Studies* 9: 111-52.

Schegloff, E. A.（1987）. Recycled turn beginnings: a precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization. In G. Button & J. R. E. Lee（eds.）, *Talk and Social Organization*, Cleavedon/ Philadeiphia: Multilingual Matters. pp.70-85.

Schegloff, E. A.（1987a）. Some sources of misunderstanding in talk-in-interaction. *Linguistics* 25: 201-218.

Schegloff, E. A.（1987b）. Between macro and micro: contexts and other connections. In J. Alexander et. al.（eds.）, *The micromacro link*, Berkeley: University of California Press. pp. 207-234.

Schegloff, E. A.（1988）. Goffman and the analysis of conversation. In P.Drew & A. Wootton（eds）, *Erving Goffman: Exploring the interaction order*, Cambridge: Polity Press. pp. 89-135.

Schegloff, E. A.（1988a）. Description in the social sciences Ⅰ: talk-in-Interaction. *IPrA Papers in Pragmatics* 2（1/2）: 1-24.

Schegloff, E. A.（1988b）. Presequences and indirection: applying speech act theory to ordinary conversation. *Journal of Pragmatics* 12: 55-62.

Schegloff, E. A.（1988c）. On an actual virtual servo-mechanism for guessing bad news: a single case conjecture. *Social Problems* 35（4）: 442-457.

Schegloff, E. A.（1992）. Repair after next turn: the last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology* 97（5）: 1295-1345.

Schegloff, E. A.（1992a）. In another context. In A. Duranti & C. Goodwin（eds.）, *Rethinking Context: Language as an interactive phenomenon*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.191-227.

Schegloff, E. A.（1992b）. On talk and its institutional occasions. In P. Drew & J. Heritage（eds.）, *Talk at work*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.101-134.

Schegloff, E. A.（1993）. Reflections on quantification in the study of conversation. *Research on Language and Social Interaction* 26（1）: 99-128.

Schegloff, E. A.（1995）. Parties and joint talk: two ways in which numbers are significant for talk-in-interaction,. In P. ten Have & G. Psthas（eds.）, *Situated Order: Studies in the Social Organization of Talk and Embodied Activities*, Washington, D. C.: University Press of America. pp.31-42.

Schegloff, E. A.（1996）. Confirming allusions: toward an empirical account of action. *American Journal of Sociology* 102（1）: 161-216.

Schegloff, E. A.（1996a）: Turn organization: one intersection of grammar and interaction. In E. Ochs, E.A.Schegloff & S. A. Thompson（eds.）, *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.52-133.

Schegloff, E. A.（1997）. Whose text? whose context?. *Discourse & Society* 8（2）: 165-187.

Schegloff, E. A.（1998）. Reflections on studying prosody in talk-in-interaction,.*Language and Speech* 41（3/4）: 235-263.

Schegloff, E. A.（1998a）. Body torque. *Social Research* 65: 535-586.

Schegloff, E. A.（1999）. What next?: language and social interaction study at the century's turn. *Research on Language and Social Interaction* 32（1/2）: 141-148.

Schegloff, E. A.（2000）. Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation. *Language in Society* 29: 1-63.

Schegloff, E. A.（2000a）. On granularity. *Annual Review of Sociology* 26: 715-720.

Schegloff, E. A. & Sacks, H.（1973）. Opening up closings. *Semiotica* 8: 289-327.

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H.（1990）. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, In G. Psathas（ed.）, *Interaction Competence*, Washington, D. C.: University Press of America. pp. 31-61.

Schutz, A.（1962）. Collected Papers Ⅰ: The Problem of Social Reality. Martinus Nijhoff.（渡辺光・那須壽・西原和久訳（1983）『社会的現実の問題〔１〕：アルフレッド・シュッツ著作集第１巻』東京：マルジュ社）

Searle, J. R.（1969）. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language.* Cambridge: Cambridge University Press. （坂本百大・土屋俊訳（1986）.『言語行為：言語哲学への試論』東京：勁草書房）

Shannon, C. E. and Weaver, W.（1964）. *The Mathematical Theory of Communication.* Urbana: The University of Illinois Press.（長谷川淳・井上光洋訳（1969）.『コミュニケーションの数学的理論：情報理論の基礎』東京：明治図書出版.）

Sharrock, W. & Button, G.（1991）. The social actor: social action in real time. In G. Button（ed.）, *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 137-175.

Shuman, A.（1986）. *Storytelling Rights: The Uses of Oral and Written Texts by Urban Adolescents*, Cambridge: Cambridge University Press.

Sidnell, J.（2001）. Conversational turn-taking in a Caribbean English Creole. *Journal of Pragmatics* 33: 1263-1290.

Simmel, G.（1908）. *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung.* Berlin: Dunker & Humblot.（居安正訳（1994）『社会学：社会化の諸形式についての研究（上）』東京：白水社）

G. Simmel 1957, *Brücke und Tür*,（酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳『橋と扉』白水社）

Sperber, D. & Wilson, D.（1986）. *Relevance: communication and cognition.* Cambridge: Harvard University Press.（内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子訳（1993）. 『関連性理論：伝達と認知』東京：研究社出版）

Steensig, J.（2001）. Notes on turn-construction methods in Danish and Turkish conversation. In M. Selting & E. Couper-Kulen（eds.）*Studies in Interactional Sociolinguistics*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp. 259-286.

菅原和孝（1991）. サンの会話構造：長い語りを中心に. 田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』東京：平凡社. pp. 107-135.

菅原和孝（1996）. 序論：コミュニケーションとしての身体. 菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』東京：大修館書店. pp. 8-38.

菅原和孝（1996a）. 一つの声で語ること：身体とことばの『同時性』をめぐって. 菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』東京：大修館書店. pp. 246-287.

菅原和孝（1998）.『会話の人類学』京都：京都大学学術出版会

Sun, H.（2002）. Display and reaffirmation of affect bond and relationship: invited guessing in Chinese telephone conversations. *Language in Society* 31（1）: 85-112.

高梨克也（1999）. 発話理解の推論モデルにとって発話行為論とは何か. 『語用論研究』1: 59-73.

Tanaka, H.（1999）. *Turn-Taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Tanaka, H.（2000）. Turn-projection in Japanese talk-in-interaction. *Research on Language and Social Interaction* 33: 1-38.

Turner, R.（1971）. Words, utterance, and activities. In J. D. Douglas（ed.） *Understanding Everyday Life: Toward the Reconstruction of Sociological Knowledge*, London: Routledge & Kegan Paul. pp. 169-187.